

無／霊タイプの厨ポケ
が現れたようです

テテフてふてふ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特に理由もなくポケモンの世界に転移させられた田中牧男（24）

ひよんな事から新種のポケモンを捕まえてしまった彼の運命は、大きく変わってしまった。

「火力指数42，420!?!なんやこの厨ポケエ!!」

「(ガブリアスが竜舞してくるとか)ダメです」

「マキナ、あなたが欲しいわ」

「君はジュンサーに引き渡した方が良さそうだ」

「ずっと空を飛んでいれば、攻撃はあたらない!!」

崩壊した環境で、廃人が勘違いをされながらも頑張るようです。

目次

01	鉢巻ジャイロ	1
02	：らぐなろく	30
03	：さめはだ	53
04	：厨ポケ爆誕	76
05	：無慈悲な洗札	93
06	：愛と憎しみのフランス人形	107
07	：常夏の冬景色	123
08	：大天使の守護者たれ	174
09	：麗しき華のジェラシー	205
10	：えんかくローキック	238
11	：噛み合わせぬ歯車たち	268

D		400
12	：聖獣ドードリオ	290
13	：じたばた	315
14	：ベッドソムリエ	339
15	：大戦犯マキナ	368
16	：VANILLA is GO	400

01 : 鉢巻ジャイロ

チャンピオン・シロナは、いつだって、どんなバトルも、このポケモンたちと共に乗り越え、勝利を手にしてきた。

ある日はポケモンを考察し、ある日はポケモンを観察し、ある日はポケモンと触れ合い、そして、いつの日も情熱と愛情をポケモンに注いできた。

彼女がぼつと出の新米トレーナーに臆するなど、彼女の性格、実績、地位…あらゆる角度から鑑みても考えられぬ事だ。

しかしどうだ。

公式戦でもないただの親善試合…それも、つい最近にポケモントレーナーの資格を得たばかりのルーキーを目の前に、その整った顔をらしくもなく緊張させている。

『さああああああ!! 会場のみなさん!! 長らくお待ちせしました!! トレーナー協会主催のイベントマッチが、今ツツ!! 始まりますツツ!!』

実況席のMCが大仰にそう煽ると、会場を揺らしたかのようにして観客の歓声が上が

る。

『説明不要のシンオウチャンピオン・シロナ!! あらゆるタイプのポケモンを駆使し、圧倒

的な強さを見せつけてくれるでしょう!!』

MCの紹介に合わせ、シロナがその美しいプラチナブロンドの髪を振り払うと、会場のボルテージはますます沸き上がる。

『そして、そんなチャンピオンに果敢に挑むのは、アローラ地方で新種ポケモンを発見した今話題のトレーナー、マキナ!!』

マキナ。そう呼ばれたシロナと同じぐらいの歳の男性トレーナーが、ひかえめな態度でMCの紹介に応じる。

シロナの時とは打って変わって、会場は誰だコイツは…と言った様子でざわつき始める。

そんな中、シロナだけは至って真剣な眼差しで「マキナ」なるトレーナーを見つめていた。

(突如アローラに現れた正体不明のトレーナー、マキナ……)

シロナはその名を知っていた。

マキナ。一か月ほど前に、アローラ地方のウラウラ島にある『メガやす跡地』にて、未発見の新種ポケモンを捕獲した男。

未発見のポケモンを捕獲したという時点で、ポケモンの研究に明け暮れている界限からしてみれば、大きな功績を立てたと言える。

しかしながら、当時のマキナはトレーナー資格を持っておらず、トレーナー協会はすぐさま問題として取り上げ、マキナを召喚した。

だが、マキナ側からポケモン博士として名高いオーキド博士になんらかの打診を図ったように、新種ポケモンのみならず、既存のポケモンに関する未出の情報を提供する代わりに、トレーナー資格を得る権利が欲しいと要求したそうだ。

住所不定の男の胡散臭い話に、オーキド博士が耳など傾けるはずがない……学会や協会の間は、誰しもがそう思っていた。

しかし、オーキド博士が協会側に出したのは『彼に資格を与えるように』という旨の回答だった。

この一件に携わった人間は、それほど新種ポケモンというものは、トレーナーの待遇を大きく左右するものなのだろう……と、そう軽く受け止め、マキナがオーキド博士に対して「何を」提供したかなど知りもしなかったし、知ろうとも思わなかった。

だが、シロナは違った。

ポケモンというものは今や人間の生活とは切っても切れぬ関係にあり、とても身近な存在と言える。

それ故に忘れられがちだが、ポケモンは適切に管理をしなければ、最悪の場合死者が出る、非常に危険な存在でもある。

ケンタロスを興奮させてしまい轢き殺される者、ピカチュウの電気袋に触れ感電死する者、スピアーの巣に近づき毒針で刺される者、他人のボーマンダの逆鱗に触れ八つ裂きにされる者……トレーナー資格やポケモンの知識を持たない者が、不用意にポケモンに近づいた結果として招かれる事故と言うものは、今なお絶えないのだ。

故に、トレーナー資格というものは、安易に与えて良いものではない。その道の権威とも言えるオーキド博士が、たかが新種のポケモンを見つけたからと言う理由で、一個人にトレーナー資格を与えるはずがない。

そう思ったシロナはオーキド博士に直接事の顛末を問いただした。

オーキド博士は、そんなシロナに幾つかの書類を渡した。聞けば、マキナがオーキド博士に提出してきた論文だと言う。

『ポケモンバトルにおけるロジック』

『ポケモンの性格と能力の因果』

このタイトルだけで、彼に何かそら恐ろしいナニカを感じないかね？

オーキド博士はシロナにそう問いかけた。

わからない。わからないので、シロナは論文に目を通した。

『ポケモンバトルにおけるロジック』

ポケモンにはノーマル、ほのお、みず、でんき、くさ、こおり、かくとう、どく、じめん、ひこう、エスパー、むし、いわ、ゴースト、ドラゴン、あく、はがね、フェアリーの、計18ものタイプが存在している。

それぞれ得意とするタイプ、苦手とするタイプ、得意でも苦手でもないタイプ、全く効果のないタイプが存在し、その全ての相性を把握する事からポケモンバトルは始まる。

シロナは冒頭から目を疑った。

タイプの相性を全て把握する？

324通りもの組み合わせを覚えろと、この男は言っているのだろうか？

「ほのお」は「くさ」に強く、「くさ」は「みず」に強く、「みず」は「ほのお」に強い。

この代表的とも言える三つ巴のタイプ相性ならば、新米のトレーナーでも知っている。しかし、どく、むし、エスパール、あく、ゴーストなどの力関係は理解されていない事が多く、はがねタイプを目の前にすると、どうしたら良いのか分からなくなってしまうトレーナーまで居る始末だ。

シロナ自身は、タイプ相性がどれほどバトルを有利に進める上で重要かは、もとより理解していた為、全てのタイプ相性を覚えていた。しかし、ふたつのタイプが複合している場合は、シロナでも相性が分からなくなる事がしばしばあった。

シロナは目の前の男、マキナを強く警戒していた。

まるで強者のオーラを放っているわけでもない、至って平凡な新米トレーナーだ。おそらく、この会場の誰もがこの男はただの客寄せパンダ、あるいはチャンピオンの強さを引き立てるための有象無象にすぎないと侮っている事だろう。

だが、シロナの脳裏にごびりついて離れないのだ。

『ポケモンバトルとは、数学である』

彼の論文に散見されたこの言葉。

曰く、ポケモンバトルは論理^{ロジック}で成り立っている。

曰く、全ての結果は計算によって求められると。

曰く、ポケモンは数字であると。

シロナにはこの男が酷く無機質で、酷く冷酷に見えた。

機械^{マキナ}……付けられるべくして付けられた名なのかもしれない。誰よりもポケモンを大切にしているシロナにとって、彼の発言は理解できるものではなかった。

硬い鉄仮面の如く表情を変えないマキナに、シロナは意を決して近づくと。

「噂はかねがね聞いているわ、マキナ」

シロナがそう持ちかけると、マキナは少し困ったような表情になりながらも、その硬い表情を僅かに崩す。

「シロナさん程の方に注目されると、どこかむず痒さを感じますね。……お手柔らかにお願いします」

感情を悟らせない、ある種棒読みに近い抑揚のない声だった。

だが、ゴージャスボールを握りしめる彼の手は小刻みに震えている。

この男は戦いに臆しているわけではない。自分との戦いを心待ちにして、それを目前にまで迎えた歓喜に打ち震えているのだ……シロナはそう感じてしまった。

「見た所、ポケモンを三匹しか持つていないようだけど……あたしも三匹にしようかしら？」

「それには及びません。手を抜かれる事ほど、面白くない事はない」

マキナは僅かに口角を上げ、落ち着き払った声でそう答えた。そんな彼の挑発的とも取れる態度が、シロナの決して低くないプライドを刺激する。

「……わかったわ。ならば、お互いの全力を尽くすのみよ。……ミカルゲ!!」

「オンミョーン!!」

まずシロナが一匹目のポケモンを繰り出すと、焦らしに焦らされた会場は一気に盛り上がる。しかし、シロナは周囲の事など気にする事もなく、意識は既に目の前の男だけに注がれている。

相対するマキナは、彼の象徴とも言える新種のポケモン『アロフォーネ』が入った真新しいゴージャスボールを振りかざす。

漆黒に輝くボールから出てきたのは、繊細かつ精巧にゴシック少女を象った、フランズ人形。

その美しくも愛嬌のある外見とは裏腹に、禍々しいオーラを放っており、不気味な雰
囲気を醸し出しながら宙へと浮いていく。

アロフォーネの周囲には、アンティーク調の椅子、古ぼけた時計、錆びついた武器、壊
れかけた楽器など、雑多な物が浮遊している。

そして、その全てが独りでにガタガタと振動を繰り返しており、絶えず騒音を撒き散
らしている。調律の乱れた傷だらけのピアノが、不協和音を奏で続けている。

ゴーストタイプの名を冠するに相応しい要素を携えたアロフォーネだが、実際、心霊
現象で有名な『ポルターガイスト』は、このポケモンが原因ではないかという仮説が立
てられているのだ。

そんな薄気味の悪い外見とは裏腹に、当のアロフォーネは、中世の騎士が使っていた
ような白銀の甲冑の後ろに隠れ、ビクビクと怯えながら対面のミカルゲを遠巻きから観
察している。オーキド博士が「かなり臆病な性格をしている」と言っていたのにも合点
がいく。

しかし、見た目に惑わされてはいけない。アロフォーネは強力なノーマル技「ばくお
んぱ」を得意としており、彼女だけが使える強力なゴースト技を持つているとも言われ
ている。

故に、シロナは先発をミカルゲに任せた。

一番の脅威である「ばくおんば」を無効化できるゴーストタイプであること。そして、そのゴーストタイプが苦手とする、ゴースト技のダメージを軽減するあくタイプを持っていること。タイプ相性は最も噛み合っているはずだ。

「ミカルゲ、あくのはどう!!」

「アロフォーネ、ムーンフォース」

ミカルゲの攻撃は当たらなかった。…否、攻撃をする前に一撃で落とされてしまった。

速い。速すぎる。

（まるで攻撃が見えなかった。こだわりスカーフを巻いたガブリアスと同等…いや、それ以上かもしれないわね）

それに、あのポケモンはノーマル／ゴーストのタイプを持っているので、フェアリータイプのムーンフォースは、そこまで得意としていないはずだ。

にも関わらず、ミカルゲを一撃で倒してしまうとは……華奢な見た目にそぐわぬ、凄まじい力を内包しているようだ。

たった数秒の間に、会場の空気がガラリと変わった。

あのシロナのポケモンを一撃で倒してしまうとは、あの男は一体何者なのだ…と、会場がざわめいている。

「驚いたわ。まさか、あたしのミカルゲが一撃で倒されるだなんて…いいわ。あなたの力、もっと見せて!!」

闘志をさらに燃やすシロナは、二体目ポケモンを繰り出す。雅な鳴き声と共に現れたのは、ウロコが美しく輝くミロカロスだ。

この時、初めてマキナの表情が変わったのを、シロナは見逃さなかった。

(ミロカロスはあまり得意でないのかしら…?)

シロナはこれを好機と捉え、出せる限りの高火力をアロフォーネに叩き込むしかないと判断した。

「ミロカロス、ハイドロポンプ!!」

ミロカロスはこだわりメガネをかけている。

相手のアロフォーネは騎士甲冑に身を隠しており、何を装備しているのか分からないが、決して少なくないダメージを与えられるはずだ。

「アロフォーネ、戻れ」

マキナは、アロフォーネを引っ込めた。

この行動は、シロナが予想だにしていなかったものだ。

(よほど不利な状況でなければ、ポケモンが倒されてしまった時に変えるのが基本のはず……戦っている最中にポケモンを交代したら、タダで相手の攻撃を一発もらってしま
うもの)

腑に落ちないシロナだったが、交代先のポケモンが出てきたら、すかさずハイドロポ
ンプを当てるようミロカロスに指示を出す。

「頼んだぞ、ナットレイ」

出てきたのは、はがね／くさタイプのとげだまポケモン、ナットレイだ。

悪手だ。シロナは己の選択が誤りだった事を認識し、唇を噛む。

こだわりメガネによって強化されたハイドロポンプが、無防備なナットレイに直撃す
る。しかし、くさタイプを持つナットレイには大したダメージを与えられない。

(……してやられたわね)

攻撃の反動で吹っ飛ぶナットレイだが、表情を変えることなく、やけに鈍重な動きで

体を起こす。

相手の最高火力を受けておきながら全く物怖じせぬその姿は、ゆうかんさに満ち溢れている。

ナットレイの額には白いハチマキが巻かれている。十中八九、こだわりハチマキだとシロナは考えた。

(状況は最悪ね…)

現状、ミロカロスはハイドロポンプにこだわっているため、ハイドロポンプしか出せない。もう一度ハイドロポンプを当てたところで目の前のナットレイは落ちないだろうし、逆に向こうのこだわった強力なくさタイプで、ミカルゲのように一撃で倒されかねない……いや、確実に倒される。

(ならば、あたしは意趣返しをするだけの事)

そう、ここで意固地になるのではなく、マキナと同じようにポケモンを交代すれば良いのだ。

相手のナットレイが、パワーウィップなどの草技を放ってくる事は明白。ならば、草技を比較的有利に受けられるポケモンを繰り出せば良い。

(ここはトゲキッスしかないわ。こだわったパワーウィップのダメージは重いでしょうけど、2発は耐えてくれるはずよ。…いえ、1発でも耐えられれば十分。耐えて、だい

もんじで一撃ね)

はがね／＼きさタイプのナットレイは、炎にめっぽう弱い。外しさえしなければ確実に倒せるはずだ。

「ミロカロス、戻って!!」

シロナの決断に、会場がざわめく。

『チャンピオン・シロナ、ミロカロスを引つ込めます!!ナットレイの草技を恐れたのでしようか!』

実況などシロナの耳に入ってこない。この大事な局面で、失敗は許されないのだ。

「トゲキツス、耐えて!!」

役割を果たしてもらおうべく繰り返し出したパートナーに、シロナは櫓を飛ばす。

(トゲキツスなら耐えられるわ。いくら強力といえ、パワーウィップはくさタイプの技だか……!!?)

シロナは気づく。

何かがおかしい。

出てくるであろうシロナのポケモンに備えるナットトレイが、高速で錐揉み回転をしているのだ。

あれはどう考えてもパワーウィップの予備動作ではない。

「そんな……どうして!?!」

「ナットトレイ、ジャイロボール」

低い唸り声をあげながら飛来する、重鈍な一撃。その圧倒的な遅さから繰り出される、こだわりの重い、重い、一撃。

迫り来る鋼鉄の塊に、トゲキツスは成すすべなく吹き飛ばされた。

『ああつと!!一撃!!またしても一撃!!チャンピオン・シロナのトゲキツスは、ナットトレイのジャイロボールを前に果ててしまいました!!』

シロナは未だかつてない程、動揺していた。

(なぜ?なぜ、あそこでジャイロボールを指示したの……?)

シロナには意味が分からなかった。みずタイプのミロカロスは、はがねタイプの技に

対して耐性があるはずだ。なぜ、はがねタイプのジャイロボールを選択したのだろうか？

(……ツ!!まさか!?)

シロナは、自分の身体中に悪寒が走るのが分かった。

「……マキナ」

「なんででしょう」

「あなた、あたしの考えている事が分かるのかしら？」

「……………」冗談を。人を勝手にエスパータイプにしないでください」

お前はいきなり何を言い出すんだとでも言いたげに、マキナは首を横に振る。

だが、シロナにはそうだとしか考えられなかった。

(まるで、あたしがトゲキツスに交代する事が分かりきっていたかのような一撃だった。

…でも、あたしはトゲキツスを連れてきているだなんて、誰にも言っていないわ)

今のシロナには、目の前の男が別次元の存在に見えて仕方がなかった。

そんな彼女の僅かな弱気が、彼女が最も頼りにしているパートナーを選出することを後押しした。

まただ。

またしてもマキナは、シロナの行動が読めているかのごとく、ポケモンを変えてくる。

本来ならばナツトレイが受けるはずであったがいもんじは、再び現れたアロフォーネに直撃する。

『ルーキー・マキナ、再び新種ポケモンのアロフォーネを繰り返しました!!ガブリアスのだいもんじが直撃したというのにも関わらず、アロフォーネは全くこたえていません!!』

実況が言う通り、アロフォーネには全くと言っていいほどダメージが通っていないかった。

(確かに、ガブリアスは物理的な攻撃以外は得意でないし、ほのおタイプの技自体が得意ではない。けれど、みずタイプでもないポケモンがこれだけのダメージで済むだなんて……………)

シロナは相対する新種ポケモンのあまりの硬さに疑問符を浮かべるが、程なくしてそのカラクリに気づく。

「あれは……とつげきチョッキね」

今まで宙に浮遊している物の影に隠れていて気づかなかったが、マキナのアロフォーネはとつげきチョッキを着ていた。やたらと特殊系の攻撃に強いのも頷ける。

(元々の特殊防御が高くないポケモンに持たせてもそこまで効果がないはず……あの新種ポケモンはきつと、特殊系に強いポケモンなのかもしれないわね。だとすれば、あまり物理面での耐久は高くない可能性があるわ)

新種ポケモン故の情報の少なさに、シロナは歯痒さを感じていた。しかし、相手のマキナがあまり芳しくない表情をしている所を見るに、自分の立てた仮説は強ち間違っていないのではないかとシロナは考えていた。

(ここは素直にドラゴンクローかしら……いえ、ドラゴンクローでは一撃で倒せないかもしれないわ。げきりんんで一気に倒した方が……駄目、ナットレイに交代されたら最悪よ)

シロナは悩みに悩んでいた。

どの選択肢を選んでも、この男はそれを読んでくる。全て裏目に出してしまう……そんな不安が、絶えずシロナに押し寄せ、彼女の判断力をより鈍らせてしまう。

(逆に考えましょう。私がマキナならばどうするか。マキナにとってアロフォーネは、きつと私で言うガブリアスのようなエース的存在のはずよ。ならば、ここでアロ

フォーネが大ダメージを受けるのは避けたいはず。でも、一度だいまんじを見せている以上、簡単にナットレイは出せないでしょう。

シロナは仮説を立てていく。

ドラゴンクローではアロフォーネが落とせない可能性がある上、ナットレイに交代された時に全くダメージが入らないどころか、ナットレイの「てつのトゲ」で逆にこちらがダメージを受けてしまう。

げきりんならアロフォーネが落とせる可能性が高いが、ナットレイに交代されると二進も三進も行かなくなってしまう。

だいまんじなら交代先のナットレイに大ダメージを与えられるが、アロフォーネが居座った場合、ほぼ無意味な行動となってしまう。

他にも、ストーンエッジやじしん、どくづきなどの技があるが、ストーンエッジは決定打にならないどころか外れる可能性がある。じしんは宙に浮いているアロフォーネには当たらないだろうし、アロフォーネにもナットレイにも効かないどくづきは選択肢にもならない。

だいまんじか、げきりんか。

(…交代を繰り返していても、あたしのガブリアスはいつまで経つても倒せないわ。マキナはアロフオーネで攻撃してくるはず。でも…)

シロナが結論を出す。

「ガブリアス、だいもんじ!!」

「アロフオーネ、戻れ」

二分の一の賭けに勝った。

ようやく勝ち筋が見えてきた。

シロナは引っ込んでいくアロフオーネを見送りつつ、そんな感想を抱いた。

しかし、マキナが投げたのはナットレイの入ったモンスターボールではなく、三匹目のポケモンが入っているであろうヘビィボールだった。

(ナットレイじゃない……?)

刹那、シロナは胸騒ぎを覚えた。

「ギャオギャアアアオオオオ!!!」

まるで重戦車の装甲のような体躯。

見るからに攻撃的なトゲトゲしいフォルム。

見るもの全てを圧倒する巨体から放たれる咆哮。

いわ／はがねタイプのボスゴドラだ。

ガブリアスの放っただもんじが、出会い頭のボスゴドラに命中するも、そこまで大きな負担にはならない。

「まさか最後の一体も、はがねタイプだとは思わなかったわ。けれど、交代を繰り返していても、あなたのポケモンだけが傷ついていく一方よ?」

「…随分と余裕ですね。シロナさん」

それはこちらのセリフだ…と、嘯みつきそうになるのを、シロナは持ち前の冷静さで

グツとこらえる。

（あなたこそ、なぜ余裕でいられるのかしら？いわ／＼はがねタイプのカボトは、じしんを撃てるガブリアスにとって格好の餌食。あなたには不利な状況なはずよ）

仮に、またアロフオーネに交代されて地震をスカされたとしても、それはあくまで先ほどの状況に戻るだけだ。そうになると、食らう必要の無いだもんじをボスゴドラが食らった…という結果が残るだけだ。

（ここは素直に目の前のボスゴドラを倒せる地震を撃ちましょう。案外、この男はめちゃくちゃにポケモンを交代して、攪乱をしているだけかもしれないわ）

シロナは今までとはうって変わって、何の躊躇いもなくガブリアスに指示を出した。

「ガブリアス、じしん!!」

「ボスゴドラ、メガシンカ」

またしても流れが変わった。

マキナの呼びかけに応えるかのように、ボスゴドラが持つ『ボスゴドラナイト』とマキナが持つ『キーストーン』が反応を示す。

「ギャオギャアアアアアアアア!!」

光の殻を破って現れたのは、より重厚な装甲を纏ったメガボスゴドラ。より金属光沢の増した体表からは、純粋な鋼鉄へと生まれ変わった事が伺える。

『これは驚きました!!メガシンカです!!ルーキー・マキナ、またしても熱い展開を見せてくれます!!!』

シロナがガブリアスを繰り出した時以上の歓声が、会場を揺らす。もはや、シロナの目の前にいる男は、ただの客寄せパンダでは役不足が過ぎる評価をつけられている事だろう。

(…うろ覚えだけど、ボスゴドラはメガシンカするといわタイプではなくると聞いた事があるわ)

だが、はがねタイプがじめんタイプの技を苦手とするという事実に変わりはないはずだ。

ともあれ、すでにシロナはガブリアスに指示を出してしまっている。ガブリアスはそれに従い、じしんを起こす。会場を揺るがすほどの強い衝撃が、マキナのメガボスゴドラを襲う。

しかし、メガボスゴドラは難なくこれを耐えて見せた。

「硬い……!!」

思わず溢した私の眩きに、マキナは不敵な笑みを浮かべている。

確かに弱点を突いたはずだ。それなのにこれは一体なんだ。まるで効いていないじゃないか……シロナの焦燥は膨れ上がるばかりだ。

「ボスゴドラ、れいとうパンチ」

「ッ!? ガブリアス!! よけてッ!!」

無理な要求だと頭で理解していながらも、シロナは叫ばずにはいられなかった。

じしんを撃ち終え無防備なガブリアスに、メガボスゴドラの冷気を纏った硬い拳が突き刺さる。

「ガアア!? ガアアアアアアアアア!!!」

ガブリアスは、自分が最も苦手とする冷気に身悶えながらも、何かを嘯みしめ攻撃を耐える。

『チャンピオン・シロナ、これは痛い一撃だ!! しかしガブリアス、辛うじてこれを耐えきった!!』

見事、致命傷足り得る攻撃を耐えきって見せた相棒を、シロナは視線だけで褒め称えた。言葉を介さずとも、シロナとガブリアスは通じ合っているのだ。

「…ヤチエの実か」

マキナがそう呟いたのを、シロナは聞き逃さなかった。

「ねえ…あなた、本当はエスパークタイプなんでしょ？」

「…しつこいですよ。私がエスパークタイプだったら、こつそりシロナさんのポケモンに催眠術の一つや二つはかけてますよ」

…この男、真面目そうに見えて、実はかなり姑息な人間なのかもしれない。今の受け答えで、シロナの中でのマキナという男の印象が、若干変わりつつある。

などとふざけている余裕などシロナにはなく、すぐさま意識を切り替える。

（さすがにもう一度じしんを撃てばボスゴドラは倒れるでしょう。じめんタイプのじしんはガブリアスのメインウエポンなのよ？倒せないはずがないわ）

ガブリアスのじしんだけで、一体どれほどのポケモンを倒してきただろうか……と、シロナはガブリアスのじしんには全幅の信頼を寄せていた。

「ガブリアス、もう一回じしんよ!!」

だが、耐えられた。

目の前のボスゴドラは、三発もガブリアスの攻撃を耐えたのだ。

「ボスゴドラ、れいとうパンチでとどめだ」

大きくすり減った体力。既に効力を失ったヤチエの実。

ガブリアスにこの一撃を耐えきる術はなかった。

凍えきった体を支えきれず、その場に崩れ落ちる相棒を、シロナは愕然とした表情で見ている。

「嘘でしょ……？ガブリアスがはがねタイプに正面から負けるなんて……」

声が震え、掠れてしまう。

泣くのは駄目だ。情けない姿をここで晒すのは、最後まで自分のために戦い抜いてくれたガブリアス、トゲキッス、ミカルゲの頑張りを裏切る事に他ならないのだ。

まだ終わりではない。あの時に、三匹のポケモンで戦うと言っていたら、ここで終わりだったかもしれないが、マキナは手を抜くなと言った。そして、自分は全力を見せると言っただけだ。

最後まで戦わなくてはいけない。まだ終わったわけではないのだ。

「……お願いルカリオ。あなたならきつと勝てるはずよ」

「くわんぬ!!」

シロナは、はがね／かくとうタイプのはどうポケモン、ルカリオをくりだした。

シロナはもう迷わない。マキナはまたしてもアロフオーネを繰り出すかもしれないが、自分はまだ、今日の前にいるボスゴドラを倒す事だけを考えれば良いのだ。

「ルカリオ、はどうだん!!」

「戻れ、ボスゴドラ」

ルカリオが放ったはどうだんは、再三現れたアロフォーネめがけて飛んでいくが、ゴーストタイプを持つアロフォーネに当たる事は無かった。

「アロフォーネ、きあいだま」

「ルカリオ、あくのはどう!!」

速かったのはアロフォーネだった。ルカリオはあくのはどうを放つ事は叶わず、弱点を痛烈に突かれ、倒れてしまう。

後続のミロカロスも、ハイドロポンプを後出ししてきたナツトレイに耐えられ、こだわりハチマキによって強化されたパワーウィップに、一撃で倒された。

大敗だった。

相手はポケモン三匹に対して、自分は五匹。

相手はポケモンを一匹も瀕死に追い込まれていないと言うのに、自分は全滅にまで追い込まれた。

それも、つい最近にトレーナー資格を得た男によって。

(……………マキナ)

シロナはその名を、
強く胸に刻み込んだ。

02：らぐなろく

【朗報】二次元の美少女、三次元になっても美しかった。

いや、俺の目の前にあのシロナさんがいるわけなんですけど……なんやこの別嬪さんは。会って二秒で求婚しそうになっただけだ。アローラ求婚である。

……ゆきふらしの影響もあつてか、随分と寒いネタになってしまったようだ。自重。

しかしまあ、自分から持ちかけた話とはいえ、あのシロナさんとバトルする事になるとは、感無量と言ったところか。このお姉さん、ゲームでは随分とメチャクチャやってくれていたの、リアル（ここをリアルと称して良いのか分らないが）では逆にメチャクチャにしてやりたい所ではある。いやらしい意味じゃないからね？

「噂はかねがね聞いているわ、マキナ」

シロナさんが近づいてくるなり、至ってフランクに話しかけてくださる。

あ、駄目。好き。顔がニヤけちゃう。

「シロナさん程の方に注目されると、どこかむず痒さを感じますね。……お手柔らかにお願いします」

ビツクリしちゃうほど棒読みになってしまう。女の人とまともに会話すんの何年ぶりか分かんないんだけど。

あかん、緊張で手が震えてきた。童貞の弊害がこんなところまで……泣きそう。

そんな情けない様子の俺の前に、シロナさんはクスリと微笑む。余裕たっぷり目を細めて、俺の事をじっくりねつとりと観察している。

きつと、彼女の考えている事はこうだ。

『ふふ……緊張しちゃって。かわいいわ』

脳内再生余裕でした。おねシヨタとか全然ありだと思えます。シヨタと呼べるようなツラじゃないですけど、俺。

「見た所、ポケモンを三匹しか持っていないようだけど……あたしも三匹にしようかしら？」

外見が美しい女性は心も美しい説を提唱させていただきます。

だが、その提案に乗るわけにはいかない。それでは本来の目的を果たせなくなってしまう。

「それには及びません。手を抜かれる事ほど、面白くない事はない」

だって、手抜かれて負けたら「ねえ、なんでポケモンバトルしてるの？生きてる価値あるの？お家帰って？生きてる価値あるの？呼吸止めて？」とか言われても仕方ないし、勝ったら勝ったで「いや、今の本気じゃなかったし。ノーカンだし」とか言われかねない。そうなってしまった場合、もはや何の為にシロナと親善試合をしたのか分からなくなってしまう。

「……わかったわ。ならば、お互いの全力を尽くすのみよ。……ミカルゲ!!」
「オンミヨーン!!」

初手はおんみよくんか。シロナさんもそれなりに考えてきているようだ。

『頼んだぞ、アロフオーネ』

新品同様のゴージャスボールに念を飛ばし、大正義アロフオーネちゃんを繰り出す。

この子は、ミミツキユやゲンガーを捕まえようとメガやす跡地に突入した際、たまたま現れた新種のしんれい^心ポケモンで、外見はゴシックに身を包んだようなフランス人形のポケモンだ。

タイプはノーマル／ゴーストと、ゲーム^あでは解禁されていない複合タイプで、特性は恐らく「ふゆう」だ。

能力としては馬鹿みたいに高い特攻と素早さ、高めの特防、頼りない物理防御が特徴だ。

どうやら心霊現象のポルターガイストをモチーフにしているのか、音技をほぼ全て覚える。それ以外の技範囲もやたら広く、絵に描いたような高速特殊アタッカーだ。

メインウエポンは、威力140のノーマル音技「ばくおんば」と、彼女の専用技と思しきゴースト音技「ポルターガイスト」。

ポルターガイストは、威力90命中100のハイパーボイスをそのままゴーストタイプにしたような技で、稀に相手を混乱させる追加効果がある。確率にして10%くらいか。

この二つだけでもかなりの等倍範囲だが、残念ながら今回のシロナ戦では、ばくおんばはルカリオに受けられるだろうし、霊技のポルターガイストは誰にも刺さらない。サブウエポンのきあいだまとムンフォとフリーズドライで強引に突破するしかない。

初手でふいうちが来た時点で詰むので、ふいうちを食らったら初手降参もあり得る。そうなったらシロナさんが降参読み降参をしてくれる可能性に賭けるしかない。

『ますた、まがまがしいほけもんがいます。ここはせんりやくてきてつたいを』

そんな事を考えていたら、ビックビックと怯えながらミカルゲを観察していたアロフオーネが、交代を所望してきた。

いや、ゴーストタイプがゴーストタイプを恐れてどうすんの。お前の方がよっぽど禍々しい雰囲気あるからね？

チキンすぎるアロフオーネを叱咤激励し、ムーンフォースを指示する。

「ミカルゲ、あくのはどう!!」

セーフ。

特殊型のミカルゲでした。どんな育て方をしているかは分からないが、よっぽどでなければ確定一発で落とせるだろう。

ゲンガーすら抜けるアロフオーネがミカルゲに抜かれるわけもなく、上からムーンフォースを確実に当てていく。やはりミカルゲは一撃で落とせた。

会場のモブ共は、アロフオーネの厨性能に開いた口が塞がらないといった様子だ。ブハハハハハ!!しかとその目に焼き付けるんだな!!この俺（のアロフオーネ）が頂点に君臨しているという事実を、今一度改めて認識するが良い!!

まあ、ぼうおんバリヤードで止まるんですけどね。

『ますた、くちほどにもないおんみよーんでしたね』

アロフオーネがドヤ顔でこちらをチラ見してくる。いや、さっきまでくっそばびびってたやんか、お前。

「驚いたわ。まさか、あたしのミカルゲが一撃で倒されるだなんて……いいわ。あなたの力、もっと見せて!!」

あ、俺の力じゃないんで、そこんとこ間違えないでくださいね。この子の種族値配分がちよつと頭おかしいだけなので。

そんな俺の抗議をよそに、シロナさんは次のポケモンを繰り出す。

わあお、ミロカロスじゃん。実物つてこんなに美しいんですね……なんか気品のようなものが満ち溢れている。

生のミロカロスに感動していたのだが、それよりも気になる事があった。

シロナさんのミロカロス、眼鏡っ子属性持つてるんですが。

え、あれこだわりメガネ？この世界来てから、初めてまともな持ち物を見た気がするんだけど。

やるきルガルガンに、カゴのみを持たせている舐めプ野郎がいるくらいだからな、この世界。

『ますた、このままでは、びしょびしょのぬれぬれになってしまいます。てったいめいれい』

ガタガタと震えながら、まるでナイフを振り回す殺人鬼でも見ているかのような目つきでミロカロスを見据えるアrofオーネが、SOS信号を送ってくる。

女の子がぬれぬれとか言っではいけません。というか、なんで事ある毎に撤退命令を所望するんだお前は。

しかし、特殊受けを相手に殴り合っけていても仕方がないし、アrofオーネには恐らく後続に控えているであろうルカリオに対する役割が残っているので、いたずらにHPを削る訳にはいかない。

ここはセオリー通りにナットレイを投げる。

「ミロカロス、ハイドロポンプ!!」

正面から眼鏡ミロカロスのドロポンを受けたナットレイは、凄まじい水圧に押されてぶっ飛ぶ。

え、思ったより食らってねえか？

ナットレイはいつも通り、目半開きのポーカーフェイスで実際どうなのか全く分から

ないが、想像以上にぶっ飛んだぞ、今。

：シロナさんのミロカロスが個体値VひかえめC極振りと仮定したら、乱数三発くらいだろうか？想像してたより余裕ないんだが。

それでも、ナットレイの鉢巻パワーウィップならば確定一発だ。シロナにとって不利な対面である事は確かだ。

実際、シロナさんめつちや嫌そうな顔してるし。分かるよ、その気持ち。こだわってる状態で不利な対面にされた時って、マジで頭くるよね。レート潜り始めたばかりの頃の俺も、なんやこの糞アイテムと思って珠ばかり使っていたし。

この状況でミロカロスを居座らせてドロポンを連打してくる程、シロナさんの頭が残念だとは思いたくない。そのへんにいる一般トレーナーならやつてきそうではあるが、チャンピオンともなれば流石にポケモンを変えてくるだろう。というか変えてください。

まあ、間違はなく草技を受けにくるので、パワーウィップは選択肢に入らない。ゲームでの手持ちとこちらの世界の手持ちが共通しているのならば、ルカリオかトゲキッスあたりが出てきそうだ。

トゲキツスを確定一発で落とせるジャイロボール安定だな。ルカリオは当然落とせないだろうが、耐久の高いポケモンではないので、半分以上は削れるはずだ。

何より、ルカリオでさえ落とせるかどうか微妙な「じならし」を打って、トゲキツスを無償降臨させてしまつては、ポケモンを引退した方がいいレベルだ。

ここはジャイロボール以外ありえない。

「ミロカロス、戻つて!!」

『チャンピオン・シロナ、ミロカロスを引つ込めます!! ナットレイの草技を恐れたのでしょうか!』

実況と観客が、シロナの選択に驚きを隠せないでいる。

いや、僕はあなたたちが驚いている事に驚きを隠せないんですが。

「耐えて、トゲキツス!!」

出てきたのはキツスか……大方、文字でナットレイを焼こうとでもしたのでだろう。

指示通りに、ナットレイはトゲキツスにジャイロボールをぶちかます。当然、確定一発だ。

「そんな……どうして!?!」

あ、シロナさんが、デンジユモクに交代読みめざ氷をガブリアスにぶつ刺された時のレート厨みたいな顔してる。

『ああつと!!一撃!!またしても一撃!!チャンピオン・シロナのトゲキツスは、ナツトレイのジャイロボールを前に果ててしまいました!!』

よしよし、なかなかいい感じにサイクルが回っている。手持ちの数に差がある時点で、ダメージレースはこちらが圧倒的に不利だからな。的確に相手の弱点を突いていきたい所だ。

「……………」

……………なんか、シロナさんが人を殺せそうな目で俺の事見てるんですがこれは一体。

「……………マキナ」

……………シロナさんは、今にもこちらを噛みちぎってきそうなほど、ドス黒いオーラを放っている……………ように見える。数分前までここにいた女神は、一体どこへ行ったんです

「……なんででしょう」

「あなた、あたしの考えている事が分かるのかしら？」

分かりたくないんですけど。

「…………ご冗談を。人を勝手にエスパイタイプにしないでください」

俺の知る限りでは、超能力を使える人間はエ○パー伊東さんくらいだ。テニスラケットをくぐるとか、これはもうエスパイ以外の何者でもない。エス○ー伊東さんマジエスパイ。

……ふざけるのはやめておこう。マジで殺されそうだ。俺は馬鹿みたいな雑念を振り払うようにして、静かに頭かぶりを振る。

シロナさんが四匹目のモンスターボールに、何やら小声で囁いている。

おつといかん……声に出ていた。紳士たるもの、いかなる時も冷静でいなければならぬ。

しかしまあ、実物は随分とイカツイな……普通に怖いんですけど。こんな砂漠で鉢合わせになったら死を覚悟するわ。

うーむ……それにしても、ここでガブリアスか……絶対にルカリオが出てくると思っただがな。わざわざ死に出しするほどガブリアスはナツトレイに対して有利と言うわけではあるまい。

なんにせよ、ナツトレイは引つ込めなくてはならない。ナツトレイにはミロカロスに對する役割が残っている。ここで居座る必要性など皆無だ。

……もしかすると、シロナのガブリアスは文字だいもんじや炎の牙を搭載した変態型の可能性もある。いや、ナツトレイに死に出してきている時点で炎技を持つるのは濃厚じゃないか？ああもう……きけんよちが欲しいな。

なんであれ、ここはアロフオーネを投げるのが安全策だろう。この対面で竜技は絶対にありえないので、じしんか炎技を撃ってくるはずだ。

じしんならば無償降臨だし、炎技が来たとしても、ガブの不一致特殊炎などチョッキ

を着たアロフオーネにとつてはドライヤーみたいなものだろう。

「ガブリアス、だいもんじ!!」

やっぱり持つてやがったなコイツ。レートでは嫌と言う程エアームドを焼かれてきたので、その辺りの勘には結構自信があるのだ。

『ルーキー・マキナ、再び新種ポケモンのアロフオーネを繰り出しました!!ガブリアスのだいもんじが直撃したというのにも関わらず、アロフオーネは全くこたえていません!!』

いや、そういう事言わなくていいから。持ち物バレるじゃんか。ざっけんなよお前。ミラクル通信交換に孵化余り糞個体値コイキング垂れ流すぞこの野郎。

『ますた、あついです。やけたくれました。およめにいけなくなりました』

うそつくなよお前。ほぼ無傷じゃねえか。俺が嫁にもらつてやるから何の問題もねえよ馬鹿野郎。というかバトル中にこっち向くな。前を見る前を。

『ますたのおよめに、なれるのですか?いまのわたしに、かてるものは、だれひとりとしてそんざいしません。しろなのぼけもんなど、おそるるにたらず』

訳わからないくらいに自信満々にそう宣ったアロフオーネが前を向き直るが……その僅か0.5秒後くらいに、再びこちらへと向き直る。

マジ泣きしてるんだけど、この子。

『ますた……てつたいめいれいを。あれはだめです。いつたいなんですか、あのそびえたつ、らぐ終なる本くは』

餓死寸前の子犬の如くプルプルと震えあがるアロフォーネが、チェンジを要請してくる。

いや、チェンジとかありえないから。安定してガブリアスを倒せるの、お前しかいないんだから。

『むりです。しんでしまいます。ますた、やつのかおを、ごらんになってください。あれは、ぼうぎやくのかぎりをつくす、つらがまえです。しんでしまいます』

確かにDQNみたいな面構えしてるけども。ガブの上からフリーズドライぶっさせるお前を引つ込めるとか氣い狂ってるから。

『だめです』

駄目ですとか駄目です。

『だめですとかだめですとかだめです』

駄目ですとか駄目ですとか駄目ですとか駄目です。

『だめですとかばくがめすがめのですしろですなありあどす』

「まさか最後の一体も、はがねタイプだとは思わなかったわ。けれど、交代を繰り返していても、あなたのポケモンだけが傷ついていく一方よ？」

……なんだろう、シロナさんがちよつと嬉しそうな顔してるんだけど。げきりんを撃たなかった事を褒めて欲しいのかな？ かわいい。

「…随分と余裕ですね、シロナさん」

このHPでボスゴドラがメガれば、ガブの地震は一発は必ず耐えられる。二発耐えられるかはかなり微妙な所だが、一発耐えられれば問題はない。こちらのボスゴドラはれいとうパンチを持っているので、確定一発でガブを落とせる。

「ガブリアス、じしん!!」

「ボスゴドラ、メガシンカ」

オイオイオイ。死ぬわアイツ。何の躊躇いもなく地震撃ってきたぞ。シロナさんはメガると思つてなかったのかな？

何と言つても物理耐久バカのメガボスゴドラだ。特性のフィルターと防御種族値の暴力で、物理弱点を強引に受けられる。

「硬い……!!」

.....。

いやらしい事は考えてないからね？

いやらしい事は考えてないからね？

た、耐えてれいとうパンチだ。色々と耐えて、れいとうパンチだ。

「ツ!?!ガブリアス!!よけて!!」

砂嵐でもないのに命中100の技を避けないでください。そんな事されたら確実に憤慨する自信あります。

が、そんな番狂わせが起きる事もなく、ちゃんとボスゴドラのれいとうパンチはガブリアスに刺さる。

氷技は本当に苦手なのだろう。ガブリアスは苦しそうな呻き声を上げながら、地をのたうち回る。四倍弱点だからな。さぞ苦しかりょう。

……は？

ちよつと待つて、なんで立ち上がってんの？確定一発のはずだろオ!?

まさか耐久に努力値振ってんのか？いやいやいや、HP極振りでも高乱数一発のはずだぞ。これもうアレしかねえだろ。

「……ヤチエの実か」

ちよつとシロナさん侮りすぎてたわ。保険の一つや二つはかけてくる事など、考えるまでもなく分かる事だろうに。と言うか、いままでガブリアスはきのみを口の中に入れて状態で戦っていたのか？よく飲み込まないな…俺は飴を舐めながらマリ○カートをしているだけで飲み込みそうになるといふのに。赤こうら投げられると良く飲み込みます。

「ねえ…あなた、本当はエスパタイプなんでしょ？」

なぜか、シロナさんがいきなりそんな事を聞いてくる。

「…しつこいですよ。私がエスパタイプだったら、こっそりシロナさんのポケモンに催眠術の一つや二つはかけてますよ」

こっそりシロナさんに催眠術の一つや二つはかけてあんな事やこんな事をグヘヘへ…とは、口の中にチエーンソーをぶち込まれても言えるわけがなかった。そんな事を口走った日には、ガブリアスのドラゴンクローを生身で受ける事になるだろう。まだ死にたくないです。

さて、ふざけるのはここまでとして、ヤチエの実はちよつと計算外だった。だが、この一撃でアロフオーネの確一圈内に入れる事ができたと言う事だ。まあ、あそこでアロフオーネがちゃんとフリーズドライを撃つていれば、ボスゴドラもこんなダメージを受ける事も無かつたわけだが。

ボスゴドラがもう一発ガブリアスの地震を耐えられるか微妙な所だが、仮に落とされてしまってもアロフオーネを死に出しすれば、どのみちガブリアスは倒せるので、ここはもう一度れいとうパンチで問題ない。

だいもんじを撃たれたら確定に落とされるのだが、先程のシロナさんはなぜか地震を撃ってきたので、おそらくまた地震を撃ってくるだろう。だいもんじの命中率を気にしているのかもしれない。

「ガブリアス、もう一回じしんよ!!」

ボスゴドラはほぼ瀕死になりながらも、二度目の地震を耐えた。シロナさんのガブがさめはだだったら完全に落ちていただろう。

「ボスゴドラ、れいとうパンチでとどめだ」

炎に焼かれ、二度の地震に見舞われと、すでに満身創痕のボスゴドラだったが、確実にれいとうパンチを当てていく。

「嘘でしょ…？ガブリアスがはがねタイプに正面から負けるなんて……」

シロナは敗北を喫したガブリアスを目の前に、かなりのショックを受けているようだ。

「ここで俺が慰めや同情の言葉をかけるのは論外だ。静かに彼女の選出を待つ以外ありえない。」

「…お願いルカリオ。あなたならきつと勝てるはずよ」

恐らく、俺のパーティにとって一番重いであろうルカリオが選出される。

これがレート戦ならば、ボスゴドラにばかりからを指示してアロフォーネを死に出しているのだが…俺はあえてボスゴドラを引つ込めた。

もうこの時点で、どちらが勝っても負けても構わない。

故に、この世界のトップクラスというものが、一体どれほどのものか…俺は彼女を試すような真似をした。

「ルカリオ、はどうだん!!」

……シロナさんのルカリオがどんな技構成をしているかは分からない。だが、少なくとも俺だったら、はどうだんを選択することはないだろう。

ボスゴドラの代わりに現れたアロフオーネをめがけ、はどうだんが飛来するが……ゴーストタイプを持つアロフオーネに命中する事はなかった。

「アロフオーネ、きあいだま」

「ルカリオ、あくのはどう!!」

当然、先手を取るのはアロフオーネだ。

命中率に癖があるきあいだまだが、外れることなくルカリオに命中した。

後続のミロカロスも、十分に体力の残ったナットレイで受けて、パワーウィップで沈めた。

なんだ、この世界のポケモンバトルは、この程度の物なのか。

己の中で、名状しがたきナニカが膨れ上がっていくのを感じた。

頂点を、取れる。

そんな確信を抱いたこの時の俺は、あまりにもこの世界の事を知らなすぎたのだ。

03：さめはだ

シロナさんとの勝負が終わり、俺は控え室でポケモンたちを手入れしていた。

ゲームでは、ポケモンが泥まみれになろうが麻痺状態だろうが、ポケリフレなんて一度もやったことがないが、この世界では仲良し度は上げておいた方が良い気がする。自分のポケモンに攻撃とかされたら確実に死んじやうし。

不意に、控え室の扉がノックされる。誰だろうか？…あれか？サインください的なあれなのか!?

無意味に有頂天になる自分を落ち着かせ、入室を許可する。

記念すべく俺のフアン一号は、大人の魅力が漂う黒の衣装を身に纏い、美しすぎる金髪を揺らす超絶美人な……って、シロナさんやんけ。

「シロナさんでしたか……先ほどはお疲れ様でした」

「こちらこそ。今はお邪魔だったかしら？」

「いえ、そんな事は。いかがなさいましたか？」

シロナさん、めつちや真剣な顔してるから怖いんですけど…

『ますた、らぐなるくのしはいしやです。やつをころせば、らぐなるくはえいえんにふう

いんできます』

一目散に俺の後ろに隠れ、ブルブルと震えるアロフオーネが物騒すぎる発言をぶつこんでくる。お前どんだけガブリアスの事嫌いなんだよ。

「単刀直入に聞いわ。マキナ、なぜあたしとの勝負を望んだのかしら？ それも、こんな親善試合だなんて形で」

……どうやら、この親善試合は俺が持ちかけた話だと言う事を、シロナさんは知っていたようだ。

シロナからしてみれば、あまり快くは思わないであろう動機なので、あまり喋りたくない内容なんだがなあ……

「……目的なんて一つしかないですよ。あなたとポケモンバトルがしたかった。ただそれだけです」

「ふざけないで。私があなたに勝てない事くらい、あなたは知っているはずよ。親善試合に勝ったところで、勝者のあなたには何も得る物がないじゃない。まるで意味がわからないわ」

ヒエツ……怒ってるシロナさん怖すぎるやろ……

「あなたは、あたしが惨めに敗北する姿を、多くの人たちに晒したいだけだったのかしら？」

……どうやらシロナさんは、俺がシロナさんを公開処刑にするつもりだったと思っ
ているようだが、当然そんなつもりはない。

「まさか。あなたを晒し物にしたいだなんて、これっぽっちも思っていない。むしろ、そ
れはトレーナーとして絶対に許せない事だと私は考えています」

俺は過去に一度、レート戦のバトル動画を、実況動画として晒された事がある。

動画サイトでポケモンの実況を見ていたらまたま見つけた動画で、俺が選出の際に
凡ミスをして、スカーフテフに三タテを決められるという悲惨な内容のものだ。その
実況者がこれでもかと言うくらいに俺をこき下ろしていた事を今でも覚えている。あ
の時はマジで、死ね以外の言葉が出てこなかったわ。

「ごめんなさい……決してあなたを蔑もうとしたわけではないわ」

少々感情的に喋ってしまったのか、シロナさんが申し訳なさそうに謝ってくる。

「…謝らないでください。結果としてシロナさんに不快な思いをさせてしまったのは私
の方です」

今回の勝負は、決して褒められた動機で申し込んだものではないので、少々言いづら
い。だが、散々ダシにしておいてこのままはぐらかすのは、シロナさんからしてみれば
納得がいかないだろう。

「確かに、私はシロナさんに勝つつもりでいた。ですが、私の目的はシロナさんに勝つ事

ではない。シロナさんとの勝負に勝利する事は、手段にすぎません」

「手段？」

「知って欲しかったんですよ、自分の事を」

そう、これは単なる売名行為に過ぎないのだ。

この世界でのポケモントレーナーという職業は、芸能人のように知名度と実力が物を言う業種だ。

いくら実力があっても、名が売れてなければ金にならないし、いくら名が売れていても、実力がなければすぐに消える。

トレーナーの収入は、歩合制でトレーナー協会から振り込まれる。公式戦で好ましい成績を収めたり、協会が公認したジムのバッジを取得したりする事で、より収入が大きくなっていく。地方リーグに挑み、見事殿堂入りを果たすと、トレーナー資格から「マスター資格」というものに昇格し、グンと収入が増える。

が、地方リーグは基本的にその地方のバッジを全て持っていないと挑めない為、島の試練すらクリアしていない俺は、アローラのリーグにすら挑めない。というか、アローラにはまだリーグが発足していない。確か、ククイ博士によって立ち上げられていたは

ずだが、今の時系列は原作開始前なのだろうか？

ともかく、今の俺はクソ雑魚トレーナーという立ち位置なので、はした金しか振り込まれないため、フレンドリイショップの店員よりも薄給だ。時給に換算したら五百円くらい。生活できません。

じゃあ公式戦で協会からの評価あげればええやん？と思うかもしれないが、公式戦は基本的に、いきなり強いトレーナーとは戦えないので、底辺トレーナー同士で戦いながら、チマチマと評価をあげるしかないのだ。

そんな事をしていては何年かかるかわかったものではないし、そもそもポケモントレーナーは子どもの頃から下地を作っていくのが基本で、俺みたいに20を過ぎたやつが一から始めようと思うと、かなり険しい道になるのだ。

そう考えると、トレーナーだけじゃ食ってけないじゃん、という話になるが、ポケモントレーナーの収入は他にもあるのだ。

実力のあるポケモントレーナーは、トレーナーズスクールの講師を務める事ができるし、自分でジムを構える事もできるし、テレビやラジオなどといったメディアからオファーが来る事もある。また、一流企業がスポンサーとして付く事もある。

しかし、それらは知名度があつて、初めて現実となるものだ。

親善試合は、勝敗の結果が協会の査定を左右する事はなく、専ら「見せ物」としての

側面が強い。故に、バトルの様子は新聞やラジオ、動画サイトやテレビなどに、実況や解説をつけて発信される。売名行為にはもってこいといえよう。

そして、親善試合は公式戦と違って、トレーナー協会に齎す利益が、段違いにデカイ。なので、クソ無名トレーナーの俺がシロナさんと親善試合がしたいと言っても、協会が嫌な顔をする事はまず無い。シロナさんがOKを出せば、試合は行われるのだ。今回、なぜシロナさんが試合を受けてくれたかは分からないが、僥倖という他ならぬ幸運だと思っておこう。

「……でも、なぜ私なの？あなたと私は、何の関わりも無かったはずよ」
「シロナさんが、この世界で一番強いと思っただからです」

この世界では実際のところがどうなのかは知らないが、ゲームのシロナは他のトレーナーとは違ってタイプ統一ではない為、割と簡単にボコボコにされかねない。というか氷技を入れてないだけでガブリアスで止まる。シロナさんはみんなのアイドルであると共に、みんなのトラウマとも言える。公式に残念な美人とか言われちゃうシロナさんかわいよいよシロナさん。

一応、この世界でも『無敗のチャンピオン』という二つ名は耳にしているので、トッブクラスである事は確かだろう。そんな彼女に勝利を収めたともなれば、明日の朝刊の一面を飾るのも全然ありえる話だ。

シロナさんを踏み台にした感は否めないが、俺自身はシロナさんの事は大好きだし、大好きでもあるし、大好きだ。お部屋の片付けが出来ないシロナさんも愛せます。シロナさんかわいいよシロナさん。

「……もう一つだけ聞かせて。私にはまだ、知りたい事があるの」

そう言ったシロナさんは、ちらりと俺の後ろにいるアロフオーネを一瞥する。

あー………なんと言っても新種ポケモンだし、こいつに負かされたと言っても過言ではないので、アロフオーネの事を知りたがるのも無理はないだろう。

あまり期待させるのも可哀想なので、俺はキツパリと断る。

「………それについては、教える事はできません」

「ツ!! どうしてツ!!」

鬼気迫る表情で迫られる。怖いですシロナさん。

「………私も知らないんです。現状では、知る術が無いんですよ」

なにせアロフオーネなんてポケモンは前のゲームにいなかったですしおすし。環境と条件を整えて、検証を繰り返しているので種族値は粗方割り出せているが、どういうポケモンかは、俺でも分からない事だらけだ。

『ますたは、わたしのことを、しりたいのですか？ わたしは、うたをうたうのがとくいですよ。きいてください。』

…ほろべ。なきさけべ。なんじをしいする、しつこくのかんじようが、さらなるやみのかなたへ、いぎなうだろう。ほろべ。ほろべ…』

おい馬鹿やめろ。それ絶対ほろびのうただろ。殺す気かてめえ。

何かを考え込んでいるシロナさんは、そつと瞼を閉じる。しばしの間を経て瞼を開いた彼女は、真つ直ぐに俺を見つめてくる。

「…………マキナ。あなたと戦えた事、本当に…………本当に感謝しているわ。だから、待っていて欲しい。必ずあたしは、あなたに勝つて見せる」

…………俺は今、シロナさんにライバル宣言をされたのだろうか？俺としては、シロナさんのような美人と関われる機会が増える事は大変喜ばしい事だし、シロナさんと戦う度に俺の知名度は上がっていく一方なので、大歓迎である。むしろ求婚したいです。

「願つてもいない。いつでもお待ちしておりますよ」

「ええ、あたしが勝つまで誰にも負けないで。あたし以外のトレーナーに負けるなんて、許さないわ」

確かに、今度俺がその辺にいる底辺トレーナーに負けたら、三段論法的にシロナさんまで底辺トレーナーになってしまう。そんな事をした日には、磔にされて大文字で焼却処理されても文句言えないな。というか、今日の親善試合がまるつきり無駄になってしまう。

シロナさんはそれだけ言うと、踵を返して控え室を出ていく。あ、今ふわって良い匂いが……しゅごい。

俺がシロナさんのグツドスメル残に鼻リを伸ばしていると、ポケリフレを中途半端に止められていたナツトレイが、ジト目で睨んでくる。

……冷静になって考えると、俺ってこいつらに攻撃されたら一撃で死ぬんだよね？ 懐かれてなかったら相当やばいよね？ ナツトレイの鉢巻ジャイロなんて食らったらミンチ不可避ですよ。

……多分、ポケモンは動物みたいなものだろう。真心をこめて撫でてあげれば愛情は伝わるはずである。

イメージはムツゴウさんだ。ナツトレイは家族だ。

よーしよしよし、よしよし。ここか？ ここがええんか？ アゴの下が気持ちええんか？ あ、お前アゴ無かったな。よーしよしよし…

『ますた……いたくないのですか？』

あ。

とくせい：てつのトゲ

俺は、三針も縫う大怪我をした。

~~~~~

『マキナ選手 控え室』

シロナは、そう書かれた扉をノックする。「どうぞ」という、入室を許可する男声が聞こえたので、シロナはひと呼吸を整えた後に、ドアを開く。

控え室の中には、先ほどまで自分のポケモンとバトルを繰り返していたマキナのポケモンが、ゆつくりと寛いでおり、当のマキナは、ミロカロスのハイドロポンプを受けてベタベタに濡れたナットレイの手入れをしているところだった。その光景がシロナには少し…いや、かなり意外に思えた。

手を止めたマキナが、入ってきたシロナへと視線を向ける。

「シロナさんでしたか……先ほどはお疲れ様でした」

「こちらこそ。今はお邪魔だったかしら？」

「いえ、そんな事は。いかがなさいましたか？」

至って冷静に用件を問いただす彼の後ろに、新種ポケモンのアロフオーネが隠れ込むと、彼の肩越しからシロナを警戒している。散々、シロナのポケモンを蹂躪しておきながら、なんと臆病なポケモンなのだろうか。

「単刀直入に聞くわ。マキナ、なぜあたしとの勝負を望んだのかしら？それも、こんな親善試合だなんて形で」

この親善試合は、マキナ自身から自発的に協会側に打診したものと、シロナは知っていた。

最初は、一度も顔を見たこともないようなトレーナーに親善試合を申し込まれたのか理解できなかったが、相手がああ論文を書いた男だと知るや否や、頭ごなしに断る事ができなかった。シロナとしては、興味本位で勝負を受けたに過ぎない。

しかし、結果はシロナの大敗に終わった。相手のマキナは三対五という目に見えるハンを抱えながら、圧勝したのだ。

シロナは確信している。この男には、私に勝つ事ができる絶対的な自信があつた事を。

「……目的なんて一つしかありませんよ。あなたとポケモンバトルがしたかった。ただそ

れだけです」

「ふざけないで。あたしがあなたに勝てない事くらい、あなたは知っているはずよ。親善試合に勝ったところで、勝者のあなたには何も得る物がないじゃない。まるで意味がわからないわ」

親善試合は公式試合やリーグと違い、バトルに勝利してもトレーナーが賞金を得る事はない。今回のイベントマッチも例外ではなく、スポンサーの提供は試合の運営に充てられるのみであり、観戦チケットによる収入も、全て協会に入るだけで、一円たりともトレーナーに利益があるわけではない。会場の観客や地上波の放送で、自分たちのポケモンバトルを楽しんでもらうだけだ。

「あなたは、あたしが惨めに敗北する姿を、多くの人たちに晒したいだけだったのかしら？」

意地の悪い聞き方をしているという自覚ぐらい、シロナにはあった。だが、シロナにはそう思えて仕方がなかったのだ。

シロナの一方的な追及を、終始黙って聞いていたマキナが、どこか言いにくそうな顔で口を開く。

「まさか。あなたを晒し物にしたいだなんて、これっぽっちも思っていない。むしろ、それはトレーナーとして絶対に許せない事だと私は考えています」

語気をわずかに強めたマキナは、何かを想起しているかのように目を細める。初めて感情を露わにする彼を前に、シロナは少しばかりたじろぐ。

「ごめんなさい……決してあなたを蔑もうとしたわけではないわ」

「…謝らないでください。結果としてシロナさんに不快な思いをさせてしまったのは私の方です」

マキナはそこで言葉を切ると、わずかに逡巡してから、言葉を紡ぎ始めた。

「確かに、私はシロナさんに勝つつもりでした。ですが、私の目的はシロナさんに勝つ事ではない。シロナさんとの勝負に勝利する事は、手段にすぎません」

「手段？」

「知って欲しかったんですよ、自分の事を」

（あ..た..し..自..身..の..事.....を.....っ!?!）

その時、シロナは頭の中でパズルのピースがはまっていく感覚を覚えた。

なぜ、あたしに親善試合を持ちかけたのか。

なぜ、三対五などという、大きすぎるハンデキャップを抱えながら戦ったのか。

なぜ、完膚なきまでにあたしを叩きのめしたのか。

シロナがいかにポケモンバトルに関して無知であるかを。いかに未熟であるかを。いかに井の中の蛙に過ぎないかと言う事を……

マキナはシロナに教えてくれたのだ。

もし、シロナがマキナと闘う事なくチャンピオンを名乗り続けていたら、自分がこの男よりはるかに劣っているという事実を知ることなく、己が『無敗のチャンピオン』である事を信じてやまず、滑稽にも現状に満足し続けていた事だろう。

そう、これまでのシロナは行き止まりに立っていたのだ……否、越えるべき壁に気づかないでいたのだ。

だが、もしシロナがマキナに対して「お前は未熟だ」と言われても、どここの馬の骨ともわからぬ男の言葉を聞き入れる事などなかっただろう。

結果が全てを語るポケモンバトルで、シロナが越えるべき壁を示してくれたのだ。

「……でも、なぜあたしなの？あなたとあたしは、何の関わりも無かったはずよ」

「シロナさんが、この世界で一番強いと思ったからです」

世辞の句を述べる風でもなく、ただ思った事を発言するかのようになり、マキナはサラリと答えた。

この世界で一番強い。

自分を圧倒した相手にそんな事を言われたシロナは、得も言われぬもどかしさを覚える。

「……もう一つだけ聞かせて。あたしにはまだ、知りたい事があるの」

そう、シロナはこの男の事を何も知らない。マキナは自分を進むべき道へと導いてくれたこの男の事を、シロナは何も知らないのだ。

シロナは、マキナの背後に隠れて、怯えた様子でシロナを見ているアロフオーネを一瞥する。

マキナと言う名前。

新種ポケモンを見つけたという事。

ポケモンバトルが理不尽なほど強いと言う事。

たったそれだけの事しか知らないのだ。

シロナが何を知りたいか、皆まで言わずとも俺には分かる……………そう主張するかのごとく、マキナは間髪なく答えた。

「……………それについては、教える事はできません」

「ツ!!どうしてツ!!」

シロナが強く追及すると、マキナは困り果てたような表情になる。

「……………私も知らないんです。現状では、知る術が無いんですよ」

マキナの言葉に、シロナは思わず息を呑む。

この男は、勝負に負ける前の自分と同じなのだ。越えるべき壁が無いのだ。これまでも、これからも。



それどころか、シロナは越えるべき壁がある事に気づかなかっただけと言うのに対して、この男には越えるべき壁が存在していないのだ。

孤独ひとりでありながら、あれほどの強さを身につけたこの男が、一体どれほど満たされない毎日を送って来たのか……シロナには到底理解のできるものではなかった。

見ず知らずの男に、シロナは導かれた。それなのに、シロナには虚無を彷徨い続けるこの男を導く事ができないのだ。

(あたしだけが救われるだなんて、こんな……こんな残酷な話が………ツ!?)

シロナの中で、最後のピースが嵌はまった瞬間だった。

『シロナさんが、この世界で一番強いと思ったからです』

求めているのだ。

この男は強く、強く、シロナに求めているのだ。

マキナは、シロナが「越えるべき壁」を示してくれる事に、一縷の望みを託したのだ。

（マキナ……なんて不器用な男なのかしら。こんなに回りくどい事をするだなんて）

しかし、これは紛れもなく救済を渴望するマキナの心の叫びなのだ。マキナは、シロナならば気づいてくれると思ったからこそ、此度の親善試合を持ちかけて来たのだ。

完全なる敗北を前に、根こそぎ熱を奪われたシロナの体が、徐々にその情熱を取り戻していく。

芯から、徐々に、徐々に、燃え広がっていく。

「……………マキナ。あなたと戦えた事、本当に……………本当に感謝しているわ。だから、待っていて欲しい。必ずあなたは、あなたに勝って見せる」

一瞬、マキナは驚いた表情を見せるが、すぐに戦っていた時のような不敵な笑みを浮かべる。

「願ってもいない。いつでもお待ちしておりますよ」

「ええ、あたしが勝つまで誰にも負けないで。あたし以外のトレーナーに負けるなんて、許さないわ」

シロナはそれだけを言い残し、控え室を後にする。

(マキナは私が導く。あなたに導かれた私が、導く)

シロナは、自分にこれほどの情熱がまだ残っていた事に驚きを隠せなかった。

(……違う、彼が私の熱を取り戻してくれたのよ)

シロナは後手に閉めた扉をふり返る。

『マキナ選手 控え室』

この扉の向こうには、私の知らない彼の素顔があるかも知れない。しかし、それを覗き込むのは、野暮などという領域ですらない。

彼の心をもっと知りたい。  
彼を苦しみをもっと分かちたい。

しばらくの間、葛藤していたシロナだったが、扉の向こうにある誘惑に負け、ゆつくりと扉を少しだけ開く。

静かに、僅かに、開かれた隙間から控え室を覗き込んだ。

シロナは思わず目を疑った。

終始、鉄仮面のような硬い表情を貼り付け続けていたマキナが、まるで我が子を愛でるかのような無邪気な笑顔で、てつのとげを持つナットレイを撫で回しているのだ。

(あれが……マキナ……なの……!?)

ナットレイを撫でつけるマキナの右手には無数の傷がついており、ボタボタと鮮血が滴っている。

これ以上見ていられないと、シロナはすぐに扉を閉めた。

(私は、マキナという男を誤解していた)

ポケモンとは数字である。そんな事を書き綴った彼に、普段は温厚であるはずのシロナは憤りを覚えていた。

強くなるために必要なのは、ずっとポケモンを好きでいる事。

ポケモンと共に歩んでいく上で、自分たちトレーナーがポケモンたちに、無償の愛情を注ぎつづけるのは当たり前なのだ。

故にシロナは、マキナというトレーナーは、ポケモンをバトルに勝つための道具ではないかと思っている、自分とは相容れぬ存在だと思っていたのだ。

「……そんな人間が、ポケモンたちにあんな表情を見せるわけがないじゃない」

比類なき強さを誇るが故に、孤独という虚無を彷徨うマキナ。

そんな彼を支えてきたのは、きっと彼のポケモンたちなのだろう。

だから、彼もまた同様に、自分のポケモン<sup>パートナー</sup>たちを支えようとしているのだ。

戦いに勝つ事の喜びも。戦いで傷つく事の苦しみも、全て共有しようとしているのだ。

「なんて……なんて、無邪気な笑顔を見せるの」

シロナは後に気づく。

この時すでに、自分の心はこの男のものになっていたと言う事を。

「……………ガブリアス」

静かにモンスターボールを投げると、疲労困憊の相棒がボールから出てくる。

「ガア……………」

「いつもあなたばかりに辛い思いをさせて、本当にごめんなさい。…あたしも、あなたと

一緒に強くなる。だから、これからも頼りにしているわ。ガブリアス」  
「ガアアアブ!!」

シロナは、いつも以上に頑張ってくれた相棒を、いつも以上に強く撫でる。

ズキリとした痛みが、彼女を襲う。

シロナの女性らしい、美しい白磁のような小さな手から、血が流れ出る。

それでも、彼女は嫌な顔ひとつせず、ガブリアスを撫で続けた。

シロナを支え続けてくれるこのさめはだが、こんなにも心地よいのだから。

## 04：厨ポケ爆誕

シロナさんとの親善試合を終え、一か月ほどが経った。当然、その間には様々なイザコザがあったわけだが、順を追って整理する。

まず、俺こと『マキナ』というポケモントレーナーは、瞬く間に『時の人』となった。親善試合とは言え『無敗のチャンピオン』と呼ばれるシロナさんから、ぐうの音も出ないほどの圧勝という形で勝負を制したのだから、注目されないわけがない。

俺と言う存在に一躍脚光が浴びせられる事によって、俺にとってプラスな結果とマイナスな結果が伴う事は言うまでも無いだろう。

まずはプラスな結果から。

トレーナー協会の待遇がガラリと変わった。端的に言うところ、給付金がバカみたいに増額した事と、融通を利かせてもらえるようになった事だ。

連日連夜、メディアで俺の特集を目にした協会は、さぞ「何か知らんがこいつやべえぞ」と思った事だろう。協会は金のなる木を見つけたとばかりに、手の平を返したかのように俺を優遇するようになった。中堅以上のトレーナーとの公式戦を認めてくれた



りとか、俺の申請わがままに対して結構寛大になつてくれたりとかそんなん。

次に、俺の公式戦にスポンサーが付くようになった事。俺の立場上、公式戦は初心者クラスの人間と戦うだけなのだが、『時の人』状態の俺の試合は、宣伝効果が高いのか、とんでもないくらい格下のトレーナーを相手に戦っているだけで、大手企業からガツポガツポと金が入ってくる。

そして、各業界の著名人たちとの間に、少なくともパイプが出来た事。

シロナさんとの戦いで俺がアロフオーネにゴージャスボールを、ボスゴドラにヘビーボールを使っている事が注目されたわけだが、凄まじい速さでデボンコーポレーションとガンテツさんから問い合わせが来た。

デボンコーポレーション曰く、ゴージャス、プレミア、ネット、ダイブ、ネスト、リピート、タイマー……どのボールも無償で支給してやるからドンドンうちのボールを使ってくれとの事。さらに、デボンコーポレーションが開発したランニングシューズやポケモンマルチナビとかもタダでくれた。ロトムなんていらなかったんや!!

ガンテツさんからは、

『おう、わしのボールを使つとるとは、なかなか見どころのある若者やないかい。マキナ、わしはお前さんが気に入った！お前さんの為なら喜んでボールを作らせてもらおうわい！とりあえずこれだけ持っていけ！いつでもボール作つたるわ！』

P. S. わしにはチエ言う孫娘がおるんやが……嫁にどうや?』

という内容の手紙と共に、大量のガンテツボール及び孫娘のチエちゃんの可愛らしい写真が送られてきた。オシャボ勢の俺にとって、これは夢のような話だ。太っ腹すぎるよガンテツさん。

なお、言うまでもないが俺に幼女趣味など無いので、チエちゃんの件は丁重にお断りした。ただ、チエちゃんの知らない所で、勝手にチエちゃんが振られた感があり、チエちゃんが少し可哀想だったので、たまたま孵化した色違い糞個体値ヤドンを『お孫さんにどうぞ』って送ってあげた。

次の日から、ガンテツさんから『娘婿むすこへ』と言う、割りと結構意味のわからない宛先に向けて、大量のチエちゃんの写真が、毎日欠かさず鬼のように送られるようになった。あのジジイちよつと頭おかしいんちやう?

オーキド博士とのやり取りも盛んになった。アロフォーネの捕獲をきっかけに、無資格捕獲罪の容疑がかけられブタ箱にぶち込まれそうになった俺を救ってくれたのはオーキド博士だし、これまで色々融通を利かせてくれたのもオーキド博士なので、今までの交流が薄かったわけではない。

対シロナ戦を終えてから、より多くの報告書レポートを求められるようになったものの、その分さらに世話を焼いてくれるようになった。本来希少であるはずのメガストーンや

キーストーンを恵んでくれているのもオーキド博士だ。その対価として提出しているレポートの内容が、

『頑丈なポケモンに一撃必殺のわざは効かない』

とか、

『雨が降っているとほのおタイプの技の威力が下がる』

とか、

『まるくなつてからころがると強い』

とか、そんなん。

小学生の夏休みの研究みたいな内容をただ並べているだけで、『はっ、何をバカな事を……ファツ!』って反応が返ってくるので、とても虚しい気持ちになる。しかしながら、たまに『それ普通に常識だから』って反応も返ってくるので、この世界ではどこまでが常識のラインなのかさっぱりわからない。

相変わらず物理アタッカーに、役割破壊でもなんでもない特殊技を覚えさせているトレーナーが跳梁跋扈してるし。指摘してあげたいけど、ガチ環境になつてもらつても困るんや……すまん。

一番驚いたのは、ハウエン地方のダイゴから俺宛に、電子メールが届いた事だ。メー

ルの内容はこうだ。

To : マキナ

From : ダイゴ

Sub : やらないか

やあ、マキナくん。初めまして、ハウエンリーグの元チャンピオンとでも言えば伝わるかな？ ツワブキダイゴです。

チャンピオン・シロナとの親善試合、拝聴させていただいたよ。ホイホイとぼくにはがねタイプのポケモンを見せて良かったのかな？ ぼくは新米トレーナーだって構わないうでバトルを申し込んでしまう男なんだよ？

まあ、冗談はこの辺にしといて、実に素晴らしい戦いだったよ。君のボスゴドラ、ナツトレイ……素晴らしい声も出なかった。確かに、君のご自慢のアロフォーネも強いが……やはり、がねタイプは、良い。

ナツトレイの交代読みジャイロボールを見たとき、ぼくは思わず絶叫したよ。己の鋼鉄からだひとつで戦わんとする勇猛果敢なナツトレイを、くしゃみにも似た下賤な炎で焼き払わんとする、卑劣かつ軟弱極まりないトゲキッスを、見事一撃で仕留めた。素晴らしい。その一言に尽きるよ。

そして：ボスゴドラ。よくガブリアスの地震を耐え切った。世界唯一のはがね使いであるこのぼくですら駄目だと思いかけていたというのに……君のメガボスゴドラは見事耐え切って見せた。そして、なによりあそこで弱気になってボスゴドラを退かせなかつた君も、見事だ。

君の心もまた、はがねタイプだ。

君とはがねタイプの二匹で繰り広げた名勝負に、正直に言つて、ぼくは涙した。

世界一にして、唯一のはがね使いであるぼくが認めよう。君は世界で二人目のはがね使いであり、世界で二番目のはがね使いだ。マキナくん、君ならはがね使いを名乗る事を、心置きなく許せる。

今の君はご多用中だとは思うけど、落ち着いたらハウエンリーグに挑んではみないかい？ バツジを集めるのが面倒なら、ぼくの家に来たまえ。きみに見せたいはがねタイプがごまんと居るんだ。

きみのボスゴドラとぼくのものボスゴドラ、どちらが硬いか……確かめてはみないかい？ 良い返事を期待しているよ。

P・S．ところでコイツを見てくれ。ぼくのメタグロスをどう思う？

`daigosmetagross.jpg`

と来ていたので。

To : ダイゴ

From : マキナ

Sub : Re :

前向きに検討しておきます。

P・S・ すごく大きいですね。あとダンバルとメタグロスナイトください。クチートとクチートナイトとエアームドも欲しいです。ダンバルとクチートはいじっぱりな子、エアームドはわんぱくでがんばりょうな子がいいです。ダンバルはダイブボール、クチートはハイパーボール、エアームドはヘビーボールに入っていると嬉しいです。たまごを産ませたいのでできるだけ早いと助かります。

と、返しておいた。三日後には、要求したポケモンとメガ石が全て送られてきた。しかも全てのポケモンに手紙付きで。エアームドは飛行訓練を受けており、ライドギアまでご丁寧に登録されていた。自分で頼んでおいてアレだが、ダイゴさんが怖すぎる。

なお、メールを読んだ感想については、突っ込みどころがあまりにも多すぎて突っ込みきれないので割愛します。とんでもないはがね愛でしたね。

そして最後の朗報は、ポケリゾートを購入できたことだ。

びつくりするほど高かった。口に出すと気絶してしまいそうな金額だった。でもなぜかローン審査は通った。「マキナさんなら大丈夫ですよ」とか言っていた強面スーツのお兄さんの笑顔が超怖かった。

便利すぎる施設を私物化すると同時に莫大なローンを抱えてしまったわけだが、シロナさんから「多分それぐらいならすぐ払えちゃうわよ」と、心強いお言葉を頂いた。その代償として、なぜか三時間近く電話に付き合わされた。

『今のあたしのガブリアスなら、あなたのボスゴドラに負ける事はないわ…ふふ』  
など、なにやら意味深な内容ものもあつたが、

『最近ガブリアスと一緒に寝てるの』

とか、

『新しく見つかった遺跡でいっぱい写真とっちゃった』

とか、

『100種類のアイスが食べ放題のお店が、カイナシティにできたらいいわよ』  
とか、

『白い水着と黒い水着、どちらがあたしに似合うかしら?』

など、一切俺に関係ない話を延々と聞かされた。すごく楽しそうに喋るので、切るに切れなかった。スマホ買ってもらったばかりの女子中学生ですかあなたは?あと水着は意外性を突いた白が似合うと思います。画像ハラデイ。

：話は逸れたが、とにかくポケリゾートを購入した俺は、ポケリゾート内にある木の実栽培エリア『すくすくりゾート』の一角に住居を構えている。

島自体は商業目的に購入したのではないので、島には俺とモーンという麦わら帽子のおっさんしかいない。が、島の増設や運営は俺のポケモンたちがやってくれるのでなんの問題もない。勝手にポケマメを食わない「まじめ」や「ひかえめ」や「おとなしい」個体へのびのびリゾートの維持を任せ、ペリツパーやドレディア、カットロトムなどに、きのみを栽培するすくすくりゾートの運営を任せている。せつせと植物の手入れをするドレディア、いい感じに雨を降らすペリツパー、永遠に雑草を刈り取らされるカットロトムと、微笑ましい光景が我が家の窓から見られるのだ。他の連中はドキドキリゾートで適当に遊ばせ、ホープポケモンたちはわいわいリゾートでみっちり鍛えて貰ってい



る。ぼかぼかりゾートはもはや説明不要であろう。厳選厳選アンド厳選である。この世界じゃ、柵の中でケンタロスと共に暴れ回るなどという奇行に走るわけにはいきませんで……

まあ、そんな感じで数え切れぬ収穫があつた。これも全てシロナ様のおかげなので、収穫過多なヤチエのみやヒメリのみを、たまにシロナさん宛に送っている。シロナさんの住所はどうやっても知る事ができないため、一旦はオーキド博士に預けているのだが、ちゃんと届いているらしく、その度に電話がかかってくる。もちろん三時間くらい話し続ける。シロナさん、あなた本当に考古学者やってんの？

で、当然俺にとって良くない事もあつた。と言つてもひとつだけなのだが「アンチマキナ」が物凄い勢いで増殖しているのだ。

なぜかと言われても、そんなものは俺の知る由もない事で、知らない間にヘイトを買っていた……としか言いようがない。

とは言え、アンチ俺を掲げる大手掲示板のスレを読めばなんとなく分からなくもない。

マキナとかいう新人トレーナーwwww

1：名無しのゴンベ@カントー  
実際強いん？

2：名無しのゴンベ@イツシユ  
くさい

3：名無しのゴンベ@カントー  
あれはヤラセって結論出てただろ。解散。

4：名無しのゴンベ@ホウエン  
シロナ様がポケモンバトルで手抜くわけねえだろ氏ね

5：名無しのゴンベ@シンオウ  
卑劣な手使ってシロナさん脅してんじやね？

6：名無しのゴンベ@ジョウト  
シロナさんが卑劣な輩に屈するわけないだろいい加減にしろ!!

7：名無しのゴンベ@ジョウト

つか、はがねがガブリアスの地震二回も耐えられるん？俺駆け出しだからわっかんねーけど、はがねって地面苦手だったよな？

8：名無しのゴンベ@カロス

>>7 苦手やで

9：名無しのゴンベ@ジヨウト

>>8 じゃあ二発はキツくね？なんで耐えたの

10：名無しのゴンベ@カロス

>>9 知らんやで

11：名無しのゴンベ@ジヨウト

>>10 はえくなるほどなサンガツ

12：名無しのゴンベ@ホウエン

>>11 ええ……

13：名無しのゴンベ@ジヨウト

>>11 ええんかそれで(困惑)

14：名無しのゴンベ@カントー

>>11 草ア!!

15：名無しのゴンベ@アローラ

マキナはポケモン虐待疑惑があるからなあ……

16：名無しのゴンベ@ジヨウト

>>15 アロフォーネのやつか

17：名無しのゴンベ@ホウエン

>>15 アロフォーネたそ終始ブルブル震えとつたでな。あんなに日常的に虐げとらなならんやろ。アロフォーネたそはワイらが守るんやで。

18：名無しのゴンベ@ジョウト

>>15 ナットレイなんて感情抜け落ちとつたしな

19：名無しのゴンベ@アローラ

>>18 元から定期

20：名無しのゴンベ@シンオウ

>>18 元からやぞ

21：紳士@シンオウ

んんwwwwマキナ殿の交代読み鉢巻ジャイロは異教徒ながらも見事なものでしたぞ  
wwwwwwシロナ嬢のボゲキッス○やボロカロス○はナットレイに手も足出ません  
でしたなwwwwwwあれほどのプレイイングスキルが八百長とかありえないwwww  
wwww

22：名無しのゴンベ@カントー

またこのクソコテかよ



……と、まあキャラの濃い人たちが多かつたが、どうやら俺はポケモン虐待、八百長、脅迫などと、言われもない濡れ衣を着せられているようだ。こう言うのは気にしないのが一番だとは思うが、今後は言動に細心の注意を払わないと、揚げてもない足を取られかねない。

現状、トレーナー協会やスポンサーとしてついでにデボンコーポレーションからも特に何も言われていないが、アンチが増えすぎると亀裂を生みかねない。あまり調子に乗りすぎないのが一番だな。まあ、大金はたいてポケリゾート購入したから「あいつ調子乗ってるわ」って言われまくってる最中なんですけどね……

色々と思い返ししながら作業を進めていると、長い間精査し続けていた書式がついに完成した。

俺は表計算ソフトの上書きアイコンをクリックしてから、印刷アイコンをクリックすると、少しのタイムラグを経て複合機が印刷用紙を吐き出す。

計算結果が見間違いいではない事を確認するべく、プリントに視線を落とす。

アロフオーネ

タイプ

ノーマル／ゴースト

種族値

HP

100

こうげき 1

ぼうぎょ 60

とくこう 150

とくぼう 130

すばやさ 159

計 600

「なんやこの厨ポケエ!!」

【悲報】無／霊タイプの厨ポケが現れたようです。



## 05：無慈悲な洗礼

シロナは、マキナが居を構えていると言われている「ポケリゾート」を訪ねる事を決断した。

ご自慢の真紅の翼を広げ、綺麗に滑空飛行をこなすポーマンダの上で、シロナは食い入るようにして前方にある島を見下ろす。

並んでいる五つの小島が、それぞれ異なる用途で使われているという事は、シロナの目から見ても一目瞭然だった。ある島は大きな一本の木がど真ん中に生えており、ある島は湧き出る温泉でポケモンたちが気持ち良さそうに湯浴みをしていたりする。

そして、マキナの家だと思われる邸宅が立つ島には、広大なきのみ畑が広がっており、どことなく上機嫌なドレディアたちが意気揚々ときのみを収穫している。時たまマキナからシロナ宛に送られてくるヤチエのみやヒメリのみは、この島で収穫しているのだろう。

プスプスと白煙をあげるカットロトムが、死にそうな表情で雑草を刈り続けている事に気付かなかったシロナには、ポケリゾートがとても平和な島に感じられた。

「まるでアローラという地を象徴しているかのような場所ね。あたしもこんな所で暮ら

してみたいわ」

などと、能気な感想を思わず溢してしまふシンオウチャンピオンだが、物見遊山でこの南国に来たわけではない事を思い出し、目的の彼の姿を探す。

「今日はマキナの公式戦は無いって協会は言っていたし、家に居てくれたら良いのだけど……」

普通、知人の自宅を訪問するならば、なんらかの形で前もってアポイントメントを取るのが常識ではあるが、常人のそれと比較して、どこかズレた節のあるシロナはそれを怠っていた。

「立派なお屋敷ね……あら？家の前に何かいるわ」

ここからだとして遠くがよくわからないので、シロナは首にかけていた双眼鏡を手に取り、倍率を最大にして覗き込む。

『猛犬注意。かみつきます』

と書かれた、プラカードをぶら下げた『サザンドラ』が、我が物顔で昼寝をしていた。

「……あれを犬と呼んでも良いのかしら？」

当然、呼んで良いわけではない。ただ、迂闊に近づくべきではないと言う点では、ある意味共通していると言えよう。よく見ると、サザンドラの三つある頭の中、一つの頭がなにか珠玉のようなものを口に咥えている。シロナの記憶違いでなければ、あれは「いのちのたま」だ。

「あの家に近づいたら、文字通り命懸けで攻撃してきそうね……」

動くもの全てを破壊し尽くす暴虐さを秘めていると言われるサザンドラを、番犬ならぬ番竜として扱うマキナは、来客を消し炭にする趣味でもあるのかと、シロナは彼の正気を疑わずにはいられなかった。

目的地が目前にまで来ていると言うのに、まるで近づける気がしないシロナはジレンマに陥っていた。他の島にいるかもしれないと思っただ彼女は、ポーマンダに高度を上げてもらい、上空からポケリゾートを一望する。

ひとつだけ、何やら様子がおかしい島があることにシロナは気付く。一本の大樹が生えた島だ。

その島にいるポケモンが、何やら一点へと集まっていくのだ。そして、その集合地点にはお目当の人物……マキナが立っている。

マキナのすぐ側でグレイシアが『おすわり』の姿勢でマキナを見上げている。グレイ

シアは飼い主にも負けず劣らず、クールな表情を保っているが、その尻尾ははち切れんばかりにブンブンと揺れている。

マキナが右手を右へ、左へと動かす度に、それに釣られるようにしてグレイシアの顔も右に、左にと動いている。

最大倍率にした双眼鏡で、マキナの右手を観察すると、何かが握られているようだ。

「あれは……ポケマメかしら？」

シロナは思わず吹き出してしまう。ポケモンを「数字だ」と言い切った男が、グレイシアと仲睦まじくふざけあっているのだ。これをどうして笑わずにいられようか。

どうしてもあの時見た「仮面の裏側」を想起してしまい、形容しがたい感情がシロナの全身をくすぐる。

高高度でホバリングをしていたポーマンダに指示を出し、一気にマキナの元へと近づいて行く。

マキナはよく自分の電話にに応じてくれる上、長時間に渡って通話に付き合ってくれるので、マキナとはそれなりに会話を交わしているなぞなのだが、いざその姿を前にして言葉を交わすとなると、妙に緊張してしまう自分がいる事に、シロナは不思議で仕方がなかった。

……恐らく、その感情の由縁がいかなるものであるか解を導き出せないのは、シロナ

自身だけであろう。

肉眼でもマキナの姿がはつきりと見えるくらいの距離にまで差し掛かった時、シロナはようやく異常に気付く。

シロナが一度も見たことのないくらい険しい表情で、マキナがこちらに向かって何かを叫んでいるのだ。

あのマキナが、強い、強い怒りを露わにしているのだ。

「……………!!この島には、指一本たりとも触れられると思うな!!消え失せろ!!」

「……………ふえ?」

何だかよく分からないが、マキナがヤバイ。

シロナがそう気付くも、時既に遅し。

「グレイシア、れいとうビーム!!

キュウコン、ふぶき!!

サーナイト、ムーンフォース!!

カイリユウ、りゅうせいぐん!!」

「えっ……ちよつ………きゃあああああああああああああ  
!!!???

~~~~~

天気がとても良い。こんな日はグレイシアと戯れ合うのが一番である。

久々のオフを手にした俺は、育成&厳選も一旦は中断し、完全な休息を設ける事にした。昼前時なので、アロフォーネはぐつすりと眠っている。

オーキド博士に提出するレポートも書き終え（執筆時間五分くらい）、特にこれと言ってやる事のない俺は、愛犬（？）のグレイシアと共にのびのびリゾートに足を運んでいった。

サーナイトやカイリニューが、地に落ちたポケマメを真面目に回収しているのを尻目に、グレイシアとスキンシップを取っていた。

グレイシアは現在、俺の目の前でちょこんとおすわりをしている。この姿だけでもご飯三杯くらいはいけるが、グレイシアの愛くるしさはもっと別の場所にある。

現在、ポケマメの中でも最も質の高いニジマメが一粒、俺の手中にある。それをグレイシアにチラつかせて見ましょう。

不思議そうな顔で顔を傾^{かし}げるグレイシア（かわいい）だが、俺の手にニジマメが握ら

れていると分かるや否や、グレイシアの耳がピンと立ち上がる。かわいい。

が、さすがはクールビューティーのグレイシア。すぐさま俺からプイツと顔を背け、おすましの表情になる。『別に欲しくなんてないんだからね。勘違いしないでよ』みたいな顔をしている。でもめっちゃ尻尾振ってる。

俺が少し手を右に動かすと、グレイシアは『あっ!!』って顔で俺の右手を目で追う。で、俺と目が合うと、またしても『べ、別に欲しくなんてないんだからっ!!』って表情で、また顔をプイツって背ける。

ああああああああああああああああああああ

!!!!!!!!!!!!

おすましグレイシアが可愛いすぎて生きるのが辛いよおおおおああああああ
!!!!!!!

グレイシアのしたたかさに負けた俺は、思わずニジマメをグレイシアに与えてしまう。こんな見せられたら氷四倍勢ですらグレイシアちゃんに惚れてしまいますよ。ブイズの可愛さはガチ。はつきりわかんだね。

若干怒ってるグレイシアは、俺からニジマメをひったくる際、尻尾で俺の顔面をピン

夕してきたが、我々の業界ではご褒美なのであまり気にしない事にした。

因みに、もし今のがアイアンテールだったら、確実に首がイカれて全身不随になるので気をつけましょう。ポケモンの技を、人間が受けるのは絶対にいけない。

ポケモンの技を、人間が受けるのは絶対にいけない。

拗ねてしまったグレイシアの機嫌を直そうとしていると、近くでポケマメを集めていたサーナイトが強い『テレパシー』を送ってくる。何を伝えたいのかはまるで分からないが、何か伝えたい事があるということは分かるので、とても賢く優秀なポケモンである。あとかわい。

テレパシーを送ってきたサーナイトがいる背後を、何事かと振り返ってみると、のびのびリゾートにいる全てのポケモンが、血相を変えて俺の元へと駆け寄って来ている事に気付いた。これが自分のポケモンじゃなかったら一生トラウマになりそうな光景だな……

突然の事に俺が惚けていると、グレイシアが上空に向かって吠え始めた。なんだ、また野生ポケか。

そう、このポケリゾートはその性質上、ドデカバシやドデカバシのような野生の鳥ポ

ケモンを呼び込みやすい。ゲームでも、のびのびリゾートには野生のポケモンが来て、自分のポケモンとして居つく事がある。

しかし、人様の島のポケマメを勝手に食い散らした挙句、「気に入ったからここに住んでやるよ」的な顔で居座ろうとする、盗人猛々しいにも程がある輩を、器の小ささに定評があるこの俺が看過するはずもなく、例外なく制裁を加えている。

ただし、ラプラスだけは可愛いので手厚く保護しています。ナマコブシ？ソフトボール投げの要領で、海めがけてボスゴドラに投げさせてます。たまに特性の「とびだすなかみ」が発動して上空で爆散する。きたねえ花火だ。

のびのびリゾートにも野生ポケモンはしょっちゅう来るのだが、俺の家があるすぐすぐリゾートには、きのみ畑があるせいで連日連夜ひこうタイプのポケモンが押しかけてくるのだ。その度に、ペリッパとカトリロトムのタッグによる『必中かみなり』をお見舞いされていると言うのに……性懲りもなくまた来やがったようだ。

だが、何故わざわざポケモンたちは俺のところを集まってきたのだろうか？いつもならば、カイリユウが暴風とかでクソ適当に追い払っているのに、何だか様子がおかしい。

グレイシアの視線の先を辿ってみると、やはり不法進入者はいた。しかし、いつもの如く群れを成しておらず、単体で……

あの鳥なんか縮尺がおかしくなくですかね？というか、その辺にいるような、貧弱な鳥ポケが出せるとは思えないようなスピードで接近してくるんですけど………つて、ちよつと待てや。

あれボーマンダヤんけ。

「アイエエエエエエ!? ナンデ!? ボーマンダナンデ!?」

はあああああああ!? 600族ドラゴンさんがなんでこんな所を飛んでるんですかねえ!? というかなんでこつちに向かってくるんですかねえ!? このままだと焼け野原不可避ヤんけ!!

「冗談じゃねえぞ!! ORASでメガ獲得して復権したからつて調子乗ってんじゃねえぞバーカ!! うんこ!! 氷四倍!! こちとら鬼のようなローン返済に苦しんでるつてのに、焼け

野原にされてたまるかポケエ!!この島には、指一本たりとも触れられると思うな!!消え失せろ!!

グレイシア、れいとうビーム!!

キュウコン、ふぶき!!

サーナイト、ムーンフォース!!

カイリユー、りゅうせいぐん!!

『ひかえめ』な性格のポケモンたちから、高威力のタイプ一致技が放たれる。もはやカオスとしか言いようがない無慈悲な洗礼が、迫り来るボーマンダを急襲する。

ブハハハハハ!!環境トツプメタだろうがなんだろうが、数の暴力を前にしたらラブカスも同然なんだよ!!ブハハハハハ!!死ぬが良い!!

オーバーキル以外の何物でもない四面楚歌が、愚かなボーマンダを蹂躪する。グツバイ、マンダ。くにへかえるんだな。おまえにもかぞくがいるだろう…

「きやあああああああああ
!!!?!??」

え、女の人の悲鳴？

俺は慌ててボロ雑巾のように変わり果ててしまったポーマンダに視線を戻す。ポーマンダのすぐ側には、人間のような何かも一緒に下降しているではないか。

自分の顔から血の気が引いていくのが分かった。俺は頭より先に体を動かしていた。悲鳴の主の落下地点へと滑り込み、間一髪と言ったところで抱き留める。全くと言っていいほど落下の衝撃が加わらなかったのは、サーナイトが念力的な何かで緩和してくれたのだろうか。

俺の腕の中には、確かな体温と体重が感じられ、当人の物と思われる荒い息づかいが聞こえる。大事には至らなかったようだ。

生きている。

それが確認できた俺は、安堵を覚えると共に、全身から力が抜けていくような感覚を覚えた。が、今の状態で力を抜くわけにはいかない。

対象を抱き抱えている己の胸元に視線を落とすと、枝毛の一つもない艶やかな金髪が、アローラ特有の快い日差しを美しく反射している。

乱れた呼吸とともに、その漆黒の衣装を纏った華奢な肩が上下している。その金糸のような金髪が揺れる度に、女性だけが放つ事ができる、心地良いリンスの香りが漂う。

後にも先にもないであろう災禍を被^{こうむ}った、この女性の安否を確かめるべく、俺は壊れ物を扱うような手つきで彼女の髪を払い分けると、そこには俺がよく見知っている顔があった。

「けほっ、けほっ……うう……どうしてこんな目に………」

「何やってるんですかシロナさん」

06：愛と憎しみのフランス人形

人は死の危機を目前にした時、走馬灯のようにこれまでの記憶が呼び起こされると言われているが、シロナに限ってはそのような事はなく、逆に己の思考が冴え渡っていくのを如実に感じた。

どうする事もできぬ集中砲火の前に、すくみあがるような絶望がシロナのボーマンダを支配した。それでも、シロナだけは傷つけまいと真紅の両翼を広げる。一方でシロナは、少しでもボーマンダを傷つけまいと、持つているスペシャルガードを全てボーマンダに使う。一時的ではあるものの、ボーマンダの特防が大きく底上げされる。

シロナが三つ目のスペシャルガードを使ったと同時に、過剰火力とも言える洗礼がボーマンダを陵辱する。

慣性に抗う事など出来ず、シロナは急激に減速したボーマンダの上から放り出されてしまう。彼女は思わず甲高い悲鳴をあげてしまうが、それによって状況が好転する事など無く、その身体は地へと引き寄せられていく。先ほどまでボーマンダと共にいた、雲の一つもないアローラの晴天が、凄まじい速度で遠ざかって行く。

シロナは、最後までボーマンダの無事だけを祈っていた。

地へと叩きつけられるまでの一瞬が、とても長く感じられる。想像したくもない、来たるべく悲劇の恐怖に、シロナの全身が小刻みに震える。

(そろそろね……)

シロナは強く目を瞑り、身体を強張こわばらせる……が、いつまで経っても落下の衝撃が彼女を襲う事は無かった。

(あたしは……助かったの?)

シロナがゆっくりと瞼を開くが、自身の髪が視界を覆い尽くし、状況を把握する事は叶わない。だが、背中から自分の物ではない、別の体温が混ざっていくような感覚をシロナは覚えた。

誰かが己の身を受け止めてくれたのだ。満身創痍のボーマンダか。島にいたポケモンたちか。あるいは……

徐々に落ち着きを取り戻すと共に乱れた呼吸をしていたシロナは息苦しさを覚え咳き込んでしまう。

どうしてこんな事に……そう己の身に降りかかった災禍を恨めしく思うシロナだが、一切の告知もなくボーマンダに乗ってこの島に急接近した事に原因があったとは、露ほども自覚していない。

ふと、暖かな光が瞼を刺激する。条件反射的に目を開くと、鳩が豆鉄砲を食ったよう

な顔をしたマキナが、自分の顔を覗き込んでいた。

「何してるんですかシロナさん」

「……それはあたしのセリフよ。死ぬかと思ったじゃない。なぜ攻撃をしてきたの？あなただのせいでボーマンダが……」

そこまで言葉にして、シロナはハツとなる。

ボーマンダは……自分を守ろうとしてくれたボーマンダはどうなった。

シロナは慌ててパートナーの姿を探す。ボーマンダは目も当てられぬ程の傷を負い、自分のすぐ近くで力無く地に伏せていた。

「っ!!」

シロナは振り解くようにしてマキナの腕の中から飛び降りる。そして、一目散にボーマンダの元へ足を急がせ……ようとすも、盛大に転倒してしまう。

「痛っ!?!なによもう……」

打ち付けた腰をさすりながら足元を見やると、数粒のポケマメが転がっていた。

仕組まれているのではないかと疑わずにいられない程の負の連鎖に、若干の苛立ちを

覚える彼女であったが、息絶え絶えといった様子のボーマンダを見ると、またしても気が気でなくなる。

焦燥に駆られるシロナは、げんきのかたまりをうまく取り出せない。もたつくシロナを見かねたのか、マキナがげんきのかげらとまんたんのくすりを取り出し、ボーマンダに使用する。嘘のように怪我が癒え、みるみるうちに瀕死状態にあったボーマンダが元気を取り戻していく。

「シロナさん。謝って済む事ではありませんが、此度は申し訳ありませんでした」

シロナは混乱していた。感情のままにシロナとボーマンダを攻撃してきたマキナが、シロナのボーマンダに高価なきずぐすりを躊躇なく使ったあげく、こちらが求める前に謝罪をしてきたのだ。

そして、マキナに対して強い敵意を剥き出しにしていたボーマンダに、このアローラでも少数しか出回っていないと言われている『虹色のポケマメ』を与え、真剣な面持ちで「すまなかつたな」とボーマンダを宥めていた。

ものの数秒の間に、ボーマンダはすっかりマキナに懐いていた。

周囲にいるマキナのポケモンに対しては、ボーマンダのいじつぱりな性格がそうさせているのか、相変わらず威嚇を振りまいているが、マキナに対してはそれなりの時間を共にしてきたかのような距離感で、さらなるポケマメをマキナに所望している。

シロナからしてみれば、ボーマンダはガブリアスや他のポケモンたち同様、タツベイの頃から大事に育ててきているので、家族も同然な関係を築いているのだが、自分以外の人間に愛想を振りまく様子などただの一度も見ないのだ。

気の強いシロナのボーマンダと、種族的にも温厚な個体の多いマキナのカイリユーは波長が合うのか、どちらともなく遊び始める。のびのびとしたこのリゾートが彼らをそうさせているのか、それとも…

目の前の光景に呆氣に取られていると、マキナが苦い表情でシロナに話しかけてくる。

「シロナさん、私に全面的な非があつた事は認めますが、今回のようにポケモンに乗っていきなり現れるのは勘弁していただきたい。ここは野生ポケモンが来ることが多く、まさか人が乗っているだなんて基本的には思わない。お訪ねする際は予めお教えいただくか、船舶等でお越しください」

なんのことはない、マキナはシロナを攻撃しようとしていたわけではなく、単に野生のボーマンダが襲いかかってきたのだと勘違いをしていたに過ぎないのだ。

トレーナーのいない野生のボーマンダは、所構わず火を吐きまくるようなポケモンだ。特に、コモルーから進化して、空が飛べるようになってしまったばかりのボーマンダは、歓喜のあまり周囲を火の海にしてしまう、ちよつとやつてられないような暴れん坊っぷり

を見せる。

そんな野生ポケモンが自らのプライベートリゾートに突入を仕掛けてきたともなれば、彼がポーマンダに攻撃をするのは正当防衛に過ぎず、彼には何一つとして非がなかったと言つても、誰も否定はできまい。

「ごめんなさい。これからは前もってあなたに電話をするから」

一瞬、マキナが『電話』という単語に思わず顔を顰めていた事に、後ろめたさ故に彼の顔を見れないでいたシロナは気づかなかった。

「……電話である必要はありませんが、ポケチャットなどでひと声かけていただきたいですね。あまり人に見せたくないものもありますから……」

マキナの言う『見せたくないもの』が、彼がポケモンたちだけに見せている『あの表情』の事だと、シロナにはすぐ分かった。

言うまでもないが、真実は全くもって違うのだが、この時のシロナにその誤解を解消する術はない。

(マキナ……あなたは、ポケモンにしか心を開けないでいるのね)

言うまでもないが以下略。

マキナのポケモンたちにししか見せないはずの表情を、二度に渡って覗き見をしてしまったシロナは少なくとも罪悪感を覚える。同時に、世間からは冷たい人間だときき下

ろされ続けているマキナの『本当の表情』を、自分だけが知っているという事実には、シロナの身体がわずかに熱くなっているのを感じた。

「今はなんとも無いかもしれないですが、シロナさんもどこか痛めているかもしれないですね。家うちでゆっくりしていくといいでしょう」

ニコリともせず平坦な口調でマキナがそう言うが、わざわざ自分からシロナを招き入れるような事を言っているのだから、邪険に扱われているわけではないのだろう……そんな事を考えながら、シロナは首を縦に振る。マキナの家に興味があるのも事実だ。

もし仮に、逆にシロナの家に行きたいなどとマキナが言い出したら、シロナは全力で拒否しているだろう。彼女の家は、とても人に見せられるものではなく、チャンピオンであると同時に考古学者でもある彼女の、山のような資料と書籍が、文字通り山を築いているのだ。散らかっているという表現では生易しすぎる。

マキナがライドギアに登録してあるポケモンを呼び出すと、一匹のエアームドが現れる。

「家は隣の島にあるので、空を飛んで移動します。……本来ならば二人乗りは危険ですし、ライドスーツの着用が義務付けられていますが、そこまでスピードを出すわけではありませんし、敷地内の移動です。問題はないでしょう。ですが、しっかりと掴まってください」

マキナはエアームドに装備された『騎乗具』に掴まれと言ったのだが、よく理解していないシロナは、二輪車の二人乗りでもするかのように、マキナの腰に腕を回し、強く抱きしめる。何がとは言わないが、シロナの色々と凄いものが、マキナの背中に押し付けられる

「海の香りが気持ち良いわね」

「ええ……とても気持ち良いです。こんな体験は、きつと後にも先にもないですね」

「……………？マキナはこのリゾートに住んでいるのだから、後にも先にもあるでしょう？」
「気にしないでください。こちらの話です」

よく分からぬ事を言うマキナに首を傾げるシロナだったが、そうこうしている間に、きのみ畑の広がるあの島が見えてくる。

シロナはマキナにならってエアームドから降りる。きのみやドレディアたちの甘い香りが漂うきのみ畑を横断していると、一匹のドレディアが駆け寄ってくる。

ドレディアはモモンのみを抱えており、それをマキナに差し出している。モモンのみを受け取ったマキナは、礼を述べるとやや控えめにドレディアを撫でる。シロナの前なので遠慮をしているのだろう。マキナは「私はいつでも食べられる」と言い、そのままシロナに横流ししてきたが、甘い物に造詣が深いシロナは喜んで受け取る。

「こんな平和なポケモンたちもバトルで戦うだなんて、想像もつかないわね」

おもむろにそう口にしたシロナに対して、マキナは静かに首を横に振る。

「…コータスと並べると恐ろしい事になりますよ、彼女たちは」

なぜここでコータスが出てくるのか、シロナには皆目見当もつかないが、他ならぬマキナが言うのだからきつとそうなのであろう。なにせ、マキナは無敗だったシロナをたった三匹のポケモンで倒し、公式戦では一度たりとも黒星をつけられた事がないのだ。

そのくせマキナは、ルールの無い変則マッチは一度も行った事はなく、公式戦でお馴染みの『一対一シングルのターン制』ルールを適用しない親善試合は全て断っている。『二対二ダブルのターン制』は全くやらないという訳でもないようだが、それほど積極的ではないようだ。マキナからは何か『一対一のターン制』に対する強いこだわりのようなものを感じる。

きのみ畑を抜けると、いよいよ彼の家が見えてくるのだが、先の墜落事故によつて完全に失念していた事実をシロナは思い出す。

「……ねえ、襲つてこないわよね？」

珍しく恐怖心を露わにするシロナが指差す先には、いのちのたまを啜えたサザンドラが惰眠を貪っている。

さすがにここまで近づくと、サザンドラは目を覚ます。見慣れぬシロナの姿を目にし

たサザンドラが、敵意を剥き出しにして咆哮をあげる。

「あたしはまだ死にたくないわ」

「こいつで余裕」

無駄にダンディな声でそう即答したマキナが、サザンドラに向かってモンスターボールを放り投げる。ボールの中から現れたのはマリルリだ。

興奮した様子だったサザンドラの動きが、マリルリを目にした瞬間にピタリと止まる。さらに、マリルリが『はらだいこ』を打つと、サザンドラは脱兎の如く逃げていつてしまった。

「不思議な事もあるのね。あのサザンドラがこんな小さなポケモンを恐れるなんて」

「よく見かける光景ですよ」

にべもなくそう言い放つマキナが、シロナには可笑しくて仕方なかった。

外部からの脅威に対しては無慈悲ではあるとは言え、やはりこの島は信じられないくらいに平和だ。

パチパチと火花を散らし、おかしな挙動を繰り返しながらも雑草を刈り続けるカットロトムに、やはり気づかなかったシロナはそんな事を考えていた。

片付けがしたいから少し待っていてくれと言われたシロナは、マキナの言葉通り家の

前で待つ。

マキナが家に入って行く際、ドアの隙間から何か短冊のような物が見えたが、マキナが慌てるように扉を閉めてしまったため、何なのかは分からなかった。

「良かった。家が片付いていないのは、あたしだけじゃないのね」

胸をなでおろすように独り言ちるシロナだったが、お前の家は少し待ってもらう程度で片付けられるレベルじゃないだろうとツツコミを入れられる者は、皮肉な事にも誰もいなかった。

~~~~~

マキナの家はとても広く、とても綺麗な内装をしていた。家具が充実しているのは勿論の事、窓から望める一景も素晴らしいの一言だった。家の周りを飛んでいるペリッパ―やムクホーク、ファイアローも彼のポケモンなのだろう。

部屋の上にはシャンデラが浮遊しており、独特な美しさを持つ青い炎が、窓から遠い部屋の奥を明るく照らしている。

マキナがボールからグレイシアを出してやると、グレイシアはソファアーにちよこんと座り、大人しくテレビを鑑賞し始める。

他にもいくつかのポケモンが思い思いにくつろいでいるのだが、彼の象徴とも言えるポケモンが見当たらない。代わりに、間抜けな表情をしたサルの人形が、狂ったようにシンバルを叩き続けているのだが……

「アロフオーネはどうしたの？」

「彼女は基本的に夜行性ですからね。ぐっすりと眠って……失礼、飲み物を淹れてくるので楽にしてください」

急に仏頂面になったマキナは、そう言い残すと奥に設えられたキッチンの方へと向かって行く。不思議に思うシロナではあったが、テレビに夢中になっているグレイシアを眺めながら、少しリラックスをする。グレイシアもシロナに見られている事に気づいたのか、警戒しながら、シロナの事を見ている。グレイシアのひかえめな性格も相まって、シロナに興味はあるようだが、なかなか近づこうとしない。

「おいで」

そんなグレイシアにシロナが声をかけると、おずおずといった様子でシロナに近づく。シロナが一度グレイシアを撫でつけると、グレイシアは警戒を解いて大人しく撫でられ続けている。

シロナは百戦錬磨のポケモントレーナーだ。ポケモンの扱いに関しては、この世界に來たばかりのマキナと比較すると、シロナの方がはるかに上手だ。

『ますた、わたしがねむっているあいだに、おんなをつれこむとは、とんでもないちくしょうですね。しつとのあまり、このほしのすべてをはかいしつくすところでした』

「そんなんじゃないから。シロナさんがアポ無しで突入してきただけだから。そんな事で世界滅ぼささないでください」

『だまらっしゃい。ますたは、あるくかはんしんです』

「もともと下半身は歩く為のものなんですがそれは……。というか、あの馬鹿みたいな顔でシンバル叩き続けてるサルの人形なんかかしてくんない？ 恥ずかしいからやめて欲しいんだけど」

『ぼるぼとす・にじゅうさんせいです。そのあつとうてきな、やかましさと、うざさは、たのついでいをゆるしません』

「名前と容姿のギャップが激しすぎる。迷惑なんでバルバトス君は帰って、どうぞ」

『ますたは、すけこましですからね。いいふんいきにしてしまうと、しろなは、ますたにめろめろのぬれぬれになってしまいます。だからこうして、あたまのなかばつばらばーな、しろながてんかいする、ももいろくうかんをほうかいさせているのですよ』

「濡れ濡れ言うな。あと頭パツパラパーはあまりにも失礼すぎる」

『ますたにすりよる、いじきたないおんなどもは、かえって、どうぞ』

「ヤンデレの厨ポケに死ぬほど愛されて辛い」

……現在進行形でマキナが自分のポケモンに振り回されているという事実を毛ほども知らないシロナは、この家をととても気に入っていた。

一方で、アローラにしか生息していないと言われてるリージョンフォームの研究と称して、シロナがマキナの家に入り浸ろうと密かに画策しているという事実を、この時のマキナには知る由もなかった。

~~~~~

マキナが入れてくれたエネココアを口にしながら、シロナは考えていた。

(マキナ……あなたの事を知れば知るほど、あたしはあなたの事が分からなくなる)

いかにマキナが自分のポケモンに愛情を注いでいるか……このリゾートを見ただけでもシロナには分かるのだ。それ故に、あの論文に綴られた言葉が、どうしてもシロナ

の中で引っかかるのだ。

「して、シロナさんは私に一体なんの用があったのですか？」

「ちようど今、考えていた所よ。マキナ、あなたは何故、あの論文に『ポケモンは数字』だなんて言葉を残したのかしら？」

ポケモンはポケモンであり、断じて数字などではない。この言葉はシロナにとって、とても理解のできるものではなかった。

「やはりシロナさんは読んでいましたか……申し訳ありませんが、それをお教える事は出来ません。一応言っておきますが、オーキド博士に尋ねても無駄です。それだけは誰にも教えるわけにはいきませんからね」

「どうしてかしら？」

「誰も知らない方が幸せなんですよ。その数字は」

当然、そんな言葉で納得のできるシロナではなかった。

「なら、今からポケモンバトルよ。あたしがポケモンバトルに勝ったら教えて」

「……いいでしょう。ただしルールは親善あ試合の時時のように公式戦に準拠してもらいます。そして、私が勝った場合にもシロナさんにそれなりの要求をしますよ」

「望むところよ。あの時の雪辱を果たせていないんだから。…楽しいバトルにしましょう」

シロナの心は震えていた。あの日から、マキナに勝つことだけを考えて、ポケモンたちとさらなる鍛錬を積み重ねてきたのだ。もはや、マキナ以外のトレーナーなど、シロナにとってはまるで相手にならないレベルにまで、彼女は腕を上げている。

(あたしは、あなたに負けて強くなった。だから、あなたもあたしに負けて強くなりなさい)

今までのチャンピオン・シロナは、もうここには居ないのだ。

07：常夏の冬景色

シロナは未だかつてない緊張感を覚えていた。しかし、それは自らの精神を圧迫するものではなく、奥底から愉悦を引き出さんとする、心地よい刺激だ。

あの日以来、あの親善試合の事がシロナの頭の中から片時も離れないでいるのだ。

親善試合に敗北したとは言え、シロナはチャンピオンの座から転落したわけではない。これまでと変わらず、四天王を突破した猛者の中の猛者が、殿堂入りとマスター資格の取得に野心を抱き、チャンピオンであるシロナに挑んできた。

ぼつと出の新米トレーナーに惨敗するくらいだ。自分たちにも可能性はある……

そんな甘い考えをこさえた無知な愚者たちは、チャンピオン・シロナに完膚なきまでに叩きのめされてきた。

ある者は、鉄壁のような守りと無限にも等しい再生力を持ったミロカロスに決定打を

与えることができず、全てのポケモンが猛毒に沈んだ。

ある者は、精神を統一したルカリオに攻撃をことごとく凌がれ、全てのポケモンが精錬された波動に打ち砕かれた。

そして、大半の挑戦者は、彼女のガブリアスに何もする事ができず、全てのポケモンを無力化させられた。

足りない。満たされない。こんな物ではない。

ポケモンバトルをする上で、楽しむ事に主眼を置いているシロナにとって、彼らとの戦いは彼女を悦ばせる要素たり得なかった。

あの男とのポケモンバトルを知ってしまった彼女の心は、すでに別の次元の彼方に傾きはじめていた。

彼が繰り返した、まるでシロナの意図を見透かしているかのような立ち回りは、無敗のチャンピオンから一切の余裕を奪い取ったのだ。

本来ならば、圧倒的に有利であるはずのシロナを、的確に、恒常的に、不利へと追い込んでいったのだ。

(前みたいなの、一方的な戦いになんてさせないんだから……ッ!!)

パートナーが入ったモンスターボールを握りしめる手に、自然と力が入る。

「行って、トリトドン!!」

「ほわーお」

シロナは、みず／じめんタイプのトリトドンに先発を任せた。

「行ってこい、ボスゴドラ」

「ギャオギャアアアオ!!」

相対するマキナが繰り出したのは、いわ／はがねタイプのボスゴドラだ。

(悪くない対面ね)

いわタイプとはがねタイプを持つボスゴドラに対して、シロナのトリトドンが覚えている『だいちのちから』は非常に大ダメージを与えられる。さらに、ボスゴドラが非物理的なダメージにはそこまで強くないと言う事も、シロナは既に学習している。前のようにメガシンカをしたとしても、かなりのダメージが見込めるはずだ。

だが、しかしだ。

（あたしに分かつて、あなたには分からないだなんてあり得ないわ。そうでしょう？ マキナ）

ここで『だいちのちから』を選択するのは、以前までのシロナだ。だが、今のシロナは違う。

「戻れ、ボスゴドラ」

「トリトドン、すなあらし!!」

ボスゴドラの代わりに姿を現した、新種ポケモン・アロフォーネに、トリトドンが巻き上げたリゾートの砂塵が絡みつく。

あそこで『だいちのちから』を選択していたら、宙に浮いているアロフォーネにはまるでダメージが与えられなかっただろう。

吹き荒れる砂嵐が、僅かながらもアロフォーネの体力を削り取る。

それとなくマキナの表情を伺うと、彼の顔には少なくとも驚きの色が浮き出ている。見くびって貰っては困るのだ。

シロナはマキナを倒す事だけを考えて、ポケモン達と鍛錬を積み重ねてきたのだか

ら。

シロナは、よりパートナーの事を理解しようとしてきたのだから。

「トリトドン、戻って!!」

「アロフォーネ、フリーズドライ」

砂嵐は、相棒の独擅場だ。

「あなたの力……存分に見せてあげて、ガブリアス!!」

シロナが放ったモンスターボールから、たすきを装備したメスのガブリアスが音もなく出てくる。

以前のように雄叫びをあげる事なく、静かにその姿を露わにする。

そして、ここにいる者全てが瞬きを終える頃には、ガブリアスは吹き荒れる砂塵に身を隠してしまった。

一瞬、標的を見失ってしまったアロフォーネは、交代の隙を突く事ができず、みず々

イブのポケモンをも氷結させられる強い冷気を、ガブリアスに当てることが出来なかった。

マキナのエースとも言えるポケモンの一撃を、ガブリアスは回避したのだ。

マキナの鉄仮面のような無表情が、僅かに崩れたのを、シロナは見逃さない。

(マキナ……焦っているの？もつと……もつと見せて。あなたの仮面を剥ぎ取るために、ここまで来たんだから!!)

シロナは知っているのだ。その仮面の裏には、温かさに満ち溢れた表情^{かお}が、硬く秘されてしまっている事を。

シロナは決意したのだ。一段と強くなった相棒たちと共に、その仮面を粉碎すると。

そう意気込んだシロナが、次の指示をガブリアスに与えた時、アロフォーネが思いもよらぬ動きを見せた。

マキナの指示を待たずして、勝手にマキナのゴージャスボールへと戻っていったのだ。

普通、混乱状態でもない限り、ポケモンがトレーナーの指示を受けずに勝手な行動を取る事は、絶対にありえない。

他のトレーナーから譲渡されたポケモンはこの限りではないが、自らの手で投げたボールで捕まえたポケモンが、トレーナーの命令に従わない事は絶対にありえないのだ。

つまり、アロフォーネが勝手にボールに戻ったこの現象が何を意味するか……

指示が無くとも、自分の主人が考えている事など、アロフォーネには分かりきっているのだ。

(見せつけてくれるわね)

決して少くない時間を、トレーナーと共にしてきたシロナのポケモンですら、何らかの形でシロナが意思疎通を図らねば、バトル中に行動を取る事はできない。しっかりと何をするか伝えてあげなければ、何もする事ができないのだ。

だと言うのに、マキナのポケモンはそれを当然のようにやっつてのけたのだ。それも、マキナが捕まえてからそれほど時間の経っていないポケモンが……だ。

(マキナ……あなたは一体、どれほどの愛情をポケモンに注いでいると言うの?)

自らが傷つく事すら厭わぬ、誰にも見せぬマキナの愛情。

島のポケモンを一匹たりとも傷つけまいと憤る、誰にも見せぬマキナの激情。

そして、ポケモンたちを勝利へ導くために淡々と最適な指示を出し続ける、誰もが蔑むマキナの無表情。

シロナが超えなくてはならない男は、静かにプレミアボールを取り出す。

「行ってこい、キュウコン」

プレミアボールから飛び出てきたのは、『たつじんのおび』を巻いた白いキュウコンだ。

(これが噂のリージョーンフォームね……)

通常、キュウコンと言うポケモンは、黄金色に輝く体毛を持った、ほのおタイプのきつねポケモンだ。

しかし、このアローラ地方の環境と文化に適応した、全く異なる容姿や形質をもつた同種のポケモン：地方姿態が存在していると、かの有名なオーキド博士の従兄弟にあたるナリヤ・オーキドによって発見されたのだ。さらに、このアローラ地方では、キュウコンだけにとどまらず、複数種類のポケモンのリージョーンフォームが確認されていると

言う。

ポケモンの知識を貪り続けるシロナが、今一番に注目しているのもこのリージョンフォームだ。

マキナが繰り出したポケモンは、キュウコンのリージョンフォームであり、通常種と違って『こおり／フェアリー』のタイプを持っていると言われている。どちらも、ガブリアスが苦手としているタイプだ。

アローラの姿のキュウコンがどんなポケモンか、リージョンフォームについて齧った程度の知識しか無いシロナには、まるで予想もつかない。だが、この程度の逆境で狼狽える彼女ではなかった。

（ガブリアスが何度も何度も何度も……何度も練習してようやく覚えたこの技で、あなたのポケモンを倒してみせる）

シロナは、ガブリアスの全てを信じて号^{さけ}んだ。

「ガブリアス!!りゅうのまい!!」

張り裂けるような咆哮。

大気を切り裂く鋭爪。

大地を揺るがす舞踏。

己を鼓舞したガブリアスの全身に、荒ぶる龍の力が漲っていく。

今のガブリアスなら、いつも以上に疾く、いつも以上に力強い攻撃が繰り出せるだろう。

さらに、ガブリアスは無傷を保っている。『きあいのたすき』により底力が引き出されているガブリアスは、必ず一発は攻撃を耐えてくれるだろう。

そして、砂嵐に紛れたガブリアスに攻撃を当てるのは、至難の技だ。

もはや、今のガブリアスを止められる者はいないだろう。

(マキナ、これがあたしたちの全力よ)

誇らしげに相棒を見つめていたシロナは、自分の全力を前にしたマキナの反応を確かめるべく視線を移し……

底冷えするような悪寒を覚えた。

笑っているのだ。

皮肉るように、嘲笑うように、冷たい笑みを浮かべていた。

あの日、ナットレイに見せていた、温かな笑みとは似ても似つかない。彼の顔は引き攣り、失笑しているのだ。

「……ダメです。シロナさん」

(否定された………？ガブリアスたちの……あたしたちの全力を、否定した？)

シロナの中で、灼熱の感情が急激に沸騰していく。

(絶対に、勝つ。勝って、そのいけ好かない仮面……引つpegしてやるんだからッ!!)

業火のような闘志を燃やすシロナ。

そんな過熱したシロナを、芯から冷却していくような、冷たい外気が彼女を頬を撫でた。

(なんだか肌寒くなってきたわ。急にどうしたと言うの………っ!?)

冷静さを取り戻した彼女が、ようやく気づく。

つい先ほどまで吹き荒れていた砂嵐が、嘘のように収まっているのだ。

それどころか、この常夏のアローラに、あられ霰が降っているではないか。

(これは……キュウコンの仕業ね)

考古学者として研ぎ澄まされたシロナの推察力が、霰の正体を看破する。

(しかも、これはあたしのトリトドンが砂嵐を起こしたのとはわけが違う。まるで、そこにキュウコンがいるから霰が降っているかのようだよ)

突然の異常気象に開いた口が塞がらないシロナだったが、戸惑っているのは彼女の相棒も同じである。

うまく砂嵐に身を紛らせていたガブリアスは己を包み隠すための砂塵を失い、突如として強く降り始めた霰に身体中を蹴られている。

『きあいのたすき』によって引き出された底力も、穿つような霰によって削り取られてしまっただろう。

(まだあわてるような時間じゃないわ。今のガブリアスなら、このキュウコンより先に攻撃できるはずよ)

このアローラのキュウコンがどれだけの素早さを秘めているかは分からないが『りゅうのまい』をしたガブリアスが後手を取らされた事は、これまでに全くと言って良いほ

ど無かったのだ。

問題は、どの技を撃たせるかだ。

今の時点でマキナの手持ちは全て判明しており、キュウコンの後ろにはアロフォーネとボスゴドラが控えている。

『ドラゴンクロウ』や『げきりん』などのドラゴンタイプの技は、目の前のキュウコンに効かないので選ぶべきではないだろう。もしマキナが交代させずに、キュウコンにこおりタイプの技を命令したら、ガブリアスは確実にやられてしまう。

もう一つのメインウエポンである『じしん』ならば、キュウコンを倒せるかもしれないし、もしボスゴドラに交代してきたら、おそらく一撃で倒せるだろう。ただし、アロフォーネに交代をされたらスカされてしまう。

『どくづき』なら、ほぼ確実にキュウコンを倒せるだろうが、後ろに控えている二匹に対しては効かないだろう。

『ストーンエッジ』なら、確実にキュウコンが倒せる上に、アロフォーネにもダメージを与えられるはずだ。ただし、ボスゴドラに対してはあまり効かない上、ストーンエッジは攻撃の隙が大きく、しばしば避けられてしまう事がある。

(じしんか、ストーンエッジ、どちらが正解なのかしら……うう……頭が痛くなってきた

……)

意外にも直情的な部分があるシロナにとって、読み合いはそこまで得意でなかったよ
うだ。

(よく分からないからストーンエッジにしましょう)

シロナは考えるのをやめた。

「キュウコン、戻れ」

マキナならばキュウコンを引っ込めるだろうと、シロナはどこかで勘づいていた。しかし、いざ彼の完璧な読みを目の前にすると、流星は自分を倒してみせた男だと、改めて評価してしまう彼女がいる。

キュウコンをプレミアボールに戻したマキナは、アロフオーネの入ったゴージャスボールを振りかざした。シロナの選択が吉と出たのだ。

(初めてマキナとの読み合いに勝った…!!)

溢れ出そうになる喜びを抑えながら、シロナはアロフォーネが出てくるのを静かに待つ。

しかし、アロフォーネは、一向にボールから出てこない。

「……マキナ、どういうつもりなの？」

普通に意味が分からなかったシロナは、率直な疑問をマキナにぶつけると、今までに見たことがないくらいに渋面を作ったマキナが、言い淀みながらも静かに答える。

「ボールを投げ間違えてしまったのですが」

「……………」

シロナは哑然としていた。

シロナのように全てモンスターボールで統一しているならまだしも、ゴージャスボール、プレミアボール、ヘビーボールと、それぞれ全く違うボールに入ったポケモンを投げ間違えるとは、一体どういう事なのか。

「……今のはただのうっかりミスなの？」

「……ボスゴドラを投げるつもりでした」

彼の気の抜けた返答に、シロナはなんとも言えない脱力感に苛まれる。

しかし、すぐにシロナは気づくべき異常に気がつく。

なぜ、アロフォーネはボールから出てこなかったのだ。

ボールを投げられたら、ポケモンはどんな状況でも『自分の出番だ』と思うに決まっているし、瀕死状態でもない限りは必ずボールから出てくるはずだ。

(アロフォーネ……あなたは一体、どれだけトレーナーの事を理解していると言うの?)
アロフォーネは、ここでマキナが自分を投げるはずがないと、完璧にマキナの思考をトレースしていたのだ。

このポケモンはあまりにも賢すぎる。そして、あまりにもトレーナーの事を理解しすぎています。

シロナの目には、アロフォーネという新種ポケモンと、マキナという新米トレーナーが、心と心が完全に癒着しきつた一心同体の存在に見えて仕方がなかった。

(これはもう……家族という関係すら、とうに通り越している)

もはや、マキナという男の心は、ポケモンにしか向けられていないのかもしれない。

一瞬、シロナの脳裏をよぎったそんな考えを、彼女自身が否定する。

駄目だ。彼はトレーナーである前に一人の人間だ。人間としての心を失って良いわ

けがない。

(彼の強さが彼を孤独にしたのなら、あたしが彼の弱さを教えてあげる)

マキナが投げたヘビーボールからボスゴドラが出てくる。隙だらけのボスゴドラにストーンエッジが叩き込まれるが、いわ／＼はがねタイプのボスゴドラにはまるで効かない。

頬を突き刺すような強い冷氣とともに、硬質な霰が向かい合う二匹のポケモンを襲う。

荒れ狂う自然の中、あの時と同じ対面がここに実現したのだ。

だが、全く同じではない。

あの時とは違い、今のガブリアスはボスゴドラのれいとうパンチを凌ぐためのヤチエの実を持っていない。

そして、あの時とは違い、今のガブリアスはより強力な『じしん』を放てるのだ。

「ボスゴドラ、メガ進化」

あの時の、雪辱を……………

「ガブリアス!!じしん!!」

規格外の衝撃が、リゾートを揺らす。

戦いの行く末を見届けんとしていた、周囲にいるマキナのポケモンたちすらをも巻き込むかのような、強烈な一撃が、メガボスゴドラを打ち砕き………

耐えられた。

「そんな……………」

「ボスゴドラ、れいとうパンチ」

またしても……………またしてもパートナーを悪戯に傷つける結果に終わらせてしまった。

あの時と全く同じ結果だ。

「ガアアアアアアアアア!?!」

ごめんなさい。

堪え切れぬ苦しみを吐き出しながら力尽きていく相棒を目にしたシロナには、その言葉しかなかった。

ガブリアスの咆哮が止んだ時、二つの巨体が砂浜に倒れこんだ。

「……………え？」

ボスゴドラが、力なく地に伏せているのだ。

「ありえない……………ッ!!」

あのマキナが無表情仮面を脱ぎ捨て、驚愕に顔を歪めている。

感情を剥き出しにした彼が鋭い視線を向ける先には、ボロボロに傷ついたボスゴドラの拳があつた。

さめはだだ。

ガブリアスのさめはだが、マキナのボスゴドラに一矢報いてみせたのだ。

ただでは終わらせない…そんなガブリアスの執念が、難攻不落のボスゴドラを、見事打ち破つてみせたのだ。

ガブリアスの最後の抵抗が、マキナの仮面に綻びを生み出したのだ。

最後まで戦い抜いたガブリアスをねぎらい、ボールへと戻す。

(マキナ、初めてあなたのポケモンを倒す事ができたわ。これで二対二……………ガブリア

スの頑張りを無駄にはしないんだから!!)

再び闘志を燃やすシロナが再びマキナへと視線を戻すと……

またしてもマキナは笑っていた。

「……この世界は最悪だ。やりたい放題だ」

「マキナ………?」

乾いた笑いを浮かべるマキナが、ゴージャスボールを投げる。シロナも慌ててマキナに続いてモンスタールボールを投げる。

マキナのアロフォーネと、シロナのミカルゲ。あの日、この対面からシロナの全ては始まったのだ。

ガブリアスだけでなく、ミカルゲも打倒アロフォーネを掲げ、新たな技を覚えたのだ。そして、唯一の弱点であるフェアリータイプの技によるダメージを半減する『ロゼルのみ』を持たせている。アロフォーネを出し抜くための対策は、手厚く練つてある。

(ミカルゲ、ふいうち)

シロナは決して声には出さず、あらかじめ決めておいた合図で、ミカルゲにふいうちを指示する。ミカルゲは、アロフオーネが攻撃をする瞬間をじっくりと待っている。

必ずアロフオーネはムーンフォースを撃ってくるはずだ。そして、ふいうちはつつがなく遂行されるはずだ。シロナはそう確信していた。

しかし、アロフオーネがミカルゲに攻撃をしてくる事はなかった。

「アロフオーネ、ほたるび」

弱々しく儂げな光が、アロフオーネの周囲で不気味に点滅する。怪しげな灯火に照らされたアロフオーネは、その臆病な立ち振る舞いに似つかわしくない、禍々しい気配を強く垂れ流し始める。

終ぞアロフオーネの出方を伺っていたミカルゲは、攻撃を仕掛けることは敵わず『ふいうち』は失敗に終わった。

（ほたるび……？見たことのない技ね）

ほたるびとは、自分の特攻をぐぐーんと底上げする技なのだが、この技を使用できるポケモンは非常に少なく、流石のシロナでさえも知らなかったのだ。

（攻撃を受けなかったのはこちらと同じよ。ふいうちを一撃当てられれば良いのだから、ここはもう一度ふいうちね）

しかし、シロナの思惑通りには行かず、アロフオーネはもう一度ほたるびを使ってく

る。

今やアロフォーネは、数多の神秘的な光源に囲まれ、人形に取り憑いた靈魂とは思えぬ神々しさを放っていた。

(すごく、綺麗……)

エメラルドグリーンの螢火に照らされ、美しく輝くフランス人形に、降り頻る白銀の霰が加わり、神話の一部分を切り取ったかのような幻想が、シロナの眼下に広がっているのだ。

だが、見惚れている場合ではない。ガブリアスがその身をすり減らして掴み取った勝機を無駄にするわけには行かない。シロナは、ミカルゲに再三ふいうちを指示する。

「アロフォーネ、ムーンフォース」

「今よ、ミカルゲ!!ふいうち!!」

攻撃動作に移ったアロフォーネの不意を突くようにして、ミカルゲの瞬撃が叩き込まれる。

だが、アロフォーネは倒れなかった。

アロフォーネは騎士甲冑の後ろに隠れて、怯えながらも何かをモグモグと咀嚼してい

る。小さな口で頬張っている物は、トゲトゲとした輪郭が特徴的な紫色のきのみだ。

「あれは……ナモのみ……!!」

なんと言う事だ。マキナもアロフォーネが苦手とする、あくタイプ攻撃を軽減するきのみを持たせていたのだ。

やつの思いでミカルゲが命中させた会心の一撃を、かなりの余裕を残して耐えたアロフォーネが、反撃とばかりにムーンフォースを放つ。

「ミカルゲ、ロゼルのみで耐えて!!」

シロナは知らない。

今やアロフォーネの特殊攻撃の威力は、普段の四倍にまで跳ね上がっているのだ。

自らが灯した蛍の光と、月がもたらす精の光。薔薇輝石のような輝きを蓄積させたアロフォーネから、眩い光弾が射出される。

シロナのミカルゲが、これを耐えられるはずなどなかった。

ロゼルのみを以ってしても、その驚異的な威力のムーンフォースを緩和しきる事など到底不可能であり、ミカルゲは砂塵を巻き上げ島の端まで吹き飛ばされる。

勝てない。

生まれて初めて、シロナが勝負を諦めた瞬間だった。

「降参するわ」

これ以上、大事なポケモン達が瀕死状態に陥ってゆくところなど、シロナは見たくもなかった。

シロナが白旗を上げると同時に、マキナが安堵の表情を浮かべた。

「なぜ、あなたがそんな表情をするの？」

「必要以上にシロナさんのポケモンを痛めつけるほど、私は悪趣味ではありませんよ」

苦みばしった表情で、疲れたようにそんな事を言い放つマキナを見て、シロナは思った。

(やっぱりあなたは……この世界の誰よりもポケモンを愛しているのね)

リゾートの作物を食い荒らす野生ポケモンたちを、マキナが無慈悲に撃退しているという事実を知らないシロナは、彼が注ぐポケモンへの愛を信じて疑わなかった。

「さて、私が勝つたら、シロナさんには私の要求を聞いてもらうという話でしたが……忘れてはいませんか?」

「……ええ、ちゃんと覚えてるわ」

シロナはわずかに体を硬直させる。マキナに限ってそんな事はないと思うが、もし変な要求をされたら……と、さすがのシロナでも少しは考えてしまう。

「シロナさんには今後、このリゾートで目にした事、耳にした事は、一切口外しないでいただきたい。絶対に、です。よろしいですか?」

ああ……やはり、マキナはマキナなのだ。

ポケモンたちだけに注ぐ愛情は、ポケモンたち以外に見せるつもりがないのだ。

ここは彼にとって不可侵の楽園であり、シロナのような無粋でしかない部外者は、彼にとって招かざる客に過ぎないのだ。

ポケモンバトルを介して、急速に縮められたような気がしたマキナとの距離が、無情にも突き放されてしまったような錯覚に、シロナは締め付けられるような痛みを覚え

た。

「……………わかったわ。約束する」

彼に干渉する事は、彼の幸せを妨げるだけだ。だから、シロナはもう……

「……………それが約束できるのなら、いつでも歓迎します」

シロナは耳を疑った。

「……………え？」

「シロナさんなら、このリゾートに来る事を拒んだりはしません。暇な時で良いので、たまに私のポケモンたちとも遊んでいただけると嬉しいですよ」

許された。許されたのだ。

彼の聖域に土足で踏み入る事を、シロナだけに許されたのだ。

彼の愛するポケモンたちに触れる事を。シロナだけに許されたのだ。

シロナは、目の前にいる笑わない男を見つめ、心で叫ぶ。

もっと、隠された心を知りたい。

シロナさんにポケモンバトルを申し込まれ、ホープポケモンたちがアスレチックで鍛錬を積む三日月型の島、わいわいリゾートに場所を移していた。

なんの連絡もなしに、いきなり人様の家に突撃してくるとか、シロナさんは一体どういう育ち方をしたんですかね？

ゲームから引き継がれた伝説ポケや、割り出した三値のデータの山を見られずに済んだとは言え、多分今ままで一番焦ったかもしれない。伝説ポケは、ジラーチ以外は外に出していなかったが、今後はジラーチもボックスで大人しくしてもらった方がいいだろう。伝説ポケをシロナさんに見られたら面倒臭い事にしかならないだろうし。ジラーチに破滅を願ってもらう結末にはなりたくないです。

シロナさんに『ポケモンは数字』とはどーゆーこつちやと訊かれたが、中二病ノートの内容をクソ真面目に解説するメンタルなど俺には備わっていないので、それに対する返答は丁重にお断りした。が、やはり納得がいかなかったのか、バトルで勝って口を割らせるという強行手段に出てきた。ヤクザかな？

今回はあの時と違って三対三だ。とりあえず俺はアロフォーネ、キュウコン、ボスゴドラを選出した。ぶつちやけアロフォーネだけでもなんとかなりそうだが、前みたいにアロフォーネがチキって言う事を聞かなくなる可能性を考慮して、ガブを確実に仕留められるキュウコンを編成した。なぜ毎度、役割の薄いボスゴドラを入れているかと言う

と、単純に好きなポケモンだからという理由で採用しているだけだ。相手のパーティを見るなら、ナットレイの方が圧倒的に使い勝手が良い。

シロナさんのトゲキッスが少々気になるが、スカーフを巻いていてもボスゴドラをメガシンカさせなければ、もろはのずつきで強引に突破できるだろう。

今回のパーティで重要な点は、キュウコンが『この世界で』生まれた個体だという点だ。

現在、俺が所有しているポケモンは二種類あり、ひとつはゲームの世界で使っていたポケモンであり、もう一つはこちらの世界で新たに入手したポケモンである。

この二つの明確な違いは、技を四つ以上覚えるか否かにある。

ゲームの世界から引き継がれたポケモンたちは、ゲーム同様どうあがいても四つしか技を覚えられないのに対して、こちらの世界で入手したポケモンたちは、懐いてさえいれば四つ以上技を覚えるのだ。公式戦では、七つもの技を覚えているポケモンも見かける事もあった。まあ、折角の技スペを謎すぎる技で無駄にしている場合が殆どではあるが。

このキュウコンも技を四つ以上覚えている。技構成はふぶき、フリーズドライ、ムーンフォース、あくのはどう、めざめるパワー地、わるだくみの六つだ。キュウコンは専ら、ゆきふらしとオーロラボールを利用した壁張り要員として見かける事が多いが、敢

えて積みエースとして育ててみた。オーロラボールは、どうせ鋼を呼んで逆に起点にされてしまうからという理由で採用していない。

持ち物は『たつじんのおび』を持たせている。あく乙あたりを持たせたいところではあるが、俺は乙クリスタルを持っていないし、そもそもシロナさんの手持ちには仮想敵であるギルガルドがいないので、呼ぶルカリオをわるだくみ+めざ地で確実に落とせる、たつじんのおびを持たせることにした。

きあいのたすきで試行回数を増やすのが理想的かもしれないが、他のポケモンから剥ぎ取って付け替えるのも億劫だったので諦めた。妥協と言われても否定はできないが、そこまでガチガチに固めなくても何とかなるだろう。

「さあ、あなたの全力をみせて!!あたしたちがどれだけ強くなったか、見せてあげるわ!!」

おば……お姉さんノリノリっすね。最近、あなたがリーグ戦で挑戦者をボッコボコにまくついていると言う噂をちよくちよく耳にしているので、普通に怖いです。

とりあえず様子も兼ねて、先発はボスゴドラに任せる。

「行って、トリトドン!!」

「ぼわーお」

あちらの先発はまさかのトリトドン。教え技を持っているかどうかは不明だが、だいちのちからを撃たれるとちよつとキツイ。素直にナツトレイを入れるべきだったかもしれない。

「ボスゴドラ、戻れ」

物理技を受けるのがボスゴドラの仕事なので、ここは脳死でアロフォーネを投げる。

「トリトドン、すなあらし!!」

うわあ…他の人が変化技使ってくるのすげえ久しぶりな気がする。

シロナさんのトリトドンが起こした砂嵐により、あたり一帯には砂塵が舞い上がる。

『ますた、かみのけに、すながからまりました。なえました。てったいめいれいを』

アロフォーネちゃん、君ちよつとメンタル弱すぎじゃないですかね？あとでポケリフレしてあげるのでちゃんと戦ってください。

とりあえず、一貫性がヤバイ事になっているフリーズドライを選択する。ルカリオが出てきたら、まあその時はその時で何とかなるだろう。

「トリトドン、戻って!!」

引つ込めたか。前の試合でフリーズドライは見せていないので、居座る可能性もあると見ていたのだが。

「あなたの力……存分に見せてあげて、ガブリアス!!」

ファツ?!砂ガブ!?

ガブリアスがボールから出てくると同時に、アロフォーネがフリーズドライブを撃つ。しかし、砂嵐に紛れたガブリアスをうまく捉えられず、フリーズドライブをはずしてしま

う。
『すなあらしにまぎれるなんて、こごかしいぽけもんがいたものですね。かたはらだいげきつう』

騎士甲冑の後ろに隠れてるお前が言えた事じゃないだろ。と言うか前を見ろ前を。いちいちこつち向かなくていいから。

『こごかしいまねをしてくる、しろなのぽけもんなど、おそるるにたらず。また、みていてください。この、だいせいぎあるふおーねが、ひれつなあくをうちくだいてみせ………ひっ』

前を向き直ったアロフォーネが短い悲鳴をあげると、ゴージャスボールの中へと戻ってしまっ

ちよつと待てい。

何勝手に戻つてんのお前？ 心の中にだつしゆつボタンでも飼つてんの？

『ますた、らぐなるくはだめです。しんでしまいます。このたたかいがおわたたら、わたしとますたは、けつこんするのでしょうか？ こんなどころで、しぬわけにはいきません』
いや、そんな死亡フラグを立てた覚えはありませんが。

マジかよつて感じの顔で、シロナさんがドン引きしながらこちらを見ている。お前どんだけポケモンに懐かれてないんだよ、つて思つてるんだろうなあ……

まあ、いずれにせよアロフォーネは引つ込めるつもりだったので問題はない。よく見ると、シロナさんのガブリアスは『きあいのたすき』を装備しているので、フリーズドライを当てた所で反確を取られてしまう。

アロフォーネ対面でじしんを指示しているとは思えないので、キュウコン後出しが一番安定しそうではある。変態読みストーンエッジとか飛んできて倒されても、ゆきふらしのスリップダメージでたすきは潰せる。その後にはボスゴドラを死に出しすれば、態勢を整える事ができるはずだ。

キュウコンの入ったプレミアボールを投げると、純白の九尾がモフモフして気持ち良

さそうなキュウコンが出てくる。かわいい。

これで『げきりん』あたりの竜技が飛んでくれば最高なんだが……

「ガブリアス!!りゅうのまい!!」

は？

……やだなあ、シロナさん。『つるぎのまい』と『りゅうのまい』を間違えてますよ。
ほら、あなたのガブリアスも呆れてま……

竜舞やんけファック。

「(ガブリアスが竜舞とか)ダメです。シロナさん」

全ポケモントレーナーの総意を、俺が代弁してあげたと言うのに、シロナさんは何故かムツとした表情になる。いや、今一番怒ってるのはフライゴンさんですよ？

散々、不遇ポケモンだの、ガブリアスの完全下位互換だの、ドラゴンタイプの面汚しだの、フライゴミだの、世間の冷たい評価に耐え忍んで、念願の竜舞を獲得したんだぞ？それによってレート使用率が上がったかどうかは別として。

フライゴンさんは未だかつてない黄金期を迎えたんだぞ？輝いているかどうかは別として。

レート使用率上位に居座り続けるガブリアスに、これ以上の蛮行を許してはならない。夜な夜な枕を濡らし続けてきたフライゴンの仇は、必ず俺が取ってやろう。

冗談はさておき、ガブリアスが竜舞をしてくるというレギュレーション違反はさすがに予想していなかった。ゆきふらしの霰あられによって襷たすきは潰せたが、目の前のガブリアスはデメリットなしで鉢巻とスカーフを巻いているようなものだ。なにこの世紀末。

生憎とこちらのキュウコンはこだわりスカーフを巻いていないので、竜舞を積んだガブリアスを抜く事は不可能だろう。加えて、ガブリアスの努力値や個体値にもよるが、じしん一発で落とされる可能性が非常に高い。

これがレート戦なら、交代読み竜舞読みふぶきを撃っている所だが、シロナさんがレート民のような変態じみた読みをしてくるとは思えないので、まず攻撃をしてくと見て、間違いはないだろう。因みに、ここでガブリアスにもう一度舞われたら降参確定だ。

キュウコンを捨てて、ボスゴドラを無償降臨させるのも選択肢に入るが、シロナさんの三体目のポケモンが分からない以上、下手に手持ちを減らすのは危険すぎる。

一旦アロフォーネを投げて、すぐにボスゴドラに代えるのが一番安全だろう。わけわからんサブ技が飛んできて、瀕死になる事はまずない。

己の中で結論を出した俺はキュウコンを引つ込め、アロフォーネの入ったゴージャスボールを投げる。

.....。

.....。

.....。

いや、アロフォーネ何してんの？早く出てこいや。

『^三さん^十じ^六ゆう^計ろ^逃つ^げけ^るいに^如げ^るに^かし^かず^ず.....ますた。なに^ごとも、あきらめ^がかん^{じん}で

す。こんかいは、あいてがわるかったです。またがわるいわけじゃないです』

まだ負け確じゃないんですけど。しかもなんで俺が慰められてんの？

『ますた、あれはむりです。もし、ますたがどうしても、らぐなるとたたかえと、おつしやるのなら、わたしはますたの、にくをたち、ほねをください、いのちをうばいとります』

なつき度ゼロかな？こう言う時だけゴーストタイプみたいな脅し文句を使うのはやめてもらえませんか。

「……マキナ、どういうつもりなの？」

シロナさんのゴミを見るかのような目が辛いです。

おい、どう誤魔化せば良いんだよこれ。

「ボールを投げ間違えてしまったのですが」

「……今のはただのうっかりミスなの？」

「……ボスゴドラを投げるつもりでした」

シロナさんの塵芥でも見るかのような視線が辛いです。完全にドン引きしてる顔だよ、あれは。アロフォーネの我儘のせいで俺の評価は地に落ちたようだ。

アロフォーネが戦闘行動を拒否する事は、公式戦においても何度もあった。その大半が、対面が高火力アタッカーの時なのだが、たまにトドゼルガやゲンガー、果てはピクシーが対面の時でも、戦闘を拒否する事があった。

今までは、ただ臆病風に吹かれたただけだと思ってきたが、何某かの理由があるのかも
しれない。

が、悠長にそんな事を考察している暇はないのでボスゴドラを投げる。無防備のボスゴドラに、鋭い岩石が飛来する。ストーンエッジだ。

運の良い事に、シロナさんは『じしん』ではなく『ストーンエッジ』を指示していたようだ。キュウコンに一舞ストーンエッジをぶち込もうとするとか、あなたは悪魔ですか？

メガシンカ前のボスゴドラにとっていわタイプ
の技はハナクソみたいなもので、体力の一割程度しかダメージを受けていないだろう。急所に当たった様子もない。

あられ霰のダメージを加味しても、メガシンカをすればボスゴドラがガブリアスのじしんで落とされる事はまずない。竜舞では攻撃のランクは1しか上がらないので、ガブリアスの物理技の威力は1・5倍になるだけだ。前回のシロナ戦で、二発もガブリアスのじしんを耐えたメガボスゴドラなら、急所に当てられない限りは確定で耐えられるはずだ。

だが、どこかガブリアスを過信しているシロナさんならば、ほぼ確実にじしんを撃つ

てくるだろう。

「ボスゴドラ、メガシンカ」

「ガブリアス、じしん!!」

当然、ボスゴドラはこれを耐えた。

あとは無防備なガブリアスの土手っ腹に、ボスゴドラのれいとうパンチをぶち込むだけの作業だ。

「ガアアアアアアア!?!」

ブハハハハハハ!! どうだね!?! 苦渋を舐めさせられてきたフライゴン先輩の苦しみが分かったかね!?! これに懲りたら、二度と身の丈に合わない技など使わない事だな!! ブハハハハハハ!!

またしても四倍弱点を痛烈に突かれたガブリアスが、力なく倒れこむ。

メガボスゴドラも一緒に。

……………は？

なぜにダブルノックアウト？なにこれバグ？擲着た砂ガブを殴って、みちづれにされるとかありえないんだけど。

だが、瀕死状態に陥ったボスゴドラを観察すると、ガブリアスを殴りつけた右手が、ロボロに傷ついているのが分かる。

つまり、シロナさんのガブリアスは『すながくれ』と『さめはだ』の特性を持っていて、という事だ。

さらに、前回の戦いでは『さめはだ』は発動していなかったため、シロナさんのガブリアスはなんらかの形で、後天的に『さめはだ』の特性を獲得したという事だ。

「……………この世界は最悪だ。やりたい放題だ」

「マキナ……………？」

ゲームでは、改造産のポケモンでもここまで酷くはなかった。ワタルカイリユウなどかわいいものだ。この世界のポケモンはチートと言う表現すら生温い。

ならば、こちらチート級のポケモンで徹底対抗をするまでだ。

瀕死のボスゴドラを引つ込め、アロフオーネの入ったゴージャスボールを投げる。アロフオーネは先ほどのように戦闘を拒否する事なく、ちゃんとボールから出てくる。

『ました、ゆきがふつてますね。とてもさむいです。てったいめいれいを』

ダメです。ちよつと何言ってるか分かんないから。

ガブリアスを引つ込めたシロナさんは、ミカルゲを繰り出してきた。前回のバトルでミカルゲは、アロフオーネに瞬殺されたというのに、シロナさんは自信満々な表情をしており、それなりの対策をしている事は確定的に明らかだ。この人分かりやすいなあ。

ガブリアスがあの有り様だったので『ふいうち』の一つや二つは覚えさせているかもしれない。まあ、前回の戦いでは技を一つも見ることなく倒してしまったので、元々ふいうちは持っていたのかもしれないが。

今回はふいうち対策として、ナモのみを持たせている。さらに、新たな技を覚えたのはシロナさんのポケモンだけではないのだ。

前回のように初手あくのはどうではないのは、落ち着きのないシロナさんを見れば一目瞭然なので、俺はアロフオーネに『ほたるび』を指示する。

バルビートやマナファイ、デンジュモクといった、極少数のポケモンしか覚えられない強力な積み技を、なぜアロフオーネが使えるか不思議で仕方がないが、攻撃種族値が1しかないようなポケモンに疑問を抱くだけ無駄だ。

『まずは、わたしのことをもつとしりたいのですか？わたしのほたるびは、ぷらまを、はっせいさせているのですよ。このようにやるのです……あっしゆくあっしゆく!!くうきをあっしゆく!!まずは!!つよまっています!!つよまっています!!わたしは!!』

やめんか。お前はどこの一方通行だ。と言うか、空気を圧縮できるとか、そのうちお前が絶対に覚えているといけない技を覚えそうで怖いんだけど。

アロフォーネの周りには、いくつもの光の玉が点滅している。これでアロフォーネの特攻の実数値は505にまで跳ね上がったはずだ。これはひどい。

結局ミカルゲは攻撃をしてこなかったので、おそらくは『ふいうち』を指示したのだろう。『わるだくみ』をしているのかもしれないが、その時はミカルゲから放たれる重圧のような物に変化が見られるし、アロフォーネが教えてくるはずなので、ふいうちで間違いはないだろう。

真の強者つつうのはね、ふいうちを外さないんですよ。

ぶつちやけ、三体目がミカルゲだった時点で、キュウコンが手持ちに控えている俺の勝ちが、ほぼ約束されているようなものなので、もう少し遊んでみることにする。結果次第では、シロナさんの性格を見る事ができるかもしれない。

俺はもう一度、アロフォーネに『ほたるび』を指示する。

『みてください、ますた。わたしはいま、じんせい、いちばんかがやいています。まあ、わたしはゆうれいなので、すでにじんせいは、おわつていますけどね』

うん、めつちや輝いてるよ。栄光の輝きじゃなくて、物理的な輝きだけど。あと、さり気なく自虐ネタぶつ込むのは止めような。聞いてて悲しくなるから。

アロフォーネは二度目の『ほたるび』を成功させ、美しい妖精の如く絢爛な輝きを放っている。ゴーストタイプとは一体なんだったのか。

これでアロフォーネの特攻のランクは、最大まで引き上げられたはずだ。最大のランクで元の400%になるので、実数値にして808。敵は死ぬ。

美しく光り輝くアロフォーネに、シロナさんは目を奪われていた。

綺麗な顔してるだろ？ルギアすらワンパンできるんだぜ、それ。

またしてもミカルゲは何もしてこなかったの、シロナさんのミカルゲは、あへあへふいうち連打マンと化しているようだ。単純思考すぎるシロナさんかわいいよシロナさん。

今のアロフォーネがムーンフォースを撃てば、仮にシロナさんのミカルゲがHD極振りでロゼルのみを持っていたとしても、確定一発で落とせる。厨火力すぎる。

「アロフォーネ、ムーンフォース」

「今よミカルゲ!! ふうち!!」

うわあ……シロナさんめっちゃ良い笑顔してる。守りたい、この笑顔。でも多分守れない。それどころか歪めちゃう可能性の方が高い。

本来なら大ダメージとなるはずの『ふうち』だが、アロフォーネはあらかじめ持たせておいたナモのみを齧りながら、ミカルゲの攻撃を耐える。

『もぐもぐ……こっけきの……んっ……すきをつくなんて……んぐっ……げせんなやからですね……もぐもぐ……ほんものの、ごーすりたいぷというものを、わたしがみせて……っ?!?!? げぼげぼっ?! ますたっ!! きかんに、なものみがっ?!』

食べながら喋るからです。大体お前人形だから気管とか無いだろ。

『げほっ……なんてひきような……!! やみのほのおにだかれてしね!!』

いや、今のミカルゲ関係ないし。ムーンフォースはそんな邪悪な技じゃないから。あと、女の子が死ねとか言っちゃいけません。

フルパワーのアロフォーネが、怒りに任せた一撃をミカルゲに放つ。これが本当の『やつあたり』か……

「ミカルゲ、ロゼルのみで耐えて!!」

無理です。

過剰火力がミカルゲに叩き込まれ、ミカルゲは遙か遠方までぶっ飛んでいく。尋常じゃない破壊力に、シロナさんの顔が真っ青になる。俺の顔も真っ青になる。

「……降参するわ」

とても良い判断だと思います。むしろ降参してくれなきゃ困ります。

「なぜ、あなたがそんな表情をするの?」

「必要以上にシロナさんのポケモンを痛めつけるほど、私は悪趣味ではありませんよ」

もし、今のアロフォーネがトリトドンにフリーズドライを撃ったら、火力指数は226, 240となる。分かりやすく言うと、これは一発でトリトドンが四、五回は瀕死になる数値だ。トリトドンが永久凍土になるところなど、誰も見たくないに決まっている

ので、降参して欲しいに決まっている。今のアロフオーネがばくおんばやポルターガイストなんて使ったら、ここにいる全員の耳が使い物にならなくなるし、きあいだまを撃った日には、リゾートにクレーターができる。冗談じゃねえ。

なんであれ勝ちには勝ちなので、有耶無耶にされる前に、シロナさんに確認をとる。

「さて、私が勝ったら、シロナさんには私の要求を聞いてもらうという話でしたが……忘れてはいませんか？」

「……ええ、ちゃんと覚えているわ」

……ここで、薄い本にありがちな要求をするのも大変魅力的な選択肢ではあるが、シロナさんにそんな事をした時点で、この世界を敵に回したも同然な上、そこまで俺はクズじゃないので、真面目な要求をする。

「シロナさんには今後、このリゾートで目にした事、耳にした事は、一切口外しないでいただきたい。絶対に、です。よろしいですか？」

もしかしたら、さっきのジラーチはシロナさんにバレているかもしれないし、今後何かの拍子に勘づかれるかもしれない。準伝や禁止級のポケモンを持っている事が世に

バレると、ちょっとシャレにならない。ここでしつかりと言質を取っておけば、シロナさんの人間性なら、仮に何か見られても、おいそれと吹聴する事はないだろう。

「……………わかったわ。約束する」

真剣な表情で頷いてくれたので、多分大丈夫だろう。

ただ、これだけあからさまに何かを隠そうとしていると、逆に勘づかれてしまうだろう。

「……………それが約束できるのなら、いつでも歓迎します」

「……………え？」

「シロナさんなら、このリゾートに来る事を拒んだりはしません。暇な時で良いので、たまに私のポケモンたちとも遊んでいただけると嬉しいです」

なんなら、俺のガブリアスにも竜舞を仕込んで欲しいです。いや、マジで。

……………この時。

シロナさんの熱っぽい視線に気づけるほど、俺が鈍感ではなかったら、何かが変わっ

ていたのかもしれない……

08：大天使の守護者たれ

突然のシロナさん襲来という濃すぎる一日を乗り越えた俺は、改めてこの世界のポケモンについて、現段階で分かっている範囲でまとめていた。

まずポケモンのレベルだが、ゲームとはかなり仕様が異なっている。そのため、あくまで推測という域を出ないが、日々検証の母体を増やしていく中、仮説を覆すような結果は現れていないので、かなり信用度は高いはずだ。

この世界のポケモンも、ゲーム同様にレベルが存在しており、上限も同じく全てLv100となつている。しかし、ステータスの上昇に大きな違いがある。

俗に一般ポケモンと呼ばれている、幻ポケモンや伝説ポケモンではないポケモンたちは、Lv50を境に、ステータスの上昇が止まるのだ。その証拠に、ゲームの世界から引き継がれた一般ポケモンの実数値が、例外なくLv50のものになっていた。Lv50の時の実数値は基本的に記憶しているので間違いはないはずだ。

ステータスではなく、純粋にレベルが50に下がったのでは？という考え方もできる

が、この世界でヨーギラスをバンギラスに進化させた時、ステータスの上昇が止まって少し時間が空いてから進化したので、ゲーム同様にLv55になってから進化したと考えられる。更に、進化したバンギラスがギガインパクトを覚えたのもそれなり時間が経ってからのなので、これもLv82になってから覚えたのだと考えられる。まあ、使う機会がない技なのでソツコーで忘れさせたが。

だが、重要なのはここからだ。一般ポケモンたちと違って、伝説ポケモンや幻ポケモン……俗に言う禁止級ポケモンは、Lv100まで育てていたものは、全てLv100の実数値になっていた。一方で、Lv50のものはLv50の実数値になっていたし、何度がポケモンと戦わせるとステータスが上がったので、禁止級のポケモンはLv100までステータスが上昇すると考えられる。

しかしながら、三犬やコピペロスなどの準伝説ポケは、Lv50の実数値でもLv100の実数値でもなく、その間くらいの実数値となっており、ウツロイドやマツシブーンなどのUBは、Lv50より少し高いくらいの実数値になっていた。つまり、この世界でLv100のポケモン同士を比較した時、

一般ポケ　　へ　UB　　へへ　準伝説　　へへ　禁止級

という、種族値を度外視した明確な力関係が成り立ってしまうのだ。禁止級マジ禁止級。

ちなみに、禁止級の検証はジラーチなどの幻ポケモンで行ったので、ディアルガとかルギアとかが実際どうなっているかは確定していないので、それ以上にやばい可能性もある。外に出せる訳がない。

まあ、準伝説も幻も伝説も、ドヤ顔で堂々と連れ歩くのは論外なので、重要なのは一般ポケモンのステータスだ。

シロナさんを筆頭に、ククイ博士やデクシオなどといった強者たちは、皆例外なくポケモンをLv50以上に育てているので、彼らと戦う時は通信対戦のような『フラットルール』に近い状況で戦う事になる。

特に、カロスからはるばるアローラにやってきてジガルデの研究をしているデクシオは、ゲームと同じ手持ちならば、個体値V、理想性格、努力値全振りという、あまりにもガチガチな構成なので、できることなら戦いたくない相手である。

Lv50のフラットになるとはいえ、大半のトレーナーたちはLv50までポケモンを育てていないし、カンストさせているにしても悲惨な性格や個体値や技構成だったり、めちやくちやな努力値が入っているの、アロフォーネを投げるまでもなく、ランターンとかでも全抜きできる。ランターンまじランターン。

ただ、注意しなくてはならないのは、ほぼ全てのトレーナーが手持ちポケモンに四つ以上の技を覚えさせているので、あんまり余裕ぶっこいていると予想外の技をぶつけられる事がある。ゲームから引き継がれた俺のポケモンたちは、こちらへ来ても何故か四つしか技を覚えないので、技スベだけで見れば痛いハンデを背負っている事になる。

全てのポケモンが『技スベが増える＝強くなる』という訳ではないが、より多くの技を覚えられた方が良いに決まっているので、リゾートを手に入れた今、俺はこの世界のポケモンの捕獲、厳選、育成に力を入れている。先の戦いで使ったアローラキュウコンもその産物だ。

そして、技スベだけでなく、本来覚えられない技まで覚えられると言う事。ただ、これは今のところシロナガブの『りゆうのまい』しか見た事が無いので、何とも言えない。更に、この世界のポケモンは技だけでなく、特性まで多数持てる可能性が出てきた。だが、これもシロナガブの『すながくれ+さめはだ』しか前例がないので、やはり確定とは言えない。さすがはシロナさんやで。

なお、後で触れるが、アロフォーネは二つ特性を持っていた。

ポケモン全体で見た時のゲームとの違いはこんな所だ。しかし、ゲームとの大きな違

いは、やはりアロフォーネという存在だろう。

つい最近に、アロフォーネの意味不明な種族値が明らかになったのだが、目に見える数字が少なすぎて、あれが正しいとは言い切れない。

アロフォーネが一般ポケなのか伝説ポケなのか分からないが、とりあえずは、一般ポケモンと考えて、Lv50、性格補正はおくびよう、個体値は全てVとして見積もると、暫定的な種族値の合計が600に近い数字になるので、600族と考えて計算してみた。

後で説明するが、アロフォーネは瀕死状態になりそうになると絶対にボールの中に引っ込んでしまうので、ナイトヘッドを利用したHP種族値の調査は非常に難航したが、1000という数字はそれなりに正確なはずだ。ただ、攻撃や特攻はダメージのブレがあるので、正確な数値だとはかなり言い辛い。それでも、試行回数が増えれば、乱数ダメの平均値は、中央値に近い数字へと自ずと収束していくはずなので、全く違う数字だと言う事は無いだろう。

更に、防御と特防の種族値は、後述するアロフォーネの『もう一つの特性』の恩恵で、非常に精度の高い結果が得られたので、ほぼ正確と言える。

問題は、物理攻撃の種族値だ。なにせ、アロフォーネは物理技を一つも持っていない

ので、イカサマでしか検証のしようがない。あくタイプの子なのでダメージは二倍になるのだが、余裕で五発近くは耐える事から、アロフォーネの攻撃力はかなり低いと言う事がわかる。実数値にしたら20もないくらい。

攻撃力も個体値Vとするならば、種族値は限りなくゼロに近い数字となる。素早さの種族値が159で確定しているので、攻撃種族値を1と考えると、綺麗に600族になるのだ。

そんなこんなで、アロフォーネの種族値は憶測込みで確定した（という事にしておく）。

種族値だけ見れば酷い厨ポケだが……アロフォーネは『二つ目の特性』として、とんでもないデメリット特性を抱えていた。

特性『こしぬけ』（命名俺）

先攻後攻・命中率に関わらず、相手がこのポケモンを『確定一発』で倒せる技を持っている時、このポケモンに『こうげき』を指示する事は出来ず、ポケモンの交換を強制される。この特性によってポケモンが引つ込む時、相手の『おいうち』は失敗し、『かげふみ』『くろいまなざし』の効果は無効化される。また、この特性を持つポケモンが受けるダメージは常に最小の値となり、急所にあたらぬ。

……クソ長い説明になっているが、要約すると、相手のポケモンが『アロフォーネに攻撃を当てた時、確実にアロフォーネを瀕死状態にすることができる』時、アロフォーネは命令無しに勝手に引っ込んでしまうと言う事だ。さらに、この条件が満たされた状態でアロフォーネを後出ししても、アロフォーネはボールから出てこないのだ。

つまり、たとえばアロフォーネのHPが満タンだろうが、アロフォーネが相手より先に『確定一発』で倒せる、いわゆる『縛った』状態だろうが、相手のポケモンがアロフォーネを確定で倒せる高火力の技を持っていたら、アロフォーネは戦闘を拒否するのだ。

『ぜったいれいど』のような命中率30の一撃必殺技を持っていても、当たったらアロフォーネは『確定で』瀕死になってしまうので、アロフォーネは戦闘を拒否する。ご丁寧に『ぜったいれいど』が出る可能性のある『ゆびをふる』を持っていても、アロフォーネは戦闘を拒否する。『みちづれ』や『ミラーコート』でも拒否する。

しかも、攻撃を耐えられても、その後には毒や砂嵐などのスリップダメージで瀕死になってしまう時でも、アロフォーネはボールに引っ込んでしまう。

極め付けには、この特性はコソクムシの『にげごし』とは違って、お互いの攻撃が終わってから発動するようなので、交代先のポケモンは絶対に『後出し』となってしまう。

なお『乱数一発』の時は発動しない。と言うのも、常に騎士甲冑の後ろから相手の攻

撃を警戒しているからなのか、アロフォーネは必ず『最も小さい乱数ダメージ』を受け
る上、相手の急所ランクが3だろうが、受ける技が『こおりのいぶき』だろうが、絶対
に急所に当たらないのだ。故に、そもそも『乱数一発』という概念がなく、確定で耐え
るか、確定で倒されるかのどちらかしかない。これだけは、この特性唯一のメリットと
言つても良いだろう。

逆に考えると、この特性によつて俺は絶対にアロフォーネを瀕死状態にさせる事がで
きないのだ。

字面だけ見れば、アロフォーネを瀕死にさせずに戦える、優秀な特性に思えるかもし
れないが、全然そんな事はない。

なぜなら、アロフォーネが確実に相手のポケモンを倒せる状況でも、特性が発動した
せいでポケモンを交換しなくてはならない……という状態が、普通に起こり得るから
だ。

特性が発動した時点で、折角の高速・高火力が全くの無駄になってしまう。しかも、控
えのポケモンが一匹もない状態で発動したら、降参確定だ。

二度にも渡って、シロナさんとのバトルでアロフォーネがガブリアスとの対面を拒否したのは、いずれもアロフォーネのHPが、『だもんじ』や『すなあらし』によって、ガブリアスの『げきりん』の確一圈内に入ってしまったからだ。

総括すると、アロフォーネの厨性能を過信して、扱い方を少しでも間違えたら、一瞬でこちらのサイクルが崩壊するという事だ。

特性の発動機会を減らす為にも、持ち物は『きあいのたすき』か『とつげきチョッキ』或いはナモのみで固定になってしまっただろう。どんな相手でも初手から発動する事がなくなる『きあいのたすき』が一番安定しているかもしれない。すなおこしバンギラスが出てきたら、中指を突き立てざるを得なくなるが。

アロフォーネは、性格も特性も臆病極まりないポケモンだ。アロフォーネについて詳しくなったとは言え、それは『数字』としてのアロフォーネだ。こいつがどういった経緯で現れたのか、どんな生態をしたポケモンなのか、まだ何も分かっていない。

見た目こそ少女を象った人形ではあるが、彼女は人形に取り憑き、人形と半同化状態にある心霊ポケモンなのだ。人間の言葉を理解するあたり、人間だった頃もあるのかもされない。

アロフォーネは今、お気に入りの身代わり人形を抱きしめ、ぐっすりと眠っている。まあ、アロフォーネも身代わり人形も同じぐらいの大きさなので、しがみついているよ

う者だ。まるで面識のない相手からの手紙に驚いたかもしれないが、今この瞬間からぼくたちは友達になったのさ!!」

……アローラの人は、皆総じて人との距離の詰め方が大雑把なのだが、この人は特に顕著だ。なんで南国の人って大らかな人が多いんだろうな。

『最近の君の目覚ましい活躍は耳にしている。あのシンオウ地方のチャンピオンが「彼こそが頂点」と褒めちぎっていたと話題になってるよ』

シロナさん、俺の知らない所で一体何をしてくれてるんですかね？ 変な目立ち方はしたくないので程々にしていただきたいですね。

『公式戦でも連戦連勝の好成績を収めていると聞く。そんなマキナくんに話したい事が幾つかあってね……一度ぼくの研究所まで来て欲しいんだ。本来ならば、ぼくがそちらへ出向くべきなのだろうけど、ちょっと色々とあってゴタゴタとしてるんだ』

……どうしよう。俺について色々と勘付かれていますのだろうか？ だが、アローラで活動していく以上、アローラの中心人物とも言えるククイ博士の要望を断るわけにはいかないだろう。ゴタゴタというのは、リーリエやUB関係の事だろうか？

『ぼくの研究所はメレメレ島の南端にある。ポケモンの技を何度も受けていて、随分とみすばらしい状態になっているから、すぐに分かるはずだ』

研究所はポロポロになるのに、生身でポケモンの技を受けているククイ博士が五体満

足なのは、絶対におかしいと思うの。

『無論、強制させるものではないから、断つてくれても構わない。だが、君に少しでもその気があったら、手紙を返さなくても良いから、研究所に来て欲しい。マキナくんにとつても、悪い話じゃないと思うから、いつでも待っているよ。』

ククイ』

本文はここで終わっているが、その下に追伸が書き加えられている。

『忘れる所だった。もし来てくれるなら、マキナくんが全力でバトルできると思えるポケモンを、六匹連れてきて欲しい』

……絶対にバトルする流れじゃないですかヤダー。

島の試練をクリアしなくては、ほとんどのZクリスタルは手に入らないし、そもそも俺はZリング自体持っていない。アローラのトレーナーとしてZ技を使えないのは致命的なので、早々になんとかしておきたい所だ。遅かれ早かれ、ククイ博士とは関わる必要がある。

俺は、手紙を貰った翌日にククイ博士の研究所を訪れる事にした。手持ちポケモンは、

アロフオーネ@きあいのたすき

ボスゴドラ@メガ石

ギャラドス@ゴツゴツメット

ナツトレイ@こだわりハチマキ

カイリユー@こだわりメガネ

Hロトム@たつじんのおび

という編成にした。ぶつちやけククイ博士の手持ちは、ルガルガン昼とウォーグルと御三家しか覚えていないので、各ポケモンがちゃんと役割を持てるかどうかは微妙だ。また、アロフオーネ以外はゲームから引き継がれたポケモンたちなので、技は四つしか覚えていない。

とりあえず六対六のバトルを仮想するならば、初手ルガルガンでステロを撒かれると、かなり厳しくなる。先発はアロフオーネに任せ、きあいだまで即粉碎する必要がある。違うポケモンが飛んできても、アロフオーネの技範囲ならばなんとかなる。

ウォーグルの『おいかぜ』も、アロフオーネ以外のポケモンには、素早さに努力値を一切振っていないのであまり関係はない。

どれが出てくるか分からない御三家だが、ガオガエンはギャラドス、アシレーヌはナツトレイ、ジュナイパーはアロフオーネかロトムで見れば良い。

公式戦のルールで戦わないとなると、かなり厳しくなるが、火力ゴリ押しでなんとかできそうな気もする。これがフラグにならない事を祈るだけだ。

アロフォーネのとんでもない特性が発覚した今、アロフォーネの努力値を振り直したい所だが、一朝一夕でどうこうできるものではない。

『……………うう……………にじゅうろく²こも……………まとまのみが……………こんなにたべられないです……………ああつ……………つみのない……………ひやく¹にじゅうろつ²びきの……………ペリつぱーたちが……………ひどいです……………ますた……………むにやむにや……………』

予知夢かな？

翌朝、腹を括った俺はエアームドにまたがり、メレメレ島へと向かった。不安要素は山ほどあるが、なにも絶対にバトルをすると決まったわけではないのだ。99.9%はバトルになるでしょうけどね。

博士の研究所のすぐ近くに、やたら大きな家が建っているが、位置的にあればゲームで言う『主人公』の家ではなからうか？それとなくククイ博士に聞いてみよう。

ククイ博士の研究所の上空まで辿り着いたのだが、研究所のすぐ近くに、帽子と白衣を着用した男と、子犬のようなポケモンが見える。ククイ博士とイワンコか？

「さあ、イワンコ!!ぼくに向かって『いわおとし』を撃つんだ!!」
「いわわん!!わん!!」

ククイ博士めがけて小さいとは言いやい難しいサイズの岩石が放たれるが、彼の鍛え抜かれた肉体が、これを難なく凌いでみせる。

「いいぞ……前よりも威力が上がっている!!より強力な技を覚える為にも、もつと特訓だ!!」

「わん!!」

……あれもう人間じゃないよ。こんなの絶対におかしいよ。なんでポケモンの技を受けて平然としてるわけ?俺なんてこの前、育成途中のクチートにじゃれつかれて、上半身噛みちぎられそうになってるんだよ?もはや噛みとかそういうレベルじゃない。

あの変態筋肉ダルマに、いじつぱりドサイドンのがんせきほうをぶつ放したらどうなるか気になるが、そんなくだらない事を考えている場合ではないので、彼らのすぐ側にゆつくりと着地する。

「ん………?おお、マキナくんじゃないか!!アローラ!!」

「アローラ、ククイ博士」

エアームドから降りた俺を見るなり、ククイ博士はその真つ白な歯を見せながら、元気の良い挨拶をしてくれる。くっ……これが陰キヤと陽キヤの格の違いというものか……

「まさかポケモンに乗ってやつてくるとはね。でも、危ないからちゃんと言おうよ」
を着る事をお勧めするよ」

いや、ポケモンの技を受けるような人に危険云々の話はされたくないんですが。

「……善処します。それで、お話と言うのは？」

「急に呼び出したりしてすまなかつたな、マキナくん。立ち話もなんだ、研究所の中でゆっくりと話そう」

長時間の飛行により休息を必要としている俺は、ククイ博士の提案に思考停止で頷く。

研究所に入る時、何やら足元で緑色の何かが蠢いていたが気にしない事にした。ジガルデ・セルなんて見ていない。いいね？

ククイ博士に続いて研究所に入ると、天使が俺たちを出迎えてくれた。

「おかえりなさいククイ博士……こちらの方は？」

新雪のように透き通った肌。

シャンパンゴールドの淡い金髪。

純白のサマードレスに純白のつば広帽子。

ミスマッチなスポーツバッグ。

我らが大天使、リーリエである。

「あの……なんで泣いてるんですか？」

おつといかん……殿堂入り後、長らく『リーリエシヨック』に苦しめられていた事もあつてか、生リーリエの神々しさに俺の涙腺が歓喜の声をあげてしまったようだ。

「……すまない、二度と会えなくなつた妹（にしたいリーリエ）と、あまりにも似ていた（というか本人そのもの）んだ……みつともない所を見せてしまった」

「い、いえ……こちらこそ不躰な質問をしてしまい、申し訳ありませんでした」

「君が謝る必要はない。私は、君のそんな顔は見たくない。君は誰よりも笑顔で居てく

ればばいい。君が誰よりも元気でいてくれれば……私はそれで満足だ」

リーリエの笑顔はワイらが守るんや!!

リーリエに近づく悪い虫はワイらが駆除するんや!!

ワイらがリーリエの虫除けスプレーになるんや!!

リーリエは何も気にせず、がんばりリーリエしてくれれば……ワイらの人生に悔いは残らんので。

「わ、わかりました……その、妹さんの事、とても大切にされていたのですね」

当たり前である。リーリエの平和と幸福を願うのは、我々の業界では義務であると同時に権利でもあるのだ。

「失ってなお、家族（になりたかった女^{ひと}）の大切さが分かるものだ」

一体、どれだけの数の紳士たちが、自分の力で母を救い出さんと動き出すリーリエの健気さに涙を流し、二度とリーリエに会えなくなると言う事実^{じじつ}に身を引き裂かれるような心的ダメージを負った事だろうか。次の作品でリーリエが出てこなかったら、ダイナマイトと共にゲーフリに突撃する奴が現れるくらいの勢いである。

「……ふむ、やはり噂と言うものはアテにならないものだな」

俺が爆発寸前のリーリエ愛を必死に抑えている横で、ククイ博士が意味深な呟きをしているが、今の俺におっさんの事など気にしている余裕はない。リーリエかわいいよリーリエ。

「すまないがこの人と大事な話がしたいんだ。少し待っていてくれ」

「……う・わかりました、ロフトで待っていますね」

ああ、我が天使がお帰りになられる……

天使がロフトへと上がるためのハシゴから落ちないように、守護者の眼光で俺はリーリエを見届ける。

「マキナくんはここに座っていてくれ。何か飲む物を持ってくるよ」

「いえ、それには及びません。早く話を進めてください」

こちらとら少しでも、あんたと話してる時間をリーリエとリーリエする時間に回したいんだよ!!

「ははっ、随分とせっかちじゃないか。まあ、マキナ君も忙しい中来てくれているわけだしね。先に結論から伝えていこうか」

今まで朗らかに笑っていたククイ博士が、そのハンサムフェイスをキリリと引き締める。

「マキナくん、君にアローラの初代チャンピオンを勤めて貰いたいと考えているんだ」

……………はい？

ちよつと話が見えないんですけど。どういう事？俺が出来立てほやほやのアローラリーグのチャンピオンを任せられるって事？

……………慌ててはいけない。ここで俺が、本来知っているはずのない情報を口走ってしまふと、取り返しのつかない事になる。

「……………仰っている意味が分かりません」

「そのままの意味さ」

「アローラには他の地方と違って、ポケモンリーグは存在しないはずですよ。それなのに、トレーナーになって日の新しい私がアローラの初代チャンピオンとは、一体どういう事でしょう？」

「だから、そのままの意味さ。近いうちに新しくできる、アローラリーグの初代チャンピオンを、君に任せたいと言っているのさ」

「……………質問は後でまとめてします。順を追って全てを説明をして貰いたいです」

「勿論そうさせてもらうつもりだよ。まず、ウラウラ島のラナキラマウンテンに、新しくアローラのポケモンリーグを建設する予定で……いや、設備はもう完成に近い状態だ。今はもうすでに、チャンピオンに挑む資格があるかを見定める『四天王』を探しているところなんだ」

「つまり、今現在ククイ博士は、リーグを設立するべく東奔西走されているという事ですか？」

「そんなに大仰な事はしていない。アローラにいるトレーナーの中でも、実力のある人たちに声をかけて回っているだけさ。まあ、四天王は追い追いなんとかすると……問題はチャンピオンだ。四天王を最初に突破した者が初代チャンピオンで良いのかもしれないが……それだとんだかしくり来ないんだ。ぼく自ら、挑戦者の実力を見定めようとも思っていたんだけど、ぼくはそういう柄でもない」

「……だからと言って、私に白羽の矢が立つ理由にはならないでしょう。名実共に釣り合っていない」

「ははっ、シンオウの『無敗のチャンピオン』を圧倒したマキナくん以上のトレーナーが、このアローラにいるとは思えないぜ。そしてなにより……それを確かめる為にも君をここに呼んだのだからね」

ちよっと戦闘フラグ立つの早すぎんよー。

「それに、私は島巡りもしていないような、しがない新米トレーナーだ。私以上のトレーナーなんてごまんと居るでしょう」

「まあその辺りも含めて話させて貰うよ。まず、マキナくんには島巡りをして貰いたいと考えている。当然、ぼくが強い事なんてできないから、君の意思を尊重した上で……だ」

まさか、向こうから島巡りの話をしてくれるとは思っていなかった。これは嬉しい誤算だ。この話に乗っからないのはあり得ない。

「……それは願ってもいない。よりポケモンたちと共に強くなれると言うのなら、断る理由など見つかりません」

「やる気は十分のようだね。ぼくも島巡りのサポートに尽力するつもりだから、是非とも頑張つて試練を乗り越えて欲しい。……それに付随して、もう一つ頼まれて欲しいんだ」

「……なんででしょう」

「実は、マキナくん以外にも島巡りをする子が二人居るんだ。一人はこのメレメレ島の島キングであるハラさんの孫にあたる『ハウ』。そして、もう一人は最近カントー地方から引越してきた女の子『ミツキ』だ」

やっぱりこの世界にも『主人公』がいたようだ。別人かもしれないが、カントーから引越してきたという部分はあまりにも酷似している。サンムーンには主人公のデフォルネームが無かったので、名前での判別はつかないが、お馴染みの赤いニット帽を被っていたらほぼ確定だろう。

「この子たちも立派なトレーナーだから、ぼくたち大人がそこまで過保護になる必要はないだろう。だが、彼女たちはまだ14歳にもなっていない。少しでも危険のないようにしてあげなきゃだ」

「そうですね。島巡りは長い旅路になるでしょうし、野生のポケモンを相手にする以上、危険は付き物です。可能な範囲でリスクマネジメントはさせてもらいますよ」

この世界じゃ、野生ポケを相手に手持ちのポケモンを全滅させられたら、目の前が真っ暗になるどころの騒ぎじゃない。ゴー・トウ・ザ・ヘヴンである。俺は天国にいくかどうかすら怪しいが。まだ四季映姫さんには会いたくないです。

「そう言ってくれると助かるよ。それに加えて、君にはリーリエの事も気にかけて欲しいんだ」

「リーリエ？一体どなたの事でしょうか」

「ブハハハハハハ!! 見くびって貰っては困るなあ、ククイ博士よ!! なんとお粗末なカマカケをしてくれたものだ。デスノートを四周くらい読んでいる俺に死角は無いんだよ!!」

大天使リーリエよ。森羅万象に救いの光を齎す貴女を、存ぜぬと嘯いた私めの大罪を許したまえ…

「……いやあ、これは失礼。さつき、帽子を被った金髪の女の子がいただろう？あの子はリーリエと言って、少し複雑な事情を抱えた子なのだが……君に打ち明けて良いものか、少し決めあぐねているのさ。不快に思うかもしれないが、それだけ彼女の事は安易に話せる事じゃないんだ。だが……」

そんなものは断じて認められるものか。

「ククイ博士。回りくどいのはあまり好きではありません。早く、私という人物を試してみてくださいは可能ですか？私はいつでも準備は整っています。貴方が戦いたいと言えば

……私はいつでも戦える」

大天使リーリエに、お近づきになれるか否かを定める勝負に、負けられるわけがねえんだよ。

~~~~~

ククイは初めて、強者から放たれる覇気というものに気圧されていた。

マキナというトレーナーは、冷酷で、非道で、名声を貪るためなんでもする人間だ。それが、ククイが最も耳にしたマキナという人物像だ。

一方で、彼と浅くない関係を持っていると言われているシンオウチャンピオンは『誰よりも熱い心を持った男』だと評している。

百聞は一見に如かず。一端の博士であるククイは、己の目で確かめてこそ、それが自分にとっての真実となり得ると考えていた。

故に、マキナをこの研究所へ呼んだのは他でもない、ククイ自身の目によって、彼を見定める為だ。

感情の薄い男だ、というのがククイにとっての第一印象だった。しかし、研究所に入った瞬間に、その評価はひっくり返る事となる。

研究所に入ったククイたちを、リーリエが出迎えてくれたのだが、マキナはリーリエを見た瞬間に、これでもかという程に目を見開き、食い入るように見つめていたのだ。

ククイはかなりの動揺を覚えた。しまった、マキナはエーテル財団に関わりのある男だったのか……と、己の短絡的な行動を後悔した。が、それもすぐにかき消される事となる。

マキナは涙していた。

当のリーリエは勿論の事、ククイもいきなりのマキナの変化にたじろいだ。

マキナ曰く、リーリエが死別した妹に似ていたようで、大切にしていた家族を想起し

てしまい、思わず感情が溢れてしまったようだ。

この時点で、ククイの中では『マキナ悪人説』に疑問符が浮かび上がっていた。

マキナは、失った家族に対する熱い感情を溢し、彼が亡き家族を描いてしまうリーリエに、笑顔でいてくれと懇願した。

ロフトへと戻っていくリーリエを、忠誠を誓った守護者ガーディアンのごとく、最後まで見送っていた。

(これが……『機械』と呼ばれた男なのか……?)

マキナの豹変ぶりに、ククイは驚きと戸惑いを隠せなかった。しかし、リーリエの姿が見えなくなるとマキナはまたしても感情を悟らせぬ無表情になる。少し不機嫌になつていような気がしなくもないが……

この男の人間や本性が分かったわけではないので、ククイは問答を通じて、マキナと  
いう男の中身を引き出そうとした。

——リーグチャンピオンにならないか？

名声のためなら手段を選ばないと言われていたマキナだったが、いきなりこの話に食いつく事はなく、純粋に訳が分からないといった様子で首を傾げていた。それどこか、自分では力不足だとも言い切ったのだ。

——島巡りをしてみないか？

この提案には、ノータイムで食いついてきた。今よりもさらに強くなれるのなら是非もない……そんな事をにべもなく言い切れる彼には、確かな向上心があるのだろう。無敗のチャンピオン・シロナを圧倒したというのにも関わらず、己の実力に対する奢りや昂りはないようだ。

——子供たちの面倒を見てくれないか？

そんな押し付けがましい要望にも、彼は嫌な顔を見せる事なく、応えてみせると言い切った。私利私欲を貪る人間であるならば、間違いない難色を示しているはずだ。

——リリエの事も頼むよ。

念には念をと言う事でカマカケをしてみたが、彼はリリエとは誰だと答えた。これで彼がリリエにとって脅威となり得る人物でないことは、ほぼ証明できただろう……

そう思ったククイが、マキナに全てを話そうとした時、マキナが自ら『化けの皮』を剥いだのだ。

本性を剥き出しにした彼は、餌を捕食せんとする猛禽のような鋭い視線で、ククイを射抜いた。

——回りくどいのは嫌いだ。

——俺を疑っているのだろうか？

——さっさと俺を試せ。

——マキナという人物が一体何なのか、お前にも教えてやる。

最後だけは、言葉ではなく、闘志を垂れ流す背中で語っていた。

ククイの背筋をゾクリとした寒気が駆け抜ける。

これから、マキナが一度も見せた事のない『ルール無用の六対六』のポケモンバトルを挑むつもりだ。

だが、マキナという男の目は、確かに語っていたのだ。

自分が負けるなど、絶対にあり得ぬ事だ……と。



## 09：麗しき華のジェラシー

マキナの運命を分かつ激戦の火蓋が切られようかと言う時……

シロナはリゾート地として有名な、イツシユ地方のサザナミタウンを訪れていた。

潮風を運ぶサザナミ湾が広がっており、この一景を欲するかのようにな数多の別荘が立ち並んでいる。

数ある別荘のうちのひとつ『Cattleya』という洒落た書体の表札がかかった別荘にシロナは近づき、呼び鈴を押す。暫しの間隔が空いた後、別荘のドアが開かれる。

白とピンクを基調とした上品な衣服に身を纏い、気品溢れるウェーブのかかった金髪の少女……カトレアがシロナを出迎える。

「久しぶりね、シロナ。半年ぶりくらいかしら？」

カトレアは来たる良き友の姿を目にし、その表情を綻ばせる。そんなカトレアを前に、シロナからも自然と笑みが浮かぶ。

「そうね……カトレアに別荘を返してから半年も経つのね」

「せっかくの再会を立ち話で消化したくないわ。早く上がってちょうだい」

「ええ、お邪魔します」

少し前まで自分が生活していた空間に招かれた事に、シロナは少しばかりの違和感を覚えながらも、慣れた足取りで中へと入っていく。

「飲み物を持ってくるわ。シロナは座ってて」

カトレアの気配りにお礼の言葉を述べつつ、シロナはテーブルに着く。ここからは、開け放たれた窓を介して、サザナミ湾の美しい海景色が一望でき、シロナにとつてお気に入りのポジションだ。

「同じリゾート地でも、マキナの家から見えた海景色とは全く違うわね」

そもそも地方が違うのだから当然と言えば当然なのだが、マキナのポケリゾートも気に入っているシロナは、自然と比較をしてしまう。

だが、どちらに軍配が上がるか……と言う事ではなく、それぞれが持つ魅力を見つけ出そうとするのが、シロナというトレーナーだった。

「それにしても、この部屋こんなに広かったかしら？」

シロナが住んでいた頃は、これでもかと言うほどに散乱した文献と資料がスペースを殺していたという事に気付けないのも、シロナというトレーナーだった。

一頻り、シロナが懐かしの別荘を見渡しているうちに、二つのカップを乗せたトレイを携えたカトレアが帰ってくる。

「お待たせ。アイスティーしかなかったけど良かったかしら？」

「ありがとう。あまり紅茶は飲まないから新鮮ね」

「アタクシのように、シロナもエレガントな嗜みを持つ事をお勧めするわ」

基本的に、身の回りの事はコ克蘭に任せているカトレアが、自分で紅茶を淹れられるという事を少しばかり意外に思いつつも、シロナはカップに口を付ける。

一方、カトレアは自分の分の紅茶には目もくれず、シロナの事をジツと見つめている。

「なんでそんなに見てくるの？あたしの顔に何か付いてる？」

「……気にしないで。シロナの口に合うか心配だったのよ」

「とても美味しいわ。なんだか、今まで飲んだ事のない味がするわね」

「ふうん……あまり飲まない割には舌が肥えてるじゃない。それなりに良い茶葉を使っているから、香りも嗜みながら少しずつ飲むと良いわよ？」

いくら気の許した仲でも、もてなしに妥協をしないあたり、流石はお嬢様と言ったところね……と、シロナはカトレアの気遣いに素直に感心した。

「それにしても、カトレアが改まってあたしに会いたいって言うのも珍しいわね」

そう、此度の会合はシロナが自発的に所望したものではなく、カトレアの意向によるものだ。だが、シロナにとっても、良き友に会えるという事に是非は無いので、二つ返事でカトレアに会いに来たのだ。

シロナが素朴な疑問をカトレアにぶつけると、カトレアは静かに睫毛を伏せる。

「純粋に、シロナに会いたくなつたと言うだけの事よ。けれど、それだけではない事も確かね。……シロナ、あなたに訊きたい事があるの」

「訊きたい事？」

「あなた、あの『機械仕掛けの新種使い』が住む、アローラのプライベートリゾートに行つたらしいじゃない」

「……機械仕掛けの新種使いって、マキナの事かしら？」

「そうよ」

「なぜカトレアがそんな事を知っているの？彼に会いに行くだなんて、あたしは誰にも言つてないはずなんだけど……」

「あなたほどのトレーナーになると、何をしてても噂として広まるものよ。もう少し自覚を持ちなさい。それで……シロナは一体何をしに行ったのかしら？」

「別に大した事じゃないわ。あたしがカトレアに会うのと一緒に、誰かに会いに行くのに理由はないわよ」

一瞬、カトレアが不愉快そうに表情を曇らせたが、再び淡々とシロナに質問をたたみかけていく。

「そう。でも、あなたが特定の異性に入れ込むだなんて、アタクシは見たことがない気がするわ」

「……言っておくけど、マキナとはそんなんじゃないからね？」

「知ってるわよ。そんな下世話な勘繰りはしてないわ。だからこそ聞いているんじゃない？」

カトレアから柔らかくも暖かい雰囲気消失し、張り詰めた緊張感を放つ。

「シロナは、あの男の何を見たのかしら？」

見た事のない親友の表情に、シロナは寒気を覚えた。

誤魔化すようにして、シロナはアイステイーを口に運ぶ。

「……ごめんなさい。マキナの事は話せないわ」

「親友のアタクシにも？」

「ええ。誰にも話さないって、彼と約束したから」

シロナがそう弁明するも、カトレアの語気は強まる一方だった。

「どうして……？誰よりも純粋で、誰よりも美しい心を持つシロナを、こんな風にしてしまうだなんて……許せない。美しくないわ、あの男」

カトレアから堰を切ったように黒い感情が溢れ出す。

「やっぱり間違っていたのよ……あの男は卑劣極まりない……!!アタクシの大事なシロナを、こんな風に口止めをして……っ!!」

この時、シロナは自分の異常に気がついた。

温厚であるはずのシロナの感情が、自由奔放に暴れ回っているのだ。

体が熱い。頭がぼやーっとする。なんだか目の前のカトレアが揺れ動いている……著しく思考能力が低下したシロナの口は、自制が効かなくなっていた。

「マキナの事を悪く言わないれよ!!彼の事を悪く言うのは、カトレアらって許さないんらからねっ!!」

「……………えっ?」

~~~~~

「久しぶりね、シロナ。半年ぶりくらいかしら？」

久しく目にしていなかった友の姿を前に、カトレアは得も言われぬ感慨深さを覚える。

「そうね……カトレアに別荘を返してから半年も経つのね」

シロナが思い出すようにそう呟く。あの時の事はカトレアも覚えている。あのコ克蘭が『これは骨が折れそうですね……』と泣き言を漏らすほどの惨状だったのだ。忘れるはずがない。何が酷かったかは皆まで言う必要もあるまい。

「せっかくの再会を立ち話で消化したくないわ。早く上がってちょうだい」

「ええ、お邪魔します」

久々の別荘が嬉しいのか、シロナは上機嫌な様子だ。そんなシロナの様子が、カトレアには微笑ましく思え、こうしていつでも会えることの喜びを噛み締めていた。

だからこそ……カトレアは、このシロナの汚れなき笑顔だけは守って見せたいと思っただのだ。

バトルでは彼女の足元にも及ばない。それでも、この世の中はポケモンバトルだけで動いているわけではないのだ。

「……飲み物を持ってくるわ。シロナは座ってて」

カトレアが予め用意していた言葉を放つと、シロナは屈託の無い笑顔でカトレアにお礼を言う。そんな彼女の素直な気持ちだが、カトレアの心に痛いほど突き刺さる。

だが、顔には出さない。全てはシロナのためだ。彼女を守る為には、彼女をも欺く。カトレアにはその覚悟があるのだ。

カトレアがキッチンに足を踏み入れた瞬間、音もなく執事服の男が現れる。

「コ克蘭」

「はい、カトレアお嬢様。準備はできております」

執事服の男……コ克蘭は、無駄一つない動きで、カップが二つ載ったトレイを差し

出す。

「こちらがカトレアお嬢様のカップ、こちらがシロナ様のカップでございます。くれぐれもお間違いにならないようお気をつけくださいませ」

そう：カトレアのカップとシロナのカップには、同じ紅茶が満たされているわけではない。カトレアのカップには、普段からカトレアが常飲しているロズレイティーが注がれているが、シロナのカップには紅茶と似て非なる液体が注がれているのだ。

ロングアイランドアイスティー。

ラム、ジン、ウオツカ、テキーラ、ホワイトキュラソー、ガムシロップ、レモンジュース、炭酸抜きコーラ……これらを絶妙なさじ加減によってブレンドし、紅茶の味を再現したカクテルだ。

「より自然な味わいにするべく、今回はテキーラを使っておりませんが、アルコール度数はかなり強めとなっております。シロナ様はお酒にお強くないそうなので、おそらく一杯だけでも十分に酔ってしまわれるでしょう」

あくまで、紅茶に味を寄せているだけなので、紅茶を飲みなれている人間を相手に出そうものなら一瞬で看破されてしまうが、カトレアの知る限りではシロナが紅茶に精通

しているという情報はない。なにより、彼女のイメージにも合わない。

「……シロナの体に障る事は無いわよね？」

「ただのカクテルでございますので、ご心配なさらなくともよろしいかと。ただ、やはりアルコール度数が高いので、一気に飲んでしまわれる事が無いようにだけ、ご注意ください」

「分かったわ」

「では、お気をつけてお持ちくださいませ」

コ克蘭からトレイを受け取ったカトレアは、心を落ち着かせながらシロナの元へと歩みを進める。

トレイを持つカトレアの手が、微かに震える。

(重いわ……大切な人を騙す事が、こんなにも重いだんて……)

だが、ここまで来てしまったのだ。もうカトレアは、後に戻る事などできない。

「……お待たせ。アイスティーしかなかったけど良かったかしら？」

「ありがとう。あまり紅茶は飲まないから新鮮ね」

なんたる僥倖。やはりシロナは、紅茶に関しては些か疎いようだ。

「アタクシのように、シロナもエレガントな嗜みを持つ事をお勧めするわ」

その暁には、そんな無粋な物ではなくアタクシと同じロズレイティーを楽しみましよ

う……と、声にならぬ独善的な希望を脳内に展開し、カトレアはシロナを騙す罪悪を紛らわそうとする。

「……………なんでそんなに見てくるの？あたしの顔に何か付いてる？」

「……………気にしないで。シロナの口に合うか心配だったのよ」

「とても美味しいわ。なんだか、今まで飲んだ事のない味がするわね」

「ふうん……………舌が肥えてるじゃない。それなりに良い茶葉を使っているから、香りも嗜みながら少しずつ飲むと良いわよ？」

口からのデマカセをつらつらと吐くカトレアだったが、内心では冷や汗をかいていた。シロナはどこか抜けている節があるのに、変なところで鋭いのだ。伊達に考古学者をやっているわけではないのだろうと、カトレアはシロナの勘の良さに舌を巻く。

「それにしても、カトレアが改まってあたし会いたいって言うのも珍しいわね」

(……………時は満ちたのね)

改めて覚悟を決めたカトレアが、目を伏せる。

「純粋に、シロナに会いたくなかったと言うだけの事よ。けれど、それだけではない事も確かね。……………シロナ、あなたに訊きたい事があるの」

「訊きたい事？」

「あなた、あの『機械仕掛けの新種使い』が住む、アローラのプライベートリゾートに行つ

たらしいじゃない」

「……機械仕掛けの新種使いつて、マキナの事かしら?」

「そうよ」

「なぜカトレアがそんな事を知っているの?彼に会いに行くだなんて、あたしは誰にも言つてないはずなんだけど……」

「あなたほどのトレーナーになると、何をしても噂として広まるものよ。もう少し自覚を持ちなさい。それで……シロナは一体何をしに行ったのかしら?」

「別に大した事じゃないわ。あたしがカトレアに会うのと一緒で、誰かに会いに行くのに理由はないわよ」

カトレアの奥底でとぐろを巻く、漆黒の感情が、徐々に、徐々に、肥大化していく。

自分とシロナとの再会と、シロナとどこの馬の骨とも分からぬ男との邂逅が、一緒にたにされていいはずがない。

「……そう。でも、あなたが特定の異性に入れ込むだなんて、アタクシは見たことがない気がするわ」

「……言っておくけど、マキナとはそんなんじゃないからね？」

「知ってるわよ。そんな下世話な勘繰りはしてないわ。だからこそ聞いているんじゃない？」

——全てはシロナ、貴女の為に訊いているのよ。

「シロナは、あの男の何を見たのかしら？」

カトレアは、マキナという新人トレーナーを、誰よりも強く警戒していた。

きっかけは勿論、あの親善試合だ。それまで無敗を貫いていたシロナが敗北を喫した……そんな情報が連日連夜、メディアを介して発信され続けていれば、当然カトレアの目にもつく。

完璧な人間などこの世にはいないので、シロナが誰かに負けること自体は、別におかしな事ではない。しかし、未だにシロナから一勝も取れないでいるカトレアにとって、にわかには信じがたい内容だ。

この情報を聞きつけたカトレアは、すぐに親善試合の映像を視聴した。

シロナを倒したという男性トレーナー…マキナの容姿が明らかになる。

背丈は170cm以上で、体格は普通。髪の色は黒で、歳はシロナと同じくらいと言ったところだろうか。緊張しているのかは分からないが、かなり固い表情をしている。だが、ルックス自体は悪くなく、どこかぶっ飛んだ格好の人間が多いこの界限には、落ち着いた服装をしているのが、カトレアにとってはそれなりに好印象だった。

…どうやらユニ○ロで統一したマキナのコーディネートは、この世界の女性陣からのウケはそこそ良いようだ。しかしながら、そんな事はマキナの知る由もないし、知ったところでどうにもならない。

カトレアにとってのマキナの第一印象は、何の変哲も個性もない、ごくごく一般的なトレーナーだ…:と言ったところだった。もし何かが違ったら、カトレアがマキナに興味を持つ事などなく、ただシロナに負け運がついてしまったのだろう…:と、軽く考えて終わっていただろう。

だが、カトレアはその異常性に気づいてしまったのだ。

カトレアが違和感を感じたのはマキナではなく、シロナだった。

マキナがアップで映されれば、当然、シロナにもカメラが向く。むしろ、この親善試合のメインディッシュはシロナと言っても良いほどだ。

MCがかなり勿体つけた後にシロナを紹介すると、会場に歓声が響き渡る。それと同時にシロナの表情を捉えるべく放送局のカメラが向くのだが……

(なぜ……？なぜシロナが、そんなに真剣な表情をしているの？)

カトレアの知るシロナならば、ポケモンバトルを望む際に、こんな顔を見せるはずがないのだ。

基本的にシロナは、勝敗にこだわる事はなく、いかに楽しむ事ができるかどうか主に眼を置いて、ポケモンバトルをしている。

シロナがこんな余裕の欠片も感じない、勝ちにこだわるかのような表情をする時は、いつだって曲がった事の許せない彼女が、彼女の正義を貫く時の表情だ。正義を掲げてポケモンバトルをする時に見せる表情なのだ。

この男は、一体何者なのだ。

この男は、一体シロナに何をしたのだ。

カトレアは片時も画面から目を離さず、食い入るように二人のバトルを観戦した。目が離せなかった。

あのシロナが、見事に翻弄されている。彼女のポケモンに下される指示が、ことごとく悪手となつてしまっているのだ。：否、あの男がそうさせているのだ。

まるでシロナのとり行動すべてを見透かしているかのような、マキナのバトルスタイルを目にしたカトレアは、ただひたすらに悪寒を覚えた。

シロナの五匹のポケモンに対して、三匹のポケモンで挑む新人トレーナー。興冷めも良い所の消化試合だ……カトレアだけでなく、観戦者のほとんどがそう思った事だろう。そして、その全員が例外なく冷水を浴びせられた気分を味わわれた事だろう。

先発のミカルゲは一撃で落とされ、ミロカロスは交代を余儀なくされ、それによつて繰り出されたトゲキッスは登場して一瞬で撃破されてしまう。ここまで、マキナはポケモンを一匹も瀕死に追い込まれていない。

そしてシロナの象徴とも言えるガブリアスすらも、マキナのボスゴドラとの正面から

の殴り合いの末、力尽きてしまった。

その時のシロナの顔を見た瞬間から、カトレアのマキナを見る目に明確な『敵意』が加わった。

ガブリアスを打ち破られたシロナが、何かを堪えるように、唇を噛んでいた。悔しさを耐え忍ぶかのような、苦く、悲痛な表情をしていたのだ。

カトレアの知るシロナではない。カトレアの知るシロナならば、自分の相棒をも打ち破ったマキナを褒め称え、最後の最後まで全力で戦い、バトルを楽しむ事に専念していただろう。

だが、シロナの顔に笑顔が取り戻される事なく、最後までマキナのポケモンに決定打を与える事なく、シロナは敗北してしまった。

それ以上、カトレアはシロナの顔を見ていられなかった。

(マキナ……あなたは一体、シロナに何をしたのかしら？事によっては、アタクシはあなたを許さないわ。アタクシの得難き親友を貶めるような真似をしているなら……アタ

クシは絶対にあなたを許さないわ)

カトレアはコ克蘭の助力も得ながら、マキナに関する情報を、今日に至るまでかき集め続けた。

マキナ。自称24歳。身長175cm。体重71kg。血液型AB型。生年月日不詳。職業不詳。出自不詳。

約一年ほど前に、容姿がマキナに似ているという男性(その時点ではマキナという名は明るみに出ていないが)が、アローラ地方のウラウラ島にあるホクラ二岳にて、顔中に痣を作った状態で徘徊していたと、近隣住民からジュンサーに通報があつた。ただ、あまりにも情報が少なすぎて、これがマキナであるという確証は全くない。なお、その近辺の草むらに、50匹近くの瀕死状態のメタモンたちが発見されたという追加情報もあつたが、やはり関連性の有無は分からない。

約半年ほど前に、トレーナー資格を持たない男が、メガやす跡地にて新種ポケモン『アロフォーネ』を捕獲し、ニユースとなると同時に、その男は無資格捕獲罪の罪を問われ

た。これが後のマキナである。

マキナに任意同行を求めた際、マキナはアロフオーネのみならず、ユキメノコ、ヌメラ、ドレディア、メタモンを所持していた。いずれのポケモンもウラウラ島に分布している種族なので、マキナはウラウラ島を中心に活動していた事が分かる。

トレーナー資格を持たない者のポケモンの捕獲、携行は大変重い罰則が課せられる。しかし、マキナは学界の権化とも言えるオーキド博士に、何かしらの文書を送付しており、同時にトレーナー協会に働きかけをしてもらうよう、何かしらの打診を行っている。結果として、マキナにはトレーナー資格が付与され、トレーナー協会から『ポケモンを所持するにふさわしい人物』と認定された事になり、マキナのポケモン捕獲・所持はお咎め無しとなった。

当然、マキナがオーキド博士に送ったとされる文書もリークした。

マキナは今現在に至るまで、オーキド博士に奇天烈な内容の論文を送り続けている。その大半が、学界にとって眉唾もの内容だったらしく、マキナがオーキド博士に論文を送る度に、ポケモンの停滞していた研究が一気に加速したと、学界ではマキナを讃える声飛び交っている程だ。一方で、既に学界が実証済みの論文も含まれている事も、稀にあるようだ。

しかし、彼がオーキド博士に打診を図った時に送った、彼の一番最初の論文だけは、未だに何を意味しているか解明されておらず、今現在でも物好きな研究者たちが、あーでもない、こーでもないという物議を醸しており、学界では『過去に類を見ない奇書』として扱われている。

内容としてはポケモンバトルについて理論を展開したものだと考えられているが、全ての学者が『我々が理解する事は不可能に近い』と匙を投げてしまっている。もちろん、その論文はカトレアも目を通した。

『ポケモンバトルにおけるロジック』

『ポケモンバトルは数学である。全ての結果には根拠があり、全ての結果は計算によって求められる。ゆらぎにも近い不確定要素があるものの、それも一つの因果に過ぎない。ポケモンとは数字であり、全てのポケモンに運命にも近い数字と、得るべくして得た数字が与えられる。だが、それらは決して平等に非ず、そこには明確な優劣が生じ、予定調和的に各々の役割が発生する。全ての数字を理解し、全ての数字を記憶し、全ての数字を導き出し、全ての数字を意のままに操った時……ポケモンバトルはより高次的な物へとシフトし、弱者はデジタルデバイスによって淘汰され、強者は瑕疵なき勝利を貪らんとする。

ポケモンとは数字である。人間が悪戯に因果を自らの手で作りあげた時……彼らは皆、廃れきった己の先に、終わりなき深淵を覗くことになるであろう』

率直に言つて、意味が分からなかった。カトレアの目からは、精神に異常をきたした狂者の妄言にしか見えなかった。

マキナはトレーナー資格を得た直後に、彼はポケモン預かりシステムの会員登録を行っている。だいたいの新米トレーナーは、手持ちポケモンが法定上限所持数の六匹に達して、初めて自分のボックスを開設するのだが、マキナは自分のトレーナーIDを得ると同時にボックスを開設した。手持ちが溢れていないのにも関わらず……だ。

さらに、彼はボックスを開設した直後、全く別のIDのボックスにアクセスしているのだ。

通常、自分以外のトレーナーのボックスにアクセスしようと思つても、バイオメトリクス指紋・虹彩認証をパスする必要がある為、100%不可能なはずなのだ。

ポケモン転送システムの創始者にして開発者である、カントー地方のマサキに解析を依頼したのだが、

『うーん、なんやこのID……確かにボックスは存在しとるんやけども、ワイが開発したん

と全然ちゃう方式で暗号化されとる。数字の中にAからFまでのアルファベットが混ざって訳わからんわ。そう簡単にクラッキングされるほど脆弱なシステムとちゃうんやけどなあ。すまんけども、解析できんかったわ。ほな、また……」

と返ってきた。内容が専門的過ぎて、カトレアには何を言っているか分からなかったが、マサキでも解析できなかつたと言う事は分かった。

シロナとの親善試合を行った日を境に、マキナは各メデアから引つ張りダコの『時の人』となる。また、マキナは公式戦を頻繁に行うようになり、かなりの頻度で彼のバトルが放映されるようになる。しかし、彼はメデアからのオフアアは基本的に蹴っている。彼の露出はポケモンバトルの実況放送と、その後の報道陣たちのインタビュアにに応じている様子くらいだ。そのインタビュアでもファンサービスは少なく、あまり多くを語らない為、彼の人物像は依然謎に包まれたままだ。

無敗のチャンピオンを完封したという事実は、世界中のトレーナーを震撼させた。シロナの『無敗のチャンピオン』という二つ名は、シンオウ地方という枠組みを超えたものだ。

それ故、シロナを敗北させたという事実は、数多くのトレーナーの反感と嫉妬を買っ

た。大手インターネット掲示板にマキナのアンチスレが乱立するようになった。やれポケモンを虐待しているだの、シロナを脅迫しているだの、金を積んで八百長をしているだの、根も葉もない噂が跳梁跋扈しているような有様だが、火のないところに煙は立たないとも言える。特に、シロナを脅迫している云々は、カトレアにとって無視のできないものだ。

さらに、シロナはマキナにかなりの頻度でコンタクトを凶っているのだ。その手段は電話によるものが大半だが、シロナを脅迫して傀儡化しているという噂がある以上、非常にきな臭い動きだ。

シロナに限って、一個人の都合の良いように扱われるような事はないと信じているが、彼女はマスター資格を持つポケモントレーナーであると同時に、一人の女性なのだ。必ずしも男を相手に強気に出られるわけでもないし、何かしらの弱みにつけ込まれていられる可能性だってある。

そんなカトレアの慮りを知ってか知らずか、シロナはマキナが住んでいるというプライベートリゾートに、つい最近に単身で訪れたのだ。

この時点で、カトレアに堆積していた不安が、一気に爆発したのだ。聞かなくてはならないのだ。シロナの口から真実を。

しかし……………

「……………ごめんなさい。マキナの事は話せないわ」

それが、シロナの答えだった。

「親友のアタクシにも？」

「ええ。誰にも話さないって、彼と約束したから」

シロナが……………口止めをされている……………？

誰にも囚われない……純真で天衣無縫なシロナが……拘束されている……？

「どうして……？誰よりも純粹で、誰よりも美しい心を持つシロナを、こんな風にしてしまっただなんて……許せない。美しくないわ、あの男」

カトレアの感情は、もう止まらない。

「やっぱり間違っついていなかったのよ……あの男は卑劣極まりない……!!アタクシの大事なシロナを、こんな風に口止めをして……っ!!」

目の前にいる親友に、どうすることもできない感情をぶつける。己の不甲斐なさ故に、カトレアの目頭に熱が集積していく。涙で滲んだ視界に、親友の姿を収めると……

シロナは顔を真っ赤にし、蕩とろけたような表情をしていた。

「マキナの事を悪く言わないれよ!!彼の事を悪く言うのは、カトレアらって許さないん

「らからねっ!!」

「……………え?」

シロナは盛大に酔っていた。

「カトレアっ!!」

「は、はい」

「マキナが、ろれらけポケモンの事を想ってる人か、分かってるの!」

「分からないわ…」

「分からないと駄目ちめじゃない!!カトレアなら分かってくれるんらから!!分かって!!」

「わ、分かったわ」

「らめっ!!分かってないっ!!いい?マキナはね、誰われよりもポケモンの事を愛していて、誰われよりもポケモンの事を理解しているのっ!!だから、彼のポケモンたちも、誰われよりもマキナの事を愛していて、誰われよりもマキヤナの事を……囁ささんじやった」

「……………」

「マキナはね、自分のポケモンたちを愛することしかできないの。どんな感情も、ポケモ

ンたちらけにしか向けるつもりがないの。らから、誰られよりもポケモンに真摯まじなのに、誰られよりも人に感情を見せたがらないの……彼は強すぎるの。その強さが、彼を孤独こらくにして、孤独こらくが彼を苦しめているの。……あたしが彼よりも強くなれば、彼はもう孤独こらくじゃなくなると思うの。彼の隣に立ってあげられると思うの。らから、あたしはこの前、彼のリゾートに行つて再戦を申し込んだの。教えて欲しい事があつたつていうのもあるける、そつちはオマケ」

「じゃあ、マキナのプライベートリゾートに行つたのは、ポケモンバトルをするために……？」

「そつよつ」

「彼に変な事をされたりとかは……」

「マキナがするわけじゃない!!確かにマキヤ……マキナは何考えてるか分からない顔してるけど、何の連絡も無しにリゾートに来たあたしを帰らせる事もなく、あたしのポケモンバトルを受けてくれて、またいつでも来てくれって言ってくれたのよ?すごく、すごく優しいのよつ、彼は!!」

「……………」

「あ、そうそう。あたし、なんか些細な事れもマキナに電話して話したくなつちゃうんらけど、いつでもマキナはちゃんと聞いてくれるの。たまにマキナの話も聞かせて貰える

んらける、これがまた可笑しくて仕方ないのっ!!前なんかね、あたしが『今何してるの?』って聞いたたら『ちようど、本日20匹目のコイキングが孵化したところですよ』って、真面目な声れ返ってきたのよ?あたしが『そんなにたくさんのタマゴができるわけないじゃない』って聞いたたら、また真面目な声で『できないんじゃない。やるんです』って。マキナが真顔れこんな冗談を言っているのを想像しちやって、もうたくさん笑ちやったのっ!!」

「……………」

「らから、あたしは彼の笑顔も見てみたいの……ううん、一回らけ見てるけど、あれはあたしに向けられたものじゃないから……いつかあたしにも見せて欲しいの。彼から偽りのない笑顔を引き出すためなら、あたしは何度らってマキナにバトルを挑み続けるのよ。れも、この前は結局あたしらがバトルを楽しんじやって、結局彼には何もしてあげられなかつた……うう……いつもあたしだけが与えられて……ぐすつ……マキヤナには何も……ふえええええ……ガドレリヤああああ……」

「ついに泣き出しちやつたわ。この子」

「うう……どうすれば良いの……カトレアあ……」

「アタクシが聞きたいわ」

「うう……あつ、ナデナデしないでよつ。あたしの方がお姉さんならから」

「はいはい。お姉さんお姉さん」

「カトレアの膝あ……カトレアの匂いしゆるう……ふわあ……」

「匂いは嗅がないでちょうだい」

「カトレアあ……すう……すう……」

「……寝ちやつたわ。コ克蘭」

己の膝の上で熟睡するシロナの金髪を撫でながら、辟易した様子のカトレアが呼びつければ、最初からそこに居たかのように、コ克蘭がやはり音もなく現れる。

「……いかなさいましたか？カトレアお嬢様」

「……ねえ、マキナは黒だと思う？白だと思う？」

「……僭越ながら私見を述べさせていただきます。白かと」

「白よね」

「ええ。驚きの白さです」

「シロナ、完全にホの字よね」

「ええ。驚きの乙女っぷりでございましたね」

「ねえ、今までのアタクシたちの苦勞は何だったのかしら？」

「…………ご無礼を承知で申し上げますが、徒労に終わりましたね」

「ああああああ!!!!もう!!シロナの馬鹿!!人の苦労も知らないで!!何よそれ!?アタクシの知らないところまでこの馬の骨とも分からない男に現を抜かしちゃって!!あんな仏頂面のどこが良いのよっ!!あんな男とバトルしている暇があったら、アタクシのエレガントでエクセレントなティータイムを共有しなさいよっ!!」

「……………」

「コ克蘭!!今日はもう良いわ!!外してちょうだい!!」

「はい、失礼いたします」

コ克蘭が去った後、自分の膝の上で気持ち良さそうに寝ているシロナの髪に、カトレアは顔を埋める。

「もう、シロナの馬鹿!!散らかすのは部屋だけにして欲しいわ!!人の心をこんなにもかき乱して…っ!!気が抜けて涙が出てきたじゃない……………ぐすつ……………もう……………シロナの馬鹿……………シロナの匂いが……………するんだから……………すう……………すう……………」

数分後には、重なり合うようにして眠りこける、二人の少女の姿がそこにはあった。

どこから現れたのか、そしてどこから取り出したのか、一眼レフを構えたコ克蘭が、幸せを切り取ったかのような一枚を、フィルムに収める。

「シロナ様……これほどまでに貴女あなたを思うカトレアお嬢様を、いつまでも大切にしてください。カトレアお嬢様……いつまでも変わらぬにいてくれるシロナ様を、いつまでも大切にしてください。この、コ克蘭……命果てるまで貴女方をお支え致します」

~~~~~

シロナが目を覚ましたのは翌朝の事だった。

「うう……なんでこんなに頭が痛いのかしら……」

頭の中でバクオングが騒ぎ回っているかのような頭痛に苛まれながら、シロナが体を起こすと、すでにモーニングを食べているカトレアと目が合う。

「…おはよう、シロナ」

「おはよう…：…ねえ、カトレア。あたしって、いつから寝ちやつてたのかしら？」

「…：…昨日の事、何も覚えてないの？」

「不思議な事に全然思い出せないの。カトレアと久しぶりに会えて嬉しいっ、てなつたのは覚えてるんだけど…：…」

「そう…：…十分よ。それだけで十分よ」

何やら含みのある物言いをするカトレアは、不思議そうな視線を向けるシロナから、フイツと顔を背けてしまう。心なしか彼女の首筋が赤くなっている気もするが…：…

「シロナ、もう少ししたらフウ口の誕生日じゃない？今度ここで彼女の誕生日パーティーを開くわよ」

「へえ…：…楽しそうね!!あたしも参加していい？」

「当たり前じゃない。その時に、マキナと言う男も連れてきなさい」

「えっ、マキナ!?!…：…どうしてマキナなの？それにここって、男子禁制じゃなかったの？」

「どうせコクランも出入りしてるんだから男子禁制も何もないわ。とにかく、マキナという男も呼ぶ事。分かったわね？」

「うーん…：…マキナが来てくれるかどうかは分からないけれど、一応声はかけてみるわ。」



あまり期待しないでね」

「絶対に連れてくるのよ」

シロナはカトレアにとって、唯一無二の親友だ。そんじよそこの男になど任せられるわけがなかった。

（『機械仕掛けの新種使い』……いいわ、このアタクシみずから、あなたの気品を見定めてあげるんだから……!!）

……なお、カトレアが立ててしまったこのフラグによって、さらに状況が面倒臭い事になるのだが、それを予見できたのはコ克蘭ただ一人だけだったとか……

## 10：えんかくローキツク

「……くしゅんっ!!」

「ん？風邪でもひいているのかい？」

「……いえ、どこかで誰かが私の噂をしているのでしよう」

「そうか……じゃあ、早速始めるとしよう。悪いが、そんな簡単に倒されるほど、ぼくは甘くないぜ？」

「そのセリフ、そのままお返ししましょう」

俺が、罪なきコスモスほしくもちゃんモッグをエーテル財団の魔手から保護せんとこの地に降り立った、慈愛と救済を司る大天使・リーリエの側に立つ事が許される人間か否かを見定める戦いが、始まった。

ルールは六対六、アイテムの使用以外なら何をしても許される『なんでもアリ』の変則マッチだ。ククイ博士曰く、島巡りをしている間は公式戦のような形式だったバトルではなく、臨機応変な戦い方を求められるから……との事だったが、『ぬしポケモン』のような野生ポケモンを相手にしなくてはならない事を考えると頷ける。

お互いのポケモンは既に見せ合っている。ククイ博士の手持ちは、

ルガルガン（昼）@きあいのたすき

ウォーグル@不明

カビゴン@不明

ジバコイル@ふうせん

ヤレユータン@不明

ジュナイパー@不明

となっていた。ほとんどのポケモンの持ち物が分からなかったが、そもそも持たせていない可能性が高い。

カビゴンはボスゴドラ、ジバコイルはロトム、ヤレユータンはアロフォーネで見ればいいだろう。ロトムが過労死しないために、ジュナイパーはアロフォーネないし乃至カイリユーで見れば完璧だ。

「よし!!じゃあ、イワンコに『いわおとし』を撃ってもらって、それが地面に落ちた瞬間からバトル開始だ。イワンコ、いわおとし!!」

「いわん、わん!!」

イワンコから放物線を描くようにして岩石が放たれる。すぐに投げられるよう、アロフォーネの入ったゴージャスボールを構える。

この戦いはルール無用の『なんでもアリ』だ。考え方を一新してより柔軟に、より速やかに指示を出さなくては、いくら俺のポケモンに性能面で軍配が上がっても、勝負に勝てない可能性は十分にある。

『ますた。ふだんのわたしなら、じゆくすいしているじかんたいです。たたかいがおわつたら、たくさんぽけりふれしてくださいね。そしてにじまめよこせ』

はいはい分かっているって。というか最後に本音が出たぞ、今。

先発は襷ルガルガンと思われるので、なんとか先手を取って『ステルスロック』を阻止したいところだ。アロフオーネの素早さなら可能だとは思いたい。

『まかせてください、ますた。わたしが、いぬちくしようごときに、まけるわけがありません』

頼もしいね。でも犬畜生はさすがに言い過ぎだと思うよ。

イワンコが放った『いわおとし』が、ようやく海岸の砂浜に突き刺さる。俺とククイ博士は、すかさず先発のポケモンを投げる。

ほぼ同時に、お互いのポケモンが姿を露わにする。やはり相手の先発はルガルガンだった。

「よしルガルガン、作戦通りにステルスロックを撒くんだ!!」

「……させると思えますか？アロフオーネ、連続きあいだま」

刹那、アロフォーネから小さなエネルギー弾が無数に放たれ、ステロを展開しようとしてるルガルガンに叩きこまれる。まっくのうち!!まっくのうち!!

当然、『つららばり』のような素で連射性のある技以外を連射するのは、公式戦ではご法度だ。しかし、今はルール無用の変則マッチなので、そんなものは一切関係ない。法は死んだ。

ほぼ全ての弾がルガルガンに命中し、砂塵が舞い上がる。完全に某惑星の王子のグミ撃ちです。本当にありがとうございます。

『やったか…?』

おい馬鹿やめろ。変なフラグを立てるな。

手数が増えた代わりに、威力が落ちているとは言え、ルガルガンは紙耐久のポケモンだ。いわタイプ弱点であるかくとう技を、アロフォーネの高い特攻実数値から叩きこまれたルガルガンは、サイバイマンの自爆を食らったヤムチャの如く横たわっていた。

「きあいだまでそんな事もできるのか……!!技を研究しているぼくですら思いつかなかったよ。流石はシンオウチャンピオンを倒したマキナくんだけ!!」

やっぱドラゴンボールって神漫画なんやなあって。

『ますた、やりました。ほめてください。ごほうびをください。にじまめはやくしろよ』  
お前もう取り繕う気ゼロだな。いちいちドヤ顔しなくていいから前見ろよ。もう次

のポケモン出てくるから。

「バトル中によそ見は厳禁だぜ？ウオーグル、ふきとばし!!」

アロフォーネが調子に乗っている隙をつくかのように、ククイ博士が新たに繰り出したウオーグルが、凄まじい風圧をアロフォーネに叩きつける。

『んみやっ?!』

無防備な状態でウオーグルの『ふきとばし』を食らったアロフォーネは、遠くまで吹っ飛ばされてしまう。んみやっ?!じゃねえよ。なに自分より遥かに遅い相手に、先手取られてるんだよ。これはニジマメお預け案件ですね。

遠くまで吹き飛ばされてしまったアロフォーネはしばらく戻ってこれないので、次のポケモンを出さざるを得なくなりました。まあ襷を潰されるよりかはマシだったと思っておこう。ウオーグルはアロフォーネの役割対処じゃないし、むしろ無償降臨をさせて貰ってありがたいだ。

とりあえず俺は、ボスゴドラの入ったヘビーボールを投げる。ロトムでも良いが、ロトムは役割が多すぎる上に、耐久が心許ない。ボスゴドラならば、攻撃種族値の高いウオーグルのブレイブカードも余裕で受けられる。

さらに、あえてメガシンカをしない事で、ひこうタイプの技を1/4のダメージに抑えられる。それに加え、メガシンカ前の特性『いしあたま』を活かして、無反動かつタ

イプ一致で『もろはのずつき』が撃てるといふ、ひこうタイプ絶対殺すマンと化す。ブレイククローなどで防御を下げられたとしても、ウォーグルが重戦車仕様のボスゴドラに打点を持つ事は不可能だろう。

唯一の不安要素は『ばかちから』くらいだな。不一致とはいえ、四倍弱点を突かれると流石に厳しい。

「ウォーグル、おいかせ!!」

俺の憂慮していた事が現実となる事はなく、ククイ博士は『おいかせ』を指示する。もともと、俺の手持ちは鈍足ポケモンばかりなので、大した影響はない。この一生おいかせマン!! 風ばつか吹いとけ!!

あとはボスゴドラが『もろはのずつき』を決めれば…

「いいぞ…!! その追い風に乘って、ブレイブバードだ!!」

ファッ!? 二回行動!?

『おいかせ』を発生させたウォーグルが、間髪入れずにボスゴドラへ捨て身のブレバを叩き込む。おいおい、変化技と攻撃技を同時に使ってくるとか無駄がなさすぎるだろ。

俺も真似したいところだが、生憎とこちらの手持ちは、アロフォーネを除いた全てのポケモンが攻撃技<sup>フルアタ</sup>だけで構成されているので、致し方ない。

だが、いわ／はがねタイプのボスゴドラにひこう技を撃つてくるとはな……タイプ相

性をご存知でない？

ボスゴドラの硬質なボディに突っ込み、ウオーグルは脳震盪でも起こしたかのようにフラフラとしている。これなら鈍足のボスゴドラでも攻撃は当てられるだろう。自分のトレーナーを恨むんやで。

「ボスゴドラ、もろはのずつき」

すかさず俺が指示を出せば、ボスゴドラの石頭がウオーグルに叩きこまれる。火力指数40、050の岩技をまともに食らったウオーグルは、一撃で沈んでしまう。

「さすがだね、気づけばすでに二匹もぼくのポケモンを倒されている……マキナくんの実力を、リーリエにも見せてあげたいところだね」

「……クイ博士、笑えない冗談はあまり好きではありません。私たちの戦いは、そんな下らない事のために行われているものではないはずだ」

万物を慈しまれるリーリエは、ポケモンが傷つく事を厭わられていらつしやる。

無意味に彼女の目の前でポケモンバトルを行うのは、彼女に対する冒涇であり、世界に対する冒涇である。

リーリエが存在しているだけで、世から戦争は姿を消し、我々の心には平和の花が咲き乱れる。

無論、その中心でひとときわ美しく、ひとときわ美しく、ひとときわ清廉に咲き誇るのは、



リーリエである。

我々はなぜ争うのか？我々はなぜ平和をかき乱してしまうのか？

言うまでもなく、我々がリーリエを失ってしまったからだ。

我々は皆、リーリエの笑顔をもう一度拝みたかっただけなのだ。

殿堂入りを果たした我々は有頂天になっていたのだ。リーリエからほしぐもちやんを託され、四天王とククイ博士を突破し、初代アローラチャンピオンの名を欲しいがままにし、カプ四種を捕まえられると、我々は調子こいていたのだ。大天使の苦しみを露ほども知らなかった我々は、調子こいていたのだ。

大天使リーリエは、聖母ルザミーネさんに光を取り戻さんと、カントー地方へと召された。

これが、己のサクセスストーリーに浅ましくも酔いしれていた我々を、奈落の底へと突き落とした『リーリエショック』またの名を『リーリエロス』である。戦士たちの終末……ラグナロクそのものだ。

我々は発狂した。筆舌に尽くしがたい喪失感を抱えた我々は、茫然自失としながらも敵選作業を開始した。

その果てに、身も心も廃れきった我々は、行き場のなかった悲壮と激情を、ヴァルト<sup>レ</sup>ハラ<sup>ト</sup>にて吐き出し続けた。

——ほしぐもちゃんが鳴く度にびつくりしてしまいうりりエ、可愛くて仕方がなかった。

乙さいみんなじゅつで敵を眠らせ、ほたるびを積んだデンジユモクが、怒りの10万ボルトを放つ。

——いっしょに雨宿りした時のりりエ、レポートを書いておかなかった自分が恨めしくて仕方がなかった。

りゆうのまいを積んだメガボーマンダが、嘆きのすてみタツクルを放つ。

「……ふとりーリエのことを思い出したロト。がんばりーリエしてるロトかな」

我々は3DSを閉じた。

「彼女の笑顔が、私をここまで強くした。だから、私とこのポケモンたちが、彼女の笑顔を取り戻さなくてはならないのです」

「エイン<sup>レ</sup>ヘリヤル<sup>ト</sup>の遺志は俺に託された。故にククイ博士……あなたは俺に倒される運命にある。」

「……マキナくんの過去に何があったかは訊かない。それでも、ぼくは全力で君と戦うつもりだ。それがりーリエたちのためでもあり、君のためでもあるからね」

純白に輝く八重歯を見せながら、ククイ博士はアローラ御三家の一匹……ジュナイパーを繰り出す。

「当然です。あなたに手を抜かれるほど、私は弱くはない」

俺はようやく戻ってきたアロフォーネを戦闘に繰り出す。吹き飛ばされて海に落ちたのか、アロフォーネはずぶ濡れになっている。

『ました。うみのなかに、おおきなしんじゆがおちてました。これをうりはらえば、おいしいものがたべられますね。わたしは、きんのぼろつくがたべたいです』

戦闘中に油売ってんじやねえぞ。錢ゲバかお前は。

「…アロフォーネ、ポルターガイスト」

「悪いね、マキナくん。すでにジュナイパーにさせる事は決めているのさ。先手はこちらがいただくぜ!!」

アロフォーネが周囲に浮遊している家具や楽器から歪な音を奏で始めると同時に、ジュナイパーは上空へと退避してしまう。あれ、ジュナイパーって『そらをとぶ』を覚えてられたか？

しかし、現にジュナイパーは安全圏にいるので、こちらの攻撃を当てる事は敵わない。いつジュナイパーが降りてきても良いように、アロフォーネには専用技のポルターガイストを継続させる。

『ました。せっかくなので、いつもとちがう、きよくにしてみました』

うん、サンバはお前のイメージに合わないと思うよ。ゴーストタイプっぽさが激減してるから。何が「せっかく」なのか教えてくれ。

技の威力に影響がないか心配ではあるが、一応アロフォーネは攻撃を続けている。しかし、ククイ博士のジュナイパーは一向に空から降りてこない。どうしたと言うのだろ

うか？

「ふふ……マキナくん。この『そらをとぶ』と言う技は、技が完了するまで相手の攻撃を食らわないんだ」

そんな事は廃人じゃなくても知ってますが。

「つまり……ずっと空を飛んでいれば、攻撃は当たらない!!」

ゲーフリ仕事しろ。

「さらに、ぼくのジュナイパーは遠くからでも近接攻撃を当てられる『えんかく』という特性を持っている。上空から一方的に相手のポケモンを攻撃できる、無敵の戦術だ!!」  
ククイ博士がキメ顔でそんな事を宣ったかと思えば、ジュナイパーが上空から攻撃を叩き込んでくる。おそらく『かげぬい』と『ローキック』だろう。

まさかの夢特性持ちかよ……遠隔でローキックぶち込んでくるとか、それなんてスタンド？ つーか『えんかく』ってそういう特性じゃねえから。

だが、『かげぬい』はゴースト技だし『ローキック』はかくとう技なので、どちらもアロフォーネには全く効果のない技だ。不毛すぎる時間だけが過ぎていく。

「むっ……そうか、君のアロフォーネはノーマルタイプとゴーストタイプを持っているんだっただな……これは厄介だ。ジュナイパー、フェザーダンスだ!!」

ジュナイパーは攻撃を中断し、バサバサと羽を撒き散らし始めた。草技ひとつも持っていないのかよ……

『ひっ……ますたっ!!けがらわしいはねがっ!!かみのけにつ!!てったいめいれいをっ!!』

…海に落とされたり、羽塗れになったり、つくづくツイてない奴だなあ。鳥系のポケモンたちは、アロフォーネに何か恨みでもあるのだろうか？

フェザーダンスは攻撃ランクを2段階下げる技だ。特殊アタッカーのアロフォーネにはまるで意味のない技だが、これ以上アロフォーネが羽塗れになるところを鑑賞していても仕方がないので、俺はアロフォーネを引っ込める。アロフォーネはずぶ濡れの羽塗れになっているので、戦闘後のポケリフレが超絶面倒臭そうだ。泣きそう。

俺は新たにカイリユを繰り出す。なぜカイリユなのか、察しの良い人ならばすぐに分かるだろう。

「やっつとでポケモンを変えたな……今が好機だ!!」

クワイ博士が、Zリングにはめ込まれた『ジュナイパーZ』を輝かせ、ゴーストZの全力ポーズを取る。

「ジュナイパー、シャドーアローズストライク!!」

Zパワーを纏ったジュナイパーが、ボールから出てきたばかりのカイリユーに、全力のかげぬい：『シャドーアローズストライク』を叩きこむ。威力180を誇る、強力なゴースト技だ。

まるで攻撃に備えていないカイリユーに、無数の影の矢が突き刺さるが……カイリユーはかなりの余力を残して、ジュナイパーの全力攻撃を耐えてみせた。

「なに……ジュナイパーのZ技が耐えられたのか!？」

俺のカイリユーは特性に『マルチスケイル』を持っている。この特性は体力が満タンの時に、受けるダメージを半分にするという素晴らしい特性だ。今のような強力なZ技でも、楽勝で耐えられる。ただしレイジングジオフリーズ、テメーは駄目だ。

「手強いポケモンだぜ……だが、ぼくのジュナイパーに攻撃が当てられない以上は、いくら攻撃を耐えたところで突破できない……そうだろうか?」

「……ククイ博士。ポケモンの技というものは、もつと奥が深いですよ」

「へえ……ポケモンの技を研究し続けている、このぼくが編み出した戦術に、穴があると  
言う事かい?」

「ポケモンバトルにおいて、穴がない戦術なんて存在しませんよ。カイリユー、ぼうふう」

ぼうふう。

威力110命中70のひこう特殊技。30%の確率で相手のポケモンを混乱状態にする。雨が降っていれば必ず命中し、日差しが強い快晴の時は命中率が50%になる。そして、この技は相手のポケモンが『そらをとぶ』『とびはねる』『フリーフォール』を使つて、上空に身を潜めている時でも命中するのだ。

カイリユースはドラゴン／ひこうタイプのため『ぼうふう』には1.5倍のタイプ一致ボーナスが付く上、俺のカイリユースは『ひかえめ』な性格で特攻努力値252振りだ。極め付けに、特攻を1.5倍にするこだわりメガネをかけている。

上空で盆踊りを踊っていたジュナイパーは、自分が苦手とする超火力のひこう技をモロに食らい、一瞬で瀕死状態となる。もう草タイプのアローラ御三家はダダリンで良いと思います。

「なっ……上空にいたジュナイパーに攻撃を当てられた……!? そんな事があるのか!」  
これに懲りたらあんな有害戦法はやめてくださいね。マジで。

後続のジバコイルはロトム、『オーバーヒート』で焼き、カビゴンはメガシンカしたボスゴドラの『ばかぢから』で殴り倒し、ヤレユータンはアロフォーネの『ほたるびばくおんば』でゴリ押しした。

ジバコイルの強力な磁場でロトムを故障させようとしてきたり、カビゴンののしかか



りでボスゴドラの身動きが取れないようにしてきたり、トリックルームで素早さの逆転したヤレユータンが逃げ回ったりと、あまりにも酷いバトル内容だった。いばみがクレッフィとか無限グライオンとかが可愛く見えるくらいである。台パンどころか3DSを逆パカしててもおかしくないレベルだ。

「見事だったよ、マキナくん。結局ぼくは君のポケモンを一匹も倒す事ができなかった……完敗だぜ。カントー地方のジムに挑んだ時とは比較にもならない。君がシンオウチャンピオンを圧倒したというのも、今なら納得できる」

……今のシロナさんを圧倒できるかどうかは、かなり怪しい所なんですけどね。あのお姉さんは一体、どこに向かっているのでしょうか。

「そして、君のバトルには、何か強い意志のような物と、ぼくには見えない非常に大きな積み重ねのような物を感じる。君になら、リーリエやハウたちの事も任せられる……と、ぼくが言うのも烏滸がましいくらいだ!!」

一度、ククイ博士がカラカラと笑うが、すぐにその整った顔を引き締める。

「今から言う事は他言無用だ。リーリエはエーテル財団会長……ルザミーネの実娘だ」

「なん……だと……?」

真面目なシーンでふざけてごめんなさい……

「彼女は『ほしぐもちゃん』という不思議なポケモンを連れていてね……エーテル財団は

ウルトラホールを発生させる為に、このポケモンにストレスを与えていたんだ。見かねたリーリエが、ほしくもちやんを連れ出し、エーテルパラダイスを抜け出してきたのさ」

「ウルトラホール？」

「ああ。ウルトラホールとは……」

既に知っている事を懇々と説明されるのって、こんなにも辛いのか……壊れるなあ。

「……まあ、そんなこんなで彼女は珍しいポケモンを連れてくるが故に、良くない連中から狙われている。加えて、リーリエはトレーナーじゃないから、ほしくもちやんをボールに入れる事ができないし、バトルをさせる事もできない。彼女を一人にさせるのは、あまりにも危険なんだ」

まあ、急に姿を消した珍ポケモンと会長の実子を探しているエーテル財団が、良くない連中だとは一概に言い難いと思うが……ククイ博士が好青年じゃなかったら、逆に拉致監禁扱いされてたくらいだと思います。

「……ククイ博士。私の島巡りのサポートをしていただく以上、あなたの要望にはできる範囲でお力添えをしたいと思っていますし、新設するアローラリーグの話に關しても、私なりに考えておきたいと思います。ただ、島巡りやその他諸々の主役は、私ではない



もはやククイの経験、知識、実力では、マキナというトレーナーの力量を正当に評価することができず、賞賛の言葉を与える事すらできない。

全てだ。全てのポケモンが『一撃で』やられてしまったのだ。こんな事が今までにあつただろうか？

マキナのポケモンが使ってくる技は、どれも威力の高い技だ。だが、その分『オーバーヒート』や『ばかぢから』などといった、使い勝手の難しい技ばかりだ。あまつさえ、カイルューは『こだわりメガネ』という、同じ技しか出せなくなるアイテムを持っていた。一方でククイは、六匹いる内の三匹のポケモンにしかアイテムを持たせていなかった。ポケモンは愚か、アイテムの扱いですら彼に劣っているのだ。

このアローラでは、彼に優るトレーナーなど存在しないだろう。∴いや、他の地方にすらいるかどうか怪しいほどだ。

しかし、同時にククイはマキナというトレーナーに一抹の不安を抱いていた。

『彼女の笑顔が、私をここまで強くした。だから、私とこのポケモンたちが、彼女の笑顔を取り戻さなくてはならないのです』

彼が戦闘中に残したこの言葉。恐らくは、在りし日の妹の姿を、リーリエに強く投影しているのだろう。

あんなにも強いトレーナーが、少し小突いただけで瓦解してしまいそうなほど、マキナと言うトレーナーが弱々しく見えたのだ。

きつと、彼はかけがえの無い存在を失い、己の支えとなるものを求めているのだ。そんな自分の弱さに飲み込まれぬよう、ただひたすらにポケモンと共に研鑽を繰り返しているのだ。

「機械仕掛けの新種使い……か」

機械のように無機質に見えた無表情は、きつと孤独を押し殺す為の物なのだろう。

「ぼくになにか、できる事はないだろうか」

そんなマキナを支えてやりたいとククイは思ったのだが、何しろククイはマキナの事など何も知らない。

「……シンオウチャンピオンは、よくマキナくんの事を話していると専らの噂だ。彼女なら、彼の事を人よりも知っているかもしれないし、彼の支えとなり得る人物かもしれない」

ない。今度、彼女に手紙を出してみるか……」

マキナは知らない。

ノリとテンションで放たれた軽率な発言が、至る所でフラグを乱立させているという事実を……

「イワンコ、ぼくたちも負けたままでいられないな。ボスゴドラの『もろはのずつき』は、実に熱い一撃だった…!!」

「いわん!!」

「イワンコも逞しい岩技を覚えるためにも、もつと特訓しないとだな!!」

「わん!!」

~~~~~

俺はオレンジ色に染まる海を眺めながら、アロフォーネにドライヤーをかけていた。おねむの時間だと言うのにも関わらず戦闘に駆り出されたアロフォーネは、満身創痕と

いった様子で眠りこけている。ダメージを一切食らっていないとは言え、アロフォーネが一番疲れている事だろう。

水平線に沈みつつある夕日を見送りつつ、俺は黄昏るようにしてため息をつく。

「…随分と遠くまで来てしまったものだな」

この世界に来たきっかけなど、何もなかった。びっくりするほど、何もなかった。

別にポケモンをプレイしていた訳でもないし、神様なヤツが異空間に俺を連れ去った訳でもない。

久々に有給が取れて、エッチなDVDでも借りようかなと、鼻歌まじりに外を歩いたら、ウラウラ島のホクラ二岳の草むらを歩いていたのだ。そりやあもう、ポルナレフ状態だった。

急に景色が変わり、パニックっていた俺の前に、追い打ちをかけるようにして紫色の物体……メタモンが現れたのだ。

ピーポーン…と、なんとも可愛いらしい鳴き声と共に姿を現したメタモンこそが、俺

が初めて生で見たポケモンと言えらるだろう。

戦闘能力を有していないであろうそれを見ても、少々気が動転していた俺が恐怖を抱く事はなかった。むしろ、その愛らしい姿に微笑ましさを覚えた。

エアームドとかオニドリルとかが出ていたら、風穴の一つや二つは空いていたと考えたと、初のエンカがメタモンだったのは僥倖と言う他ないだろう。

そう思っていた時期が俺にもありました。

その時の俺は当然、ポケモンを所持していないので、『へんしん』しか技を持たないメタモンは攻撃手段を有しておらず、人畜無害な平和ポケモンだと高を括っていた。そんな楽観的な俺の慮りを覆すかのようにして、メタモンはその姿を変えて見せた。

数秒後、対面には俺によく似た……いや、俺そのものと言うべき男が立っていた。

ドツベルゲンガーに会うと死ぬ。そんな話をどこかで小耳に挟んだが、死の恐怖というよりも、凄まじい不快感と、それに伴う憎悪にも似た殺意がふつふつと沸き上がってくるのだ。

不思議なものである。スマホのインカメラで見ると「なんだこの不細工は」ってなるし、鏡を見ると「あれ、俺って意外とイケるんちゃう？」ってなるし、実物をその目に

すると「あ、こいつ殺さなきゃ」ってなるのは、色々とおかしい気がする。それ全部俺なんですよ。

まあそこから始まるのは俺vs俺の殴り合いになるわけで、非常に地味な絵面と、非常に気持ちの悪い光景が繰り上げられる事となる。初めて殴った顔が自分の顔とか、多分俺以外に誰も体験してないと思うし、体験してはいけないと思う。

決して少なくない傷を負いながらも、俺に擬態したメタモンを辛うじて瀕死間近に追い込むことができた。

人外との生存競争を繰り広げたのにも関わらず、自らの拳で活路を見出したのである。

某黄色いネズミの10まんボルトを受けてピンピンしている某赤い帽子さんとは、比較する事すら烏滸がましいが、自分には秘められたポテンシャルが眠っているのだと、根拠のない確信を俺は得た。座右の銘を眠れる獅子にしようとも思った。

その数秒後には、いかに自分が暗愚であるかを認識させられるハメになる。

ゲームにおいて、瀕死間近に追い込まれたメタモンが脱兎のごとく敗走する事はなかった。

そう、窮地に立たされたメタモンは、つぎつぎと仲間を呼び始めるのだ。

俺はその事実を完全に失念していた。

いくばかもしない間に、物言わぬ俺が^{メタモン}無数にひしめきあっていた。キモい以外の言葉が出てこなかった。

無尽蔵に湧き出るメタモンを前に、死を確信した俺ではあったが、一方的に蹂躪される事はなかった。

擬態したメタモンたち自身が、どれが本物の俺かわからなくなってしまったようで、メタモンたちによる大乱闘が勃発したのだ。

大量の俺が、^{メタモン}無表情で大量の俺を殴り続ける光景など、二度と見たくないものである。気分を害するとか、ちよつとそういう次元超えちゃつてた。

俺は足元に落ちていたスピードボールで、一匹のメタモンを捕まえた後に、命からがらホクラ二岳を下山した。近隣住民が不審者を見るかのような目つきで俺を見ていたが、そんな事を気にしている余裕なんてなかった。

今思えば、転移したての頃は、とても順風満帆とは言えないような逆境の中だった。

トレーナー資格を持っていない俺は、ポケモンセンターすら利用できず、落ちているアイテムを売っ払って食い繋ぐという、乞食みたいな生活をしていた。ポケモンの捕獲も、落ちているボールだけで行わなくてはならず、まともに戦えるポケモンがいない状態での捕獲は、常に危険との隣合わせだった。

アロフオーネを捕まえ、一気に事が進展するまでは、泥水を啜り続けたようなものだ。いつか爆破してやるという続けていた前の世界の会社が、超ホワイト企業に見えたくらいだ。唯一の幸運と叫びたら、あの時捕まえたメタモンが6Vだった事くらいか……

あかん、涙出てきたわ。

『むにやむにや……ますた……あまりむりしないでください……むにやむにや……』

「……今は何も、辛い事なんて無い。お前らは、絶対に裏切らないからな」

廃人と呼ばれる俺たちが、なぜ膨大な時間を厳選作業に注ぐのか……

ポケモンは裏切らないからだ。

数字は決して、裏切らないのだ。

だからこそ俺たち廃人は、数字に固執するのだ。

本来ならば先制をとれる対面なのに、厳選を妥協したばかりに後攻に回ってしまった日には、対戦相手は喜ぶどころか『お前个体値くらい粘れよ……』と呆れられるくらいだ。

理想の数字に近づける為に、アロフォーネたちにも並々ならぬ苦行を強いる事になる。だから、俺も彼女たちポケモンを裏切つてはいけない。ロトムに地震を撃たせたりとか、そう言うあり得ない指示をしてはいけないのだ。

より少ないダメージに抑え、より大きなダメージを与えていく。それがレート戦での俺のバトルスタイルだ。

エースポケモンで上から高火力を叩き込み、全抜きを狙うスタイルも嫌いではないが、得手不得手をもったポケモンたちを、適材適所で使っていくのが、俺にとって一番しつくりくる戦い方だ。

先のククイ博士との戦いのように、まるで予想だにしていけない戦いになる事もあるだ

リーリエは、マキナと言うトレーナーを、知りたがった。

海岸沿いに腰を下ろした彼は、その黒髪を潮風に揺らしてしている。彼の手元には、ベタベタに濡れ、ジュナイパーの羽に塗れたフランス人形……アロフォーネがいる。

マキナは丁寧な手つきでアロフォーネの髪から羽を取り除き、櫛を通しながらドライヤーをかけている。

「……………お前らは、絶対に裏切らないからな」

その声は、涙でわずかに濡れていたような気がした。

私が見ているものじゃない。そう感じたリーリエは、静かに踵を返す。

「……………とてもポケモンを大事にされている方でしたね」
「ピュイ!!」

リーリエがそつと呟くと、彼女のスポーツバックの中から元気な鳴き声が聞こえる。

「私もほしぐもちゃんのことを、とても大切に思っていますが、あの人はもつと凄いい気があります。私よりもつと昔から、私よりもつと多くのポケモンに、私よりたくさんの愛情を注いでいるんだと思います。ミツキさんやハウさんも、いつかマキナさんのようなトレーナーになるんでしょうかね？」

「ピュイ？」

「いえ……ダメですね。私もほしぐもちゃんを支えられるようにならないと、ダメです。これからもよろしくお願いします、ほしぐもちゃん」

「ピュイッ!!」

11：噛み合わぬ歯車たち

ククイ博士との色々と酷いバトルを終えた後日、メレメレ島のリリイタウンに呼び出された。

カプ神にポケモン勝負を捧げる『ゼンリヨク祭り』という奇祭が行われるらしい。リリーエ、ハウ、ミヅキが揃っていて都合が良いという事で、改めて俺の紹介をしたいとのククイ博士の意向だ。メレメレ島の島キングである『ハラ』との顔合わせも兼ねているので、それなりにちゃんとした格好で来た。紳士は身嗜みも整えるものである。

「アローラ、マキナくん!!グッドタイミングだ。これからゼンリヨク祭りが始まるところだぜ!!」

興奮気味なククイ博士が指差す先には、祭壇のような物が設えられており、壇上には赤いニット帽を被った女の子と、黒々と日焼けした男の子が立っている。

「あの二人が、マキナくんと一緒に島巡りをするミヅキとハウだ。どうだ…君の目から見て、彼女たちにトレーナーの資質はあると思うかい？」

「…二人とも、とても良い目をしてますね。特に女の子の方…ミヅキは、私以上に強くなる気がします」

主人公やしな、あいつ。

「ククイ博士に勝ったマキナさんにそんな事を言わせるなんて、ミヅキさんはすごいですな」

おお……大天使リーリエよ。音もなく現れないでください。驚愕と狂喜のあまり昇天するところでしたよ。

「アローラ、リーリエ」

「アロ……こんばんは、マキナさん」

うむ、殻を破れないリーリエも佳き。いとをかし。

「ま、お互いの自己紹介はハウたちも交えてにしようか。そろそろゼンリヨク祭りが始まる。ちゃんと二人の戦いを見届けたいとな!!」

ククイ博士が祭壇へと視線を促すので、そちらを見やると、島キングのハラが行司でも務めるかのようにして、ミヅキとハウの間に立っている。

「カプ・コケコに捧げる、ポケモン勝負を始めます」

ハラが開戦の音頭を取ると、ミヅキとハウがモンスターボールを取り出す。ククイ博士がジュナイパーを使ってきた事を考えると、ミヅキはアシマリ、ハウはニャビーとなっているのだろう。

みずでつぼう連打ゲーですね。わかります。

両者、同時にモンスターボールを投げる。

ハウの先発はお馴染みのピチュー。

対するミツキの先発はアゴジムシ……アゴジムシい!?

チヨイスが洩いなオイ。無難にピチューを捕まえた俺とは大違いだ。この子、絶対大物になるわ。なんかもう分かるもん。

種族的にはピチューの方に素早さの軍配は上がるのだが、どちらが先手を取るのだろうか。

「ピチュー、でんきショック!!」

ハウが元気一杯に指示を出す、ミツキのアゴジムシがピチューより先に『むしくい』を繰り出した。

おい待てい。

『むしくい』は確かLv13かそこらで覚えるはずだぞ？ミツキちゃん短期間でどんなレベリングしてんねん。鼻水出そうになったわ。

考えるまでもなく、Lv13アゴジムシの『むしくい』は、ハウのLv6ピチューを確定で落とせる。レベルの暴力で上から叩かれたピチューは、何をする事も出来ず、一瞬で落とされてしまった。これは酷い。

ハウが後続として繰り出したニャビーも、ミツキのアシマリによる『みずでっぼう』で、普通に倒されてしまった。

なお、ここまでミツキは一貫して真顔である。

あかん……ミツキちゃんが想像以上に主人公してる。

「……とても気迫溢れるゼンリヨクの戦いだっただな!!」

ククイ博士がぎこちない笑顔で二人の戦いを讃える。大人の優しさって、時には残酷なんやなあつて。

「うむ、実に見事なゼンリヨク祭りでした。カプ・コケコもさぞ喜んでおられるでしょう

な!!」

ハラが満面の笑みで、ククイ博士の世辞に乗っかる。今の戦い観て喜んでたらコケコ相当性格悪いだろ……

「お疲れ様です、ハラさん。こちらが以前にお話したマキナくんです」

ククイ博士が隙を見て、俺の事をハラに紹介する。

「アローラ。噂はかねがね聞いておりますぞ、マキナ殿。いつか、わしとも手合わせを願っていたですな」

「アローラ、ハラさん。あなたとは近い内に戦う事になるでしょう。その時はよろしくお願いします」

俺たちが軽く挨拶を交わすと、ククイ博士がひっそりと俺に耳打ちをしてくる。

「アローラリーグの四天王は各島の猛者に任せようと思っただけ……ハラさんにも声をかけているんだ。任せてくれと、心強い返事を頂いているから、ハラさんにはほぼ確実に四天王の一人を務めてもらうつもりだ」

ハラか……どうしてもマヒナペーパーに、ムンフォで5タテを決められる未来しか見えない。ほしぐもちゃんかルナアローラかソルガレオのどちらに進化するかはまだ分からないが。

「ねー博士ー。この人誰？」

いつの間にもやら祭壇から降りていたハウが、俺を指差してククイ博士に疑問を差し挟む。

「この人は今活躍中のトレーナー、マキナくんだけ」

「えー!? マキナって、あのシンオウチャンピオンを倒した人だよなー? すげー、本物なのかー!!」

そんな売れっ子芸能人みたいに持ち上げてくれるな。天狗になっちゃうだろ。

「……マキナさんは、実はすごいトレーナーなんですか?」

ハウの大袈裟な反応を見て、リーリエが戸惑ったような表情で俺を見てくる。

「……少なくとも、シンオウチャンピオンほど立派なトレーナーではないな」

俺のような小物が大物だと、リーリエに誤解させてしまうのは、磔にされて石を投げられてもおかしくない大罪なのでキチンと否定しておく。

「でも、めちやくちや強いんでしょー? 一回勝負してみたいな」

「……ハウはまず、ミツキに勝つ事を目標にした方が良い」

俺がさりげなく矛先をミツキへと逸らすと、ミツキは俺の事をジツと見つめてくる。

「……………」

いや、何か喋れや。

ゼンリヨク祭りの後、ククイ博士の研究所でハウやミツキたちと自己紹介を交わした。ククイ博士からは島巡りの事と、リーリエの事について説明をされた。また、ミツキとハウはすでにハラからZリングを受け取っていたが、俺はまだだったのでククイ博士から改めて受け取った。形から入るタイプではないが、Zリングがあるだけで一端のアローラトレーナーになれた感じがする。

また、『しまめぐりのあかし』も同時に受け取った。他の地方で言うジムバッヂにあたる大切な物だ。

「最初の試練は一週間後くらいになると思う。ミツキたちと一緒にハウオリシティのポケモンスクールに行くってくるから、マキナくんは試練の日まで待っていて欲しいんだ」
今後の予定をククイ博士が伝えてくれたので、俺はそれに従う事にする。

フリー対戦に湧き出る伝説キッズたちに、現実を教え込むならまだしも、子供ばかりの所に乗り込んで無双しても仕方ないしな。小学生をスマブラでポコポコにするのと同じぐらい大人気ない。

それに、俺は公式戦も両立して行わなくてはいけないし、少し考えたい事があるので、

一度リーリエたちから離れなくてはならない。

ふと、ここまで口数の少なかつたリーリエが、ミツキに何やら話しかけているようだ。「ミツキさん、さっきの戦いでミツキさんのアシマリさんが傷ついています。私、きずぐすりは沢山持っているのです、これを使ってください」

傷ついたミツキのアシマリが見ていられないといった様子で、リーリエはスポーツバッグから、きずぐすりを取り出す。

真顔で領いたミツキは、リーリエからきずぐすりを受け取り、アシマリの傷に吹きかける。あれ結構しみるんですよ。

「元気になりましたね。これからもミツキさんのポケモンさんは、いっぱい戦う事になると思います。ポケモンさんが傷ついたら、いつでも私に言ってください」

リーリエの言葉を真摯に受け止めたミツキが頷くと、リーリエは穏やかな笑みを浮かべる。どこかよそよそしく感じる二人の距離感が、心なしか縮まったようにも見える。

うん。やっぱリーリエと結婚していいのはミツキちゃんだけやね。

~~~~~

ミヅキたちとの顔合わせを終え、ポケリゾートに帰ってきた俺は考え事をしていた。その内容はリーリエの母……ルザミーネさんの事だ。

率直に言つて、ルザミーネさんは俺の中で『養われたい女性No.1』に輝く、属性的にぶつちぎりで大好きなポケモンのキャラクターである。あんな特殊な層を狙い撃ちしているかのような美魔女を全年齢対象ゲームに出す、ゲーフリはイカれている。良い意味で。

ゲームにおいて、ルザミーネさんはウツロイドの魅力に囚われてしまった冷酷なる貴婦人(某F O Eの事ではない)として、リーリエや主人公たちに立ちはだかる壁となる。しかし、ルザミーネさんが家族であるリーリエたちに冷たくなってしまったのは、ウツロイドの毒に冒されてしまっているからだ。

そんな背景を抱えているルザミーネさんの事は嫌いになれない。でも、ウツロイドも可愛いので嫌いになれない。この行き場のない感情はどうすればいいんですか？



原作の流れを歪めてでも、ルザミーネさんは救いたい。というか、原作通りになっちゃうと、またしても『リリーエシヨック』を受けるハメになる。そうなると、俺が二つの意味で廃人になってしまう。ヒモ無しバンジーENDとかシャレにならない。

原作でできなかった事が、今の俺にはできるはずだ。サンムーンには出てこなかった人物と関わる事ができるし、他の地方に行く事もできる。

幸い、ポケモンについて詳しいオーキド博士やシロナさんとは、知らない仲ではない。著名人とのパイプは最大限に利用するべきだ。

今度、シロナさんにもそれとなく協力を求めてみようか……そう考えていたら、その本人から電話がかかってきた。

シロナさんからは毎夜のように電話がかかってくるのだが、昼にかかってくるのは珍しい。なんかもう嫌な予感しかしない。

厄介な事は後回しにしたくないタチなので、素直に応答アイコンをタップする。

「……………はい」

『お休みのところごめんさい、マキナ。今大丈夫？』

……………なんか雑音が凄いな。今どこにいるんだシロナさんは。

「……………ええ。いかがなさいましたか？」

『あたし今、マキナの家に向かっているの。……マキナの家に行ってもいいかしら?』

シロナさん、順序がおかしいです。

~~~~~

当然、断れるわけもなくシロナさんを迎え入れた。あんな反則技やろ。

現にシロナさんは、俺の目の前でロズレイティーを飲んでる。シロナさんは美人なので、紅茶を飲むという何気ない動作のひとつひとつがとても絵になる。スマホの壁紙にしたい。

「……紅茶……何か大事な事を忘れてる気がするわ……」

シロナさんはロズレイティーをしげしげと見つめながら、何かを呟いている。…変な薬は盛ってませんよ?

「……で、急にどうしたんですか？暇だったとか、そんな理由ではないはずだと思いますが」

「え、ええ……そうね。マキナに話があるの」

「そこまで言うと、シロナさんは不自然に言葉を切り、ぎこちなく俺から目を逸らしてしまう。」

「そう、先ほどからシロナさんの様子がおかしいのだ。」

「なかなか俺と目を合わせようとしないし、何か言いかけては止めてしまうのを、何度も繰り返している。明らかに挙動不審だ。」

「一体どうしたんですか？シロナさんらしくもない。私は貴女に何を言われても、腹を立てたりはしませんよ」

「煮え切らない様子のシロナさんに痺れを切らした俺は、続きを催促する。中指突き立てながらファツキン童貞クソ野郎とか急に罵倒されたら流石に怒るけど。」

「一度、静かに目を伏せた後、シロナさんが意を決したように口を開いた。」

「……………マキナ。あなた、悩んでる事があるんじゃないかしら？」

「……………え？」

「教えて欲しい……………あなたが抱えている事を、あたしにも教えて欲しいの」

~~~~~

シロナの元に一通の手紙が届いた。差し出し人はアローラでポケモンの技を研究しているという、ククイ博士からだった。

『アローラ、シロナくん!!ぼくはククイという、アローラ地方でポケモンの技を研究している者だ。ぼくがアローラと言った時点で、シロナくんとはもう友達だ!!』

同じアローラ地方の人間だと言うのに、マキナとの温度差が凄いわね…………と、シロナはククイのフランクさに戸惑いを隠せなかった。

『いきなりの手紙で申し訳ないが、シロナくんに訊きたい事があってね……マキナくんの事だ』

マキナ。

その三文字を目にしただけで、シロナの手紙を持つ手に、力が入るのが如実に感じられた。

『つい先日、マキナさんとポケモンバトルをしたんだけどね……いやはや、恐ろしい程に強かったよ彼は。まるで手も足も出なかつた。ぼくの手持ちは全て一撃でやられてしまった。あれではマキナさんの実力を認めざるを得ない!!』

(あたしが知らない間に、マキナが他の人とバトルしてる……)

……自らの頬が僅かに膨らんでいる事を、全く自覚していないシロナは、更に手紙を読み進める。

『これはオフレコでお願ひしたいんだけど、近々アローラにもリーグを発足させるつもりなんだ。その時、初代のリーグチャンピオンをマキナさんに任せたいと考えているんだ。…彼にはその気があまりないようだけどね。もし、本当にマキナくんがチャンピオンになったら、ベテランチャンピオンのシロナくんから色々アドバイスをしてやって欲

しい』

マキナが、リーグチャンピオン。

シロナは、驚くほどのこの一文がしっくり来たし、彼以外に誰がチャンピオンを務めるのだ……とさえ思ってしまった。

また、世間からの評価が芳しくないはずの彼に白羽の矢が立った事が、シロナは何故だか自分の事のように嬉しく感じたし、マキナの本質を理解しているククイに、親近感を覚えた。

『それでもね……今のマキナくんにはチャンピオンを任せるのは、彼にとって負担が大きすぎると思うんだ』

シロナは静かに続きを読む。

『彼と親しいシロナくんならば、既に知っているかもしれないが……マキナくんは大切な家族を失っているそうなんだ』

シロナは、呼吸を止めた。

『彼はね、妹を亡くしているんだ』

「……嘘……そんな……」

シロナはハツとなる。今思えば、あれだけマキナは有名になったと言うのに、彼の家族については一切の情報が無いのだ。そして、彼の口から身内の話が出た事など、一度もないのだ。

『今でもハツキリと覚えている。彼はぼくとバトルしている時にこんな事を呟いていたんだ。「彼女の笑顔が、私をここまで強くした。だから、私とこのポケモンたちが、彼女の笑顔を取り戻さなくてはならないのです」

……ってね。ぼくの目には、失った二度と戻る事のないモノを、何かで埋め合わせようと、必死にもがいているようにも見えたんだ』

小刻みに震えるシロナの手から、ハラリと手紙が滑り落ちる。

「あたしは……勘違いをしていた……」

彼はポケモンを愛し、強さを求めた果てに、孤独となったわけではない。

孤独を押し殺す為に、ポケモンを愛し、ポケモンバトルに埋没していたのだ。

——知って欲しかったんですよ、自分の事を。

あの日のマキナの言葉が鮮明に蘇る。

あれは、マキナのSOSだったのだ。

どうしてあれが、シロナ自身の事を示唆したものだとか勘違いしてしまったのだろうか。マキナは声にできぬ悲鳴を、シロナに聞かせようともがき、足掻いていたのだ。

マキナは、自分の事を知らないと言っていた。知る術が無いと言っていた。



肉親を失い、揺蕩うように強さを求め続けた彼は、自らを見失ってしまっているのだ。

——シロナさんがこの世界で一番強いと思つたからです。

マキナは救つて欲しかったのだ。押しつぶされるような孤独に耐えながらも、終わりの見えぬ放浪を続けるのを、シロナの手によって終わらせ欲しかったのだ。

だが、シロナは彼に勝つ事ができなかった。無限に続く暗闇へと這いずっていく彼を、止める事ができなかったのだ。

本当の事を、確かめなくてはならない。

気づいたら、シロナはポーマンダに跨っていた。

しかし、リゾートを訪れる際は連絡を寄越せと、マキナに言われた事をシロナは道中で思い出し、電話をかけた。

マキナはいきなりの電話にかなり戸惑っていたが、一応許可は貰えた。シロナはポー

マンダにもっとスピードを上げるよう指示した。

リゾートに着いたシロナは、マキナの家へと一直線に向かう。突然のシロナの来訪に、昼寝をしていたサザンドラが驚いたように飛び起きる。サザンドラは物凄い剣幕でシロナを威嚇したが、シロナがトゲキッスを投げるとサザンドラは逃げていった。

呼び鈴を押すと、マキナが迎え入れてくれる。彼の顔を見ると、堪え切れぬ感情が溢れそうになるが、不思議な事に言葉にしようと思っても、自分の口が思うように動いてくれない。

いつかの時と同じように、マキナは飲み物を淹れてくると言って、キッチンへと向かっていった。

いつ来ても綺麗な部屋だ：と、シロナは感心をしながら部屋を見渡す。綺麗にされているが故に、片付いていない部分もよく目立つ。

部屋隅に置かれた段ボールがカポエラーのサンドバッグにされており、中に入っていたものが僅かに散乱してしまっている。

「あれは写真かしら？」

写真とは思いい出を形にしたものだ。破れたり汚れたりしたとあつては大変だ。そう思ったシロナはダンボールへと近づいた。

そして、見てしまった。

「これは……………」

写真に写っていたのは、マキナと同じ黒髪の幼い少女だった。

ダンボールから飛び出た物だけではない。ダンボールの中も、全てその女の子の写真で埋め尽くされているのだ。それも、何十枚やそこらではない。

「なに……………これ……………」

顔はマキナとそこまで似てはいない。だが、変わった色をしたヤドゥンに抱きつき、満面の笑みを浮かべている姿は、いつかのナツトレイに向けたマキナの笑顔を想起してしまう。

シロナは散乱した写真を静かにダンボールに戻し、ダンボールを蹴るなどカポエラーを諭す。

マキナに気付かれる前にテーブルについたシロナの両手が、微かに震えている。

ククイ博士が言っていた事は、真実だったのだ。

「お待たせしました。紅茶は飲めますか？」

いつもの無表情でマキナがティーカップを差し出す。

この無表情の裏側にある素顔は、あの子だけに向けられていたのかもしれない。

「……………ええ。ありがとうございます」

胸が締め付けられるようだ。マキナの顔を見ていられない…………シロナは、マキナの顔を直視できなかった。

シロナは紅茶を口にした時、何か大事な事を忘れているような気がしたが、今は目の前の男の事で頭がいっぱいだった。

「…………で、急にどうしたんですか？暇だったとか、そんな理由ではないはずだと思いますが」

シロナに追い討ちをかけるように、マキナが問う。

「え、ええ…………そうね。マキナに話があるの」

シロナは考えていた。自分はなぜ、居ても立ってもいられなかったのだ。自分はなぜ、マキナの元へと飛んできたのだ。

自分はマキナをどうしたいのだ。

「一体どうしたんですか？シロナさんらしくもない。私は貴女に何を言われても、腹を立てたりはしませんよ」

当然、彼にとつて妹の事は踏み込んで欲しくない領域だろう。それでもマキナが感情的になる事はないと、シロナも思っている。それが、感情を殺そうと生きてきた、マキナというトレーナーだから……

マキナを、救いたい。

誰よりも優しい心を持つ彼女には、一つしかなかった。

「……………マキナ。あなた、悩んでる事があるんじゃないかしら？」

「……………え？」

「教えて欲しい……………あなたが抱えている事を、あたしにも教えて欲しいの」

## 12：聖獣ドードリオ

「教えて欲しい……あなたが抱えている事を、あたしにも教えて欲しいの」

シロナは逃げなかった。マキナの目をしっかりと見据え、言い淀む事なく訊いて見せた。

この男を救えるのは、きつとあたしだけだ。そう強く己を持ったシロナは、何がなんでもマキナと向き合う事を選んだのだ。

当のマキナは凶星を突かれたのか、普段の彼からは想像もつかぬほど動揺している。何かを誤魔化すかのように、しきりに紅茶を口にしている。しかし……

「……さすがは、考古学者をしているだけの事はありますね。察しが良いという領域を越えているようにも思いますが……一体いつから気づいていたんですか？」

マキナは既に、いつもの無表情（仮面）を纏い、感情を悟らせぬ声に戻っていた。だが、シロナがここで引いては何も変えられないのだ。

「確信したのはついさっきよ」

「そうですか……まあ、私の方から話すつもりだったので、都合が良いです」

今度はシロナが動揺する番だった。

(……今まで一切触れてこなかったマキナの過去を、あたしに話すつもりだった……?)

腑に落ちないシロナだったが、口を挟まず彼の言葉を待つ。

「実はですね……何とか助けてあげたい人がいるんですよ」

「……………へ？」

「ですが、私の力だけではどうにもならない。だから、シロナさんにもご助力をいただけないかと考えていたんですよ」

シロナには彼の言葉が理解できなかった。

(どうして……どうしてなの？なぜ、誰よりも辛い思いをしているはずのマキナが、誰かに救いの手を差し伸べようとしているの……?)

彼の答えは、シロナの求めている答えではなかった。もはや、シロナにとって『マキナ』という男が、一体どんな人物なのか分からなくなってしまうていた。

無敗であったシロナを、いとも容易く打ち破った完全無欠のポケモントレーナー。

対戦相手とは必要最低限の挨拶しか交わさず、インタビューには必要最低限の言葉し

か返さない。

常に無感情、無感動、無関心、無表情を貫くその姿は、多くの人たちから『機械仕掛け』と揶揄される。

そんな世間の目が及ばぬ暗所にて、自分のポケモンたちに際限の無い愛を注ぐ。

そして……失った家族を未だ忘れられず、そんな己の弱さに吞まれまいと、必死にもがき続けている。

それが、シロナの知っているマキナという男のはずだ。

他人に必要な以上に関わろうとしないはずの男が、なぜ誰かを助けようとしているのだ。  
だ。

己を支える事で精一杯なはずの男が、なぜ誰かを助けようとしているのだ。  
シロナは混乱していた。

「どうして……？」



「どうして……と言われても困りますね。人を助けるのに、なんで理由付けする必要なんがあるんですか？」

「こんな事を言ったら失礼かもしれないけど、あなたが理由もなく誰彼構わず助けるとは思えないわ」

「本当に失礼ですね……ですが、シロナさんの言っている事に間違いはありません。……実は私、此度より島巡りというアローラに伝わる儀式を行う事になりましたね。本来であれば、子供たちが行う儀式なのですが、特別に同行させてもらえるよう、ククイ博士にご助力をいただきました。……それで、一緒に行動する子供たちの中に、母親がポケモンに寄生されている可能性がある子がいるんです」

しばしの間を空けた後、マキナは言葉を紡いだ。

「家族を失うにはまだ若すぎる……取り返しが付かなくなる前に、何とかしてあげたいのです」

シロナは溢れ出そうになる感情を、必死の思いで押さえつける。

自分と同じ苦しみを、他の誰かに味わわせまいとする……マキナの偽りない優しさ

が、痛い程シロナには分かってしまうのだ。

「この事は、その子はおるか、ククイ博士も知りません。現時点で知っているのは、おそらく私だけです。ですので、シロナさんが本当に信用できる人以外には、絶対に口外しないでいただきたい。特に、ククイ博士には絶対に言わないでください。なんでそんな事を私が知っているか……という質問には答えられません、知るべくして知ったと言っておきます」

「……具体的にマキナはどうしたら良いと考えているの？」

「まずは寄生しているポケモンを引き剥がす事が第一優先でしょう。宿主に寄生している状態でポケモンを攻撃するのはあまりにも危険すぎます。また、寄生されている時点で、宿主である彼女は、なんらかの毒に侵されている可能性があります。そちらのアフターケアも必要になってくるかもしれませんね」

そんな、スケールの大きな事を言う彼だが、至って真剣な顔をしている。くだらないデマカセで言葉遊びをしている人間の顔ではなかった。

「……分かった。あたしの方でも出来る限り調べてみるわ」

「ありがとうございます。非常に助かります」

マキナの表情が、心なしか柔らかくなったようにシロナは感じた。彼の力になれた事

が、シロナは純粹に嬉しかった。

しかしだ。

シロナの目的は果たされていない。彼女は、マキナを救う為に、ここに来たのだ。

「でもね、マキナ……あたしが訊きたかったのは、それじゃないの」

「なんですか……？」

「マキナ、あなたには妹がいたのかしら？」

マキナが目を見開く。

誰の目から見ても分かる程に、その無表情を歪める。

酷な事をしていてという自覚はシロナにあった。

それでも、訊かなくてはいけないのだ。

「……まさか、シロナさんにまで伝播するとは……ククイ博士から聞いたのですか？」  
「ええ」

マキナが顔を伏せ、深く息を吐く。顔をあげた時には、彼はいつもの無表情に戻っていた。

「忘れてください」

「……え？」

「気の迷いです。私はどうかしていた。ただの妄言です。不謹慎かもしれませんが、妹が死んだというのは嘘です。虚言に過ぎません……」

「……私に妹なんて、いません」

思わずシロナは、顔を背けてしまった。

（あたしは彼に……なんて辛い思いをさせてしまったのかしら……なんて辛い嘘を言わ

せてしまったのかしら)

家族の大切さを語った彼の感情は嘘だったのか。

時折見せる彼の愛情は嘘だったのか。

妹の事を聞かれ、悲痛に歪めた彼の表情は嘘だったのか。

そんな訳がない。

全ては、あの写真が物語っているのだ。

それでも、マキナという男は痛みを、苦しみを、哀しみを……己の中に封じ込める事を選んだ。

シロナに綻びだらけの嘘を吐いてまで、マキナは弱さを見せる事を頑なに拒んだ。

水晶のように固められた彼の心は、今のシロナでは溶かす事ができないのだ。

「シロナさん……？」

「ごめんなさい、気にしないで。……変な事を訊いてごめんなさい」

「いえ……誤解が解けてなによりです」

そんな事を溢すマキナだったが、彼からは隠し切れぬ寂寥感と悲壮感が漂っている。あからさまに浮かない表情をしているのだ。

マキナの無表情が仕事をしていないほどだ。口ではああ言っているが、表に出してしまうほどマキナは古傷が疼いているに違いない……と、彼の心をかき乱してしまった事に、シロナは強い罪悪感を覚える。

それでもシロナは諦めたくなかった。

家族想いで。

ポケモン想いで。

他人の事まで思いやるような。

人一倍優しい心を持つこの男を、<sup>ひと</sup>見捨てたりなどできるはずがなかった。

「……ねえ、マキナ」

「なんですか」

「もう、あたしには敬語を使わなくて良いわ」

「えっ……シロナさん？」

「シロナって呼んで。今後、あたしの事をさん付けして呼んでも応えないから」

「シロナさん、これは一体……」

「シロナ」

「あっ、はい」

「はいもダメ。敬語禁止」

「……わかりました」

「敬語禁止」

「……わかった、シロナ」

初めて聞いた、彼の口調。

初めて見た、彼の辟易とした表情。

そう。これくらい強引でなくては、一生かけてもマキナには近づけないのだ。

「ふふっ…なんだか違和感あるわね」

「……茶化すなら止めますが」

「敬語禁止」

「あつ、はい」

「はいも禁止」

「……」

彼が内側から殻を破らないのなら、シロナが外側から殻を破って見せるのだ。

「そうだった。今度、カトレアの別荘でフウロの誕生日パーティーを開くの」

「……カトレアって、イツシュの四天王の？」

「よく知ってるわね。因みに、フウロはフキヨセジムのジムリーダーよ。多分、ライモンジムのカミツレも来ると思うわ」

「なにその花園」

「……ん？」



「いや……なんでもない。それで、何故そんな話を俺に？ハブにされた愚痴なら勘弁して欲しいが……」

「そんな訳ないじゃない!?カトレアにマキナも連れて来いって言われたのっ」

「……なぜ？」

「あたしも知らないわ」

終始、渋面を作っていたマキナがいつもの無表情へと変わって行く。マキナは、何かを考え込んでいる時ほど、無表情になりやすいのかもしれない。

「……わかりました。場違い感が否めませんが、時間があれば顔を出させていただきませう」

「敬語禁止」

「……どうしても?」

「駄目よ」

「……悪いが、タメ口を聞くのはシロナだけにさせてもらおうからな」

シロナだけ。

そんなマキナの言葉に、シロナはどこか、くすぐったさを覚える。

「でも、カトレアもフウロもカミツレも、あなたより歳下よ?」

「俺がそうしたいだけだ。気にしないで欲しい」

そう言われてしまうと、シロナは何も言えなくなってしまう。それが今のマキナの在り方なのだろう。

(マキナ……今のあなたの中には、あなたの妹しかいないのかもしれない。だけど、待つて欲しい。必ず、あたしもそこに入って見せる。そして、あなたの心を開け放つ。あなたが一人じゃないって事を、教えてあげるんだから)

どれだけ強がっていても、彼も人間なのだ。必ずどこかで、人との関わりを求めているはずだ。

カトレアも、フウロも、カミツレも……みんな優しい子ばかりだ。きっと、いつでもマキナの力になってくれる。無論、シロナもだ。

「覚悟してね。マキナ」

「……………何が?」

「ふふ、ないしょ」

(…………ポケモンバトルも、マキナの殻を打ち破るのも、手加減なんてしないんだから)

動き出したシロナは、もう止まらないのだ。

~~~~~

あ…ありのまま今日起こった事を話すぜ!!

でも、起こった事が多すぎるから順を追って話すぜ!!

シロナさ…：シロナが、エスパー的読心術でルザミーネさんの事を訊いてきた。色々と怖かった俺は洗いざらい話した。鳥肌立ちまくりだった。結果として、シロナは協力してくれると言っていたので、決して悪い出来事ではなかった。

しかし、実際にシロナが訊きたかったことはルザミーネさんの事ではなかった。俺が誤魔化す為にククイ博士に吐いた嘘が、なぜかシロナにも伝わったらしく、死別した妹がいるのか？と追求された。

まさか、こんな大きな事になるとは思っていなかったので、あれは真つ赤な嘘だと言

い切つておいた。脳内妹を頭の外に漏らすとは、とんでもねえ童貞野郎だな…と、思われたかもしれないが、これ以上誤解が広がるよりマシだ。人間、安易に嘘を吐くものではないという教訓を得た。

これは好感度大暴落イベントですね…と、一人で落胆していたら、シロナから敬語禁止命令が発令された。理由は全く分からないし、あまりの強引さに聞きそびれてしまった。…なんか変なフラグが立ったわけじゃないよね？大丈夫だよな？

シロナの年齢は未だに分からない（女性に年齢を聞くとかありえない）が、おそらく俺とそこまで変わらないと思う。しかし、社会的地位やトレーナー歴を鑑みても、俺が彼女に敬語を使うのは当然の事である。

なんにせよ、シロナ自身に敬語禁止と言われてしまつては致し方あるまい。彼女はあまり社会的地位とか気にしない人間だと思うので、俺がタメ口を聞いても失礼な奴だとは思わないだろう。公の場ではさすがに敬語を使うつもりだが。

そして、最後にとんでもない爆弾がひとつ。

なんと、あの大空ぶつとびガールことフウロちゃんのバースデーパーティーに招待されてしまった。しかも開催地はカトレアちゃんの別荘だ。いつからポケモンはギャル

ゲーになったんですか？

パーティーにはフウロ、カトレア、シロナ、カミツレが集い来るらしく、そんな甘い香り漂う麗しき花園に、しよーもない野郎がぶち込まれるのだ。絵に描いたようなハーレム状態である。本当に大丈夫なのかコレ？

美少女たちと楽しく談笑していたら、後ろから忍び寄ったコ克蘭さんが『カトレアお嬢様に、^{よしま}邪な目を向けましたね？』とか言つて、ボールのようなものでガツンと……あかん、絶対罠だわ。死ぬわ俺。

……島の試練より恐ろしいイベントをブッキングしてしまったようだ。もはや、フウロちゃんのバースデーパーティーという、なんとも微笑ましい会合のはずが、血塗られたマキナ暗殺計画にしか見えなくなってきた。一体俺が何をしたって言うんだ。あれか？今まで駆逐してきた野生ポケモンたちの呪いなのか？

だが、ルザミーネさんの件で協力してもらおう以上、シロナの顔は立てるのが道理だ。全力でフウロちゃんの生誕を祝福する以外ありえない。あの子、何プレゼントしたら喜ぶんだらうか？

ひこう統一パのジムリーダーを勤めているくらいなので、ひこうタイプのポケモンやタマゴをプレゼントするのが一番手っ取り早い気がする。元いた世界でも、たくさん生まれた仔猫や仔犬を、友達にあげたりとかは普通にしていたしな。

要らないと言われたら、その時はその時だ。今更、黒歴史のひとつやふたつ増えたところで、さしたる影響はない。中学二年生の時の俺死ね。

孵化余りポケモンも、俺のような華のない男と共に、バトルに参加する事なくこのリゾートで一生を終えるよりかは、フウロちゃんのような肉々しいぶつとびナイスバデーの女性に抱擁されて一生を終えた方が幸せに決まっている。というか俺が抱擁されたい。

フウロちゃんにルギアあたりをポンっとプレゼントしたら『抱いてっ』ってなりそうだが、伝説を外に出すのは論外なので却下。

せっかくなので、アローラ地方ならではのオドリドリをプレゼントしよう。専らダブルでしか輝けないポケモンだが、『おどりこ』であるオドリドリは、日常でも可愛らしい求愛ダンスを見せてくれるので、愛玩ポケモンとしてのスペックも高いはずだ。きつと受け取ったフウロちゃんも『抱いてっ』と求愛をしてくるだろう。完璧やんけ。フウロちゃんマジぶつとび。

それに加え、俺以外の女性陣は皆、ジムリーダー以上の肩書きを持った一流トレーナーだ。目が合った瞬間に勝負を吹っかけられるとか普通にありえるので、ガチ編成の手持ちで乗り込むべきだろう。というか、シロナがいる時点でそうなる可能性が高すぎる。バトルジャンキーかな？

……ちよつと待つて。一人だけ明らかに様変わりしている人がいるんですが。「アローラ。……ミヅキだよな?」

俺が恐る恐る尋ねると、金髪青眼の少女がコクリと頷く。

さつそくへアサロンに行つてきたのね……びつくらこいたわ。ミヅキちゃんがトリツキー過ぎて行動が全く読めません。

「……よく似合っているぞ」

俺がそれとなく褒めてあげると、ミヅキは自慢気にコスメポーチを見せてくる。おそらくはリーリエから譲り受けた物だろう。

「こんにちは。あつ……ミヅキさん、ヘアサロンに行つたのですか?それに、早速コスメポーチを使つてくれたんですね」

やはりリーリエも女子なのか、ミヅキのおめかしにいち早く突っ込む。ミヅキは似合つてる?とでも言いたげに、髪をいじっている。

「とても似合ってますよ。……私とお揃いですね」

リーリエもミヅキを真似するかのようになり、その枝毛ひとつ無い金髪を弄ぶ。あら、いいですわゾ、これ。

「ねーミヅキー、ポケモン強くなつたー?」

ハウよ……お前も早く男を磨くんだな。とりあえず女の子の髪の変化にはいち早く

気づき、いち早く褒めてあげるのが鉄則だぞ。彼女いない俺が言うと言説得力皆無だが。

ハウの問いかけにミツキは首を縦に振り、五つのモンスターボールを取り出す。

オシヤマリ、デンヂムシ、ケララツパ、ユンゲラー、ベトベターの五匹だった。

破竹の勢いでメキメキと育っていくミツキちゃんのポケモンたちがヤバイ。

当然だが、ミツキの手持ちは俺と違って全てこの世界のポケモンだ。つまり、どのポケモンも技を四つ以上覚えるという事だ。ミツキの手持ちはどいつもこいつも技範囲の広いポケモンばかりなので、全ての手持ちがLv50以上に育った時点で、俺ですら勝てるかどうか怪しいくらいだ。これはだめかもわからんね。

最初の試練はノーマルタイプに精通しているキャプテンの一人『イリマ』が取り持つのだが、試練を行う『茂みの洞窟』へと向かう前に、みんなの実力を見ておきたいと勝負を仕掛けてきた。

「はい!!キャプテンのイリマです!!ボクの試練に挑めるかチェックさせてもらいます!!」

……これ、俺もやらなきゃいけないのか？

イリマが使ってくるポケモンはヤングースとダブル。ダブルと聞くと、我々の業界では『ダークホール』だの『きのこのほうし』だの使ってくるLv1ダブルが真っ先に出てくるのだが、当然そんなエゲツない技は持つておらずレベルも10かそこらだ。手持ちの平均レベルが20近くまできているミツキの相手ではないし、ハウも苦戦する事はなかった。

俺？育成中のドードリオで適当に終わらせました。一度だけ『とびげり』を外して変な空気になったが、ちゃんと倒せたので問題あるまい。命中率95を外すとは情けない鳥だ。

イリマから合格とのお墨付きを頂いたので、俺たちはようやく茂みの洞窟へと向かった。

しかし、その道中で通りかかったきのみ農家のおっさんが、スカル団の下っ端二人のきのみを強奪されそうになっていた。

「つまんねーきのみだけだよ、スカル団が使つてやるんだよ!!」

俺の怒りが有頂天に達した。

人が丹精込めて栽培したきのみを、奴らはつまんねーきのみと抜かしやがったのだ。

奴らからしてみれば、きのみは勝手に生えてくる物だ……程度の認識しかないのだろ

う。だが、奴らは我々の苦勞をまるで知らない。

きのみによつては適切な手入れをしないと果実を腐らせてしまふし、何より目を光らせておかないとドデカバシやドデカバシのような鳥ポケモンに食われる。そして、鳥ポケモンを追い払い安心していた所を、ケケンカニに食われるという黄金コンボが待つてゐる。すきあらば野生ポケモンに食い荒らされるのだ。

そんな外敵たちの魔手を掻い潜り、無事に実つた奇跡の果実を、つまんねーきのみと抜かしやがつたのだ。そりやあもう激おこステイックファイナリアリテイぷんぷんドリームである。聖獣ドードリオでボコボコにして差し上げた。

「ひっ……なんでこんなところに『機械仕掛けの新種使い』がいるんスカ!？」

「おいやべーよこれよ!!逃げるしかねーよ!!覚えてろよお前らよ!!」

激ダサな捨てゼリフを残して、スカル団の下っ端二人は慌てて逃げ出してしまった。

貴様らが犯した大罪は二つ。天と地の恵みをつまんねーと宣つた事、大天使リーリエの御前にて蛮行を働いた事だ。悔い改めて。

「マキナさんは凄いですね。私はポケモンを戦わせる事ができないので、今のような人たちにいくわしても、助けられませんか……」

おお、大天使リーリエよ。なんと慈悲深き心をお持ちでいらつしやるのか。貴女のその汚れなき白磁のような御手を血に染める事など我々が許しませぬぞ。貴女はその美

しき心で平和をお望みになるだけでよろしいのです。貴女の側には勇ましき純潔の戦乙女フルキューレが付いておられるではありませんか。

「……ミツキがいつでも助けてくれる。リーリエはポケモンを大切にしている気持ちをお忘れなければ、それで良いと思うが？」

恐れ多くも俺がリーリエに進言すると、ミツキはリーリエの手を握り、力強く頷く。

「ミツキさん……ありがとうございます。私も、自分にできる事を探してみます。いつもミツキさんに助けられてばかりは嫌ですから。私もミツキを助けられるよう頑張りますね」

まだ少し照れがあるのか、微かに頬を朱に染めながらも、リーリエはミツキの目を見て決意を口にする。そんなリーリエの健気な気持ちを受け取ったミツキちゃんは、頼もしさすら感じるほど毅然とした真顔で頷いてみせる。キマシタワ。

「ねーマキナさん。最近リーリエとミツキって、かなり仲良くなったよなー。なんか見てるこっちまで嬉しくなってくるねー!!」

お、入信者かな？

~~~~~

スカル団のせいで遅れが生じてしまったが、無事に茂みの洞窟にたどり着く事ができた。ハウ、ミツキ、俺の順番で試練を行う事になったが、ハウもミツキも見事に試練を達成してみせた。ミツキはチャームボイス連打ゲーでコラツタたちを一掃したらしいが、ハウはそこそこ苦戦したらしい。純粋なレベリング不足だとは思うが、後でイリマが特訓に付き合うと言っていたので、ハウも次の試練までにはそれなりの力を付けてくるだろう。

俺？もちろんドードリオでアローララツタをボコボコにしてみましたよ。劍舞してから電光石火余裕でした。

「はい!!イリマの試練、達成!!皆さん、めざましいトレーナーです!!」

約1名様、めざまし過ぎる女の子がいるんですが、それはツツコミ待ちですか？

「これがノーマルZのZクリスタルですね!!」

イリマの手から俺たち三人にZクリスタルが手渡される。やったねたえちゃん!! Z技が撃てるよ!!

「Zパワーを使うには、ノーマルタイプの技を強める為の、エレガントなゼンリョクポーズを取る必要があります!!見ていてください!!」

イリマは謎のドヤ顔で両腕を段違い平行棒のように折り曲げ、胸の前で『Z』の形を

作る。

「すげー!!これがゼンリヨクポーズかー!!」

男の子のハウは、大喜びでイリマのゼンリヨクポーズを見ていたが、リーリエはポカ  
ンとした表情で口を開けている。びっくリーリエである。なお、言うまでもないがミツ  
キちゃんは真顔である。

「覚えましたか? 皆さんも試しにやってみてください!!」

大天使リーリエの前でそんな恥ずかしいポーズ取れるわけねーだろしばき倒すぞ。

## 13 : じたばた

無事にイリマの試練を終えた俺たちだったが、重大すぎるアクシデントが発生した。

少し目を離れた際に、リーリエがいなくなっていたのだ。

リーリエを危険に晒してしまった己の不甲斐なさや自責の念に押しつぶされ、一時過呼吸になりかけたが、大人の俺が取り乱すわけには行かないので、とりあえずミツキとハウには、ハウオリシテイで待機しているククイ博士を呼んでくるよう指示した。

恐らくリーリエは、スポーツバッグからフラッと出て行ってしまったほしくもちゃんを追いかけたのだと思われるが、スカル団のような頭がオメタイ連中がウロついている事を考えると、やはり安心はできない。

急ぎ足で『メレメレの花園』へと向かうと、果たしてリーリエはそこにいた。

おお、大天使リーリエよ!!

貴女を守護する事こそが、我々に与えられた使命であると言うのに、一時的とはいえ、清廉にして純潔なる貴女を、矮小な不埒者共が愚行に及び兼ねない状況化に置いてし

まった事を、切腹を以ってして贖罪したいと存じます次第…ツ!!

しかしながら、貴女をその身に宿した、総ての起源にして至高なる聖母ルザミーネを、無邪気なる触手より救済致します前に、この無価値にも等しい命を投げ出すのは、死をもつてしても償い難き愚昧故、烏滸がましくも生命維持を継続させていただく事を、お許しくださいませ……ラ・ヨダソウ・ルザミーネ。

「あ、マキナさん!!ほしぐもちゃんが……あの、なんで泣いてるんですか?」

「……いや、なんでもない。リーリエが無事で安心しただけだ」

「そ、そんなに心配をしてくれていたのですね……迷惑をかけてごめんなさい!!」

何の落ち度も無いと言うのにも関わらず、俺のような人間にまで頭を下げるリーリエは、もはや天使の翼と後光を携えた聖女と言う他ない。光と光が両方そなわり最強に見える。

「いや、リーリエが謝る必要はない。だが、リーリエは野生のポケモンや、良くない連中のポケモンと戦えるポケモンを持っていないんだ。ほしぐもちゃんを追いかけるにしても、せめて俺やククイ博士に一言かけてくれ。大人がいなかったらミツキやハウでも良い」



「そうですね……できるだけほしくもちやんと離れないようにしますが、もしそうなたら今度からは気をつけます。あの、マキナさん……ほしくもちやんがこの花園の奥の方まで行ってしまったんです。ほしくもちやん、野生のポケモンさんと戦える技を持ってないのに……」

やはり、今のリーリエはほしくもちやんが心配で仕方ないのか、頻りに花園の方へと視線を泳がせている。

「俺が行ってくるから、リーリエはここで待っていてくれ」

流石にリーリエを一人にするのは心配なので、捕獲要員として連れてくるダブルにリーリエの護衛を任せる。リーリエに近づく怪しい奴がいたら『みねうち』でポッコポコにして差し上げなさい。

花園にはオドリドリやアブリーなどの野生ポケモンが、花の蜜を求めて集まっている。そして、そのポケモンたちを捕まえんと意気込む女性トレーナーたちが何人かいる。

いちいち野生ポケモンやトレーナーに絡まれていては面倒なので、ぬしポケモンを倒して少し調子に乗っているドードリオを引き連れて、ほしくもちやんの元へ向かう。

アブリーやチュリネたちは『げえつ、ドードリオ』と言う声が聞こえてきそうな程、慌てた様子で逃げて行き、『おどりこ』であるオドリドリたちは、本能的にドードリオの『つ

るぎのまい』を真似してしまい、バトルそっちのけで踊りに夢中になっている。

そんなシユールすぎる光景を目の当たりにした女性トレーナーたちは、なんか知らんがヤベエ奴が来た：とでも言いたげな顔をして、花園を去って行った。

メレメレの花園には、一心不乱に剣舞を踊り続けるドードリオとオドリドリだけが残された。何これひどい。

ほしぐもちゃんを捕まえるのはそこまで苦勞しなかった。と言うのも、バカみたいに剣舞を続けるドードリオたちを見つけたほしぐもちゃんが、自らこちらに飛んできたからだ。

「ピュイ!!」

お前まで混ざらんでもええんやで?

「もう、勝手に飛び出ちゃダメですよ、ほしぐもちゃん」  
「ピュイ?」

「ほら、バッグに戻って。マキナさん、手間をかけさせてしまつてごめんなさい」

またしても俺はリーリエに頭を下げられてしまった。ツーストライクである。次、リーリエに頭下げられたら爆発するから、俺。

「いや、ほしぐもちゃんが無事だったならそれで良いが……………なあ、リーリエ」

「はい、なんですか？」

「俺のダブルがどこに行ったか知らないか？」

「あ、そういえば見当たりませんね……………あっ!!」

素っ頓狂な声をあげたリーリエが、花園の出口を指差す。一体どうしたんだ…？

リーリエが指し示す先には、無我夢中に尻尾を振り回すダブルと、それに対峙する『怪しい男』がいた。

「くっ……………なんだこのダブル、なかなか手強いな!!だが、そんな手加減をした攻撃では、鍛え上げたぼくの体を打ち破る事はできない!!」

「ねーミツキーっ!!ククイ博士が生身でダブルと戦ってるけど、大丈夫なのこれーっ!?」

「……………」

「さつきから『みねうち』ばかり……………そんなんじやぼくは倒れないぜ!?!他の技を見せたらどうだ!!そうだ、ダブルならもつと珍しい技を……………あつ、キノコのほうし」

「ミ、ミツキー!!博士が倒れたよー!?!」

「……………」

何やってんだお前ら。

~~~~~

「いやあ、悪かった悪かった。まさか君のダブルだとは思わなかったよ。危うく怪我をさせてしまうところだったぜ!!」

普通は逆なんだよなあ……

ミヅキとハウが、思ったより早くクイ博士を呼んで来てくれたらしく、リーリエの護衛を任せていた俺のダブルが、クイ博士の事を『怪しい奴』だと勘違いしてしまい、スーパーアローラ人流ポケモンバトルが勃発してしまったようだ。相手が捕獲要員ダブルじゃなかったらあんた死んでたぞ。

「ま、リーリエも無事だった事だし、とにかく試練達成おめでとう!!この後、島キングの

ハラさんと戦う『大試練』が控えている。ハラさんは『かくとうタイプ』のポケモンを使ってくる、とても強いポケモントレーナーだぜ!!」

……かくとうタイプと聞いた瞬間から、ミツキちゃんが自分のオシヤマリを凝視しているんですが、ネタバレしても良かったんですかね？

一旦、ポケモンセンターに寄ってポケモンを回復してから、ハラの待つリリイタウンを訪れた。ポケモンセンターのジョーイさんが俺好みのお姉さんで、俺のパラメーターも色々と回復したが、大天使リリーエの前なので自重した。

リリイタウンに着く頃にはすっかり日が沈んでしまったが、ハラはすでに祭壇の上で待機しており、大試練を行う準備が整っていた。

「最初の試練達成、お見事です。過去に例を見ない速さですな!!」

俺たちの試練達成が異例のスピードだったのか、ハラが豪胆に笑いながら賞賛の辞を贈る。

「これから大試練を行います、準備はよろしいですか？ 大事な試練故、全力でお願いしますぞ!!」

大試練を行う順番はイリマの試練と同じく、ミツキ、ハウ、俺の順となった。

「ふむ、ミツキのオシヤマリがどこまで育ったか、とくと拝見させていただきますぞ!!」

ハラの手持ちはマンキー、マクノシタ、マケンカニのかくとう統一パだ。

オシャマリのチャームボイスで瞬殺だった。もはや戦術もクソもない。レベルと不一致弱点技の暴力である。

「すげー、じいちゃんのパケモンが全部一撃でやられたー!!」

「流石はミツキさんですね」

「ワツハツハ、手も足もでませんでしたな!!」

ハラはミツキの成長っぷりを嬉しそうに笑いながら、かくとうZをミツキに渡す。まーたミツキちゃんが強化されてしまったのか……壊れるなあ。

ハラのパケモンを回復させた後、すぐにハウの大試練が行われたが、レベリング不足が顕著に出てしまい、ハラの手持ちを倒す事ができなかった。

「くー、俺のパケモンたちなら勝てると思ったんだけどなー」

ハウは悔しそうにしているが、別にハウの育成が遅いわけではない。むしろ、この短期間でピチューがピカチュウに進化している事を考えると、トレーナーとしての資質は十分に伺える。ミツキのパケモンたちが鬼の速さで育っているせいで、シナリオが早く

進み過ぎているだけだ。ミツキちゃんマジミツキちゃん。

「ま、時間はまだまだたくさんある。ポケモンスクールに行けば、イリマも稽古に付き合ってくれるし、ハラさんを倒すためにも特訓あるのみだぜ!!」

ククイ博士がそのハンサムスマイルと共に、落胆するハウの肩をバシバシと叩いて叱咤激励する。この人の子供の扱いに関しては、是非とも見習いたいところだ。ポケモンの扱い方は絶対に見習ってはいけないが。

「ふむ、次はマキナ殿の番ですな」

ついに俺の番となったので、祭壇へと足を運ぶ。

「ククイ博士から話は聞いておりますぞ。なんでも、アローラリーグのチャンピオンを任されたそうですな」

ハラさんがミツキたちに聞こえぬよう、声を潜めてそんな事を言ってきた。なーんで俺がチャンピオンを務める事が確定してるんですかね？

「わしも四天王を任せられていますな、メレメレ島の誇りをかけて戦わせていただきますぞ」
内緒話はこちらまでですな…と、ハラは告げると、五つのモンスターボールを取り出す。

「さて……本来であれば、先ほどの手持ちで大試練を行うのですが、マキナ殿はわしのゼンリョクと戦ってもらいますぞ!!」

あ、これアカン流れや。

ハラが力強く投げたボールから、ハリテヤマが飛び出てきた。絶対これリーグ用のパーティーじゃないですかやだー。

現在の俺の手持ちは、島巡り用の舐め腐ったメンツなので、まともに戦えるのはドードリオとアロフオーネくらいだ。

ドードリオはレベリングが終わっていないので現時点ではまだLv44だ。ハラのパケモンは全てLv50以上だと思われるので、実数値にそれなりのハンデがある。

おそらく初手は『ねこだまし』が飛んでくるだろう。ここはアロフオーネを投げ、相手が無意味な『ねこだまし』をしている間に『ほたるび』を積んで、ばくおんば連打ゲージに持ち込めば、相手のポケモンは鈍足ポケモンばかりなので勝ち確定だ。

ククイ博士と戦った時のように、公式戦の『ターン制』が適用されるわけではないが、アロフオーネがただひたすら同じ技を連打している以上は、相手もこちらの虚を突くような行動はとれないはずだ。

完璧な脳死戦法が確立したので、アロフオーネの入ったゴージャスボールを取り出す。出番ですよ、姫。

『……………むにやむにや……………ああつ……………ますた……………だめです……………そんなはずかしいことを……………せきにんとつてください……………むにやむにや……………』

爆睡しとるやんけ。

ええ……………マジかよ。いつもなら起きてる時間帯じゃん。なんでこんな時に限って寝てるんだよ。詰みもうしたぞ、我。

「……………う？どうかされましたかな？」

「……………いえ、なんでもありません」

マジかあ……………Lv44ドードリオと捕獲要員のドーブルだけで勝ち筋を作るしかないな。

とりあえず俺はドーブルの入ったプレミアボールを投げる。

「先手必勝……………ハリテヤマ、ねこだまし!!」

出鼻に繰り出されたハリテヤマの『ねこだまし』が、ドーブルに繰り出され初手を完全に封じられてしまう。

だが、素早さにかかなりの差があるので、二手目は必ず俺のドーブルが先制を取れるはずだ。『なんでもアリ』のルールが俺にとって足枷になっているのなら、相手ポケモンに

何もさせなければ良いだけの事だ。

「あー!!あれさつき博士が食らってた技だー!!」

ハウ君ご名答、俺がドーブルに指示したのは『キノコのほうし』だ。先発がやるきオコリザルじやなかったのが不幸中の幸いだったな。

「むっ……まずいですな。起きなさい、ハリテヤマ!!」

俺はすぐにドーブルを引つ込め、ドードリオを取り出す。

「なんとか起きましたぞ……ハリテヤマ、もう一度ねこだまし!!」

おいゴルルア!!寝ろ!!カゴのみ持つてんのか!?起きるのが早すぎるんだよこの野郎!!

あと、さりげなく『ねこだまし』二回も使つてんじやねえぞ!!こんなんチートや!!チーターや!!

……やつべえなコレ。きあいのたすきを潰された上に、インファイトの確定一発圏内に入れられてしまった。普通ならば3DSをぶん投じている状況だ。

だが、まだ負けが決まったわけではない。俺のドードリオが育成中という事は、この世界で生まれた個体であると言う事だ。

つまり、このドードリオは四つ以上の技を覚えている。技スペースを確保したドードリオの恐ろしさをとくと味わうがいい。

「終わりですな!!ハリテヤマ、インファイト!!」

「ドードリオ、こらえる」

至近距離に飛び込んできたハリテヤマが、重い連撃をドードリオに叩き込む。紙耐久かつレベルが足りていないドードリオを一撃で落とせる強力な攻撃だ。

だが、『こらえる』構えをとったドードリオは、瀕死確定の攻撃を耐えてみせた。HPを1だけ残して。

「ドードリオ、じたばた」

じたばた。

そのネタ性の強さで有名なコイキングが覚える事で知られている技だが、悔る事なかられ。

この技は、使うポケモンのHPが低いほど威力が増し、最大HPが48以上のポケモンがHP1の時に使うと、威力は200となる。

これは、高火力ノーマルタイプ物理技として名高い『ギガインパクト』よりも高い威力であり、ノーマル／ひこうタイプのドードリオには『タイプ一致ボーナス』が付き、さらに威力が1.5倍となる。

そして、ドードリオの攻撃種族値は110と馬鹿にできない数字であり、努力値も既に最大まで振ってある。

窮地に立たされたドードリオは、死にももの狂いで、じたばたする。

ひたすらに、我武者羅に、遮二無二じたばたする。

わけのわからないレベルでじたばたするドードリオに巻き込まれたハリテヤマは、わけのわからないまま一撃で倒される。

そして、わけがわからないといった表情でハラが啞然としていた隙に、俺はドードリオに指示を出す。

「ドードリオ、つるぎのまい」

無駄に耳触りな鳴き声。

一体感の欠片もなく暴れ回る三つの頭。

大地を踏みしめる細い細い足。

己を鼓舞したドードリオの全身に、荒ぶる駄鳥の力が漲っていく。

今のドードリオなら、いつも以上に力強く、いつも以上に見苦しいじたばたが繰り出せるだろう。

「これは……なんだか良くわかりませんが非常にまずい気がしますな。なんとかしてあの鳥を止めなさい、オコリザル!!」

割り結構本気で鬱陶しいレベルでじたばたするドードリオに、攻撃を当てるのは至難の業だ。

もはや、今のドードリオを止められる者はいないだろう。

「ドードリオ、エターナルじたばた」

エターナルじたばた。

それは、俺がドードリオをボールに引っ込めるまで、永遠にドードリオがじたばたし

続けるという、禁忌の戦術。相手は死ぬ。

こうなったドードリオは誰にも止められない。俺も止められない。

ドードリオは考える事をやめたのだ。

この圧倒的じたばたを受けたオコリザルは、一撃で沈んだ。後続のニヨロボン、キテルグマ、ケケンカニ……ハラの手持ち全てがじたばたに巻き込まれ、瀕死となった。

「な、なんという事でしょう……もはやマキナ殿のドードリオを止める事はできませんな」

いつの間にか祭壇の上から退避していたハラが、絶望に満ちた表情で呟く。ちなみに俺も祭壇から退避している。

祭壇の上には、わけのわからない勢いでじたばたするドードリオだけが残された。恐らく、ドードリオ自身もわけがわかっていないであろう。

「ドードリオ、戻れ」

ドードリオは考える事を止めている。トレーナーである俺の声すらも届かない。じたばたしている。

「くっ……もはや誰もドードリオを止める事ができないのか……ッ!!」

ククイ博士が苦々しげに呟く。ポケモンの技をその身に受け、ポケモンの技を研究し続けた彼ですら、ドン引きしているのだ。

「ドードリオさん…傷だらけで暴れてて大丈夫でしょうか？」

リーリエは天使だった。

重い沈黙とドードリオがじたばたする音だけが支配する空気の中、延々とじたばたするドードリオを真顔で見っていたミヅキが、不意に上空を指差した。彼女の指し示す先には……

「あれは……カプ・コケコ!!」

「カプウウウウコッコ!!」

その勇ましき鳴き声と共に、裁きの雷霆が祭壇に放たれる。

黒煙をあげる祭壇の上では、電撃に灼き尽くされた焼き鳥が気絶していた。

リリイタウンの安寧は、島の守り神によって取り戻された。

~~~~~

先日、無事にかくとうZを得た俺は、リゾートで休息を取っていた。やはり、一日中歩き回っていると、疲れが蓄積するものである。何をする気にもならなかった俺は、おねむのアロフォーネと並んで、惰眠を貪っていた。

そんな、怠惰の限りを尽くしていた俺を叩き起こすかのように、ポケモンマルチナビが着信音を鳴らす。こつちにメールが入ってくるなんて珍しいな……誰だ？

とりあえずナビを起動してみると、なんとあのミツキちゃんからメールが届いてい



た。

From : ミヅキ

To : マキナ

Sub : 纏上 ◆ 纏励? ∴ 一 励 ← 纏エ 纏翫 U 纏

纏 「 綱ユ 綱シ 綱ウ 縲√? 纏ユ 綱翫 &amp; 纏薙? ゆ A 綱? く 纏ア 纏呐? 」

縲ツ 縲ツ 縲、 蚶壺 「 オ 纏九 i 縲√? 纏ユ 綱翫 &amp; 纏薙? 豊 「 螻ア 纏ヨ 綱昂こ 綱 「 綱ウ 蜈

ア 纏オ 縲∞、 ア 纏阪 → 綱エ 纏セ 綱シ 綱医 ← 菴上 s 纏ア 纏? k 纏イ 閨 械 ” 纏セ 纏励 ◆ 縲ゆ

↓ 纏ヲ 纏よ 一 励 ← 纏エ 纏 「 纏溘? 纏ア 縲のク? 蟻ヲ 隕九 ← 隋後 ▲ 纏ヲ 纏リ 憶 纏? 一 纏呐

。 溘 一 纏 阪 一 纏 一 縲 √ M 綱シ 綱エ 纏イ 纏。 纏? s 纏ゆク? 邱 偵 ← 騾 「 纏後 ※ 隋後 ” 纏溘√

纏ア 纏呐?

日本語でおk。ガツツリ文字化けしてますね。ミヅキちゃんマジミヅキちゃん。

文字化けとか久しぶりに見たわ。凶鑑ロトムから送ってきたのだろうか? ゲーム  
じゃメール機能なんて付いてなかったが、これじゃ有つても無くても一緒だな。凄まじ

い死に機能である。

何を伝えたかったのか全くわからなかったの、直接ミツキちゃんの家まで向かうことにした。休日なんて無かった。

呼び鈴を鳴らすと、額にサングラスを差し、長い髪をポンパドールにした女性が出てきた。

「アローラ……って、あらっ？マキナくんじゃない!!」

女性……というかミツキの母親は、俺を見るなり興奮した様子でキャツキャと騒ぎ始めた。

「いつもテレビで見てるわよ。マキナくん凄くポケモンバトルが強いわね!!あのシンオウチャンピオンとの戦いも見てたわよ?あの時はまだカントー地方に居ただけだね、もーミツキもテレビに釘付けだったわよ!!今でも、あの子はマキナくんの試合中継を楽しみにしてるのよ。あ、そうそう。ミツキやハウくんと一緒に島巡りを始めたんでしょ?その歳になっても一所懸命になれるって、凄い事だと思うわ。…そうだった!!いつもミツキにマキナくんのサインを貰ってきてって頼んでるのに、あの子シャイだからいつまでたっても貰って来てくれないのよ。良かったら、マキナくんのサイン貰えないかしら?色紙なんて持ってないからこのシャツに書いて欲しいんだけど、書けるかしら?あつ、ペンがないと書けないわね、今持つてくるから!!……ミツキ!!本物の

マキナくんが来ちやったく!! あら、リーリエちゃんも来てたの? ほら、二人とも!! 本物のマキナくんよ!! 立って立って!!」

ええ……これ本当にミツキちゃんのお母さん? 似ても似つかないくらいマシンガントーカーなんだけど。遺伝子仕事しろ。

それにしても、リーリエが来ているのか。ミツキちゃんの家でリーリエが遊んでいるとか、二人とも原作をはるかに上回るスピードで仲良くなつてませんか? タマリマゼンワー。

サインペンを携えたミツキのお母さんと共に、黒髪黒眼のミツキとリーリエが現れる。

ミツキちゃん飽きるの早スギイ!! もう染め戻したんかい!! どんだけフリーダムなんや君は!!

「こんにちは、マキナさん。ミツキさんのメールに返信が来なかったから、少し心配してましたよ」

リーリエがそんな事を言うと、追従するようにミツキが頷く。

「いや、メールを貰ったみたいなんだが、文字化けしていて全く読めなかったんだ」  
俺がポケモンマルチナビを見せると、リーリエは、そう言うことですか…と納得してくれたようだ。

「わざわざ確認しに来てくれたのですね。すみませんでした。スマホとかで聞くべきでした…あ、マキナさんの連絡先をまだ知りませんでしたね。この機会に交換しましょう」

はい、今日は俺の人生における絶頂期確定ですね。サンキューミツキちゃん。サンキュー凶鑑ロトム。お前から愛してるで。

言うまでもなく登録名は大天使リーリエである。

「マキナくん、私とも連絡先交換しましよ!!見て、ミツキ、お母さん有名人の電話番号貰っちゃった!!これで私も有名人ね」

大丈夫ですよお母さん。近い将来に、あなたの娘さんの方が有名人になりますから。逆に俺がミツキちゃんのサインを貰っておきたいくらいです。

「……ところでミツキ、メールの内容は何だったんだ?」

ミツキに確認を試みたところ、何故かリーリエが俺の問いに答えた。

「その、ククイ博士から『マキナくんは凄く大きなリゾートで、たくさんのポケモンに囲まれながら生活しているらしいんだぜ!!』…という話を聞きまして、興味を持ったミツ

キさんが見に行きたいって。それを伝える内容のメールを、ミツキさんが送ったんですよ」

大天使リーリエよ、それは真まことにございますか？私の目には、彼女がリゾートに興味を持つているような顔をしている風には見えませんよ？いつものミツキちゃんですよ？

「へへ、凄いわね!!それは是非とも遊んでこなきゃ!!マキナくん、申し訳ないけどミツキとリーリエちゃんを頼んだわね。せっかくリゾートへ行くんだから、二人とも泊まってきたら？ちようど、ハウくんの特訓が終わるまで、ミツキたちはする事がないんですよ？もしかしたら、マキナくんにポケモンバトルのコツを教えて貰えるかもしれないわね!!あ、リーリエちゃんもお泊りの準備しないとイケないわね!!」

「あ、あの……ミツキさんのお母様……?」

「大丈夫よ、ミツキが島巡りで服を汚しても良いようにたくさん服を買ってるから、遠慮せずに借りてって!!リーリエちゃんの方が身長高いから、ちよつとサイズが合わないかもしれないけど、ゆつたりとした服なら多分大丈夫ね!!リーリエちゃんなら何着ても似合うわよ。あ、都合の良い事に新品の水着が二着あるわよ!!せっかくのリゾートなら海で遊ばなきゃ勿体ないわ!!マキナくん、もし良かったら二人の写真を撮ってきてくれないかしら？あ、これカメラね。こんな機会ないから、二人が楽しんでる写真を撮っちゃって!!撮ってきてくれたら、マキナくんの分も記念に現像してあげるわよ!!」

これもうミツキちゃんのお母さんに足向けて寝れねえな。人妻は神。はつきりわかんだね。

## 14：ベッドソムリエ

半ば強制的にミツキとリーリエのお泊まり会が決行されてしまったので、俺はミツキとリーリエを引き連れてポケリゾートまで帰ってきた。流石にエアームドに三人も乗るのは危ないので、モーンのおっさんに船舶を出してもらった。

帽子が風で飛ばないように手で押さえている姿がとても天使です。さすが、生まれた時から現在に至るまで天使を務めてきただけの事はある。

因みにルザミーネさんは40年以上は天使を務めているので、もはやもつと高次的な別の存在へと昇格している。ルザミーネさんは天使であり、聖母であり、女神なのだ。我々のような塵芥に等しい人間が、ルザミーネさんを偶像崇拜しようものなら、頭おかしくなって死ぬ。

ミツキちゃん、船舶と並走して空を飛んでいる、野生のキャモメをジツと眺めている。

「マキナさん、五つの島が見えてきました。どれがマキナさんのリゾートなんですか？」  
ようやくリゾートが見えてきた所で、リーリエが疑問を口にする。

「どれも俺の島だ。ポケリゾートはポケマメを栽培するのびのびリゾート、きのみを栽

培するすくすくリゾート、宝探しのできるだけときどきリゾート、アスレチックがあるわいわいリゾート、温泉の湧き出るほかほかりゾートの、計五つのリゾートで構成されている」

「す、すごいですね……」

どうせなら全部見ていつて欲しい所だが、ときどきリゾートは洞窟となっていて、人間が潜るには少々難があるし、わいわいリゾートはいじっぱりなポケモンたちが、四六時中ドンパチをしているので、危険が危ない。とりあえず一番安全そうな、のびのびリゾートで遊んで貰う事にした。

「わあ……ポケモンさんたちが一杯いますね!! エーテルパラダイスと同じぐらい凄いです。でも、エーテルパラダイスと違ってとても解放的だから、ポケモンさんたちも気持ち良さそうにしていますね!!」

少し興奮気味なリーリエが、思い思いにくつろいでいるポケモンに駆け寄ろうとするが、ミツキがリーリエの手を掴んで引き止める。

「ミツキさん……う……あつ……そ、そうですね。一緒に行きましょう」

ミツキの何らかの意図を察したらしいリーリエが、ほのかに赤面しながらミツキと手を繋いだまま、ゆつくりと歩き出す。ミツキも満足げに頷くと、リーリエの歩調に合わせて歩き出す。



因みにこの時点で俺は、ミツキのお母さんから預かっているカメラで、十枚以上の写真撮っている。当然だよなあ？

「ん……？マキナさんのポケモンさんたちは、何を一緒懸命集めているのですか？」

真面目にポケマメを回収しているサーナイトたちが気になったのか、リーリエは首を傾げながら訊いてくる。

「足元を良く見てみる。リーリエたちの足元にもたくさん落ちてはいるはずだ」

「あ、本当です。これは……えっ!?これ全部ポケマメですか!？」

「そうだ」

「す、凄い量ですね……もしかして、あの大きな木から落ちてくるんでしょうか？」

「ああ。最近、凄い勢いでポケマメの木が成長しているせいか、一日に落ちてくる量が尋常じゃないんだ」

「へえ……そうなんですね。あの、ほしぐもちちゃんにも食べさせてあげても良いでしょうか？」

「全く問題ない。ミツキも、好きただけポケモンにあげてくれて構わないぞ」

ミツキはコクリと頷くと、手持ちのポケモンたちを次々とボールから出していく。

「ありがとうございます。ほら、ほしぐもちちゃんもちゃんとお礼しないと」

「ピュイ!!」

ほしぐもちゃんは見たとのことない場所に来て喜んでいいのか、リーリエのスポーツバッグから出てくるなり、俺のポケモンたちがいる方へと飛んで行ってしまった。

「もう……ほしぐもちゃんは警戒心がなさすぎます」

リーリエは無鉄砲なほしぐもちゃんが心配で仕方ないのだろう。だが、のびのびりゾートには温厚な性格のポケモンしかいないので、喧嘩になるような事はあるまい。

ふとミツキの方を見やると、すでに自分のオシヤマリにポケマメを与えていた。ミツキが合図を出すまで勝手に食べないあたり、トレーナーとして理想的な信頼関係が、ポケモンとの間に築かれているのであろう。俺なんて、毎日のようにいじっぱりなギャラドスに腕ごと食われそうになっているというのに、大したものである。俺のトレーナーとしての資質が、絶望的である可能性も十分にあり得るが。泣きそう。

見慣れないポケモンがいて気になったのか、俺のカイリユーが興味津々といった様子で、ミツキやリーリエにふよふよと近づいてくる。

「とつても大きなカイリユーさんですね。ミツキさんのオシヤマリさんも、いつかはこれくらい大きくなるんでしょうか？」

大天使リーリエよ、流石にアシレーヌはそこまで大きくなりませんぞ……そんなに巨大なアシレーヌがいたら、サザンドラがマジ泣きしてしまいます。

リーリエはポケマメを一粒拾い上げ、カイリユーに差し出す。カイリユーは嬉しそう

に翼を。パタパタさせると、笑顔でポケマメを咀嚼し始める。

「えへへ、とてもおりこうさんですね」

行儀よくポケマメを食べるカイリユーを労うようにして、リーリエがカイリユーの鼻先を優しく撫でる。おう、カイリユーそこ代われや。

ポケマメを与え終わって満足したのか、ミツキちゃんが自分のポケモンたちを次々とボールへ引っ込めていく。同時に、シオルダーバッグから何かをゴソゴソ取り出した。

二着の水着だった。

「……………そろそろ海で遊びたいのか？」

俺がそう尋ねると、ミツキはコクリと頷く。

しかし、ミツキは相変わらず、これ見よがしに二着の水着を掲げており、ほしぐもちやんと遊んでいるリーリエを呼びに行こうとする様子はない。

「……………まさか、俺に水着を選べと？」

ミツキはコクリと頷く。童貞になんて無茶振りをしやがるんですか。こつちの事情も考えてよ。

水着はホルターネックとラッシュユガードの二種類だ。

ホルターネックはパステルカラーを基調とした色合いで、胸元に太い結び目のある水着で、下はミニスカートのようにひらひらとしたデザインとなっている。

ラッシュガードは薄桃色のビキニの上から、真っ白なパーカーのようなものを着るスタイルのものだ。

パステルカラーな色合いと言い、胸元の結び目と言い、ミツキが普段から着ている服のイメージにマッチしているので、ホルターネックの方似合う気がする。

「ミツキにはそっちのホルターネックが似合うと思うぞ」

俺が恐る恐るファイナルアンサーを告げると、ミツキは十秒間くらいの沈黙を挟んだ後に、コクリと頷く。今の間は何だったんですかね。

「すみません、ほしくもちゃんが全然言う事聞かなくて、なかなか戻ってこれませんでした……って、ミツキさん……もう水着に着替えるのですか？」

ミツキがリーリエの問いに頷くと、リーリエはどこかモジモジとした様子で言葉を紡ぎだした。

「あの……私、そっちのパーカーみたいな水着が良いです」

都合の良い事に、リーリエはラッシュガードの方をお気に召されたようだ。

大天使リーリエよ。未だ何にも染まる事なく純真無垢な御心をお持ちの貴女は、さぞや水着をお召しになれる事に、少しばかりの抵抗と羞恥を覚えていらっしやるので

しよう。

しかしながら私もめの愚考を述べさせていただきますと、むしろラツシユガードの方が絶妙なエロスを感じますぞ。なぜなら、ラツシユガードは水に濡れると、下に着るビキニがお透けになられるからです。世の男たち全てを悩殺する、大量殺戮兵器と化しますぞ。無垢なる魔性でございませぬ。

ミツキの母親から預かっているカメラを潤す為にも、大天使リーリエにはそれを着てもらいます。下心などありません。それが世界の選択です。

「じゃあ、ミツキちゃん到着替えてきます。……覗いたらダメですからね？」  
「当たり前だ。聖母に誓って覗かない。覗いたら自害をもつて謝罪する」

「別に死ななくても良いですよ!? あ、でも覗くのは本当にダメですからねっ」  
リーリエは用心深く釘を刺すと、ミツキの手を引いてポケマメの木の裏側へと行ってしまう。心なしかサーナイトたちがトゲトゲしいテレパシーを送っている気がするの  
で、紳士的に待つ事にした。

数分後には、ホルターネックを着たミツキちゃんと、ラツシユガードを着たリーリエが現れる。とりあえず俺は無言でカメラのシャッターを切る。

「ど、どうですか? 似合ってますか? ちよつ、いきなり写真を撮らないでください!!」

おお、大天使リーリエよ!!お怒りになられる姿もなんとお美しい事か。おこリーリエなさつても、更に良い一枚が撮れるだけですぞ。

「二人とも良く似合ってるぞ。せっかくだから、海を背景にしてほしぐもちゃんやオシヤマリたちと一緒に、記念撮影でもしたらどうだ?」

「そうですね……ミツキさん、どうしますか?」

まだ写真を撮られる事に抵抗があるのか、顔を赤らめたリーリエがミツキに判断を委ねるが、ミツキは是非もないと真顔で頷く。

「よし、じゃあ二人とも近づいて。もつと……もつとだ。もつと近づいて」

「あの、マキナさん……すでにミツキさんにくつついちゃうくらい近いんですが……」

むしろ、くつついちゃう以外の選択肢があるのでしようか?

リーリエは視線が安定しておらず、恥じらいを隠しきれない様子だが、作り笑顔をされるよりも全然きやわわなので、そのままシャツターを切る。

完璧な一枚だ。ミツキちゃんが真顔じゃなかったら最高でしたね。

記念撮影を終えた二人は、どちらともなく海へと駆け出し、嬉々として水遊びを始める。

おお、大天使リーリエの天衣が透けておられる……くつつ、なぜ連写機能が付いていない!!大天使のベストショットを逃してなるものか!!俺のリロードはレポリユーション

だ!!

撮影した大量の写真を確認するべく、データをプレビューしていた時、突如として事件は起こった。

「きゃあっ!?!」

大天使が悲鳴をあげているではないか。俺は靴がぶっ壊れるくらいの勢いでリーリエの元へと急ぐ。

「どうしたリーリエ!?!」

沿岸にはギャラドスやマリルリなどの、俺のみずポケモンがウジャウジャいるので、野生のサメハダーなどはそうそう近寄れないはずだ。リーリエの身に一体何が……

俺は言葉を失った。

リーリエとミツギが、全身に白濁液を浴びていた。

「うう……熱くて……ドロドロしてます……」

やたらと粘度の高い白濁液が、ミツキとリーリエの頬を伝い、顎先や鼻先からゆつくりと滴り落ちている。

いけない。これはいけない。

R—18タグが点滅している。ヨーグルトとかカルピスとか、そんな生易しいレベルじゃない。完全にアウトだ。具体的に何がアウトかは言えないが、とにかくアウトだ。

「……一体何があったんだ？」

「その、ミツキさんと二人で浜辺を歩いていたら、私がナマコブシさんを踏んじやつて……そしたら、ナマコブシさんが急に爆発したんです」

……どうやらリーリエが、ポケマメにつられてやってきた野生のナマコブシを踏み潰してしまい、特性の『とびだすなかみ』が発動してしまったようだ。だとすれば、二人とも怪我をしている可能性が大いにあり得る。

「二人とも怪我はしていないか？」

「いえ、怪我とかはしませんでしたが、ベトベトしてて気持ち悪いです……」

ミツキもふるふると首を横に振っているの、外傷はないようだ。良かった…二人に



怪我をさせたとあつては、リーリエ教の背信者として国際指名手配されてもおかしくない失態である。

「怪我が無くてなによりだ。ただ、そのままだと気分が悪いだろう？少し早い気もするが、ぼかばかりゾートの温泉で、身を清めたらどうだ？」

温泉と聞いた瞬間、ミヅキちゃんの目がキラーンと光った気がしたが、多分気のせいだと思ふ。

「ほ、本当ですか!?ぜひお願いします!!その、ナマコブシさんの、白くて濃い体液が髪に絡まつて……臭いもすごいですし……なによりドロドロしてて……ちよつとマキナさん!?なんで写真撮ってるんですか!!」

この一枚は御神体として、パソコンの奥底にて祀らせていただきます。

~~~~~

ぼかばかりゾートに二人を送ってから一時間後ほど経つた今、神聖なる禊みそぎを終えたリーリエとミヅキがエアームドに乗って戻ってきた。

今後、あの温泉から孵化するポケモンたちは6V確定になるだろう。大天使リーリエ

が湯浴みなさった温泉で孵化したタマゴが、糞個体値とか絶対にあり得ないし許されない。

二人とも既に水着から部屋着に着替えており、いつでも寝られる格好だ。リーリエはミツキから服を借りたのか、普段のリーリエとは一味違う、カジュアルなスタイルだ。リーリエは何を着ても美しいという事が証明されてしまったようだ。

長風呂だったせいも、ミツキもリーリエも、ほんのりと上気している。だが、リーリエだけ異様に顔が赤いような気がする。

「……どうしたリーリエ？ 顔が赤いぞ」

「ふえ？ い、いえ……なんでもありません、少しのぼせちゃっただけです」

……その割にはやたらソワソワとしているし、何度もミツキの方をチラ見しては、更に顔を赤くしている。

一方でミツキちゃんは、安心と信頼の真顔でありながらも、どこか顔がツヤツヤとしている……ような気がする。

うん、これは何かありましたね。ミツキ×リーリエなのかリーリエ×ミツキなのかはわからないが、確実に何かありましたね。後でお兄さんにも聞かせてもらおうからね。

気がついてみれば、すでに陽は傾き始めており、アローラの夏空が朱に染まり始めている。腹も減ってきたし、そろそろ家に戻る時分だ。

二人を連れてすくすくリゾートに戻ると、一面に広がるきのみ畑に圧倒されたのか、リーリエが嘆息を漏らす。

「すごいです……これ、全部きのみなる木ですか？とても甘い香りがします」

きのみ畑に興味を持ったのはリーリエだけでなく、ミヅキもキヨロキヨロと辺りを見渡している。

「ああ。その辺にいるドレディアに欲しいきのみを伝えれば、採ってきてくれるはずだ。まあ、うちでは育てていないきのみもあるが……」

俺の言葉を聞いたリーリエは、目をキラキラと輝かせてドレディアに話しかける。かわい。

「ドレディアさん、モモンのみを採ってくださいますか？」

おお、大天使リーリエよ。モモンのみは貴女のすぐ目の前に実っておりますぞ……
「あ、こんなに近くにあったんですね……マキナさん、いただいても良いですか？」

「当然」

リーリエは顔を綻ばせると、もぎたてのモモンの実に齧りつく。食べ方自体はワイルドなはずなのに、リーリエが食べると凄く上品に見える。これが育ちの違いというものか……

「とても甘いですね。あつ、中は結構スカスカなんですわね」

「モモンのみは可食部が少なく、中はほとんど空洞になっているんだ。その分、甘みも他のきのみより凝縮されている」

その甘さと手頃な量が好評だったのか、女性から人気を集めているきのみだ。ちなみに、シロナはモモンのみを相当気に入ったのか、リゾートから帰る時に十個くらいモモンのみを豪快にもぎ取っていった。女子力の足りてないシロナさんかわいい。

「あの……マキナさん。ミツキさんはどこに行っただけでしょうか？」

モモンのみを食べ終えたリーリエが、ミツキが見当たらない旨を伝えてきたので、俺も一緒になってミツキを探す。いくら広大とはいえ、迷子になるような事はないと思うのだが……

「ま、マキナさん!! あれってミツキさんじゃないですか!？」

上擦った声をあげるリーリエに視線を移すと、リーリエは何やら上空を指差している。

リーリエの指差す先には、真顔のまま目を輝かせているミツキが、サザンドラにまたがり上空を駆け回っていた。

何やってんのあの子。

よく見るとミツキは、右手にロメのみ、左手にニジマメを握りしめている。どちらもポケリゾートで収穫したものなのだろう。

ミツキがそれらをサザンドラにチラつかせるたび、サザンドラは媚を売るような表情で飛行を続けている。ミツキの目は更に輝く。

「はわわ……何やつてるんですかミツキさん!!ちよつとマキナさん、写真なんて撮ってる場合じゃないですよ!」

おお、大天使リーリエよ。何をおっしゃるか。近い未来、アローラ史上最高のトレーナーになるミツキちゃんがサザンライダーだった頃の写真が撮れたのですぞ? 10年後の教科書に載っていてもおかしくない一枚と言えましょう。

しばらく写真を撮っていたら、おこりーリエから激おこりーリエに神化なさったので、ミツキちゃんを呼び戻して、軽く注意しておいた。こんな幼気いたいけな少女が、嬉々としてサザンドラにまたがっていると、あのゲーチスさんもビックリですよ。

ついでに、サザンドラにロメのみを与えるなども言っておいた。人が苦勞して振り切った特攻努力値なんて事をしてくれるんだ君は。

ようやく二人を家にあげる頃には、とうに日没を迎えていた。

「かなり良い時間になってしまったな……急いで夕食を作るから、二人は適当にくつろいでいてくれ。退屈だったら、家の中を見て回ってくれても構わない」

二度にも渡ってシロナのアポなし訪問テロを食らっているの、見られて困るような物は全部片付けてある。ミツキは真顔で頷くとリビングを出て行ってしまったが、リーリエはリビングで昼寝をしていた俺のエルフーンを、モフモフしながら楽しそうに微笑んでいる。俺は料理をしながら写真を撮るといふ神業を披露して差し上げた。人間、愛と信仰心さえあれば大体の事は可能なのだ。

『……ますた、おんながきていますね。まあ、こんかいはふたりともこどもなので、おおめにみましょう。ますたは、わたしのようなおとなのじよせいにか、きょうみがないですからね』

いつの間にか起きていたアロフォーネが、『ふたりとも、わたしのあいてになりませんね…』と、鼻で笑っていた。他のポケモンにポケマメを奪われただけでガチ泣きするよいうな奴が大人の女性とか、片腹痛いんですけど。

途中、アロフォーネがポルターガイストでリーリエをビビらせようと画策していたが、そんな事したら柔軟剤無しで洗濯機にぶち込むぞと脅したらおとなしくなった。ビビらせるならミツキちゃんにしろ。あの子から真顔以外の表情を引き出したら勲章も

のだぞ。

アロフオーネと無益な詭弁を弄しながらも、三人分の夕食を作り終えた。しかし、未だにミツキがリビングに帰ってきていない。仕方ないのでリーリエと共に彼女を探し回ったのだが、ミツキは俺の寝室にいた。

ミツキは、真顔で俺のベッドに横たわっていた。

「……………ミツキ？」

思考回路がショートしつつかあったが、なんとか俺が声を捻り出すと、ミツキは真顔のままジツと俺の事を見つめてくる。じゃけん質問には答えましようね。

「もう、またですか？ミツキさん、人のベッドで寝たらダメですよ。しかも、マキナさんは男の人なんですから。……………ベッドソムリエの血が騒いだ？意味がわかりません。とにかくマキナさんのベッドはダメですつ。……………えつ、私のベッドですか？み、ミツキさんならダメじゃないですけど……………」

ミツキちゃんまじミツキちゃん。

~~~~~

なんとかしてミツキを俺のベッドから引き剥がし、三人で夕食をとった。

ミツキは普段から無口だし、俺もリーリエも食事中に喋るのはあまり好きじゃないので、静かな食事風景となってしまうたが、別に気まずいという事はなかった。大天使リーリエと共に食卓を囲んだとか、末代まで誇りとして語り継がれるであろう。俺が子孫を残せるかどうか心配で仕方がないが。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

リーリエから労いの言葉をいただく、ミツキも同調するように頷いてくれた。リーリエは家族と離れ離れになって以来、大人数で食事を共にする機会は少ないだろう。彼女にとって暖かな食事となったのなら、料理に腕をふるった俺としても大満足だ。

しかし、リーリエは食事中から何やらソワソワとしているのだ。お花摘みだろうか？  
「…トイレはリビングを出た突き当たりにあるぞ？」

「ありがとうございます。でも、そうじゃないんです……」

「それは失敬。どうしたんだ？」

俺が改めて聞いただと、リーリエは上目遣いで俺に質問を返してきた。



「あの、マキナさん。ずっと気になっていたのですが……あれはもしかしてテレビゲームではないでしょうか？」

Wi i Uに熱い視線を送る大天使リーリエの美しき碧眼が、キラキラしていた。

「……リーリエはゲームをした事がないのか？」

「はい。にいさまがやっている所なら何度も見ているのですが……」

確かにグラジオお兄様はゲーム好きそうだしな。主人公に『↑強者の翼↑』みたいな名前つけてそう。

「……リーリエもやってみるか？」

「良いんですか？」

「ああ、ミツキも一緒に遊ぶか？」

俺の誘いにミツキはノータイムで頷いたので、食器類を食洗機にぶち込んだ俺はWi i Uの電源を入れる。

「私、知ってますよ。この、こんとろおらあとという物で操作するんですよっ」

俺からコントローラーを受け取ったリーリエが、自慢気な表情でそう仰った。流石は大天使リーリエ、よくご存知で。しかしながら持ち方が逆ですよ、リーリエ。

ミツキは慣れた手つきでコントローラーを握っているの、ゲームをした事はあるのだろう。リーリエのようにゲームをした事すらない女の子が多いというのに、大したも

のである。

問題はソフトだな。いきなりイカとかは流石に厳しいだろうし、あまり操作が難解なものもは厳しいだろう。

リーリエのセンスを様子見するのも兼ねて、最初はスマブラにした。多少なりポケモンも出てくるので、とつつきやすさもあるだろう。

「わあ……なんだかたくさんのキャラクターがいますね。あつ、ピカチュウさんやルカリオさん、ゲッコウガさんもいますね!!」

「ああ、その中から好きなキャラクターを選んでくれ」

「じゃあ、私はこのピンク色の子にしますね」

リーリエは桃色の悪魔を選んだようだ。復帰もしやすく、シンプルな技ばかりなので、初心者には持つてこいと言えよう。

ミヅキちゃんは赤い帽子を被った超能力使いの少年を選んでいた。もうこの時点で嫌な予感しかないが、気にしない事にした。

「このゲームは他の人が使っているキャラクターをステージの外に押し出して、最後に残った人が勝ち……というゲームだ」

ざっくりと説明してから、ゲームを開始した。

「あ、ここを押すと空を飛べるんですね!! えへへ、ぽよぽよしててかわいいです」

かわいいのはリーリエなんだよなあ。

俺が大天使リーリエの慈愛に満ち溢れた笑顔に見惚れていた……その一瞬の隙を狙うかのようにして、事件が起きた。

ミツキちゃんが俺のリザードンを『下投げ↓空中前攻撃↓空中前攻撃↓空中前攻撃』のコンボで場外に押し出し、俺が慌てて復帰しようとした所にメテオをぶち込んできたのだ。

あかん、この子ガチャ。

「わあ……ミツキさんとても上手ですね!! にいさまみたいな指捌きです!!」

リーリエが賞賛の声をあげると、ミツキちゃんはそれほどでもない、真顔で頭かぶりを振る。その堂々たる姿や、王者の風格が滲み出ている。

リーリエはミツキちゃんに瞬殺で倒されてしまったが、俺はなんとかミツキちゃんに

負けずにすんだ。まさか子供を相手に、本気を出す事になるとは思わなかった。

「ま、まあ……このゲームはリーリエには難しかったかもしれない。他のゲームに変えよう」

俺は冷や汗をかきながら、強引にソフトを変えた。先ほどから、ずっとミツキちゃんが真顔で俺の事を見つめているが、気にしてはいけない。

次に選んだゲームは、子供から大人まで楽しめるマリオカートだ。スマブラほど使うボタンも多くないので、さつきよりかは幾分マシだろう。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「マキナさん、私の周りに誰もいませんが、私は独走状態でトップと言う事でしょうか？  
えへへ」

「リーリエ、逆走しているぞ」

「わあ……急なカーブですね……」

「リーリエ、体を傾けても意味はないぞ」

「あつ、誰ですか!? ジャンプ台の前にバナナの皮を捨てた人は!? がっかりです!!」

「ミツキだ」

「ちよつ、誰ですか!? アイテムブロックに偽物のアイテムブロックを重ねて置いた人はい!? ひどすぎます!!」

「ミツキだ」

リーリエは尊かった。

~~~~~

その後もダラダラとゲームをしていたのだが、俺はふとある事を思い出した。

「あつ、そうだ。リーリエは誕生日とかにどんな物をプレゼントされているんだ?」

俺が唐突にそう問いかけると、リーリエは暫しの間考え込んだ後に答える。

「誕生日プレゼントですか……その時によつて違います、髪留めなどのアクセサリーや、手鏡など身だしなみを整える時に使う物が多いですね。ポツチャマさんの人形をもらった事もあります……」

「ポツチャマ……」

「はい。一生懸命考えて選んでくれた物なら、何をもらっても嬉しいですが、やっぱりオシャレとかに使えるものだともっと嬉しいですね」

リーリエがそう言うと、隣で聞いていたミツキもコクコクと頷く。

「…ポケモンを貰ったりとかは？」

「私は無いですね。お金持ちの人とかは、エネコロコさんみたいなペットとして人気の高いポケモンを贈ったりすることもありますが、受け取る側としては少し敬遠してしまうかもしれませんね」

…ポケモンは微妙なのか。他ならぬ、女の子のリーリエが言うのだから、そうなのだろう。フウロちゃんへの誕生日プレゼントは再検討の余地があるな。

来週はホウエン地方に行つて色々いろいろと野暮用を済ませてくるので、そのついでに買ってくるか。

フウロちゃんの誕生日は来週末だし、来週一杯は公式戦も組まれていない。島巡りはまだ準備段階らしいので、都合がとても良い。

来週の予定を頭の中で整理しながら、俺はシャワーを浴びる。長かった一日が終わろうとしている。殆どの時間を、写真を撮る事に費やしていたような気もするが。

風呂から上がった俺がリビングに戻ると、ソファでテレビを見ていたリーリエとミツキが、互いに身を寄せてうたた寝をしていた。二人とも、一日の間に様々な事をして、さぞや疲れた事だろう。

俺は本日最後の一枚を撮影してから、二人に毛布をかける。データフォルダを再生す

れば、そこには幸せそうな寝顔が二つ写り込んでいる。

確かにリーリエは、歳の割にかなりしつかりとしてゐる子だが、俺からしてみればまだまだ子供だ。彼女には、彼女を支えてあげられる『家族』が必要だ。彼女はまだ、家族を支えるような歳ではないはずだ。

俺はすでに社会に出て、一人暮らしを経験している。

安い給料、理不尽な残業、口だけは達者な同期、人一倍働かない上司、疎遠になつてゆく旧友、親孝行する前に死別してしまつた親、突然の異世界転移……激しい荒波に揉まれながらも必死こいて生きていられるのは、未熟な頃の俺を支えてくれた親がいたからだ。

子供の時に大人から授かつた恩は、自分が大人になつた時に子供へと返すものだ。

おそらく、数多の秘密を抱えながら売れっ子トレーナーと化した俺は、プラトニックな恋愛などできないだろう。俺にすり寄ってくる女性など、金目当てでしかないだろう。そうでなかつたとしても、俺の目にはそう見えてしまう。疑心暗鬼のまま誰かを番にするなど、まっぴらゴメンだ。俺に子供ができる未来など、まるで想像もつかない。

シロナみたいに、誰の目から見てもわかるほど純粹な心を持つた人間は確かにいるが、そういった人たちは何かしらの肩書きを持っている。俺とは釣り合わないし、まるで可能性を感じない。シロナは何かと俺に関わつてきてくれるが、それは別け隔てなく

人付き合いができる、シロナの純粋さが成せるものなのだろう。

ああいった人種は、放っているオーラのような物が、常人のそれとはまるで違うのだ。シロナも、オーキド博士も、ククイ博士も、リーリエも、ハウも、ハラも、ミツキも……会ってきた主要人物の全てが、明らかに違う雰囲気醸し出しているのだ。凡人の俺でもわかるくらいだ。きっとそれが、彼ら彼女らに最初から与えられた運命というものなのだろう。

齢24にして、この広大なリゾートでポケモンに囲まれながら孤独死するビジョンが見えてしまったが、それもそれで悪くはない。厳選を行う中で、産まれた孵化余りポケモンたちも逃したりはしていないので、俺が死ぬ頃にはこのリゾートはサファリゾーンと化しているだろう。

おそらく、このまま行けば俺は世界最強のポケモントレーナーとして名を残す事になる。それを確信しているからこそ、シロナを踏み台にしてまで鮮烈な一流トレーナーデビューを果たしたのだ。

それでも、結局は名前しか残らないのだ。

学生の頃の俺ならば、それは偽善者の考えだと唾棄していたかもしれない。だが、身も心も大人になった俺は思うのだ。

誰かの支えとなれた時、初めて俺という存在に『価値』が発生するのだ。

名声も、富も、快樂も……一個人が小さな欲求を満たしているところを百万人、千万人に見せたところで、誰かの支えになどなるまい。

俺はリーリエの支えとなる。

無論、リーリエがそれを知る事は無いだろうし、知る必要もない。彼女が恩を返すべき相手は俺ではないのだ。

俺は凡人であると同時に、廃人だ。だからこうして、本来交わる事のなかったであろう人たちに干渉できているのだ。

俺はこの世界にとってイレギュラーであり、招かざる客なのかもしれない。だが、そんな事は俺の知った事ではないし、何より俺も来たくてこの世界に来たわけではないの

だ。好き勝手にやらせてもらう権利はある。

俺にはこの世界をメチャクチャにできる力がある。だから、良い方向にメチャクチャにしてやるのだ。

悪事を働いてメチャクチャにする事など、俺じゃなくても誰でもできる事だし、そんな事しても俺は幸せにならない。

『ますた。わたしがいるじてんで、ますたのしあわせはやくそくされてますよ』

……そうだな。何もかも、アロフォーネがいたから、上手くいったのだ。俺の力だけは到底無理だっただろう。せいぜい、異世界からやってきた頭おかしい奴として、その辺でのたれ死んでいたはずだ。

「……アロフォーネは、トレーナーが俺で良かったと思うか？」

『ぼけもんは、ますたをえらばません。だから、じぶんをつかまえた、ますたのいうことをきくのが、ぼけもんです。ますたのよしあしなんて、ありません。わたしのますたは、ますただけです』

「……そうか」

きつと、トレーナーとポケモンとの間に構築されるリレーションシップは、そこまで複雑なものではないのだろう。

誰よりもポケモンを強くして、ポケモンを戦わせ、ポケモンを勝たせる。それだけなのだ。

廃人の俺がやるべき事は、何一つとして変わらないだろう。これまでも、これからも。

15：大戦犯マキナ

リーリエは、ポケモンが傷つく事を嫌う少女だった。だからこそ彼女は、日々ストレスを与えられ続けたコスモッグをエーテルパラダイスから連れ出し、保護しているのだ。

故にリーリエは、ポケモン同士が傷つけ合う『ポケモンバトル』を観る事に、少ない抵抗を覚えるのだ。

しかしながらリーリエは、比較的穏やかな気持ちで二人……マキナとミヅキのポケモンバトルを観ていた。

何故かはリーリエ自身も分からない。だが、何となくは理解していた。

きつと、二人は自分と同じくらい……いや、それ以上に真摯な気持ちでポケモンに向き合っている事を、自分は知っているからだ……と、リーリエは自己完結をする。

それは、強ち間違いでもなかった。

リーリエたちは知る由もないが、どこか達観した様子でポケモンバトルに臨む男……

マキナは、全ポケモンを『数字』として記憶し、数多の知識と経験を培ってきたポケモン廃人だ。ことポケモンバトルにおいて彼の右に出る者など、そうそう見つかるものではない。

そんな男のポケモンたちに対峙しておきながらも、まるで物怖じする事なく真顔を貫く少女：ミヅキは、他でもないマキナのポケモンバトルに感化され、トレーナー資格の取得を後押しされたのだ。

最近になって、よくミヅキと遊ぶようになったリーリエは知っていた。

ミヅキは、毎日のようにマキナの試合中継をテレビで観戦しているのだ。本人はおくびにも出さないが、まだかまだかと彼の試合中継を心待ちにしており、中継のない日は『ある試合』を録画したものを、飽きる事なく何度も観ているようだ。

ミヅキは、一流のトレーナーになる為に、常にひたむきな努力を重ねている。自分のポケモンたちを、野生のポケモンや他のトレーナーのポケモンと積極的に戦わせ、より強く育てる事に余念はなかった。

ククイ博士やハウ、リーリエなどと共にポケモンスクールに行った時は、特に顕著だった。

ハウが同じくらいの子供たちとポケモンを見せ合ったり、ポケモンの話で盛り上がった時、ミヅキはその場にいなかった。

ミヅキはポケモンスクールの中を駆け回っていたのだ。野生のポケモンが現れるという校庭端の草むらでコイルを捕まえたり、学校の生徒はおるか、先生とまでポケモンバトルを繰り返していたのだ。

そして、ハウがポケモンバトルの基礎知識をようやく身につけ始めた時、ミヅキは既にポケモンスクールで一番強いトレーナーに勝っていたのだ。

ククイ博士から、しばらく島巡りは一時休止と言われたのも、ハウとミヅキの間に開いてしまった大きな差を埋める為だ。決して、ハウがトレーナーして成長するのが遅いわけではない。ミヅキの成長があまりにも早すぎるのだ。

現に、メレメレ島でミヅキにポケモン勝負を仕掛けてくるトレーナーたちは、ポケモンたちに何ひとつ行動させられる事なく敗れている。ミヅキのポケモンたちに手も足も出ないのだ。

そんな、ポケモンバトルとも呼べないようなバトルが多くなってきたミヅキは、どことなく退屈そうにしていた。いつも真顔で、何を考えているか分からないと言われがちなミヅキだが、それなりの時間を共にしたりリーリエはそんな彼女の感情の機微が、僅かではあるが分かるのだ。

今、マキナと向かい合っているミツキは、リーリエが見た事もないほど生き生きとしている。

相変わらず真顔ではあるが、このお泊まり会を通じてさらに仲良くなったリーリエは、確信を持ってそう言えるのだ。

昨日、リーリエはナマコブシを踏み潰してしまい、リーリエとミツキは全身にナマコブシの体液を浴びてしまった。冷静さを取り戻したリーリエは、ナマコブシを殺してしまったのではないかと、たちまち不安と罪悪感に押しつぶされそうになった。しかし、『あいつら勝手に再生するからヘーキヘーキ』と、マキナが軽いノリで励ましてくれたので、リーリエは少しだけ楽になった。大事なものは同じ事を繰り返さない事だ……と、マキナに諭されたので、リーリエは素直にそれを受け止めた。

ナマコブシの体液で汚れてしまったリーリエとミツキは、温泉が湧き出ているという『ポカポカリゾート』にて湯浴みをした。

温泉では、たくさんポケモンたちが気持ちよさそうに湯浴みをしていた。

子どもの体を丹念に洗うガルーラ。アクアジェットで楽しそうに遊び回るマリルリ。

いつから温泉に入っているのか忘れてしまったかのような表情でポケーつとしているヤドラン……など、多種多様なポケモンたちが個性豊かな寛ぎ方をしていた。リーリエがコスモッグ、ミツキが自分のポケモンたちを外に出してやると、我先にと温泉へと飛び込んでいった。

リーリエとミツキも、ナマコブシの体液で塗れた水着を脱いで身を清めた。

家族以外の人間に生まれたままの姿を見せた事がないリーリエは、水着を脱ぐことに強く反発したが、真顔のミツキに半ば強制的に脱がされた。リーリエは悶えた。

もうお嫁に行けない……と、赤面するリーリエではあったが、私が貰うから心配するなど真顔のミツキが慰める。リーリエは更に悶えた。

体を流した二人はようやく湯船に浸かった。しかも、何故かミツキがリーリエに後ろから抱きつく形で。リーリエはとてつもなく悶えた。

二人は色々な事を語りあった。お互いが出会う前の事が殆どだったが、自分の知らないミツキが知れた事と、ミツキが知らない自分を知ってもらえた事に、リーリエはそこはかとな甘酸っぱさを覚えた。

ミツキは小さな頃から、ポケモンに多少なり興味はあったらしい。何でも、ミツキの父はカントーにおいて名を馳せているトレーナーらしく、何度もポケモンバトルを観て

きているからだ。

それでも、ミツキが実際にポケモンを手にする事はなかった。カントー地方には、自分と同じぐらいの年頃からポケモントレーナーを始めて、カントー地方はおろか、各地方のポケモンリーグを次々と制覇している『頂点』と呼ばれる男がいるらしいが、ミツキには雲の上の存在に見え、平々凡々に育ってきた自分がそうなれるとは思っていなかったようだ。

しかし、ある試合中継を目にした日から、ミツキは変わってしまったと言う。

そのポケモンバトルとは、一時期話題を持ちきりにした、あの『新種ポケモンを捕まえた新人トレーナーとシンオウチャピオンとの親善試合』だった。

新人トレーナーのマキナはつい最近に、トレーナー資格を持たずしてポケモンを所持していた事で世間を賑わせていたので、トレーナーになって日が新しい事は明白だ。

それでも、新人トレーナーであるマキナは、マスター資格を持つベテラントレーナー・シロナを、たった三匹のポケモンで倒した。

淡々とポケモンに指示を出し続けた彼は、勝利の喜びを露わにする事もなく、その無表情を崩さず壇上を後にした。

試合後のインタビューで『なぜ、新人のあなたがシンオウチャンピオンに勝てたのか？』と言う問いに、マキナは『ただ、ポケモンが好きなのです』と、答えとも言えないような答えを口にした。

そっけなく放たれたこの一言が、ミツキの胸に強く刺さったのだ。

才能の有無だとか、経験の有無だとか、そういったものを理由に、まだ何もしていないのに関わらず自分には向いてないと、ポケモンと関わる事を避けてきた自分に対して言われた気がしてならなかったのだ。

ミツキはすぐにトレーナー資格を取得した。ミツキは父親に無理を言っ、ポケモンのタマゴを分けてもらった。ノーマルタイプのばけねこポケモン、ニャースだ。

まだミツキはポケモンに慣れていないからと言う理由で、ニャースはミツキの母親の手持ちとして育てる事になった。ニャースはしよっちゅう、どこからか物を拾ってくる困った子ではあったが、ミツキは注げるだけの愛情をニャースに注ぎ続けた。

まずはポケモンを好きになる事。それができなくては、彼らと同じステージに立てないのだ。

ほどなくしてミヅキはアローラ地方のメレメレ島に引越した。

ミヅキはアローラに引越せた事に感謝をしていた。リーリエやハウ、ククイ博士と出会えた事。

そして、憧れのトレーナーに会えた事。

カントー地方に居ては叶わなかった事だ。ミヅキの母親が引越しの決断をしたらしいのだが、アローラ地方のニヤースが見たいからという、割と結構適当な理由で引越すに至ったとの事だ。ミヅキの母親らしいと言えばらしい気もする。

ククイ博士に誘われ、ハウと共に島巡りをする事になったミヅキは、ククイ博士から生まれたばかりのポケモンを譲り受けた。みずタイプのみしかポケモン、アシマリだ。アシマリこそが、ミヅキが初めて手にしたポケモンだった。目立ちたがり屋が多いアシマリにしては『ひかえめ』な性格をしていた。それでも、ひかえめなアシマリは自らの意思でミヅキに歩み寄った。

アシマリの直感は告げていたのだ。

この少女は誰よりも自分に向き合ってくれる。

この少女は誰よりも沢山の仲間ポケモンを捕まえてくれる。

そして、この少女は誰よりも自分を強くしてくれる……と。

そんなアシマリの期待を裏切る事なく、ミツキはアシマリをオシャマリに進化させ、アシマリの他に四匹のポケモンを捕まえている。

そして、ミツキはもう一つ上のステージへと上がろうとしているのだ。

これからミツキが戦うのは、憧れのトレーナーであるマキナだ。ミツキは彼の戦いを何度も観てきている。シロナとの親善試合、ここ最近頻繁に放送される実況中継はもちろんの事、島キングであるハラとの戦いを、生で観ているのだ。

あの大試練では、じたばたするドードリオがあまりにもシユール過ぎた上、メレメレ島の守り神であるカブ・コケコが現れたり、印象強い事が多すぎて誰も気づかなかつたかもしれないが、ミツキだけはしっかりと理解していた。あるトレーナーの影響を受

けて、常に平常心を保つように心がけていなかったら、ミツキは気づかなかっただろう。憧れのトレーナーの言葉を、一字一句聴き漏らさないミツキは、『島巡りのついでに、こいつのレベル上げをするか…』という、マキナの何気ない独り言を記憶していた。

育成途中のポケモン一匹で、島キングのゼンリョクである五匹を打ち破ったのだ。もはや、次元が違うなどというレベルではない。

そんな男と、ミツキはポケモンバトルを行おうとしているのだ。当然、手加減をしてくるだろうが、憧れのトレーナーが住んでいるリゾートで、憧れのトレーナーとポケモンバトルができる事が、ミツキは嬉しくて仕方なかったのだ。

そんな背景こそ知らないものの、無邪気にマキナとのポケモンバトルを楽しみにしているミツキを見ていると、リーリエは何も言えなくなってしまうのだ。今のミツキに、ポケモンが傷つくからやめると水を差すのが、いかに無粋であるか、どこか抜けた所のあるリーリエですら理解していた。

マキナのポケモンはムウマ、ニドクイン、スターミー、ブラッキー、クチートの実で、ミツキのポケモンたちと差が開かないように、レベルの低いポケモンばかりを選んだそうだ。さらに、ポケモンたちにアイテムを何も持たせていないとも言っていた。

対するミツキのポケモンは、オシヤマリ、デンヂムシ、ケララツパ、フーデイン、ベトベターの五匹だ。ユンゲラーは一度でも他のトレーナーの手によって育成されると、フーデインに進化するのだが、ミツキのユンゲラーもマキナのリゾートに影響を受けて、今朝にフーデインへと進化を遂げたのだ。

いくら破竹の勢いで成長しているとはいえ、ミツキは駆け出しトレーナーだ。それ故、持ち物の有用性はポケモンスクールで教わったばかりで、まだポケモンに何も持たせていない。

「今回のバトルでは、俺は最初の10ターンはポケモンに技を使わせない。10ターン経過した時点で、普通に攻撃を開始する。それでいいか？」

おもむろにマキナが提案してきたものは、あからさまな手加減だ。だが、なんらかのハンディキャップがないと戦いにすらならない事くらい、ミツキには分かっていた。

ミツキが最初に繰り出したのはデンヂムシ。一方でマキナはスターミーを繰り出した。

スターミーはみず／エスパータイプのなぞのポケモンだ。でんき技とむし技を得意とするデンヂムシにとっては、格好の餌食だ。

ミツキのデンヂムシは、未だ『シザークロス』など言った強力なむし技を覚えていない。ミツキは一番威力のある『スパーク』を指示した。

「スターミー、戻れ」

マキナはスターミーを引つ込め、新たにニドクインを繰り出す。どく／じめんタイプのニドクインに、でんき技は全く通用しない。デンヂムシの『スパーク』は不発に終わってしまふ。

ミツキのデンヂムシは、ニドクインの弱点を突ける技を持っていない。もう一つのメインウエポンである『むしくい』も、どくタイプを持つニドクインには通用しない。なんとかしてこの10ターンの間に、一体でもマキナのポケモンを倒したいと思ったミツキは、Zリングを掲げた。

「あ、私知ってます!!ミツキさんのポーズ……ノーマルZですね!!」

イリマの試練で見たものと、全く同じゼンリヨクポーズを真顔でするミツキを見て、リーリエが興奮気味に声を上げる。

しかし、マキナは既にポケモンを変えていた。出てきたのはゴーストタイプのよなきポケモン、ムウマ。デンヂムシのZパワーを纏ったゼンリヨクの攻撃『ウルトラダッシュアタック』は不発に終わってしまった。

既に2ターンが経過している。だと言うのにも関わらず、マキナのポケモンは全くダメージを受けていない。それどころか、バトル中に一回しか使えないZパワーを消費してしまつたのだ。

その後もミツキはポケモンの交代に翻弄され続け、決定打を与える事なく10ターンが経過した。

マキナの猛反撃が始まった。

オシャマリはスターミーのエネルギーボールに倒れ、デンヂムシはニドクインのだいまんに倒れ、フーデインはムウマのシャドーボールに倒れ、ケララツパはニドクインのふぶきに倒れ、ベトベターはクチートのアイアンヘッドに倒れた。ミツキの完敗だ。

「……今の戦い方でも、ミツキのポケモンたちなら殆どのトレーナーに勝てるだろう。だが、もしミツキがもつと上を目指しているなら、もう少し工夫が必要だ。不利なポケモンを無理に戦わせない事、相手も有利なポケモンに交代してくるという事……まずはこの二つを意識する事から始めた方が良い。それと、Z技を撃つタイミングだが、あれは一度きりの切り札だ。『ここぞ』と言う時に使わなくてはならない。基本的にZ技は、目の前のポケモンに撃つのではなく、自分のポケモンを倒しにくるであろう、相手の手持ちに控えているポケモンを意識して撃つものだ。俺はこれを『役割破壊』と呼んでいるが……まあミツキならすぐに順応できるだろう」

リーリエにはマキナのアドバイスの意味する所が全く分からなかったが、ミツキはコクコクと頷いている。微笑ましくも思える、そんな二人のやりとりを見ていたリーリエは、ある思い付きを口にした。

「ミツキさん。せっかくですし、マキナさんと一緒に写真を撮つたらどうですか？」

リーリエの提案を耳にしたミツキは、是非もないと真顔で頷く……事はなく、まるで石化でもしたかのように真顔のまま固まっている。そんな、ミツキの様子が可笑しくて仕方なかったリーリエは、思わず吹き出してしまう。

（私、知ってます。ミツキさんが固まってる時は、いつも照れている時なんですよね）

当然、そんな事は露ほど知らないマキナは、ジツと自分を見つめてくるミツキを前に狼狽えてしまっている。自分だけがミツキの心情を知っていると思うと、またしてもリーリエの中で得も言われぬ甘酸っぱさが広がっていく。

ニコリともしない二人を写真に収めたリーリエは満足気に頷く。カメラには、真顔のままオシャマリを抱き抱えるミツキと、無表情のままミツキのトレードマークである赤いニツト帽に手を置くマキナが写っている。

（応援しています…ミツキさん。ミツキさんがマキナさんに勝つ日を、楽しみにしていますから）

リーリエはまだ知らない。

今日の一戦こそが、初代アローラリーグチャンピオンを決する、大きなターニングポイントであつたという事を………

~~~~~

最後にミヅキにポケモンバトルの指南をした俺は、ミヅキとリーリエをメレメレ島へと送り届けた。

ミヅキの母親に『マキナくん、二人の面倒を見てくれてありがとうとね。今度はマキナくんが泊まりにきちやつても良いわよ!!』と、一夜的な過ちを期待させるかのようなお誘いを頂いたが、ミヅキの父親にバレたらぶつ殺されそうなので丁重に断つた。人妻とか言う諸刃の剣やばい。

ミヅキにはサイクル戦の初歩を教えたが、あれが生きてくるのは相当終盤だろう。旅

の序盤はレベルを上げて一致技で殴れば良いだけなので、コロコロとポケモンを変えてもテンポが悪くなるだけだ。かく言う俺も、現時点でサイクル戦を強いられるのはシロナくらいだ。シロナさんまじシロナさん。

リゾートで撮影したリーリエとミツキの写真が楽しみで仕方ないが、この一週間はハードスケジュールが待ち構えている。いつまでも余韻に浸っている場合ではない。旅客船に乗った俺はアローラを発ち、ホウエン地方のカイナシティへと赴いた。港町というだけあって、たくさんの人とポケモンが行き交う、とても綺麗な都市だ。

ホウエンに來た理由は色々とあるが、まず果たすべき目的はフウロちゃんへの誕生日プレゼントの購入だ。

カイナシティの南部にはバザーが展開されており、海を跨いだ物珍しい商品がたくさん並んでいる事だろう。様子見もかねて、俺は何の気なしにバザーへと足を運んだ。

結論から言うと、フウロちゃんの誕生日プレゼントは買えなかった。

いや、彼女いない歴〃年齢の俺に、女の子の誕生日プレゼントとかチョイスできるわけがないし。悪趣味なアクセサリーをチョイスしてしまい、大爆死する未来しか見えない。フウロちゃんに引き撃った笑みで『だ、大事にしますね!!』（大事するとは言つてな

い)』とか言われた日には死ぬるぞ。

しかし、どうしたものか……これではまともに買い物などできない。一人でハウエンに来るのは些か無謀だったかもしれない。

困り果てた俺は、アテもなくカイナシティを練り歩く。ふいに、やたらと繁盛している店を見つけた。

凄まじい行列ができています。しかも、並んでいる客は全員女性だ。看板には『バイバニラ・パラダイス』と、やたらオシャンティーな文字で銘打たれている。

あ、これシロナの言っていた、カイナシティに新しくできたアイス食べ放題の店か。めっちゃ繁盛してんじやん。

……その時、俺の脳髄に閃きの電流が走った。

俺はスマホを取り出し、ある人物に電話をかける。

「アローラ、シロナさ……シロナ」

『……マキナが電話をかけてくるなんて珍しいわね。どうしたの?』

「いや、今ハウエン地方に来ているんだが……」

『へえ……ハウエン地方はとっても良い所よ!!でも、どうしてそんな遠くに?』

「いや、フウロさんの誕生日プレゼントを買おうと思ったんだが、いかんせん何を選べば良いか分からなくてだな……」

『ふふっ、マキナも可愛いところがあるのねっ』

可愛いのはお前だぞ。

『あたしもマキナと一緒に選んであげたいけど、今日はリーグ挑戦者がいるの。四天王を突破してくるかもしれないし、さすがにチャンピオンのあたしが席を外す事はできないわ。ごめんなさい』

「そうか……前にシロナが言っていたアイス屋もあるし、お礼にアイスを奢ろうかと思っていたんだが、シロナが多忙とあつては致し方ない。またの機会に……」

『待ちなさい』

「……………え？」

『マキナ、そこを動かないで』

「え？」

『今、会いに行きます』

~~~~~

しばらくして、シロナを乗せたメガボーマンダが猛スピードでカイナシティに飛来した。あまりにもワイルドすぎるエクストリーム入国に、街ゆく人々は啞然としていた。シロナさんの女子力はどこに行けば見つかりますか？

「はあ……はあ……けほっ……んっ……待たせたわね……マキナ……」

息切れしているシロナさんセクシー、エロいっ!!

「……リーグ挑戦者がいるんじゃないやなかったのか？」

「四天王のみんなに絶対に負けないでっ、って念を押してきたから多分大丈夫よ!!」

シンオウ四天王の皆さんに、合掌。ゴヨウさんとかプレツシャー半端なさすぎて胃に穴が開いてそう。

「ね、マキナ。こうしちやいられないわ。早く行きましょう!!」

爛々と目を輝かせたシロナが俺の手を強引に握り締めると、バイバニラ・パラダイスの行列へと引きずっていく。シロナさん、みんなに見られてますよ。

並んでいる最中も、シロナは落ち着きがなかった。

「バイバニラ・パラダイスでは、三つのアイスクリームを自分で乗せる事ができるのよ。アイスクリームの原料になっているきのみによって、『すくいやすさ』とか『くつつきや

すさ』が違ってくるから、いかに早く、食べやすい大きさにできるかが、よりたくさん
のアイスクリームを食べるための鍵になるのっ」

いや、アイスクリームってそんな量食う物じゃないよね？よくよく考えたらアイスク
リーム食べ放題ってコンセプトもおかしい気がする。

だが、この大盛況っぷりを見るに、この世界の女性の胃腸は鋼か何かで構成されてい
るようだ。昨晩のミツキちゃんも、びつくりするくらい食べてたしな。真顔でもくもく
と食べ続けるミツキちゃんまじミツキちゃん。

数十分ほど待っていると、ようやく店に入る事ができた。料金はかなり安かったが、
制限時間は30分と短めだ。

「見てっマキナ!!こんなにたくさんさんのアイスクリームが……写真撮らなきゃっ!!」
嗚呼……シロナさんが少女へと回歸している……

一頻り写真を撮ったシロナは、あたしのかんがえたさいきょうのアイスクリームを作
らんと、意気込んでいる。しかしながら、思ったより難しかったのか、アイスクリーム
作りに難儀している。

「マキナあ……思ってたよりも難しい……どうしましょう……?」

目の前にお待ちかねのアイスクリームがあると言うのに、なかなか実食できないでい
るシロナが、涙目で俺の事を見つめてくる。

よく見ると、シロナの横でアイスクリーム作りに勤しんでいる女性も四苦八苦している。どうやらバイバニラ・パラダイスはその人気っぷりに反して、初心者殺しな側面があるようだ。

「代わりに俺が作ろうか？」

「……………ふえ？」

原料となるきのみによつて『すくいやすさ』と『くつつきやすさ』が違つてくると、シロナが言つていたので、もしかしたらゆめしまのアイスクリーム作りと同じシステムなのかもしれない。自分でも訳分かんないくらいに高得点を狙つていた時期があつたので、どのきのみが作りやすいかも覚えている。

三つともラムのみにしてしまうのが一番手っ取り早いけど、そんな物を作つてもらつて喜ぶ奴などいないので、ロメのみ、オボンのみ、ラムのみの順にすくつていく。アイスを落としてしまつては元も子もないので、くつつきやすさ重視だ。

「ちよ、ちよつと待つて!?!なんでマキナがそんなに上手なの!?!今までで一番びっくりしたんだけどつ」

感嘆の声をあげるシロナにアイスクリームを手渡すと、シロナはだらしなく顔を弛緩させる。

「ん〜……………すごく美味しい!!ねえマキナ……………あなたのアイス……………もつと、もつと欲しい

の

媚びた表情で欲しがるシロナに、俺は甘美なる快樂を与え続ける。

「あたし……幸せ。この時間、終わって欲しくない……ねえマキナ……早く……早くあなただけ……ちようだい」

女としての悦びを知ってしまったシロナは、羞恥も尊厳も捨てててヨガってくる。

「……足りないのか？これで満足できるだろ。ほら、もつと口開けて」
先刻までのと比べ、より大きくさせたソレをシロナに突き出す。

「だ、だめ……そんなに大きいの……入らないわ……」

「なんだ、もう要らないのか？じゃあここまでにするか……」

「そ、そんな……!?ここまでしておいて……嫌よっ!!」

「じゃあ、どうして欲しいんだ？」

「……しいわ」

「あーもう一回言ってくれ」

「……マキナ、あなた（のアイス）が欲しいわ」

その日、シロナは快樂に溺れた。

~~~~~

結局、制限時間になるまでシロナは尋常ならざる量のアイスクリームを食べ続けた。周りにいた他の客はドン引きしていた。店のスタッフは顔を青くしていた。

俺とシロナは『今後、二人では来ないでください』と、条件付きで出禁を食らってしまった。残念でもないし、当然である。

「マキナと一緒にに行けなくなったのは残念だけど、すごく楽しかったわね!!」

喜んでくれて何よりです。なんであれだけのアイスクリームを食べてお腹壊さないか、不思議で仕方ないですけど。

頗るご機嫌なシロナとともに、バザーへと再突入した。女物は女性に選んでもらうのが一番確実である。

「なんだか変わった物が沢山あるわね……見て見て、マキナ。ポケモンのお面があるわよ」

シロナが興味深そうに覗きこんでいる店には、多種多様なお面が並んでいる。祭りの

屋台とかで売っているような安っぽいプラスチック製の物ではなく、割と本格的な材質でできている。

「なになに……『あのダイゴも大絶賛!!これであなたもボスゴドラの真の姿に!!』……だって。ねえマキナ、ちよつとこれつけてみて」

シロナが俺に差し出して来たのは、メガボスゴドラを模したお面だった。ふむ……なかなかイカしたデザインじゃないか。

なんとはなしに、お面をつけてみる。

「……………ぷつ……………ぷつ……………マキナ……………すごく似合ってるわよ……………くすつ……………」

明らかに笑いを堪えているシロナが、スマホで俺の写真を撮り始めた。

「店主さん、このお面ください。……………ぷつ……………ま、マキナ……………それ、あなたにあげるわ……………ふつ、だめ、もう限界……………あはっ……………あはははははははっ!!」

ついに爆笑し始めたシロナが、バシバシと俺の肩を叩きながら涙を流し始めた。

「……………シロナ、笑いながら人の肩を叩くと、まるで歳食ったおば……………」

急に真顔になったシロナが、れいとうビームのような視線を向けてくる

「おば……………?何かしら?」

「ナンデモナイデス…」

シロナさんかわいい。

~~~~~

その後も色々と見て回ったのだが、女性に人気と謳われていたアロマキャンドルをお香屋で買った。消耗品ならば、フウロちゃんが既に持っけていても困る事はあるまい。シロナの助言が有ったとは言え、我ながら完璧なチョイスだ。己の童貞力が低下していく錯覚さえ覚えた。

シロナは既にプレゼントを買っているらしく、バザーではお面以外は何も買わなかった。お面も買う必要がなかったと思うが。俺の荷物が増えただけである。

「今日は楽しかったわ、マキナ。あたしはそろそろシンオウに……」

「だ、誰かあ!!あいつを止めてくれえ!!」

シロナが別れを切り出そうとした時、一人の男があらん限りの声を振り絞って叫んで

いる。

シロナが慌てて男の元へと急ぎ、事情を聞くと、どうやら大事な荷物を怪しい奴に奪われてしまったらしい。大事な荷物をこんな簡単に奪われるとか大丈夫かコイツ。

男が指差す先には、街ゆく人々を突き飛ばしながら逃げようとする、赤い服を身に纏った怪しい奴がいる。どうみてもマグマ団です。本当にありがたいがとうございました。

とりあえず俺は捕獲要員のドールブルを取り出し、くろいまなざしをマグマ団員に撃つ。

「ぐっ!? な、なんだ!? 誰だ、俺に何をした!! 卑劣な奴め!! 出てこい!!」

本日のおまいうスレはここですか？

「あなた、人のもの奪っちゃダメじゃない!!」

義憤に駆られたシロナがマグマ団員へと詰め寄る。

「ひっ、なんでシンオウチャンピオンが……ち、近寄るなババア!!」

「……マキナどいて!! そいつ殺せない!!」

「落ち着けシロナ!! お前はババアじゃない!! お姉さんだ!!」

顔を真っ赤にするシロナを宥め、マグマ団員をキノコのほうしで眠らせる。男が取り落とした荷物を回収しようとしたが、俺より先には、何者かの手によって拾い上げられてしまう。

「……………誰？……………マグマ団の邪魔をするのは？」

声の主は、真紅のフードから紫色の癖っ毛を覗かせる、マグマ団の女性幹部・カガリだった。

カガリさんヤバイかわいい。このまま荷物渡しちやいそう。エンゲージされたい。

「……………それを寄越して欲しいんだが」

「……………ボクの質問は？……………無視するの？……………こんな物をあなたが拾って、どうするの？」

「どうするも何も、持ち主に返すだけだ」

「……………そう……………邪魔するのね……………ボク、今はポケモン持ってない……………次邪魔したら……………デリートします」

カガリはそれだけを言い残すと、荷物を投げ寄越し、眠りこけたマグマ団員を部下に担がせると、何処かへと消えてしまった。エンゲージしないのか……

「マグマ団……………困った人たちがいたものね。シンオウにもギンガ団っていう困った人た

ちがいるから、あまり他人事に思えないわ」

なんだ、ギンガ団も消滅していないのか？もともとポケモンの世界の時間軸ははつきりしていないが、この世界は輪をかけてメチャクチャなようだ。まあ、RSEを正史とするかORASを正史とするかだけでも、かなり変わってくるしな。

どうやら荷物を奪われた男はデボンコーポレーションの社員だったらしく、メガバングルの量産化に関わる、大事な資料が入っていたらしい。そんな大切な物を奪われるとは、とんでもない無能がいたものだ。

デボンコーポレーションは、俺にスポンサーとしてついてくれている企業なので、それなりに密接な関係にある。どうせデボンコーポレーションに一言あいさつをしに行くとつもりだったので、代わりに俺が届けてこようか？と尋ねたら、社員は大喜びで俺に荷物を託してきた。だからそういう所が、ワキが甘いつつてんだよ。俺が上司だったらソツコーで首切ってるぞ。クビだクビだクビだ!!

「なんだか色々とあつて帰りそびれちゃったわね……今からリーグに帰っても意味が無し、今日は遊びまくりましょう!!」

超ポジティブシンキングなシロナがそう提案してきたので、俺もそれに乗つかる事にした。ホウエン地方などそうそう来れるわけでもないのです、十分に堪能しておきたい所だ。

シロナと共にポケモンコンテストライブを観戦したり、映画館で幻のポケモン『ジラーチ』を題材にしたラブストーリーを一緒に観たりした。感情豊かなシロナは泣いたり笑ったりしていたが、濡れ場に差し掛かかった途端、顔を真っ赤にして固まってしまった。初心なシロナさんかわいい。

俺？ 気まず過ぎて心の中で般若心経唱えてました。家族とロードショー観ててそういうシーンになった時以上に気まずかったです。

映画館を出た時には、既に夕暮れ時となっていた。映画の内容が良かったのか、シロナは鼻歌まじりに俺の隣を歩いている。

「かなりいい時間になっちゃったわね……マキナはいつ帰るのかしら？」

「いや、俺はこの一週間ハウエンに滞在するつもりなんだけど……」

俺がそう答えると、シロナはポカンとした表情になり、足が止まる。

「えっ……？ そうだったの!?! てっきりマキナも日帰りかと思ってたわ……」

「……まさか、シロナは帰るつもりだったのか？」

「だ、だって……映画に夢中になっちゃって時間を忘れていたんだもの……」

かわいいなオイ。何も言えなくなっちゃうだろ。こんなおっちゃよこちよいなりーグチャンピオンがいていいのか？

「仕方ないわ、その辺のホテルで泊まりました。マキナ、あそこのホテルとかどうかしらっ。」

「……ちよつとシロナさん無知すぎじゃないですかね？あなたが指差してるのラブホつすよ？心の臓に良くないのでやめてください。」

「あそこはダメだ。絶対にダメだ。他のホテルにした方が良い」

「そうなの？じゃあ他のを探しましょう」

その後もシロナと宿泊施設を探し回るが、なかなかめぼしいビジネスホテルが見つからない。

「どこを探したら良いのかも分からないわね……」

「そうだな。何かしら地図のような物がないと……あ」

「……どうしたの？」

「悪い……ポケナビを持っているのを忘れていた」

俺は慌ててポケモンマルチナビを起動すると、ビジネスホテルがあるエリアからかなり外れの方まで来てしまっていたようだ。

ようやく別のホテルに着いた頃には完全に夜を迎えてしまい、既に満室となつてしまっていた。

「ねえ、やつぱりさっきの所が良いんじゃないかしら？二十四時間営業って書いてあったし、すごく料金も安かったじゃない」

いや、確かにラブホは宿泊目的で使うとコスパ高いって良く聞くけど、男女二人は完全にマズいだろ。

……だが、あれがラブホだとシロナはまるで気づいていない。ならば、俺も気づいてないふりをすれば平和に一夜を過ごせるのではなからうか？あくまでお洒落なホテルだと思って利用すれば、問題ないのではなからうか？

そう思っていた数分前の自分を、誰か殺してくれ……

「マキナ、すごいお洒落なホテルねっ!!」

「……………」

「なんだか、漫画とかで出てくるお嬢様の寝室みたい。シャンデリアなんかも掛かっているわ!!」

「……………」

「ベッドもこんなに大きくて……あれ、なぜベッドが一つしか無いのかしら……?」
「……………」

「何この箱……何が入ってるの?……えっこれってまさか……っ!?ま、マキナ
……………ここつてもしかして……っ!!!!きやあああああああ!!」

マキナには たたかえる SANちが のこつていない!!

マキナ は めのまえが まつくらに なった…

16 : VANILLA is GOD

「ま、マキナ……絶対にこっち向かないでねっ!!」

「……わかつている」

現在シロナは、とあるラブホテルの一室にて、恋仲でもない男と同じベッドを共にしていた。

ゆうべはおたのしみでしたねと言われても致し方ない状況ではあるものの、やましい事は何も起きていないし、起きる予定もない。しかしながら、男女が愛を育む場において、知らない仲ではない男と共に居るといふ事は、シロナを赤面させるに易かった。もつとも、知らない仲の男と共にこんな所にいたら、それはそれで大問題ではあるが。

シロナの強い要望により、お互いに背を向けた状態で最大限に距離を置いて、二人はベッドに潜り込んだ。だが、薄暗い部屋に妖艶な空気を漂わせる薄桃色の電飾、ベッドにあしらわれたメルヘンチックな天蓋カーテン、仄かに香るマキナの香水の匂い……シロナに必要な以上の情報が押し寄せ、彼女が冷静を装う為の余裕を奪い去る。

(……あたしだけがこんなに気にしてるのも、なんだか面白くないわ)

シロナはマキナに背を向けたまま、わずかに首を動かして、それとなく様子を窺うが、見えるのは彼の背中だけだ。そもそも、あつちを向けと言ったのは他でもない、シロナ自身だ。

「ねえ……マキナはその……こういう所に来た事はあるのかしら……？」

「……あるように見えるか？」

彼から返ってきた言葉に、未経験である事の羞恥の色はなく、どことなく諦観……あるいは達観が見え隠れしている。

愚問だった。

かけがえのない存在を失い、独りであり続ける事を選んだ男が、誰かを愛し、誰かと体を重ねるなど……邪推ですらない。

「ごめんなさい。変な事を訊いて……」

「謝らないでくれ。傷口に塩を塗るつもりか？」

デリカシーの欠片もない言動に及んでしまった事を、シロナは悔いた。しかし、腹を割って彼に踏み込みたいと思う自分がある事に、シロナは気づいてしまう。

……完全に、修学旅行の夜にテンション上がってしまい、クラスの誰それが好きだと

か、そんな感じの会話で盛り上がる女子のソレだが、本人はまるで自覚をしていない。「マキナが初めてポケモンを手にしたのは、いつからなの？資格を取る前からポケモンを持っていたようだけど……」

「……どうだろうな。5歳かそこらになるんじゃないか？」

「へえ……随分小さい時からなのね。じゃあ、最初に触れたポケモンはココドラとかなの？」

「いや、最初のポケモンはおそらくヒトカゲだ」

おそらく……などと、曖昧な返事を寄越す時点で、彼がいかに数多くのポケモンと関わって来たかが窺える。

「……マキナという名前は、本当の名前なの？」

礼儀を欠いた質問だとシロナは心得ていたが、マキナ機械などという名を、親が子に付けるとは思えなかったのだ。

「……本当の名前ではないが、それが今の俺の名前だ」

「なぜ、そんな名前を名乗っているの？」

「俺も知らない。世界がそうさせた」

……意味深長な匂いを醸し出す言葉を残したマキナだったが、その真相はトレーナー登録の際に『マキオ』と記入したところ、字が汚かったせいで受付嬢が間違えて『マキ

ナ』と登録してしまっただけである。要するに、恥ずかしくて本当の事が言えないだけだ。

(…あなたは世の人々に、『機械』などと心ない名前を付けられ、蔑ろにされたと言うの？ そんな…あなたは、こんなにも必死に、力強く生きていくというのに…)

言うまでもないが、そのような事実はまるで存在していない。

「……マキナは、この世界を恨んでいるのかしら」

「……いや、誰が悪いなどという話ではない。悪いのは俺だ。俺がしつかりしていなかっただけの事だ」

(マキナ……あなたは自分だけを責め続けるのね。何もかも、自分の未熟さが招いた事だと、自己完結するつもりなのね)

言うまでもないが以下略。

「……そろそろ終わりにしないか？ 明日はそれなりに早く起きないといけないんだ」
「……そうね。不躑に色々と言いついてしまつてごめんさい。おやすみなさい」

未だ燻る形容し難い感情を抑制しつつも、シロナは瞼を閉じた。

~~~~~

スマホのアラーム音が安眠の終わりを告げ、急速に俺を覚醒へと引きずり出す。いつもと違う環境の中での目覚めは、あらゆる何かが異なっていた。

首元に、自分以外の何者かの息遣いを強く感じる。

俺の背中には、自分より少し高めの体温が押し当てられている。

依然として、思考能力が緩慢としている俺は、考え無しに背後に纏わりつくナニカを驚掴みにする。

俺の手中に、女性特有の絶妙な弾力を内包した柔肌……………



ではなく、どこか硬質でザラザラとした感触が広がっていた。

素で混乱した俺は慌てて振り返る。

スヤア…という擬音が聞こえてきそうなほど、気持ち良さそうな顔で熟睡するガブリアスがいた。

「フアツ!？」

おったまげた俺は、仰向けの状態からバク転へ移行するという、超アクロバティック起床法を以ってしてベッドから脱出する。オメガリー、イジエークト。

「ふえっ!？」

俺の絶叫に驚いたシロナも、口元から涎を垂らしながら飛び起きる。嗚呼……チャンピオンの威厳が……

「えっ、マキナ……っ……っ……っ!!(ぐ)、ごめんなさい!!あたし、多分寝ぼけてて……」

よくわからぬ弁明をしながらも、シロナはガブリアスをモンスターボールに戻す。

「……冗談にしては悪ふざけが過ぎるぞ。どういうつもりだ？」

「あたし、いつもガブリアスと寝ているから……癖で出しちゃったのかもしれないわ」  
ジーザス。あんな見た目が凶暴かつ肌触りが最悪な抱き枕があつてたまるか。あれもない二次元美少女の絵が描かれた抱き枕と共に眠るオタクの方がよっぽど正常だよコレ。

どうやら昨夜は『シロナ、ガブリアス、俺』という、混沌とした川の字を描いて夜を越したらしい。珍しくアロフオーネが静かだなあと思っていたのだが、そう言う事だったのか……

『ますた……わたしは、しろなとますたを、あなどっていました。まさか、らぐなろくとともに、いちやをすごすとは……しろなとますただけは、おこらせてはいけませんね。せかいがしゆうえんをむかえます』

アロフオーネの入ったゴージャスボールがプルプルと震えている。申し訳ないが厨ポケ様に人外扱いされるのはNG。

人類史に前例を見ない、全く新しい朝チユンを経験した俺はシロナに別れを告げ、ラブホを後にした。なんなんだこの童貞に厳しすぎる世界は。

なんとも言えない気分のまま、俺はデボンコーポレーションの所在地であるカナズミシティへと向かう。一際目立つ、大きな建物が聳え立っている。あれがデボンコーポ

レーションだろう。

デボンの受付嬢は俺を見るなり驚いた表情を浮かべたが、顔パスで中へと通してくれ、ご丁寧に社長室まで案内をしてくれた。

「ツワブキはこちらにあります。どうぞ、お入りくださいませ」

雰囲気呑まれそうになりつつも、社長室へと足を踏み入れる。社長室には、いかにも珍しそうな石や宝石、水晶などがディスプレイされおり、ダイゴさんの石に対する執着心が親譲りであるのが見て取れる。

「挨拶が遅くなってしまい大変申し訳ございませんでした。いつもお世話になっております、ツワブキさん」

見るからに高級そうなデスクで書類に目を通していた初老の男……ツワブキムクゲに頭を下げると、ホスピタリティー溢れる笑顔で迎えてくれた。

「おお、マキナくんではないか!!わしの方こそ君にはお世話になっているよ。どうだね、我が社の製品は役に立っているかね?」

「ええ。いつも有難く使わせて頂いております」

「それは重畳。我が社の製品……特に特製のモンスターボールたちは、マキナくんの試合が実況放送されるようになってから、飛ぶように売れているんだ。モンスターボールの開発事業はあまり業績が芳しくなく、既製品にシェアを潰されていた負け犬事業だつ

たが、マキナくんのおかげで一躍花形事業だ!!」

……性能云々ではなく、純粹に見た目が良いからと言う理由で使っているだなんて、口が裂けても言えねえなコレ。でも、ゴージャスボールとプレミアボールは、オシャボ勢にとつて非常に汎用性が高いボールなので、大変重宝している。原作だとプレミアボール一個買うと、モンスターボールが十個オマケでついてくるような状態だったしな。完全にびつくりマンチョコのそれである。

「ツワブキさん、既に<sup>ご</sup>存知かとは思いますが、御社の従業員の方より大事な書類を預かっております。<sup>ご</sup>査収ください」

俺はマグマ団員から奪還した書類を取り出し、ムクゲへと渡す。

「おお、そうだった!!その節は本当に助かったよ。お礼の代わりと言っては何だが、困った事があつたら何でも言つて欲しい。その時はいつでもマキナくんの力になろう」

ん?今何でもつて……

「ありがとう<sup>ご</sup>ございます。早速切り出すのはアレかもしれませんが、実はムクゲさんにご助力を賜わりたい事が、いくつかありまして……」

「いくつでも構わないから、遠慮なく言つて欲しい」

「ありがとうございます。まず一つ目のお願いです」

俺はアタッシュケースから一本の試験管を取り出す。

「むっ、これは……?」

「取り扱いに気をつけてください。それはとあるポケモンから分泌される、非常に毒性の強いヘドロです」

「な、なんだって!?!こんな物をわしに渡してどうしろと言うんだね!!」

「その毒を御社の技術部の方々に分析、そして血清の精製を試みて頂きたいのです。できれば、極秘で」

「け、血清か……わかった。デボンは医薬品事業にも参入しているから、不可能ではないはずだ。極秘でプロジェクトを立ち上げよう」

「ご厚情痛み入ります。二つ目は、こちらをご覧ください」

俺はアタッシュケースから、更に別の物を取り出す。

「それは……モンスターボール、なのか?」

「はい」

「我が社が開発しているボールではないね」

「詳しくお伝えする事が出来ませんが、特定のポケモンを捕獲する事に特化したボールであるとだけ。このボールを解析して、同じ性能を持ったボールを全く別のデザインで

十個ほど作って頂きたいのです」

「ほう……特定のポケモンを捕獲する事に特化したボールか。これも極秘かね？」

「内密にお願ひします」

「分かった。……だが、特定のポケモンを捕まえ易いという技術は、我が社の開発事業にも流用したいほど興味深いものだ」

……ムクゲは皆まで言わないが、チラチラとこちらに視線を投げかけ『この技術、パクつちやつてもいいよね？』とでも言いたげな顔をしている。さすがはハウエンきつての大企業……商魂が逞しすぎます。

「……商用目的で作られたボールではないので、問題はないかと」

「うむ、マキナくんは実に賢く察しの良い男だ。ぜひうちの会社に来て欲しいものだよ。わっはっは!!」

増える受注……減らない残業……迫る納期……休日出勤……うつ頭が……

「別のデザインにするという事だが、具体的にマキナくんはどんなデザインを所望しているのかね？」

「そうですね……下半分は白色、上半分は半透明の白色、上下の境界線は水色でお願いします。上半分に白色でアスタリスク\*のような白い模様が描かれていると最高ですね」

クソ細かい注文をしているという自覚はあるが、オシヤボ勢としてデザインの妥協は

許せない。ダークボールは猛省しろ。

「うむ、ボールの開発事業には潤沢に予算を回せる。必ずや成功させてみせよう!!」

「ありがとうございます。次で最後になりますが一から開発して頂きたい物があります。それは……」

一番重要かつ慎重に事を進めるべき依頼なので、俺は可能な限り詳細に要件を伝える。

「……なるほど。一体何に使うかとても気になるが、これも極秘なのだろう?」

「はい」

「こちらは少々難航しそうだが、尽力してみよう」

「ありがとうございます。私からのお願いは以上です。もちろん、タダでやれとは申し上げません。現在、私のスポンサーとして支援を賜わっている御社からは、身の丈に合わせた程の投資をして頂いております。今後、その支出は全て、此度に依頼した三つの研究開発に回して頂けないでしょうか?」

「……本当にそれで良いのかね?」

「はい、よろしく願います」

正直、ポケリゾートのローン返済に追われている今、デボンからの支援金が完全になくなるのは、全くと言っていいほどよろしくない。が、背に腹は代えられない。

なにより今の俺なら、金なんぞその気になればいくらでも工面できる。ただ、あまり聞っぱい事をするとか社会的にポアされてしまうし、ただでさえ世間からの印象は芳しくないのも、後ろめたい事はするべきではない。人間というものは汚れた金で食つていこうとすると、根っこから腐つていくものである。悪い事をした分、ゼーンぶ自分に返ってくるのだ。業、嘘つかない。

「マキナくん、三つ目に依頼してきた物だが……何か名前を考えているかね？」

「名前ですか。そうですね……『sleeping beauty』が良いでしょう」

賽は投げられた。あとは川を渡り切れるよう、全力を挙げて全てを導くのみだ。

~~~~~

いわタイプのポケモンをこよなく愛し、彼らの使い手である猛者たちが集うカナズミジムは、騒然としていた。

公式戦で連戦連勝を築きあげているあの男……『機械仕掛けの新種使い』が、その考えを悟らせぬ硬い表情と共に、カナズミジムに現れたのだ。

機械仕掛けの新種使い……マキナは、ジムの一番奥にて門下生たちを一望するジム

リーダー・ツツジだけを見据え、彼女の元へと一直線へと向かっていく。

当然、いくらあのシンオウチャンピオンを打ち破った男といえども、黙って素通りさせる事など、鍛錬に勤んでいたトレーナーたちが許さない。

いきなりジムリーダーに挑めると思うな……そう意気込むトレーナーたちは、次々とマキナに勝負を仕掛ける。

そして、その全員が例外なく瞬殺された。

まさに一瞬だった。マキナの実力とやらを見定めんと高みの見物を決め込んでいたツツジの顔に、焦燥の色が広がっていく。あまりにも一瞬の出来事で、どんなバトルだったのかすら分からなかったのだ。

一人、また一人とトレーナーたちをあしらうマキナが、確実にツツジの元へと近づいてくる。どこまでも無表情な男が、獲物を捕捉した野獣の眼光の如く、ツツジただひとりを見線で射抜く。蛇に睨まれた蛙のように、ツツジはすくみあがってしまう。

(……冗談を。わたくしは蛙などではありませんわ。ジムリーダーとしての全力を尽くし、この男に打ち勝つ……いくら『機械仕掛けの新種使い』であろうとも、簡単にジム

バッヂが得られると思ったら大間違いですわ)

ツツジは、未だトレーナーズスクールに在学中の、年端のいかぬ少女だ。さりとて、彼女は実力の伴った、立派なジムリーダーでもある。このジムを統べる者として、門下生がやられた程度で狼狽するほどお粗末な胆力など見せられるわけもなかった。

全てのトレーナーがマキナに敗れ、残るはツツジ一人となる。マキナはツツジのジムリーダーとしての風格、貫禄、覇気を見定めんと、表情一つ変えず舐め回すように観察している。

「……ようこそカナズミジムへ。わたくし、ジムリーダーのツツジと言います。トレーナーズスクールで培ってきた知識と経験……惜しむことなく貴方にお見せしますわ。貴方の全力、わたくしに見せてくださるかしら？」

年の離れた相手であろうと、ツツジが下手に出る事はない。それは、ジムリーダーとしての自信と誇りの表れであり、ツツジという少女を体現したものであった。

ツツジは一匹目のポケモンを繰り出す。いわ／＼はがねタイプのコンパスポケモン、ダイノーズだ。ダイノーズはあらかじめ持たせておいた「ふうせん」によって、宙へと浮

かび上がる。これで、ダイノーズの苦手とするじめん技は当たらなくなっただろう。

対するマキナが繰り出したポケモンはくさ／かくとうタイプのきのこポケモン、キノガッサ。

(相性は最悪ですわね)

ダイノーズはかくとうタイプに滅法弱い。しかしポケモンを出した今、臍を噛んでも仕方がない。

(わたくしのダイノーズは頑丈ですもの。どんな強力な一撃だろうとも、必ずや耐えてみせますわ)

いわタイプで統一されたツツジのパーティにとって、キノガッサは非常に重い相手だ。何かしらの足枷を押し付けたい所だ。ツツジは迷いなく指示を出す。

「ダイノーズ、でんじは!!」

「キノガッサ、キノコのほうし」

ツツジの相手は、どこまでも堅実だった。ダイノーズに大打撃を与えられるかくとう技を、キノガッサが持っている事は明確。だが、ツツジの目の前にいる男は、石橋を叩くかのようにしてダイノーズを眠らせる事を選んだのだ。

（なんなんですかの？この男……まるで次の一手が見えせんわ）

ツツジは考える。ダイノーズ次第では、次のターンに起きてくれるかもしれない。しかし、もしもダイノーズが起きなかった場合、ダイノーズは何をする事も出来ずに瀕死へと追い込まれてしまう可能性が非常に高い。

「ダイノーズ、戻りなさい!!」

ツツジはダイノーズを引つ込めつつ、マキナの顔をさりげなく窺うが、特に表情を変えない様子はない。

（ポケモンを変えるのは想定範囲内と言う事ですかの？）

結局、相手の迷惑を図り損ねたツツジだったが、十中八九かくとう技を指示しているだろうとアタリをつけ、次のポケモンを繰り出す。

「頑張つて、アーマルド!!」

むし／いわタイプのアーマルドならば、キノガッサが得意とするくさ技もかくとう技も、さほど痛手とならない。加えて、ツツジのアーマルドは『つばめがえし』を覚えている。キノガッサを一撃で倒す事も不可能ではないはずだ。

ボールから出てきたアーマルドに、キノガッサの素早い一撃が叩き込まれる。マキナはキノガッサに『マツハパンチ』を指示していたようだ。

（アーマルドはラムのみを持っていますから、キノコのほうしは通用しませんわ。アー

マルド、なんとかキノガツサの攻撃を凌ぐのよ)

キノガツサにとつてアーマルドは得意な相手ではないが、苦手な相手でもないはずだ。既に手負いのアーマルドを倒さんと、ダメ押しをしてくるに違いはない……そんな思考を巡らすツツジは、声高々とアーマルドに命じた。

「アーマルド、つばめがえし!!」

「キノガツサ、戻れ」

ツツジの読みは外れた。マキナはキノガツサを居座らせる事なく引つ込めてきたのだ。

マキナが新たに繰り出したのはこおりタイプのブリザードポケモン、バイバニラだった。

アーマルドのつばめがえしがバイバニラに直撃し、バイバニラを鎧のごとく纏つていた硬質な氷膜が碎ける。

(どういうつもりですの……? いわタイプのポケモンにこおりタイプのポケモンを出してくるだなんて……)

ツツジは拍子抜けしていた。ジムのトレーナーたちを一掃するほどの実力を持った

トレーナーが、相性の悪いポケモンを繰り出してくるなど、予想だにしていなかったのだ。

（彼が何をしたいのか分かりませんが、こおりタイプなどわたくしのアーマルドの敵ではありませんわ）

ツツジは深く考えず、素直に目の前のバイバニラを倒す事だけを考えた。

「アーマルド、いわなだれ!!」

「バイバニラ、とける」

先手を取ったのはバイバニラだった。バイバニラはアーマルドの攻撃を受けるより先に、ドロドロと氷の体を溶かし始める。軟体化したバイバニラに対して、アーマルドのいわなだれは本来の威力を發揮できず、おおよそ半分ほどのダメージに軽減されてしまう。

それだけにとどまらず、弱点を突かれたバイバニラは、突如として強力な冷気を放ち始めたのだ。

「あれは……『じゃくてんほけん』ですわね!!」

じゃくてんほけんとは、持たせたポケモンが苦手としているタイプの攻撃を受けた時、攻撃と特攻をぐーんと上昇させる持ち物だ。

つまるところ、マキナは最初からアーマルドのいわ技を待っていたのであり、ツツジ

はそれにまんまと釣られてしまったという事だ。

(わたくしが……手玉に取られているという事ですの?)

おそらく目の前の男は、ツツジの一手一手が、手に取るようにして見えているのであろう。しかしながら、当のツツジには試合の展開が全く読めないでいた。

(まずいですわね……既にキノガツサのマツハパンチを受けているアーマルドでは、今のバイバニラの攻撃は受け切れませんわ)

勝算のない撃ち合いをするべきではない……ジムリーダーとしての実力と経験が備わったツツジはアーマルドを引つ込めた。

ツツジは知らない。

今の自分が戦っている相手は、交代戦でこそ百戦錬磨の立ち回りをするトレーナーだと言ふ事を。

「バイバニラを止めるのよ、アバゴーラ!!」

バイバニラが得意とするこおり技、乃至はアーマルドが苦手とするラスタールカノンを受けるべく繰り出されたみず／いわタイプのこだいがめポケモン、アバゴーラ。

しかし、ツツジが託した役割を、アバゴーラが果たす事は無かった。

「バイバニラ、フリーズドライ」

みずタイプをも凍結させるほどの凄まじい冷気が、アバゴーラを襲う。ツツジのアバゴーラは少々弱点を突かれた程度では倒れない、ハードロックな個体だ。だが、そんなものは誤差の範囲内だと一蹴するかの如く、アバゴーラはバイバニラの一撃に倒れる。

「そんな……アバゴーラが一撃で……」

ツツジはただひたすらに戦慄する。

いつもならば何の苦勞もなく倒せるはずのこおりタイプのポケモンだ。それなのに、ボロボロに砕かれ、ドロドロに融解しているこのバイバニラが、まるで止められる気がしないのだ。

(できれば温存しておきたかったのに……でも、出し惜しみをしていられる状況ではありませんわ)

ツツジは断腸の思いで切り札を切る。

「あなたに任せたわ、ボスゴドラ!!」

ツツジが繰り出したいわ／はがねタイプのでつヨロイポケモン・ボスゴドラは、『きあいのたすき』を掛けている。一撃耐えて、強くないわ技の『もろはのずつき』を当てられ

ば、バイバニラを倒す事ができる。

「バイバニラ、めざめるパワー」

滅多に聞く事のない技の名前が聞こえ、ツツジは眉を顰める。めざめるパワーは使うポケモンによってタイプが変わると言う、まさしく個々のポケモンに秘められた力を発揮する技だ。

バイバニラのめざめるパワーがボスゴドラに直撃する。ボスゴドラが甚大なダメージを受けているのは火を見るより明らかだった。

(彼のバイバニラのめざめるパワーは、じめんタイプ……それとも、かくとうタイプなのかしら?)

何にせよ、弱点を痛烈に突かれた事には間違いない。それでも、ボスゴドラは『きあいのたすき』によって引き出された底力を見せ、バイバニラの攻撃を耐えきった。

「この一撃を外すわけにはいきませんわ!!ボスゴドラ、もろはのずつき!!」

少々大振りな技ではあるが、ボスゴドラの放った『もろはのずつき』は外れることなく、しっかりとバイバニラを仕留めてみせた。

だが、これで終わった訳ではない。ようやくバイバニラを処理できたところで、再びキノガッサが繰り出されるのだ。

(…ボスゴドラは……までね)

瀕死寸前のボスゴドラに、キノガツサのマツハパンチを耐える術はない。バイバニラを見事止めてみせたボスゴドラを讃えるかのように、ツツジはボスゴドラに最後の命令を下す。

「ボスゴドラ、ゆきなだれ!!」

「キノガツサ、キノコのほうし」

マキナはキノガツサに攻撃を指示しなかった。此の期に及んで、ボスゴドラを眠らせにきたのだ。

(なるほど……『機械仕掛け』とは言ったものですね)

いつの間に握りしめていたツツジの拳に、力が入る。手負いのボスゴドラを一思いに倒さず眠らせるとは、なんと非情な男なのだ……そう思わずにはいられなかった。

「ボスゴドラ、起きて!!」

「キノガツサ、ビルドアップ」

ボスゴドラが眠りこけているのを尻目に、マキナのキノガツサが攻撃力と防御力に磨きをかける。

ボスゴドラがようやく目を覚ました時には、キノガツサは二度目の『ビルドアップ』を

成功させ、ボスゴドラの『ゆきなだれ』をいともたやすく耐えてしまう。そして、十分に強化されたマツハパンチが、既に虫の息であるボスゴドラに突き刺さる。

「……………っ!!」

瀕死寸前のボスゴドラにここまでする必要があったのか……溢れ出しそうになる罵声を、ツツジは必死に堪える。相手を侮辱した時点で、自分はそれ以下のトレーナーに成り下がるのだ……ツツジはそう自分に言い聞かせる。

ツツジは瀕死となったボスゴドラを引つ込め、いわ／じめんタイプのメガトンポケモン、ゴローニヤを繰り出す。

(持前の頑丈さで耐えて、だいはくはつ……ごめんなさい、ゴローニヤ。キノガッサを止めるには、あなたの捨て身の一撃が必要です)

『だいはくはつ』を使うと、ゴローニヤ自身が瀕死状態となってしまう。だが、その分『だいはくはつ』の威力は生半可なものではない。キノガッサは既にボスゴドラの『ゆきなだれ』を受けている。ゴローニヤの『だいはくはつ』を食らえば、ひとたまりもないだろう。

「ゴローニヤ、だいはくはつ!!」

「キノガッサ、タネマシンガン」

先手を取ったのはキノガッサだ。弾丸の如く射出された硬質な種子は、二発しかゴ

ローニヤに命中しなかったが、くさ技に全く耐性のないゴローニヤは『だいばくはつ』を起す前に倒されてしまった。

後続のアーマルド、ユレイドル、ダイノーズも、キノガッサに手も足も出なかった。ツツジの完敗である。

「……とてもお強いのですね。どうぞ、ハウエンリーグ公認のストーンバッジを受け取ってください」

ツツジは浮かかない表情のまま、マキナにジムバッジを渡す。

「対戦、ありがとうございます」

端的な挨拶だけを述べるマキナは、ツツジに顔を合わせようとしめない。見損なったと言わんばかりに目を細め、視線を下へと落としている。

「……そんな目で見ないでください。わたくしには不相応なのかもしれませんわね」

手持ちのポケモンのタイプを統一してバトルを行うのは、決して楽な道のりではない。それでもタイプを統一したジムが世界中にこれだけ多いのは、ジムリーダーと呼ばれる者たちは皆、自分がこよなく愛するタイプのポケモンを使い続けるという信念、そしてそれ実現させられるだけの実力があるからだ。

ツツジは、自分にもその素養があるという自信を完全に失ってしまった。マキナ

のキノガツサだけでパーティを半壊状態に持ち込まれたのはおろか、いわタイプを苦手とするバイバナリにさえアドバンテージを取られていたのだ。

「あなたも、所詮は子供なのだ……と、失望したでしょう……？」

自嘲的な呟きと共に、ツツジは上目遣いでマキナの顔色を窺う。

彼は無表情を脱ぎ捨て、感情を露わにしていた。

「冗談はよしてくれ」

「……………えっ？」

「それは貴女のアイデンティティーのはずだ。それは貴女が大切にしてきた物のはずだ。それこそが貴女の美しさだと私が確信しているからこそ……私は貴女と戦えた事に感謝しているのです」

「マキナ……さん……？」

「手離さないでください。ありのままできて下さい。私は貴女のこれからが……楽しみで仕方がない」

マキナは呆然とするツツジに不器用な微笑みを見せたと思いきや、そのままジムを後

にしてしまう。

人知れず、ツツジから柔らかな笑みが溢れる。

「…………ふふ、わたくしとした事が自分を見失ってしまうだなんて、らしくありませんわ。そう…………わたくしはカナズミジムのジムリーダーにして、いわタイプの使い手。たかだか一度コテンパンにされた程度で、今までのわたくしとパートナーたちを否定して良いはずがありませんわ」

いわタイプは弱点となるタイプが非常に多く、いわタイプのみで強者たちと肩を並べるのは茨の道だ。それでも、一度弱点を突かれた程度ではくたばらないタフネスこそが、いわタイプの真髄というものだ。

「わたくしがへこたれていては示しがつきません。…………マキナさん、またいつかわたくしと手合わせをしていただけますかしら？あなたのバイバニラにできて、わたくしのポケモンたちができない道理などありませんわ。わたくしのポケモンたちは、くさタイプにも、みずタイプにも、かくとうタイプにも、じめんタイプにも、はがねタイプにも負けません。ふふ…………わたくしをその気にさせた代償は高くつきますわよ？」

ツツジは既に姿の見えぬ彼に、雪辱を宣誓する。

ツツジはジムリーダーでありながらも、未だトレーナーズスクールに通っている発展途上の少女だ。現時点で不足ない実力を誇ってはいるものの、伸び代は十分に残っている。

機械仕掛けと呼ばれる男は、意図せずして少女の運命これからを変えてしまったのだった。

~~~~~

デボンを出た俺は、ハウエンのジムバッジの制覇に着手していた。理由は他でもない、リーグを制覇してマスター資格を取得する為である。

今後、デボンからの支援金が、依頼した研究開発の資金に充てられてしまうので、俺の収入がガツツリ減る事になる。ポケリゾートのローン、住民税、生活費、ポケモンたちの維持費等々、生きているだけで訳わかんないくらい金が吹っ飛んでいく俺は、少しでも収入を増やして置かないと、冗談抜きで破産する。殿堂入りという目に見える形で

実績を残して、協会からの評価を爆上げさせる必要があるのだ。

そんなこんなで、やっぱり最初のジムリーダーはツツジちゃんだよね、って事でカナズミジムに来た。

「おーっす!! 未来のチャンピオン!! ここはいわタイプのポケモンを使うハードロックなトレーナーが集うカナズミジム。いわタイプをこよなく愛するむさ苦しい山男がひしめいているが、ここのジムリーダーは現役トレーナーズスクールの生徒、ツツジちゃん!! まさしく紅一点だが侮ってはいけない。彼女の手持ちはどれも屈強なポケモンばかり。くさタイプやかくとうタイプなどのポケモンで一撃粉砕を狙うんだ!!」

お、どのジムにも現れて主人公にアドバイスをくれるぐう聖おじさんやんけ。

おっさんの言うとおり、いかにも登山家ですと言った格好をした大柄な男たちが、いわタイプのポケモンたちとイチャコラしている。そんな中、ジムの最深部に設えられたステージ上に、ジムリーダーのツツジと思われる少女が、遠目から俺を見下ろしている。

ツツジちゃんが狂おしいほど可愛い。

ツツジちゃんと言えばカラータイツ。カラータイツと言えばツツジちゃんである。



ツツジちゃんこそがカラータイツの根源と言っても良いだろう。彼女がカラータイツを穿く事により、穢れを知らぬ子供のあどけなさを遺憾なく発揮すると共に、開花し始めた大人の妖艶さを微かに匂わせる。

いわば、女子中学生である。

女子中学生とは、未だ色濃く残る子供の純真さと、背伸びにも似た大人の羞恥が入り混じった、生命の神秘とも呼べる存在である。女性たちの長い人生の中で刹那的に観測されるそれは、もはや奇跡と呼んでも良いだろう。つまり、女子中学生とは奇跡である。

以上の事から『ツツジちゃん』奇跡』である事が証明される。Q.<sup>証</sup> E.<sup>明</sup> D.<sup>了</sup>

色気のないジャガイモ畑に実った、未熟なる果実を目指し、ジムを突き進む。勝負を仕掛けてくる山男など眼中に無い。砂いじりでもしてなさい。

『ますた……わたしこそが、からーたいつがもつともにあう、ぽけもんだとおもいませんか?』

うん、アマージョの足元にも及ばないと思う。

早くツツジちゃんとバトルしたいのに、やたら山男たちに勝負を挑まれる。目が合ったらバトルサインっていうけど、全く目合わせてないんですけど。今の俺、ツツジちゃんのカラータイツしか見えてないから。

所詮は門下生なので、ルカリオのしんくうはだけで事は済む。完全なる作業ゲーである。そんなんじゃ虫ポケモンも倒せねえぞお前ら!!

山男たちを一掃した俺は、ようやくツツジちゃんが待ち受けるステージへと登る。

「……ようこそカナズミジムへ。わたくし、ジムリーダーのツツジと言います。トレーナーズスクールで培ってきた知識と経験……惜しむことなく貴方にお見せしますわ。貴方の全力、わたくしに見せてくださるかしら?」

……これわざと負けたらカラータイツのツツジちゃんに踏んでもらえるのかな?

しかし、ここでバツジを得られないと、地下強制労働施設でペリカを稼ぐ羽目になるので、ちゃんとツツジちゃんを倒す必要がある。

俺はキノガッサを繰り出し、対するツツジちゃんはダイノーズを繰り出した。ダイ

ノーズは『ふうせん』で宙に浮いている。

ダイノーズかあ……マツハパンチで確定一発を取れるが、ダイノーズの特徴が『がんばろう』だとそうも行かなくなる。すなわしならまだ良いが、でんじはを撒かれると運ゲーになってしまうので、避けたい所ではある。一旦眠らせておけば、2/3の確率でノーダメ突破できるし、交代しても交代先がラムやカゴを持つていない限りはビルドアップの起点にできる。

「ダイノーズ、でんじは!!」

「キノガッサ、キノコのほうし」

当然、キノガッサはダイノーズの上を取れるので、でんじはを食らうより先にダイノーズを眠らせた。

次の一手はマツハパンチで良いだろう。交代先に負担をかけられる『きあいパンチ』が理想的ではあるが、ガッサの攻撃技はマツハパンチとタネマシンガンだけなので仕方がない。やはり交代戦において先制技と言うものは使い勝手が悪いな。

「頑張つて、アーマルド!!」

ツツジちゃんはダイノーズを引っ込め、アーマルドを繰り出す。

微妙だな……俺のキノガッサは『くろおび』を巻いているが、アーマルドがHP極だと仮定すると、確定三発くらいだろう。アーマルドは確か『つばめがえし』を覚えられ

るはずなので、技スぺの概念が無い相手のポケモンなら普通に撃ってきそうではある。覚えてないとしたら、のろい、ステルスロック、シザークロスあたりか。いくら一致技とは言え、いわ技が飛んでくる事はあるまい。

さあ、ご覧あそばせ。こおりタイプの、こおりタイプによる、こおりタイプの為のいわタイプ狩りをお見せしましょう。

俺はキノガッサを引つ込め、バイバニラを繰り出す。ツツジちゃんのアーマルドは『つばめがえし』を放ってきた。

バイバニラは『くだけるよろい』という、物理技を受ける度に、すばやさのランクを2段階上げると言う、一風変わった特性を持っている。

……ぶつちやけ、もともと鈍足な岩タイプを相手にするなら、がんばりよう対策になる『ゆきふらし』の方が使い勝手が良いのだが、まともな個体値のバイバニラはこいつしかいなかったたので仕方がない。一応、ロックカットによる奇襲を許さないという強みもある。

バイバニラには『じゃくてんほけん』を持たせているので、アーマルドのいわ技を起爆剤にしたい所だ。当然、いくら物理耐久に努力値を振っているとは言え、一致弱点技をそのまま受けては瀕死不可避なので、防御のランクを二段階上げる『とける』を指示

する。クソ急所を引いてしまった場合は、お悔やみ申し上げますとしか言えない。

「アーマルド、いわなだれ!!」

ツツジちゃんはこちらの思惑通りに、いわ技を撃ってきた。エッジだとかかなり怪しかったが、なだれならば余程大丈夫であろう。

『とける』を積んだバイバニラはアーマルドの『いわなだれ』を受け、『くだけるよろい』を発動させるだけにとどまらず『じゃくてんほけん』の恩恵を受ける。

「あれは……『じゃくてんほけん』ですわね!!」

どうやらツツジちゃんも『じゃくてんほけん』に気づいたらしいが、果たしてバイバニラにどう対抗してくるだろうか。

バイバニラはアーマルドに二倍で通るはがね技『ラスターカノン』を覚えているが、弱点を突いたところでオーバーキルだし、交代先に対してそれほど負担をかけられないので撃つべきではない。どのポケモンが出てきても及第点以上のダメージが見込める『フリーズドライ』が安定行動だろう。

ツツジちゃんはアーマルドをツツパさせず、ポケモンを変えてきた。

「バイバニラを止めるのよ、アバゴーラ!!」

アバゴーラか……こおり技でも受けに来たのだろうか？だが、もしバイバニラが『フリーズドライ』ではなく『れいとうビーム』を撃っていたとしても、アバゴーラの特殊

耐久ならば二発で落ちているだろう。

フリーズドライは威力が控えめな分、みずタイプから抜群を取れる。ツツジちゃんのアバゴーラは『がんじょう』持ちではなかったのか、一撃で落とせた。

バイバニラは神である。

おいしそうな見た目と可愛いらしい笑みが特徴的な神。彼は、こおりタイプが苦手とするいわタイプを粉碎するため、この地に降り立った。バイバニラは救世主。

種族値合計が535と明らかに強者のソレであるにも関わらず、敢えて微妙な配分にする事で、グレイシアなどの先輩こおり単タイプ勢の顔もキチンと立てている。バイバニラは謙虚。

そして、微妙な火力をじゃくてんほけんで補い、くだけるよろいによつて鈍足をカバーする事で、純真なツツジちゃんのポケモンたちを一方的に蹂躪するのである。バイバニラは屑。

バイバニラ is GOD.

「あなたに任せたわ、ボスゴドラ!!」

アバゴラを瀕死に追い込まれたツツジちゃんは、ボスゴドラを死に出しする。ボスゴドラはきあいのタスキを掛けている。

【悲報】バイバニラ、終了のお知らせ。

やっぱり特性は『ゆきふらし』じゃないとダメですわ。グツバイバツイ。

最後っ屁としてバイバニラにめざ地を撃たせるが、当然のごとくボスゴドラに耐えられ、もろはのずつきをぶち込まれる。安らかに眠りなさい、バイバニラ。

俺はいわタイプに大健闘したバイバニラを引つ込め、再びキノガッサを繰り出す。アーマルドが若干キツイが、仮に攻略されても後ろにルカリオとナットレイがいるので何の心配も要らない。

ビルドアップを2積みめば、アーマルドもマツハパンチで落とせると思われるので、とりあえずボスゴドラを眠らせる。

おお…ツツジちゃんがイラついていらっしやる……やはり催眠戦法は万国共通でイラつくらしい。レート民が顔真っ赤にしてきても、プギヤールの一言に尽きるが、ツツジ

ちやんがご立腹だと、ただひたすらに可愛い。蹴らりたい。

ボスゴドラは3ターン目に眠り状態が解消され、キノガッサに『ゆきなだれ』を撃ってきたが、防御ランクが2上がっている状態なので、大したダメージにならない。次のターンにマツハパンチで沈めた。

ボスゴドラを引つ込めたツツジちゃんが後続として繰り出してきたのはゴローニヤだった。『がんばりよう』で耐えてから『だいはくはつ』ですね。わかります。

だがしかし、悲しいかな……ゴローニヤ通常種は草四倍な上に、キノガッサはビルドアップを2積みしている。タネマシンガンで確定一発だ。ゴローニヤカワイソス…

しかも、仮にだいはくはつを決めたとしても、急所を引かない限りはビルドアップを2積みしているキノガッサを倒せない。ゴローニヤカワイソス…

ゴローニヤをタネマシンガンで屠った後は、脳死でマツハパンチを撃つ作業となる。最後に眠ったままのダイノーズをキツチリと落とし、ジムリーダーのツツジちゃんに勝利した。

「……とてもお強いのですね。どうぞ、ハウエンリーグ公認のストーンバッジを受け取ってください」

バッジはいらねーから脱ぎたてのカラータイツください……と言いたくなるだらしねえ口を制御し、感謝の意を告げる。



いや……それにしても、良い。カラータイツは、良い。

「……そんな目で見ないでください」

アカン。ガン見し過ぎてバレた。

「……わたくしには不相応なのかもしれませんがね」

非難されるかと思いきや、ツツジちゃんはどこか自嘲気味にそう呟いた。不相応……？  
？どう言う意味だ？

「あなたも、所詮は子供なのだな……と、失望したでしょう……？」

俺はツツジちゃんの言わんとする事を理解してしまう。

俺が、カラータイツを履くツツジちゃんを子供っぽいと思っただと、彼女は勘

違いをしているのだ。

全力で否定する必要がある。ここで誤解を解消せねば、今後二度とツツジちゃんのカラータイツを拝められなくなってしまふ可能性がある。

それは、ある種のデイストピアを俺が引き起こしてしまつたも同然であり、狂信的なツツジ教徒にぶち殺されても何の文句も言えない。

「冗談はよしてくれ」

「……………えっ?」

「それは貴女のアイデンティティーのはずだ。それは貴女が大切にしてきた物のはずだ。それこそが貴女の美しさだと私が確信しているからこそ……私は貴女と戦えた事に感謝しているのです」

「マキナ……………さん……………?」

ツツジちゃんは戸惑いを隠せないでいる。当たり前だ。年端もいかぬ少女に、カラータイツの素晴らしさを力説している奴がいたら、そいつは間違いなく変質者である。

「手離さないでください。ありのままできて下さい。私は貴女のこれからが……楽しんで仕方がない」

立派に成長したツツジちゃんも、きつとカラータイツが似合っているに違いない。カラータイツの似合わないツツジちゃんなどこの世に存在しないのだ。成長したツツジ

ちゃんを想像した俺は、思わずニヤケてしまう。完全に事案である。

俺は通報される前にカナズミジムを後にした。可及的速やかに後にした。もう二度とカナズミシティに來れねえわ、俺。

『ますた……からーたいつは、つつじにゆずるとして、くろたいつはわたしがいちばん、にあうとおもいませんか？』

エガちゃんに勝てると思うなよお前。